宮城県文化財調査報告書第196集

沢田山西遺跡ほか

――三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ――

平成16年3月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

序　　文

新たな世紀を迎え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき、三陸縦貫自動車道の建設に先立って実施した桃生郡河北町沢田山西遺跡ほかの発掘調査報告書です。一昨年度以来の三陸縦貫自動車道の建設に伴う発掘調査によって、この地域の古代の様子がより明らかになってきました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成16年3月

宮城県教育委員会
教育長　白　石　　晃

例　　言

1．本書は国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所との保存協議に基づき実施した、三陸縦貫自動車道矢本石巻道路建設に伴う沢田山西遺跡・崎山Ｂ遺跡・万歳山Ｃ遺跡及び三陸縦貫自動車道桃生登米道路建設に伴う八幡遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が行ったものである。

3．本書で使用した測量原点の座標値は、日本測地系に基づいている。

4．本書の遺構番号は、発掘調査時に、遺構の種類に関係なく検出順に付した通し番号をそのまま使用している。遺構の種別については次の略号を使用した。

掘立柱建物跡…ＳＢ、柱列…ＳＡ、竪穴住居跡…ＳＩ、井戸跡…ＳＥ、土壙…ＳＫ、溝跡…ＳＤ、水田跡…ＳＦ、石垣・焼土遺構・墓壙など…ＳＸ

5．本書に掲載した遺構は、地形図・全体図の縮尺は各図面に明示し、各遺構の個別の平面図、断面図は、掘立柱建物跡の平面図を1/100とした以外、すべて1/50の縮尺で統一した。遺物実測図は、土器・石製品が1/3もしくは1/6、礫石器・土製品・鉄製品が1/3、剥片石器が2/3の縮尺で図示した。

平断面図では、床面あるいは底面の遺物を赤線、礫を青線、炭化材を青囲、焼面を赤囲で表した。それ以外の場合は、その都度図面で明示した。

6．本文中における遺構の記述は、掘立柱建物跡、柱列、竪穴住居跡、井戸跡、石垣、焼土遺構、土壙、溝跡の順番で行い、同種類の遺構は遺構番号順に行ったが、遺構が重複する場合などではその限りではない。

7．本書に使用した土色の記述は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を参照した。

8．本書に使用した遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。

9．本書は調査員全員の協議を経て、八幡遺跡の執筆を相原淳一・須田良平が担当し、残りの執筆・編集を須田が担当した。

10．発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

11．発掘調査及び整理・報告書の作成に際しては以下の方々と関係機関から指導・助言を賜った。

（五十音順・敬称略）

稲野裕介・井上雅孝・君島武史・日下和寿・佐藤敏幸・柴田陽一郎・渋谷純子・渋谷孝雄・菅原祥夫・杉本良・高橋千晶・高橋　学・西野　修・野尻　侃・横山郁子・吉田江美子・河北地区教育委員会・桃生町教育委員会

目　　次

はじめに…… 5
沢田山西遺跡…… 9
崎山Ｂ遺跡…… 99
万歳山Ｃ遺跡…… 107
八幡遺跡…… 121

はじめに

1．はじめに

三陸縦貫自動車道は仙台市から岩手県宮古市にいたる自動車専用道路で、仙台・河北間が開通している。さらに北に延びる予定路線範囲にはいくつかの遺跡が含まれているため、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は遺跡保存のための協議を行ってきた。その結果、調査により記録保存することとなった遺跡について、平成12年度から調査を開始した。本書は平成15年度までに調査を行った遺跡の中で、桃生郡河北町沢田山西遺跡・崎山Ｂ遺跡と桃生町万歳山Ｃ遺跡・八幡遺跡について調査内容を報告したものである。

2．周辺の遺跡（第Ⅰ図・第Ⅱ図）

本書で報告する４遺跡のある河北町、桃生町は北上川下流域に位置している。この地域の山地帯は北上山系に属し、比較的急峻な丘陵部と沖積層が厚く堆積した平野部が直に接しており、平坦な地形を作り出す河岸段丘面がほとんど発達していない。傾斜地の多い当該地域には黒色土層や火山灰堆積層が発達せず、三畳紀やジュラ紀の基盤層の上に薄い腐植土層や基盤崩落土が堆積している。このため旧石器時代の遺物を包含する地層が発達せず、当該期の遺跡は周辺には認められない。

縄文時代の遺跡も小規模な散布地や貝塚が多く、沢田山西遺跡の東に位置する沢田山貝塚（47）は、丘陵を横断する道路の拡張工事を昭和24，５年頃行った際に縄文時代後・晩期の遺物が多数出土したという。しかし、河北町・石巻市境の古稲井湾北岸に形成された南境貝塚のように、学史的にも名高い早・前期から後期の貝塚もある。

弥生・古墳時代の遺跡も少なく、古墳時代としては、河南町と石巻市にまたがる須江丘陵に立地する須江糠塚遺跡（51）や関ノ入遺跡、丘陵下の自然堤防上に立地し、方形周溝墓も検出された新山崎遺跡などの前期の集落が認められる。

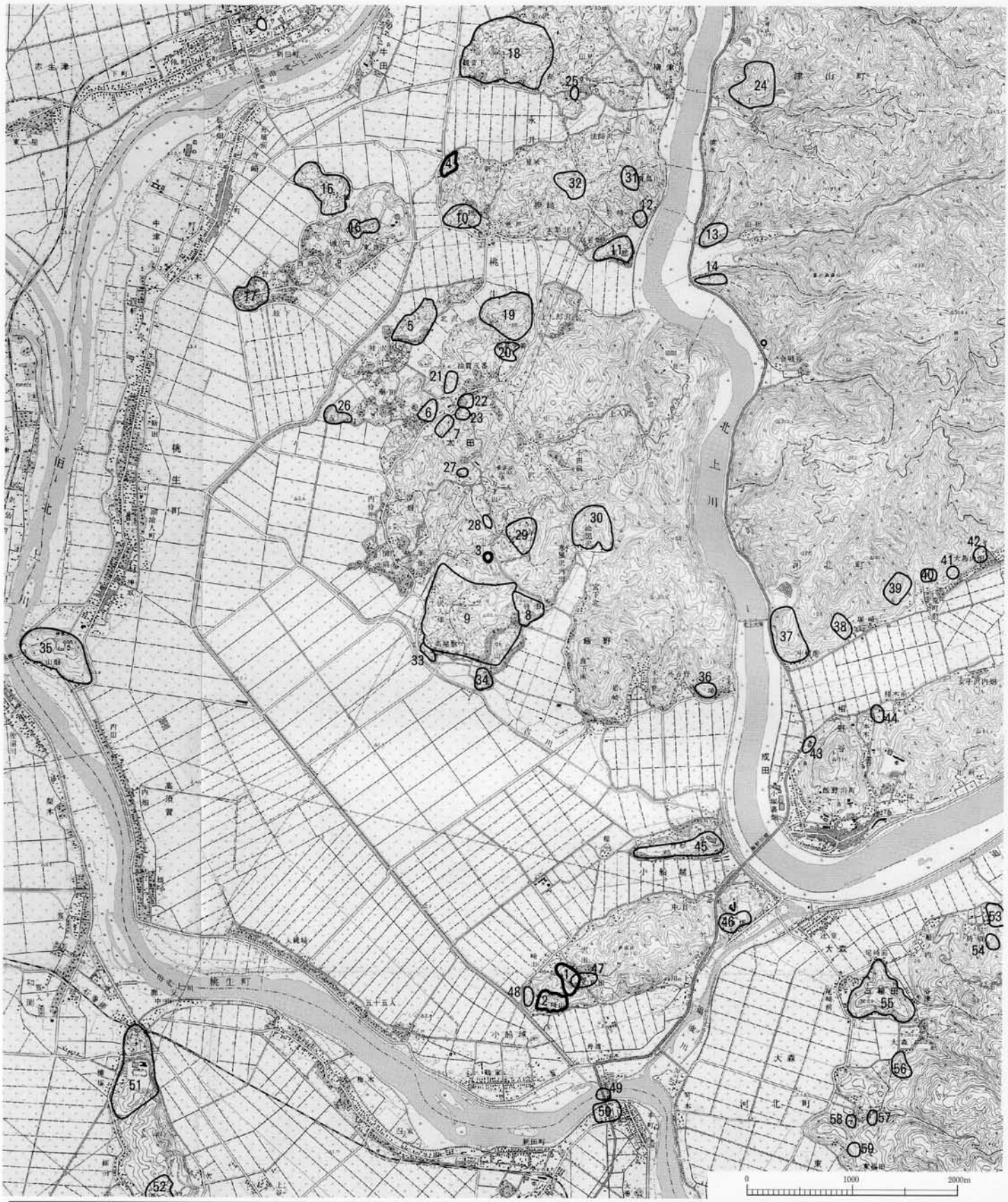
古代の遺跡は比較的多く、桃生町の東部には奈良時代の城柵官衙遺跡として知られる桃生城跡（9）がある。『続日本紀』によると、桃生城は天平宝字２（758）年から造営が始まり、翌３（759）年秋頃には完成し、宝亀5（774）年7月に海道の蝦夷の攻撃により一部が破壊されたことなどが知られてい

第Ⅰ図　遺跡の位置

る。宮城県多賀城跡研究所により10次にわたる調査が行われている。須江丘陵には須江糠塚遺跡や関ノ入遺跡、須江瓦山窯跡など奈良時代から平安時代前半までの集落や瓦や須恵器を生産した窯跡などが集中し、古代の大規模な生産遺跡群である。須恵器や瓦の一部は『続日本紀』に記されている牡鹿柵跡あるいは牡鹿郡家と推定されている矢本町赤井遺跡に供給されている。河北町東部には県指定史跡の和泉沢古墳群（39）がある。直径３～９ｍ、高さ１ｍほどの割石を積み上げた約50基の小円墳からなり、蕨手刀や鉄斧、須恵器、土師器が石室に副葬されていた。９～10世紀の築造年代とみられている。

河北町、桃生町周辺の丘陵には中世の館跡が多く分布するが、発掘調査されたものはなく詳細は不明なものが多い。

以上のように、これまで発掘調査された遺跡が少ない地域にあって、三陸縦貫自動車道建設に伴い宮城県教育委員会が平成12年度から実施してきた発掘調査により、この地域の様相が徐々に明らかになりつつある。桃生城跡においては北辺から延びる大溝が検出され、桃生城の範囲について新たな知見をもたらした。新田東遺跡（8）は桃生城跡の東に位置し、桃生城の存続期（８世紀第３四半期頃）の大規模な集落跡で、５軒の焼失住居跡を含む42軒の竪穴住居跡や15棟の掘立柱建物跡、井戸跡、土壙などが検出され、桃生城の造営、維持に携わった人々（柵戸や鎮兵）の集落跡として位置づけられている。この他、古墳時代前期や平安時代の竪穴住居跡も検出された。また、細谷Ｂ遺跡（7）では縄文時代中期末の遺物包含層や古代の竪穴住居跡７軒などが検出された。太田窯跡（6）では奈良時代の須恵器や瓦を生産し、桃生城に製品を供給したとみられており、今回の調査では窯跡は検出されなかったが、８～９世紀の竪穴住居跡４軒などが検出された。角山遺跡（5）は丘陵に立地する集落跡で、古代の竪穴住居跡60軒以上や鍛冶遺構なども検出され、縄文時代や古墳時代の遺物も発見されている。そして竪穴住居跡の検出された丘陵の南に接する低地では、古代の灰白色火山灰層に覆われた水田跡が検出され、北上川下流域では初めての発見となった。



No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	沢田山西遺跡	丘陵	集落	縄文・奈良・平安・近世
2	崎山B跡	丘陵	墓地・散布地	平安・近世
3	万歳山C遺跡	丘陵	集落	縄文中・後・古代
4	八幡遺跡	丘陵	集落・水田	縄文・平安
5	角山遺跡	丘陵	集落・水田	縄文・奈良・平安・中世・近世
6	太田窯跡	丘陵	窯跡・集落	奈良・平安・近世
7	細谷B遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中・奈良・平安
8	新田東遺跡	丘陵	包含層・集落	縄文前・古墳前・奈良・平安・近世
9	桃生城跡	丘陵	城柵	奈良・平安
10	壇の森館跡	丘陵	城館	中世
11	樫崎館跡	丘陵麓	城館	中世
12	樫崎貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文早・中
13	山田館跡（館山城）	丘陵	城館・散布地	古代・中世
14	山田囲古墳	丘陵斜面	古墳	古墳後
15	沢山城跡	丘陵	城館	中世
16	八幡館跡	丘陵	城館	中世
17	中津山城跡	丘陵	城館	中世・近世
18	氷井館跡	丘陵	城館	中世
19	阿倍館跡	丘陵麓	城館	中世
20	日高見神社遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳後

No.	遺跡名	立地	種別	時代
21	拾貫壱番遺跡	丘陵斜面	散布地	奈良・平安・近世
22	宗全山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
23	細谷遺跡	丘陵	散布地	縄文晩期・古代
24	館ヶ森館跡	丘陵	城館	中世
25	十所貝塚	丘陵斜面	貝塚・散布地	縄文早・中・古代
26	太田館跡	丘陵麓	城館	中世
27	万歳山B遺跡	丘陵	散布地	奈良・平安
28	万歳山A遺跡	丘陵	散布地	縄文
29	問答山遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
30	赤間館遺跡	丘陵斜面	城館	中世
31	陣ヶ峯館跡	丘陵	城館	中世
32	黄竜洞館跡	丘陵	城館	中世
33	高屋敷遺跡	丘陵麓	散布地	古代
34	飯野館跡	丘陵麓	城館	中世
35	神取山城跡	丘陵	城館・窯跡	中世・近世
36	外吉野遺跡	丘陵麓	散布地	古代
37	山崎館跡	丘陵	館跡	中世
38	北境館跡	丘陵	城館	中世
39	和泉沢古墳群	丘陵	古墳群	古代
40	和泉沢遺跡	丘陵斜面	散布地	古代

No.	遺跡名	立地	種別	時代
41	大島遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
42	中島貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文前・中
43	成田遺跡	丘陵	散布地	古代
44	日影貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文前期
45	後谷地遺跡	丘陵	散布地	古代
46	七郎館跡	丘陵斜面	城館・散布地	古代・中世
47	沢田山貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文後期・晩期
48	崎山A遺跡	丘陵麓	散布地	縄文
49	本鹿又遺跡	自然堤防	散布地	弥生
50	御塩蔵場跡	自然堤防	塩蔵	近世
51	須江糠塚遺跡	丘陵	集落・窯跡・城館	縄文前期・古代前期・奈良・平安・中世
52	細田遺跡	丘陵斜面	散布地・窯跡	縄文・平安
53	持領館跡	丘陵	城館・散布地	縄文・古代・中世
54	竹迫遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
55	大森城跡	丘陵	城館	中世
56	笠館跡	丘陵	城館	中世
57	大土B遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
58	大土A遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
59	東福田遺跡	丘陵斜面	散布地	古代

第Ⅱ図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

沢田山西遺跡
（さわだやまにし）

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置…… 11
Ⅱ　調査の方法と経過…… 11
Ⅲ　Ⅱ区で発見された遺構と遺物…… 15
Ⅳ　Ⅲ区で発見された遺構と遺物…… 61
Ⅴ　考察…… 68
Ⅵ　まとめ…… 76

調　査　要　項

遺 跡 名：沢田山西遺跡（さわだやまにし）（宮城県遺跡地名表記載番号66075、遺跡記号ＳＡ）

所 在 地：宮城県桃生郡河北町小船越字沢田山・崎山

調査担当：相原淳一・須田良平・岩見和泰・柳澤和明・吉野武・奥山芳明・田中政幸

調査期間：平成14年（2002年）６月３日～10月22日

　　平成15年（2003年）５月19日～７月18日

調査対象面積：平成14年度…1,000㎡、平成15年度…2,800㎡

調査面積：平成14年度…1,000㎡、平成15年度…1,200㎡

Ⅰ　遺跡の位置

沢田山西遺跡は桃生郡河北町小船越字沢田山・崎山にあり、河北町役場の南西約2.7㎞に位置し、北上川（追波川）と旧北上川に挟まれた独立丘陵上に立地する。この丘陵は、北上山系の南端付近に位置し、北上山地から西南西に延びる丘陵の先端が、北上川により分断され独立丘陵となったものであり、中心部に位置する標高119.7mの沢田山からやや急な傾斜を持って標高１mの沖積地に接している。周辺の丘陵と同様にこの丘陵にも平坦地は少ない。遺跡は沢田山と西南西にある標高59mの丘陵に挟まれた鞍部に位置し、北西－南東に細長い標高36.7mの丘陵と町道を挟んだ南の北東斜面に立地する。

Ⅱ　調査の経過と方法

工事計画と調査対象区：調査の対象となった道路路線敷は、本遺跡の中心部となる標高36.7mの丘陵（北側丘陵）の西半を斜めに横切るように切り崩し、さらに南に隣接する崎山Ｂ遺跡の所在する標高59mを頂部とする丘陵（南側丘陵）中心部を切り崩す形で設定されている。対象地域内は傾斜地が多く、当初遺構の存在が予想されたのは、比較的平坦面の広い北側丘陵頂部付近（Ⅰ区）のみであった。

試掘調査：北側丘陵の頂部付近にある畑部分を対象に平成12年９月に実施した。

Ⅰ区の調査：試掘調査の結果を受けて、平成13年４月と11月に、Ⅰ区とした北側丘陵頂部を中心とする地域を発掘調査し、北東斜面部で竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡３棟、土壙、溝などを検出した。しかし、北側丘陵の北側及び西側は平坦面のほとんど無い傾斜地域で、トレンチ調査により遺構がまったく検出されなかった。Ⅰ区の調査結果については既に報告済みである（宮城県教委2001）。

また、Ⅰ区南東部の人家が工事に伴い移転することとなり、移転先の用地であるⅠ区南東側の斜面が同年10月に一部無断で掘削された。その結果、掘削された断面に遺構が残存していることが確認され、Ⅰ区南側にも遺構が延びている可能性が認められた。さらに、国土交通省との現地協議の際に町道を挟んだ南側丘陵においても須恵器片が採集されたため、町道南側を新たな遺跡として調査の必要性が確認された。

Ⅱ区北側・Ⅲ区の調査：平成14年６月３日にⅢ区とした町道南側部分から調査を開始し、同月下旬には、Ⅱ区としたⅠ区南側部分の調査に着手した。９月26日にはラジコン・ヘリコプターによる空中撮影を行い10月22日に調査を終了した。

平成14年度に検出した遺構は、Ⅱ区では掘立柱建物跡５棟、竪穴住居跡８軒、土壙２基、溝跡９条、石垣１条、Ⅲ区では掘立柱建物跡３棟、柱列２条、竪穴住居跡１軒、土壙２基などである。

９月８日には現地説明会を開催し、地元住民を中心に150名以上の見学者が訪れた。

なお、当初、町道南側部分を崎山Ｂ遺跡としていたが、調査の結果、町道付近に遺構が集中することが明らかとなり、地形も沢田山西遺跡と同じ沢頭を囲むものであることが確認された。したがってこの範囲を沢田山西遺跡Ⅲ区とし、崎山Ｂ遺跡は南側丘陵南東斜面から南斜面にかけての範囲に訂正した。

第１図　調査の位置（1/1000）

Ⅱ区南側の調査：平成14年度に行ったⅡ区北側の調査の結果、Ⅱ区南西側の未買収地区にも遺構が延びることが確認された。そのため、平成15年度にⅡ区南側の調査を行った。調査は平成15年５月19日に開始し、７月18日にすべての調査を終了した。

平成15年度に調査した遺構は、掘立柱建物跡３棟、竪穴住居跡５軒、井戸跡１基、土壙３基などである。

調査区の概要：今回報告するⅡ区、Ⅲ区は、北側丘陵に位置するⅠ区の南側の南西斜面部と平坦部（Ⅱ区）、南側丘陵に位置する町道南側の北東斜面部（Ⅲ区）にそれぞれ立地する。Ⅲ区は今回調査を行った崎山Ｂ遺跡に隣接している。

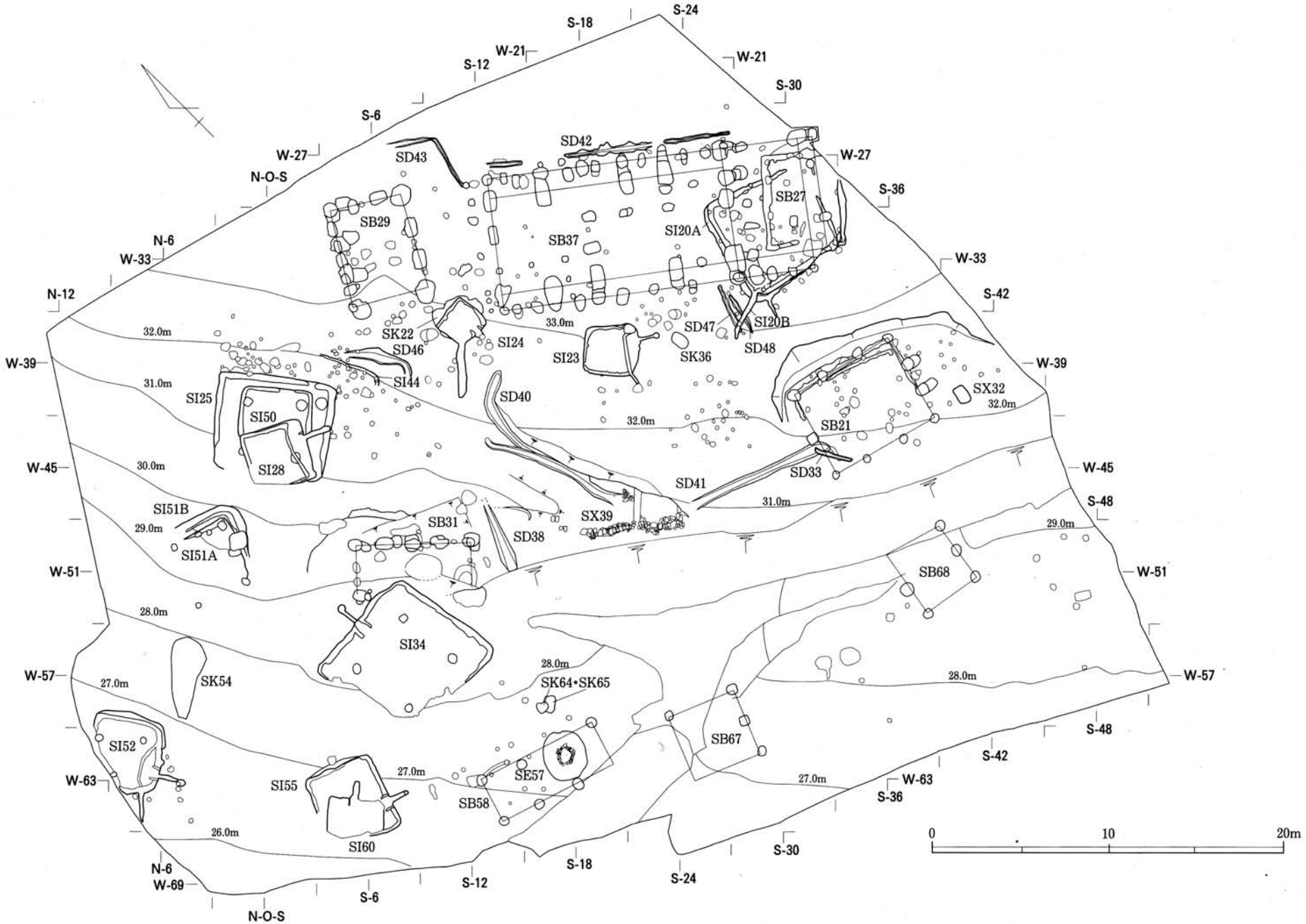
Ⅱ区：Ⅱ区は北東部の標高が高く、南から西が低い南～西斜面で、標高差は７ｍある。Ⅱ区はⅠ区よりも一段低い人家部分と、さらにその下の人家や農業用ハウス、畑、人家への通路などがあった部分にあたる。Ⅱ区上部の平坦面はⅠ区とは約３ｍの高低差があり、調査の結果、この平坦面は近世初頭には作り出されていたことが明らかとなった。Ⅱ区とⅢ区の間には、町道北側に沿うように西から沢が入っており、西側の深い部分では２ｍ以上の土盛りがされていた。そして、Ⅰ区の北側丘陵頂部から沢に向かう南西斜面の旧地形を、削り出し、もしくは土盛りなどにより改変していくつかの平坦面を形成していることが明らかとなった。

Ⅲ区：Ⅲ区は一部畑として利用されていたようであり若干の切り盛りは認められたが、ほぼ旧地形を留めていた。調査時には荒地もしくは雑木林であった。

Ⅱ・Ⅲ区の遺構検出面：遺構は表土もしくは盛土を除去した段階で検出した。遺構検出面は、Ⅱ区北側の平坦面は黄褐色シルト、Ⅱ区西側は赤褐色シルト、Ⅲ区は礫を多量に含む暗赤褐色シルトの地山面であり、それ以外の部分では、地山の上に堆積した最大厚約20㎝の礫を多量に含む暗褐色シルトの上面である。

調査の方法：Ⅱ区で検出した遺構は、Ⅰ区に設けた任意の点（Ｔ１・Ｒ23）を結んだ線を、Ⅲ区で検出した遺構は、工事範囲を示す任意の杭（Ｒ12・Ｒ13）を結んだ線をそれぞれ基準とした3m×3mのグリッドをもとに、1/20平面図・断面図や平板測量による1/100平面図を作成した。同時に35㎜と６×７のモノクロ・カラーリバーサルおよびデジタルカメラによる写真記録も行った。Ⅱ区のグリッドの南北軸は座標北から43°西に振れている。またⅢ区のグリッドの南北軸は座標北から９°東に振れている。基準線の呼称はⅡ区ではＲ23杭、Ⅲ区ではＲ13杭を基準として、東がＥ－３、Ｅ－６・・・、西がＷ－３、Ｗ－６・・・、北がＮ－３、Ｎ－６・・・、南がＳ－３、Ｓ－６・・・とした。

基準点の国家座標は　Ｔ１……Ｘ＝－166,405.049　Ｙ＝39,819.028
Ｒ23……Ｘ＝－166,438.189　Ｙ＝39,849.470
Ｒ12……Ｘ＝－166,575.747　Ｙ＝39,857.283
Ｒ13……Ｘ＝－166,556.295　Ｙ＝39,854.156　（日本測地系）である。



第2図　II区遺構配置図（1/300）

Ⅲ　Ⅱ区で発見された遺構と遺物

Ⅱ区で発見された遺構は、掘立柱建物跡８棟、竪穴住居跡12軒、土壙５基、溝跡９条、井戸跡１基、石垣１条、焼土遺構１基などである。

遺構は調査区全面に散漫に分布する。遺構は斜面部で検出されているため、各遺構の斜面下部側が削平されており残存状況は良くない。遺物量は少なく、竪穴住居跡から出土した土師器・須恵器などを中心に整理用平箱で28箱ほどである。

A　古代の遺構

古代の主な遺構は、掘立柱建物跡１棟（SB21)、竪穴住居跡12軒（SI20・23・24・25・28・34・44・50・51・52・55・60)、焼土遺構１基（SX32)、土壙４基（SK22・36・64・65)、溝跡５条（SD33・41・46～48）などである。主なものについて以下に説明する。土壙、溝については文末の一覧表に示した（第１・３表）

１．掘立柱建物跡

【SB21掘立柱建物跡】（第３・４図）

南斜面を削りだした平坦面に建てられている。柱痕跡や柱間の溝の壁材痕跡から多量の焼土塊や炭化物が検出されたことから、当建物は火災にあった可能性が高い。まず建物について説明し、次に平坦面について説明する。

〈掘立柱建物跡〉

［重複］SD41溝跡と重複し、これよりも新しい。

［柱間数・棟方向］東西３間、南北は西側柱列で２間、東側柱列で３間の東西棟である。

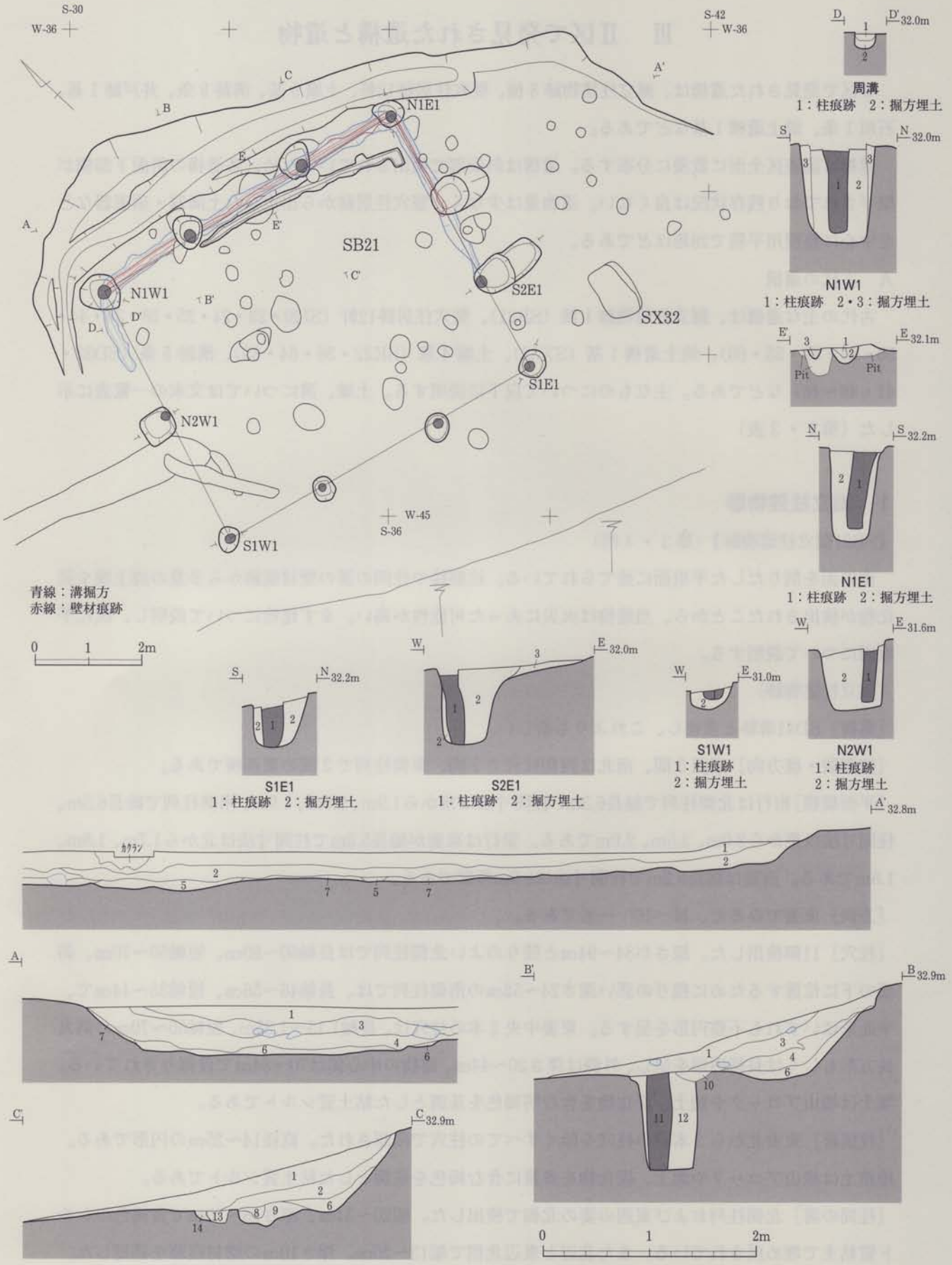
［平面規模］桁行は北側柱列で総長6.3m、柱間寸法は東から1.9m、2.5m、1.9m、南側柱列で総長6.5m、柱間寸法は東から2.0m、2.5m、2.0mである。梁行は東妻が総長5.3mで柱間寸法は北から1.7m、1.8m、1.8mである。西妻は総長5.2mで柱間寸法は2.6m等間である。

［方向］東妻でみると、N－16°－Eである。

［柱穴］11個検出した。深さが84～94cmと残りのよい北側柱列では長軸60～80cm、短軸50～70cm、斜面の下に位置するために残りの悪い深さ24～52cmの南側柱列では、長軸46～56cm、短軸36～44cmで、平面形はいずれも不整円形を呈する。東妻中央２本の柱穴は、長軸1.15～1.35m、短軸65～70cmの隅丸長方形もしくは長楕円形を呈し、外側は深さ20～44cm、建物の中心側は70～84cmで段掘りされている。埋土は地山ブロックや焼土、炭化物を含む明褐色を基調とした粘土質シルトである。

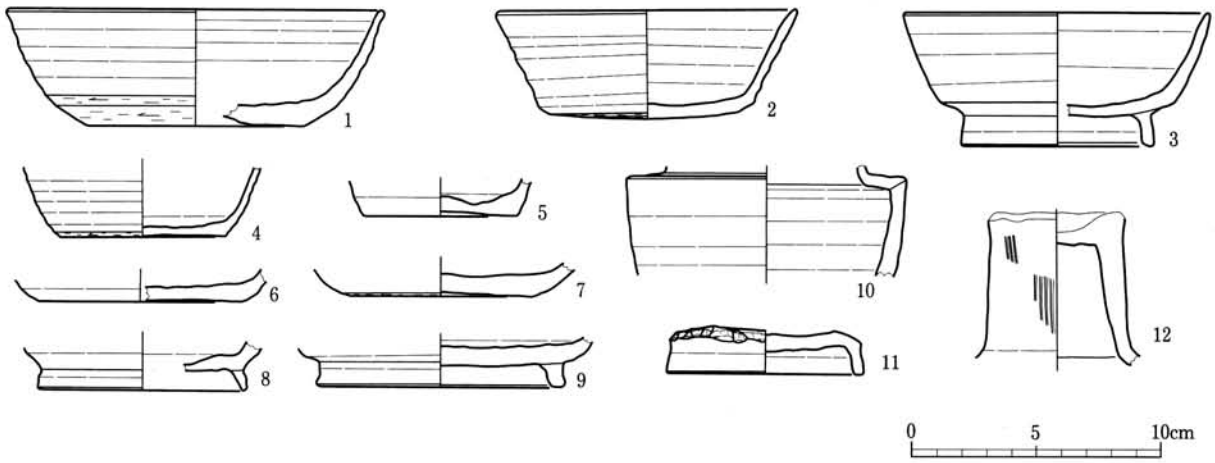
［柱痕跡］東妻北から２本目の柱穴を除くすべての柱穴で確認された。直径14～25cmの円形である。堆積土は地山ブロックや焼土、炭化物を多量に含む褐色を基調とした粘土質シルトである。

［柱間の溝］北側柱列および東西の妻の北側で検出した。幅20～34cm、深さ16～20cmで黄褐色のシルト質粘土で埋め戻されている。また北辺と東辺北側で幅13～20cm、深さ10cmの壁材痕跡を確認した。非常に堅く締まった焼土ブロックや炭化物を極めて多量に含むにぶい黄褐色の粘土質シルトで埋め戻



第3図 SB21堀立柱建物跡

番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SB21		にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土少量含む・自然堆積
2			褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	炭化物・焼土含む・人為堆積
3			褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	炭化物下部に多量・焼土含む・人為堆積
4			褐色（10YR4/6）	シルト質粘土	炭化物多量・地山ブロック含む・自然堆積
5		周溝	褐色（10YR4/6）	シルト質粘土	炭化物・焼土ブロック多量含む・人為堆積
6		崩落土	褐色（10YR4/6）	シルト質粘土	炭化物多量・地山ブロック含む・自然堆積
7		崩落土	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック多量含む・自然堆積
8		周溝埋土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物多量・焼土ブロック多量含む・人為堆積
9		N1E2掘方埋土	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	炭化物含む・地山が汚れた色調・人為堆積
10	Pit		黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	炭化物含む・地山が汚れた色調・人為堆積
11	SB21	N1W2柱痕跡	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土ブロック多量含む・人為堆積
12		N1W2掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土ブロック多量含む・人為堆積
13	Pit		黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	炭化物含む・地山が汚れた色調・人為堆積
14	平坦面の溝埋土		褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	炭化物・焼土・地山ブロック含む・人為堆積



番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　徴	写真図版	登録
1	須恵器・坏	平坦面直上	(15.0)	(8.6)	4.6	1/5	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ　底部：切離し不明→ロクロナデ→ミガキミガキ→回転ヘラケズリ	14－1	SB21－3
2	須恵器・坏	1層	11.9	7.5	4.3	2/3	内外面：ロクロナデ　底部：ヘラ切り→回転ヘラケズリ	14－2	SB21－2
3	須恵器・高台坏	平坦面直上	12.2	(7.6)	5.3	3/5	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り	14－3	SB21－1
4	須恵器・坏	1層		6.6	(2.7)	体～底2/3	内外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ 底部：切離し不明→回転ヘラケズリ→中心部ナデ	14－5	SB21－11
5	須恵器・坏	1層		6.1	(1.5)	底部2/3	内外面：ロクロナデ　底部：切離し不明→ナデ		SB21－6
6	須恵器・坏	1層		7.2	1.4	底部のみ	内外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ		SB21－10
7	須恵器・坏	1層		(8.0)	(1.3)	底部1/2	内外面：ロクロナデ　底部：切離し不明→回転ヘラケズリ		SB21－5
8	須恵器・高台坏	1層		(8.3)	(2.0)	底部のみ	内外面：ロクロナデ　底部：切離し不明→回転ヘラケズリ→高台貼付け→ロクロナデ		SB21－8
9	須恵器・高台坏	1層		9.8	(2.0)	底部のみ	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り→高台貼付け→ロクロナデ	14－4	SB21－7
10	須恵器・壺	1層	(7.9)		(4.4)	一部のみ	内外面：ロクロナデ（摩滅著しい）　最大径（11.2）	14－6	SB21－9
11	不明土製品	平坦面直上	7.8		1.9	1/2	外面：ロクロナデ　底部：切離し不明　須恵器・高台坏を転用	20－14	SB21－4
12	支脚？	1層				一部	外面：ハケメ（全体に摩滅）　土師器・高坏脚部を支脚に転用？	14－7	SB21－12

第4図　SB21堀立柱建物跡出土遺物

されている。壁材痕跡は溝掘方のほぼ中央部に認められる。

北側柱列では、西から2番目の柱穴を除く他の柱穴で、柱穴の掘方上面において溝が検出できた。しかし溝は柱痕跡に切られていた。また東妻北から2番目の柱穴では柱痕跡は確認できなかったが、溝は柱穴掘方よりも新しいことが確認できた。北側柱列西から2番目と東妻北から3番目の柱穴は溝と重複しているものの、溝の堆積土がほとんど残存せず前後関係は不明である。

〈平坦面〉

［平面形・規模］残存している部分で東西12.7m、南北3.7m以上の台形を呈する。ほぼ平坦であるが、標高の低い南に向かってわずかに傾斜している。壁に沿った北側幅約2mの部分しか残存していない。

［堆積土］にぶい黄褐色の粘土質シルト（1層）や褐色の粘土質シルト（2・3・7層）、褐色のシルト質粘土（4～6層）が堆積している。1・4～7層は自然堆積、2・3層は地山ブロックや炭化物、

焼土を多く含む人為堆積土である。

［壁］地山を壁とし、45°ほどの傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁の西側で82㎝である。

［周溝］西壁と北壁際で確認された。幅は20～80㎝、深さは２～10㎝である。北壁東側と東壁際には認められず、SB21掘立柱建物跡の北東隅の柱穴から1.6m先で周溝は途切れている。壁の崩落土である炭化物、地山ブロックを多く含む褐色シルト質粘土で埋まっている。

［溝］北壁から90㎝のところで、北壁に平行するように長さ4.2mの溝が検出された。東端が約20㎝南に折れ曲がっている。幅８～20㎝、深さ２～８㎝である。褐色の粘土質シルトで埋め戻されている。平坦面よりも古い竪穴住居跡の周溝の可能性もあるが、主柱穴などその他の施設が認められないため溝として扱った。

［出土遺物］柱穴掘方埋土から土師器甕と須恵器坏が、溝の埋土から土師器坏、須恵器坏・甕が出土した。土師器は非ロクロ調整で、坏には外面にも黒色処理されたものがある。

平坦面直上から土師器坏・甕と須恵器坏・高台坏・甕、須恵器高台坏の高台部を転用した不明土製品（11）が出土した。土師器坏・甕は非ロクロ調整で、坏には外面にも黒色処理されているものがある。須恵器坏には底部から体部下端が回転ヘラケズリ調整されているものがある（1)。須恵器高台坏（3）の底部は回転糸切りで切り離した後に高台がつけられている。

堆積土からは土師器坏・甕、須恵器坏（２・４～７）・高台坏（８・９）・壺（10)、土師器高坏の脚部を転用した支脚（12)、敲石が出土した。土師器は非ロクロ調整である。須恵器坏の底部切り離しは回転ヘラ切り（2）のものと回転糸切りのもの（6）があり、切り離し後に回転ヘラケズリ調整を施すものもある（２・４・６・７)。須恵器壺は小型で体部が直立し肩が張る形態である。

２．竪穴住居跡

【SI20竪穴住居跡】（第５・６図）

［重複］１回建て直されている。古いものからSI20Ａ竪穴住居跡→SI20Ｂ竪穴住居跡とする。またSI20Ａ竪穴住居跡はSB37掘立柱建物跡と重複し、それよりも古い。SI20Ｂ竪穴住居跡はSB27・SB37掘立柱建物跡、SD47・SD48溝跡と重複し、SD47・SD48溝跡よりも新しく、SB27・SB37掘立柱建物跡よりも古い。

《SI20Ａ竪穴住居跡》

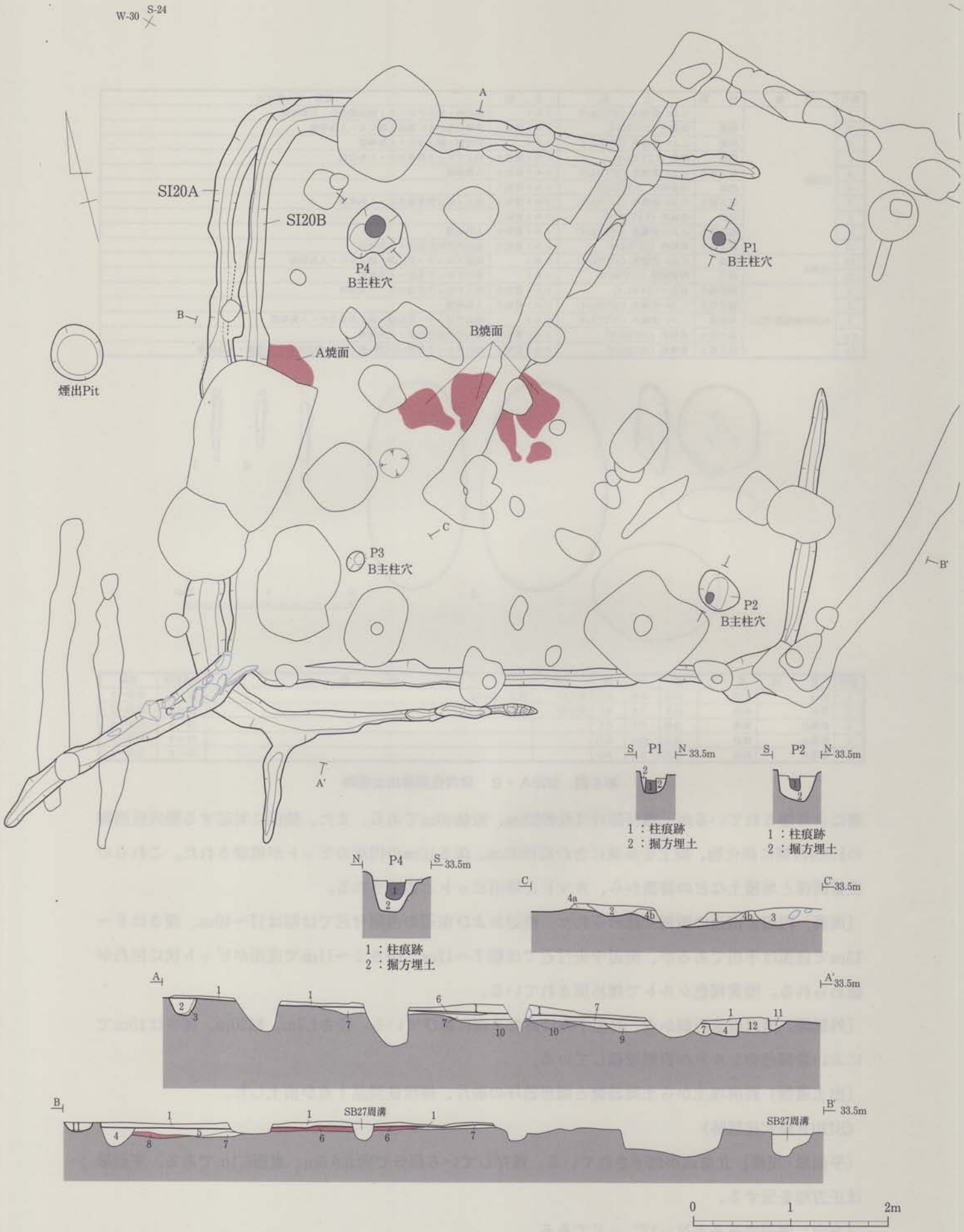
［平面形・規模］西辺と南辺の一部しか残存していない。南北6.4m、東西は南辺で3.7m以上の隅丸方形を基調としていたと推定される。

［方向］西辺でみるとＮ－18°－Ｅである。

［堆積土・壁・床面］残存していない。ただし南辺周溝とSI20Ｂ竪穴住居跡の南辺周溝の間には掘方埋土が残存しており、この付近は掘方埋土を床面としていた可能性がある。

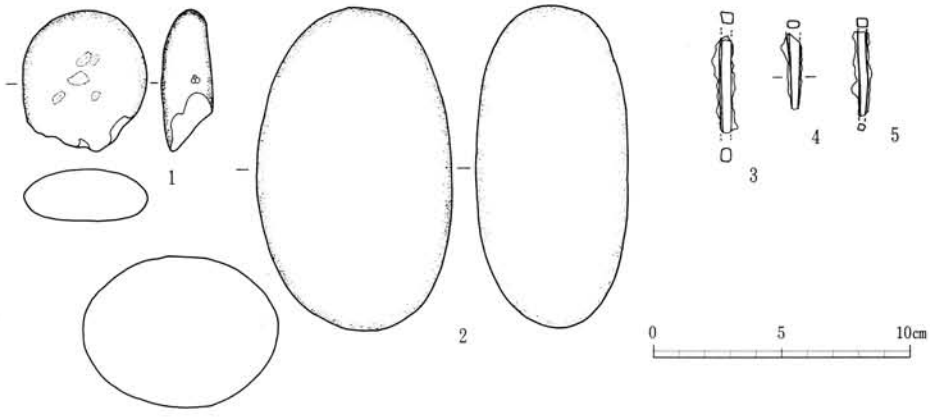
［主柱穴］検出されなかった。

［カマド］住居西辺中央付近に焼面が認められた。SB37掘立柱建物跡の柱穴とSI20Ｂ竪穴住居跡の周



第5図　SI20A・B竪穴住居跡

番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SI20B		にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物・焼土ブロック・地山礫含む・自然堆積
2		周溝	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	黄褐色地山土に黒色土混じる・人為堆積
3		周溝	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	炭化物・焼土含む・人為堆積
4		周溝	褐色（7.5YR4/4）	シルト質粘土	焼土ブロック多量含む・人為堆積
5		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	人為堆積
6		焼面	暗赤褐色（2.5YR3/3）	シルト質粘土	
7		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	焼土・炭化物多量含む・人為堆積
8		焼面	赤褐色（2.5YR4/6）	シルト質粘土	
9		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	人為堆積
10		掘方埋土	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	地山が汚れた色調・人為堆積
11	SI20A	周溝	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土含む・人為堆積
12		掘方	明黄褐色（10YR6/6）	シルト	地山ブロック含む・人為堆積
1	SI20B南西隅（CC'）	周溝埋土	褐色（7.5YR4/4）	シルト質粘土	焼土ブロック多量含む・人為堆積
2		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	人為堆積
3		外延溝	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土多量含む・人為堆積
4a		掘方埋土	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	地山が汚れた色調・人為堆積
4b		掘方埋土	黄褐色（10YR5/6）	シルト質粘土	地山ブロック多量・炭化物・焼土含む・地山が汚れた色調・人為堆積



番号	器　種	層　位	長	幅	厚	石材	特　徴	写真図版	登録
1	磨石	床直	(5.6)	(5.0)	(2.1)	安山岩	重さ：(60.0)g	22－8	SI20－1
2	磨石	床直	12.8	7.8	6.1	安山岩	重さ：810g	22－14	SI20－2
3	鉄製品	周溝	(3.8)	0.5	0.5			21－4	SI20－3
4	鉄製品	床直	(3.1)	(0.5)	(0.3)			21－3	SI20－4
5	鉄製品	床直	(3.4)	0.4	0.3			21－6	SI20－5

第6図　SI20A・B　竪穴住居跡出土遺物

溝により壊されているが、残存部分は長軸63cm、短軸40cmである。また、焼面に対応する竪穴住居跡の1.6m西側に炭化物、焼土を多量に含む直径53cm、深さ12cmの円形のピットが確認された。これらの位置関係と堆積土などの特徴から、カマドと煙出ピットと推定される。

［周溝］西辺と南辺の西側で認められた。西辺および南辺の西隅付近では幅は17～40cm、深さは6～13cmで底面は平坦であるが、南辺中央付近では幅7～12cm、深さ2～11cmで底面がピット状に凹凸が認められる。明黄褐色シルトで埋め戻されている。

［外延溝］南辺周溝西側から、斜面下方にあたる南に延びている。長さ1.2m、幅20cm、深さは10cmでにぶい黄褐色のシルトが自然堆積している。

［出土遺物］周溝埋土から土師器甕と須恵器坏の破片、棒状鉄製品1点が出土した。

《SI20B竪穴住居跡》

［平面形・規模］北東辺が削平されている。残存している部分で南北6.0m、東西6.1mである。平面形は正方形を呈する。

［方向］西辺でみるとN－17°－Eである。

［堆積土］西側半分に残存しており、にぶい黄褐色シルトが自然堆積している。

［壁］残存している部分では、西辺は地山を壁とし、南辺はSI20A竪穴住居跡の掘方埋土を壁としている。周溝底面からやや外側に傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りのよい南壁でも7cmと残りが悪い。

［床面］ほぼ平坦である。残存している西側半分では、西壁に沿って幅約2mは掘方埋土を、それ以外の部分は地山を床面としている。

［主柱穴］住居平面形の対角線上で4個確認した。残りの悪い南西柱穴（P3）を除く3個の柱穴は、平面形が長軸37～60cm、短軸35～50cmの不整楕円形を呈し、深さ31～40cmである。埋土はにぶい黄褐色シルトである。3ヶ所の柱穴で確認された柱痕跡は直径11～16cmの円形で、堆積土は炭化物を多く含む黄褐色シルトである。

［カマド］検出されなかった。

［床面の焼面］床面中央部で焼面5カ所を確認した。それぞれが非常に近接しているため、もとは長軸1.6m、短軸0.9mの焼面が分断された思われる。

［周溝］削平のため残存していない北東隅と外延溝に通じる南西隅を除いて全周で確認できた。幅は17～38cm、深さは4～19cmである。西辺北側では、掘方埋土を切って周溝が掘られている。褐色～黄褐色のシルト、シルト質粘土が自然堆積している。

［外延溝］南西隅から斜面下方にあたる西に延びている。長さ3.0m、幅37cm、深さは20cmで、にぶい黄褐色のシルトが自然堆積している。そして住居跡に接する部分から1.2mのところまで長さ10～30cmの扁平な礫が両壁を護るように据えられていた。

［出土遺物］床面直上からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、磨石（1・2）、棒状鉄製品（4・5）、掘方埋土からは土師器坏・甕、須恵器坏が出土した。堆積土から土師器坏、須恵器坏・壺・甕、棒状鉄製品（3）が出土した。土師器坏には切り離しが回転糸切りのものがある。

【SI23竪穴住居跡】（第7図）

［平面形・規模］北東辺3.2m、北西辺3.0mでやや歪んだ隅丸方形を呈している。

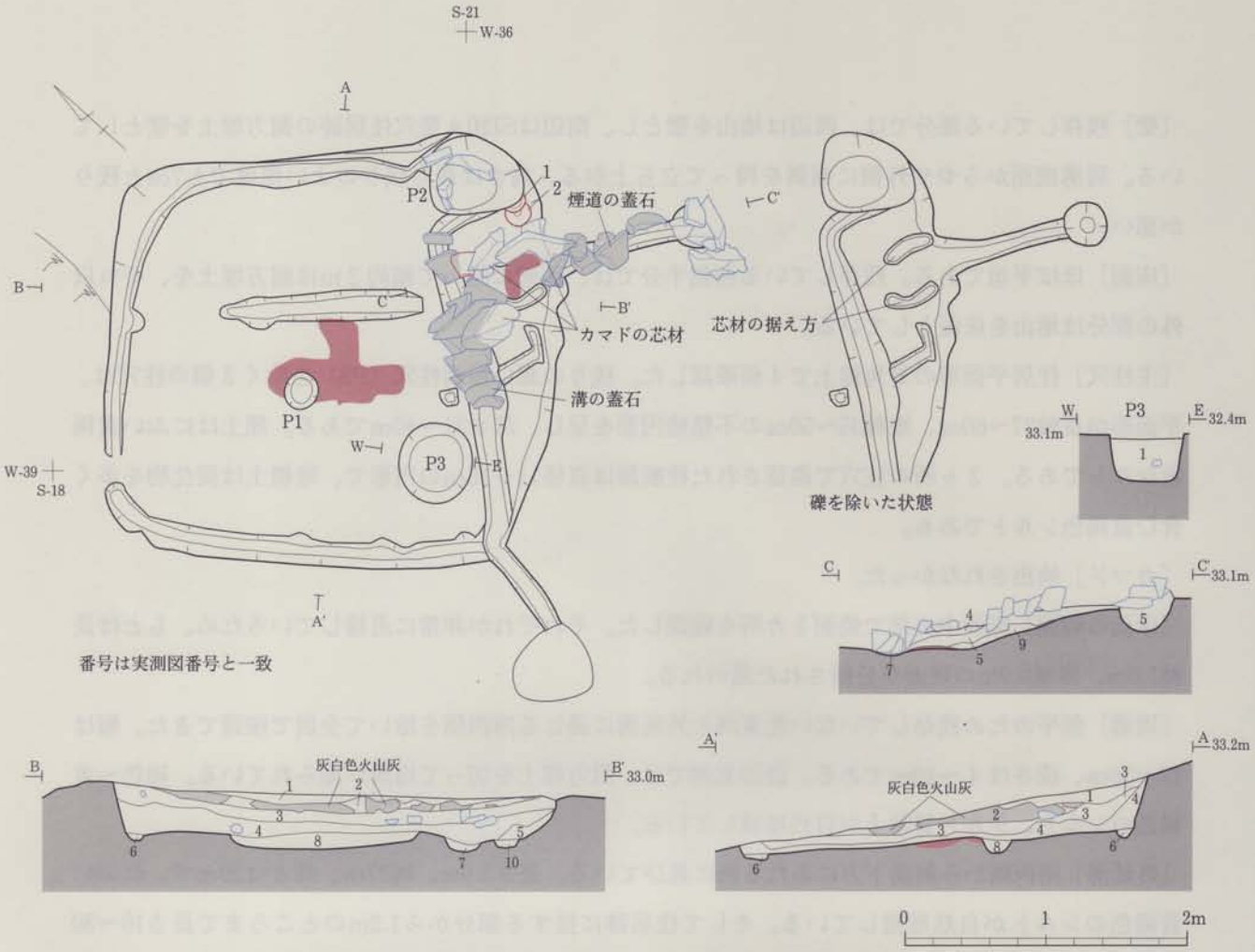
［方向］北東辺でみるとN－46°－Wである。

［堆積土］6層が認められる。1層は褐色のシルトで、2層は最大11cmの厚さの灰白色火山灰層で、1層の土が混ざっている。3・4・6層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。5層は暗褐色のシルトで、炭化物、焼土を非常に多く含んでいる。5層・6層はカマドのある南東辺にのみ堆積している。1～6層とも自然堆積である。

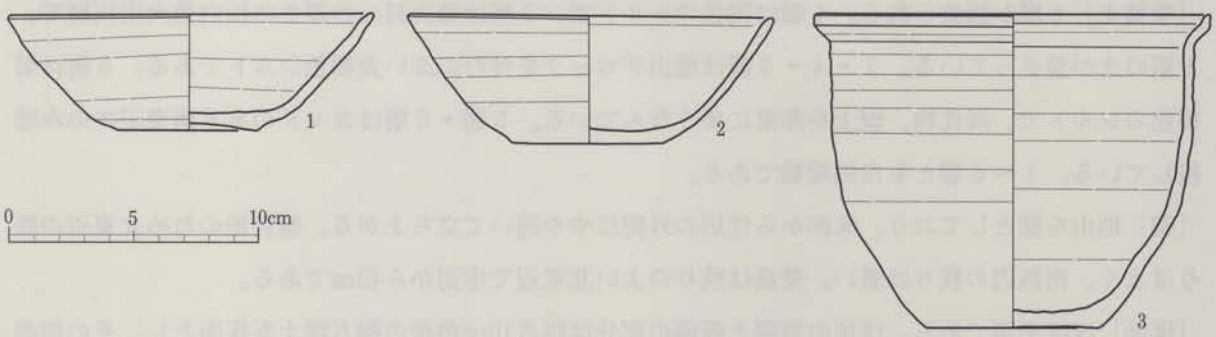
［壁］地山を壁としており、床面から住居の外側にやや開いて立ち上がる。傾斜地のため北東辺の残りはよく、南西辺の残りは悪い。壁高は残りのよい北東辺で床面から43cmである。

［床面］ほぼ平坦である。住居の南隅と西隅の部分は厚さ10cm前後の掘方埋土を床面とし、その他の部分は地山を床面としている。

［主柱穴］床面で4個のピットを検出した。柱の位置関係から、床面中央部のピットが主柱穴と思われる。直径25cmの円形で、深さ16cmである。炭化物・焼土を少量含む褐色のシルトが自然堆積している。



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI23		褐色（10YR4/4）	シルト	地山礫を少量含む・自然堆積
2			褐色（10YR4/6）	シルト	灰白色火山灰を大量含む・自然堆積
3			にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山礫・地山ブロック少量含む・自然堆積
4			黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山礫少量・地山礫含む・自然堆積
5			暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物大量・焼土含む・自然堆積
6		周溝	褐色（10YR4/6）	シルト	地山ブロック含む・自然堆積
7		カマド前面の溝	褐色（10YR4/6）	シルト	地山粒含む・人為堆積
8		床面の溝	褐色（10YR4/6）	シルト	地山礫含む・人為堆積
9			褐色（10YR4/6）	シルト	人為堆積
10		カマド側壁芯材据え方	黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山礫含む・自然堆積
1	貯蔵穴（P3）		褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物・石少量・地山礫含む・土器あり・人為堆積



番号	器種	層位	口径	底径	器高	残存率	特徴	写真図版	登録
1	須恵器・坏	床面	14.5	5.5	4.6	ほぼ完形	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り	14－9	SI23－1
2	赤焼土器・坏	床面	14.5	6.0	5.0	5/6	外面：ロクロナデ（摩滅）　内面：ロクロナデ→コテナデ　底部：回転糸切り	14－8	SI23－2
3	土師器・甕	床直	(15.8)	6.8	(12.4)	1/2	内外面：ロクロナデ（摩滅）　底部：回転糸切り（摩滅）	14－10	SI23－3

第７図　SI23竪穴住居跡・出土土器

［カマド］南東辺の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道、煙出ピットが残存している。両側壁は崩れているが、長さ20～45㎝、幅15～25㎝の扁平な礫を芯材としている。側壁下面には芯材の礫を据えた溝も認められる。溝は右側が長さ42㎝、幅10㎝、深さ５㎝、左側が長さ35㎝、幅10㎝、深さ５㎝で、ともに内側に湾曲している。この２条の溝の内法から、燃焼部の大きさは幅31㎝、奥行60㎝と推定される。

燃焼部底面はほぼ平坦であり、底面は前面から左側壁を中心に焼けて赤変している。

煙道は幅12～20㎝、長さ80㎝で、先端に向かって浅くなっている。側面には焼けて赤変している部分が見られる。煙出ピットは直径30㎝、深さ22㎝で、煙道先端の下面よりも14㎝深くなっている。煙道や煙出ピット上面には多くの礫が認められる。礫は、煙出ピットには上から落ち込んだ状態であるが、煙道では蓋をするように置かれており、地山を刳り抜いたものではなかったことが分かる。

［床面の焼面］床面中央部で１カ所を確認した。長軸95㎝、短軸60㎝の不整形を呈している。主柱穴や床面の溝に切られている。

［周溝］削平されている西隅を除くほぼ全周で認められた。東隅では貯蔵穴状ピット（P2）に接し、70㎝ほど住居の内側に入り込んだ後、カマドの前面を通って南隅に向かい、外延溝に続いている。カマド前面の溝からは、カマドの右側の壁に向かって「L」字形の溝が延びている。カマド前面の溝には、蓋をするように長さ18～32㎝、幅７～20㎝の板状の礫が敷き詰められていた。周溝、カマド前面の溝、「L」字形の溝ともに上幅10～30㎝、深さ１～９㎝で、断面はほぼ「U」字状を呈する。堆積土はいずれも地山粒を含んだ褐色シルトで、自然堆積である。

［外延溝］南隅から斜面下方にあたる南へ延びている。長さ70㎝、上幅12～16㎝、深さ６～12㎝で、断面形は「U」字状を呈する。埋土はカマド前面の溝と同様の地山粒を含んだ褐色シルトで自然堆積である。

［貯蔵穴状ピット］カマド脇の東隅（P2）と南隅（P3）で各１個検出した。P2は長軸48㎝、短軸34㎝のやや歪んだ楕円形を呈しており、深さは15㎝である。堆積土は炭化物、地山礫を多く含む褐色のシルトである。堆積土上面から礫が４点出土した。P3は直径30㎝のほぼ円形を呈しており、深さは30㎝である。堆積土は地山礫を含む褐色シルトでともに径26㎝、深さ17㎝のほぼ円形を呈している。いずれも人為堆積である。

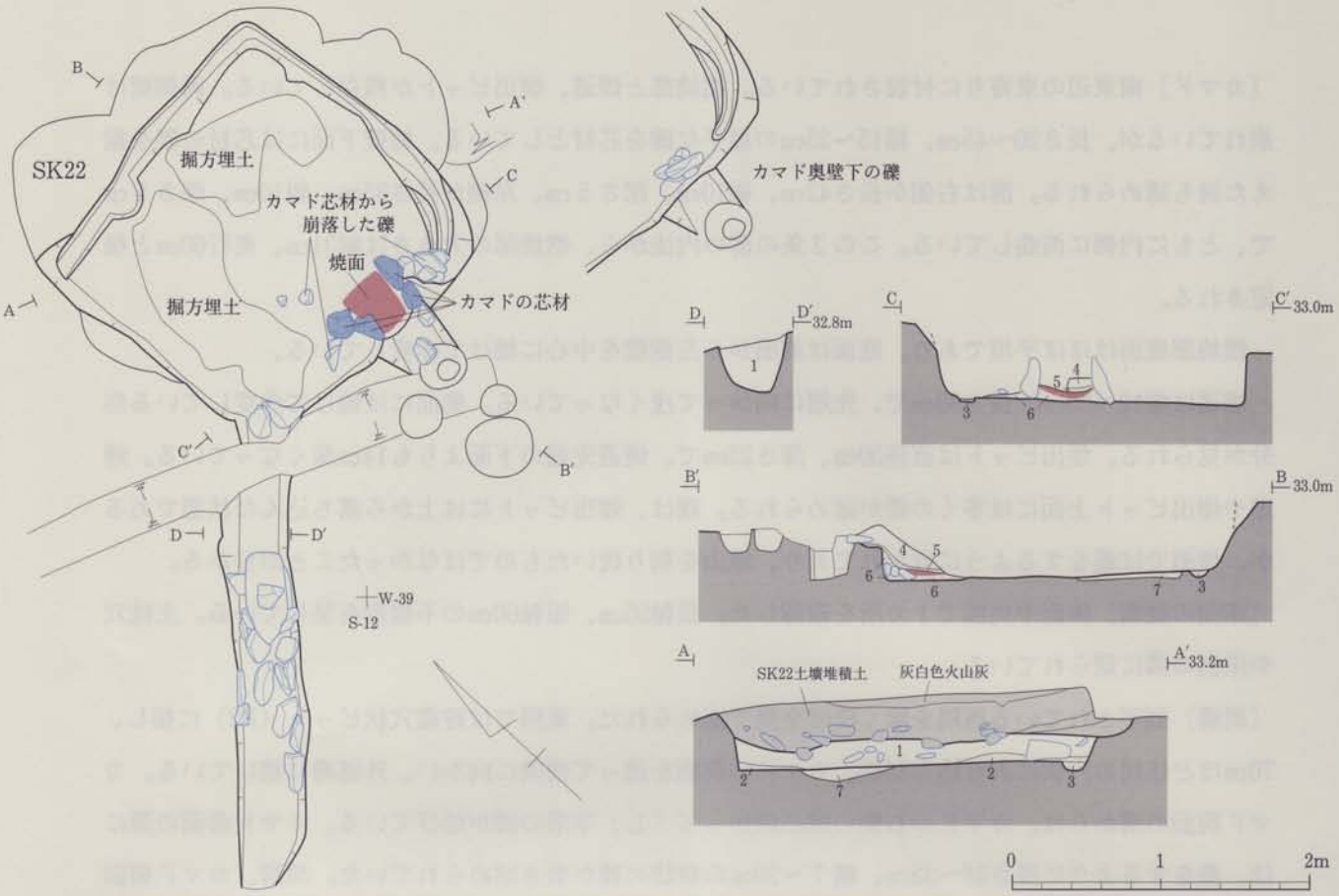
［床面の溝］北東辺とほぼ平行する溝が北東辺から約１ｍで検出された。長さ1.2m、幅16～24㎝、床面からの深さは６～９㎝で、断面形は「U」字状を呈する。堆積土は炭化物を少量含む褐色のシルトである。中央部に広がる焼面よりも新しい。

［出土遺物］カマド左脇の床面から須恵器坏（1）、赤焼土器坏（2）が出土した。ともに底部は回転糸切り無調整である。また、床面直上から土師器坏・甕と須恵器甕（3）、床面の溝から土師器甕、堆積土から土師器坏・甕が出土した。土師器はいずれもロクロ調整のものである。

【SI24竪穴住居跡】（第８図）

［重複］SK22土壙と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模］一辺2.2mの隅丸正方形である。



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI24		にぶい黄褐色（10YR6/4）	シルト	炭化物・焼土含む・人為堆積
2			明黄褐色（10YR6/6）	粘土質シルト	炭化物・焼土多量含む・人為堆積
3		周溝	黄褐色（10YR5/8）	シルト	炭化物・焼土多量含む・人為堆積
4		カマド崩落土	にぶい黄褐色（10YR6/4）	シルト	炭化物多量含む・人為堆積
5		焼土層	褐色（10YR4/4）	シルト	焼け礫多量含む・人為堆積
6		焼土層	明黄褐色（10YR6/6）	シルト	人為堆積
7		掘方埋土	黄褐色（10YR5/6）	シルト	人為堆積
1	外延溝（DD′）		にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	炭化物・焼土少量・地山ブロック多量含む・人為堆積

第８図　SI24竪穴住居跡

［方向］西辺でみるとほぼ真北方向である。

［堆積土］にぶい黄褐色シルトが自然堆積している。

［壁］地山を壁とし、周溝底面からやや外側に傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で50cmである。

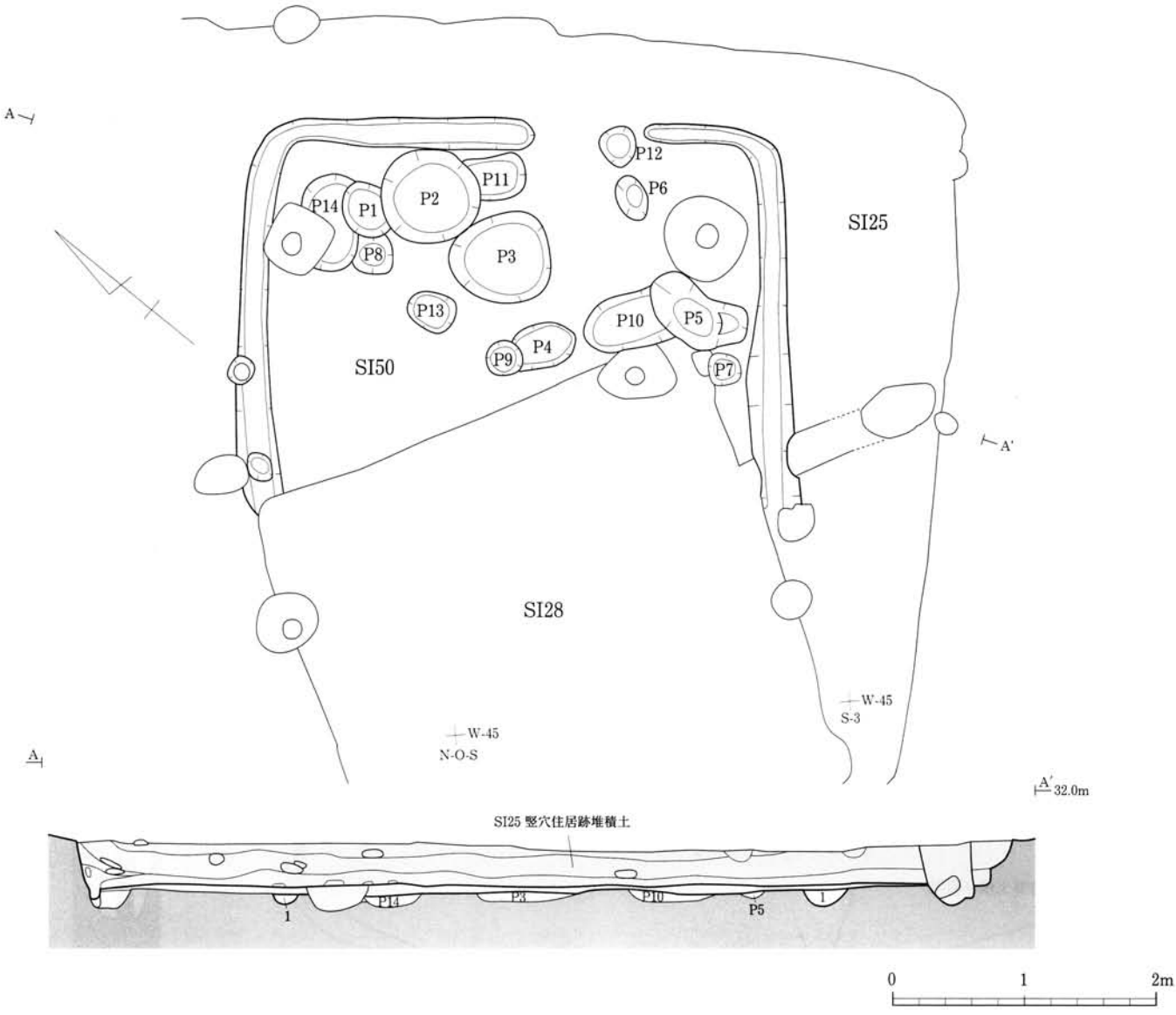
［床面］ほぼ平坦である。北壁から西壁にかけては掘方埋土を、それ以外の部分は地山を床面としている。

［主柱穴］検出されなかった。

［カマド］住居南辺中央のやや東寄りに付設されている。カマドの両側の側壁と煙道、煙出ピットが残存している。残存するカマド本体は幅約80cm、奥行き約45cmである。

左側壁は長さ40cm、高さ30cm、右側壁は長さ40cm、高さ26cmである。両側壁には、芯材とした長さ10～20cm、幅８～15cmの板状あるいは柱状の礫が露出している。壁際や側壁の底部付近にだけ、カマド側壁の構築土である明黄褐色シルトが残存している。両側壁の外側や煙道にも礫が認められるが、カマドの芯材に用いた礫がカマドの崩落とともに周囲に散乱したものと思われる。

燃焼部は、まず奥壁下に長さ25～30cm、幅10～15cmの細長く扁平な礫４個を横向きに置き、その上



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI50	周溝	褐色（7.5YR4/4）	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土粒少量含む・人為堆積
		Pit 3	暗赤褐色（5 YR3/3）	シルト	地山粒・焼土ブロック多量含む
		Pit 5	にぶい褐色（7.5YR5/3）	シルト	炭化物少量含む
		Pit10	にぶい褐色（7.5YR5/3）	シルト	
		Pit14	褐色（7.5YR9/6）	シルト	炭化物・焼土含む

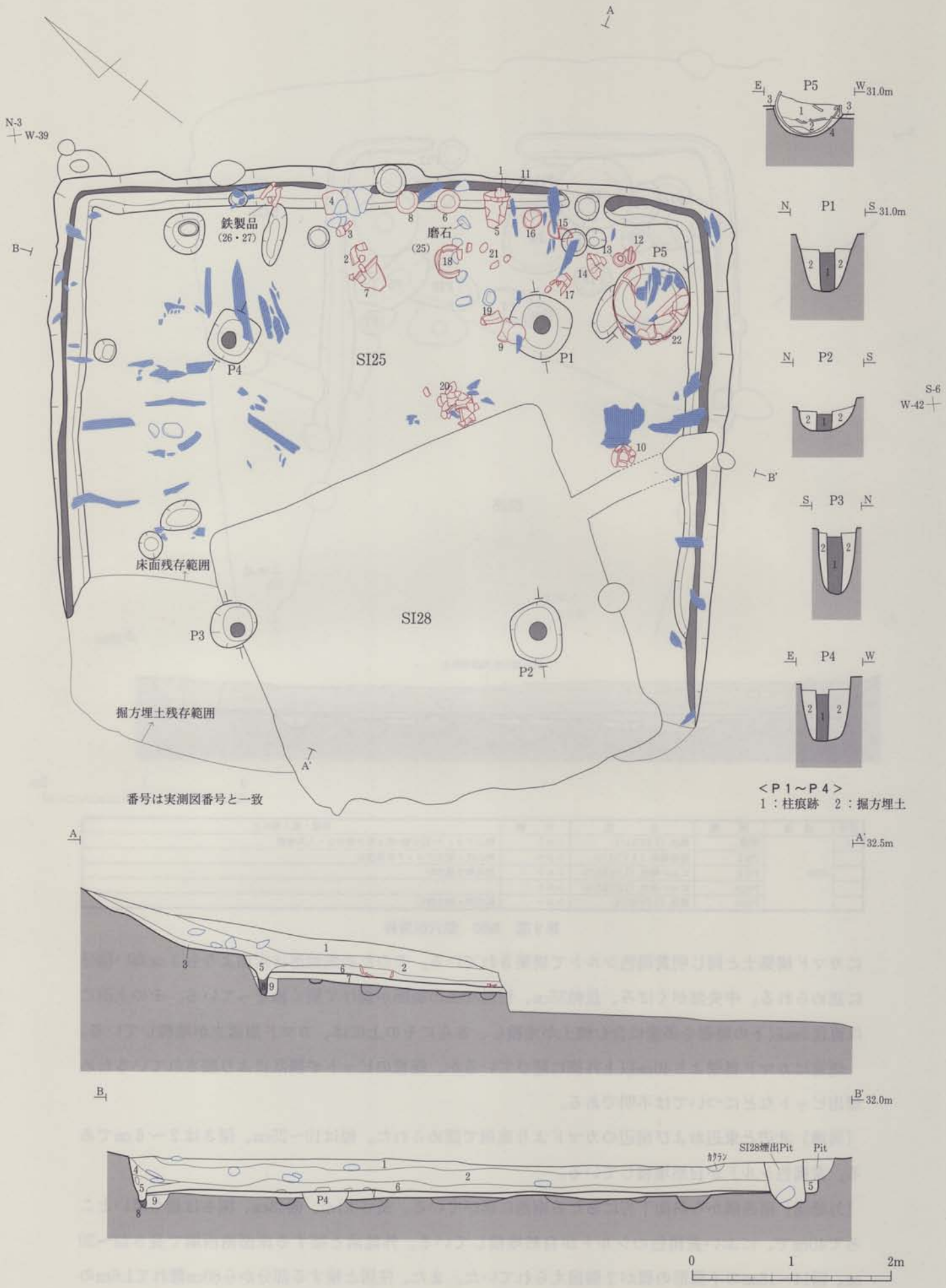
第9図　SI50　竪穴住居跡

にカマド構築土と同じ明黄褐色シルトで構築されている。そのため燃焼部は床面よりも3㎝高い部分に認められる。中央部がくぼみ、長軸35㎝、短軸30㎝の範囲が焼けて堅く締まっている。その上面には直径3㎝以下の焼礫を多量に含む焼土が堆積し、さらにその上には、カマド崩落土が堆積している。

煙道はカマド奥壁より40㎝以上外側に延びているが、後世のピットや攪乱により壊されているため煙出ピットなどについては不明である。

［周溝］北辺と東辺および南辺のカマドより東側で認められた。幅は10～25㎝、深さは2～6㎝である。黄褐色シルトが自然堆積している。

［外延溝］南西隅から斜面下方にあたる南西に延びている。長さ3.1m、幅43㎝、深さは最も深いところで40㎝で、にぶい黄褐色のシルトが自然堆積している。外延溝と接する床面南西隅で長さ22～30㎝、幅14～18㎝の不整形の礫が2個据えられていた。また、住居と接する部分から80㎝離れて1.6mの範囲に長さ15～30㎝の扁平な礫が両壁を護るように据えられ、その上に長さ60㎝、幅28㎝の大型の礫



第10図　SI25竪穴住居跡

番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI25		暗褐色（10YR2/3）	シルト	焼土粒多量含む
2			にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物含む
3			黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山ブロック・礫多量・炭化物含む
4			暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物・地山粒・焼土粒含む
5			褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物多量含む
6			暗赤褐色（5YR3/4）	シルト	炭化物・地山ブロック・焼土多量含む
7		掘方埋土	褐色（7YR4/4）	シルト	地山ブロック・炭化物・焼土粒含む
8		壁材痕跡	暗褐色（10YR3/4）	シルト	
9		周溝掘方埋土	にぶい黄褐色（10Y5/3）	シルト	地山粒含む
1	P5		黄褐色（10YR5/6）	シルト	
2			黄褐色（10YR5/8）	シルト	
3			暗赤褐色（5YR3/4）	シルト	住居掘方埋土
4			褐色（10YR3/4）	シルト	

が蓋をするように置かれていた。

［出土遺物］堆積土から土師器甕、須恵器坏の破片が少量出土した。

【SI50竪穴住居跡】（第9図）

［重複］SI25・SI28竪穴住居跡と重複し、これらよりも古い。

［平面形・規模］南北4.2m、東西3.2mの隅丸長方形である。

［方向］北西辺でみるとN－38°－Eである。

［堆積土・壁・床面］残存していない。

［主柱穴・カマド］検出されなかった。

［周溝］南西辺を除く各辺で確認できた。北東辺では中央南よりで80cmにわたり途切れている。幅12～33cm、深さ2～8cmで、褐色シルトで埋め戻されている。

［床面のピット］床面の範囲の東側を中心に、長軸27～80cm、短軸21～70cmの大小様々な円形～不整楕円形のピットが14個確認された（P1～P14）。深さは12～20cmで、炭化物や焼土を多量に含む極暗赤褐色～褐色のシルトで埋め戻されている。

［出土遺物］P2から非ロクロ調整の土師器坏・甕が出土した。坏は外面に段があるものとないものがあり、ともに内面が黒色処理されている。この他、周溝の堆積土やピット（P1・P3・P5・P6）から土師器甕の破片が出土した。

【SI25竪穴住居跡】（第10～15図）

床面には炭化材や多くの土器が残存しており、これらの状況からこの竪穴住居跡は焼失したものと考えられる。

なお、斜面上方にあるSD46溝跡の堆積土には焼土や炭化物が含まれており、位置からみても本住居跡の外周溝の可能性がある。

［重複］SI28・SI50竪穴住居跡と重複し、SI28竪穴住居跡よりも古く、SI50竪穴住居跡よりも新しい。

［平面形・規模］南北は北東辺で6.8m、東西は南東辺で5.6m、平面形は隅丸方形を基調としている。南西辺は残存していない。

［方向］北西辺でみるとN－40°－Eである。

［堆積土］1層よりも上部で、基盤の崩壊礫を多量に含む黒褐色土層に挟まれて灰白色火山灰層が堆積していた。

住居跡全面に三層（1・2・6層）、壁際に二層（4・5層）堆積している。1層（にぶい黄褐色シ

ルト)、2層（黄褐色シルト）は自然堆積である。6層は床面上に堆積し、炭化材、焼土塊を大量に含む暗赤褐色シルトで、厚さは、床面中央部が4～6㎝、壁際が9～13㎝で、壁際が厚い傾向が認められる。6層は屋根に葺かれていた葺土が火災とともに崩れ落ちたものと推定される。

［壁］地山を壁とし、周溝底面からやや外側に傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りのよい東壁で36㎝である。

［床面］ほぼ平坦である。掘方埋土を床面としている。

［主柱穴］住居平面形の対角線上にある4個を確認した（P1～4）。大きさは長軸48～63㎝、短軸43～60㎝、平面形は不整楕円形や隅丸長方形を呈し、深さ32～64㎝である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。直径12～16㎝の円形で、堆積土は炭化物を多く含む暗褐色や黒褐色シルトである。

［カマド］検出されなかった。

［周溝］残存する各辺の壁際を巡っているが、北東辺の南隅付近では35㎝途切れている。幅18～28㎝、深さ8～18㎝、堆積土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで、埋め戻されている。また、壁際に認められる壁材痕跡も、北東辺中央やや北よりの部分で45㎝途切れている。幅4～8㎝、深さ4～18㎝、堆積土は炭化物を多く含むしまりのない暗褐色シルトで、自然堆積である。

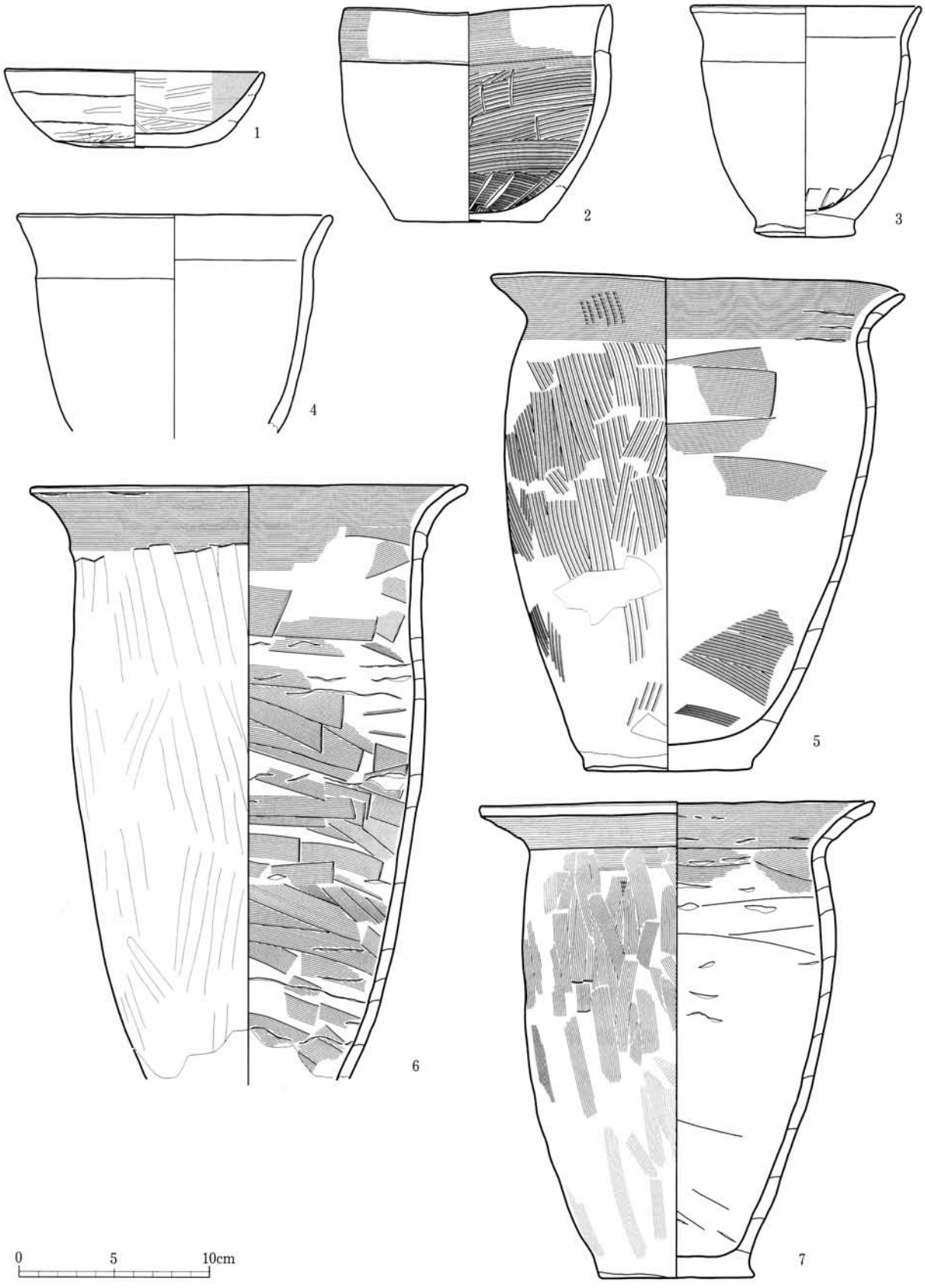
［その他の施設］床面の東隅からは須恵器の大甕を据えた、平面形が円形を呈する直径64㎝、深さ28㎝のピットが検出された（P5）。

［床面の炭化材］床面で炭化材を検出した。多くの炭化材は棒状を呈し、竪穴住居の各辺に対して直交するものが多い。南東辺には板状の炭化材が認められた。いずれも残存状況が悪く上屋の構造は不明である。

［出土遺物］床面に伴う土器は22点で、土師器9点、須恵器13点である。土師器は北東辺の中央部に分布する。土師器集中の南側の、須恵器集中に隣接する土師器甕（5）内の口縁部付近からは重なった土師器坏（1）と須恵器坏（11）が出土した。この1点の坏を除いて、土師器はすべて鉢（2）・甕（3～9）である。須恵器は北東辺の南側に集中し、東隅の大甕（22）の北側に、大甕に近い方から高台坏（12～14）が3点、蓋（15・16）が2点、鉢（18・19）2点と甕（21）1点がまとまっている。高台坏のまとまりの西側には壺（17）が1点あり、それらのまとまりからやや離れたところに坏（10）と甕（20）が1点ずつ認められる。この他、北東辺中央部の土師器の集中部から磨石（25）が1点出土した。床面と同じレベルの周溝堆積土上面からは長さ15㎝の先端の尖った扁平な鉄製品（26・27）が2点まとまって出土した。

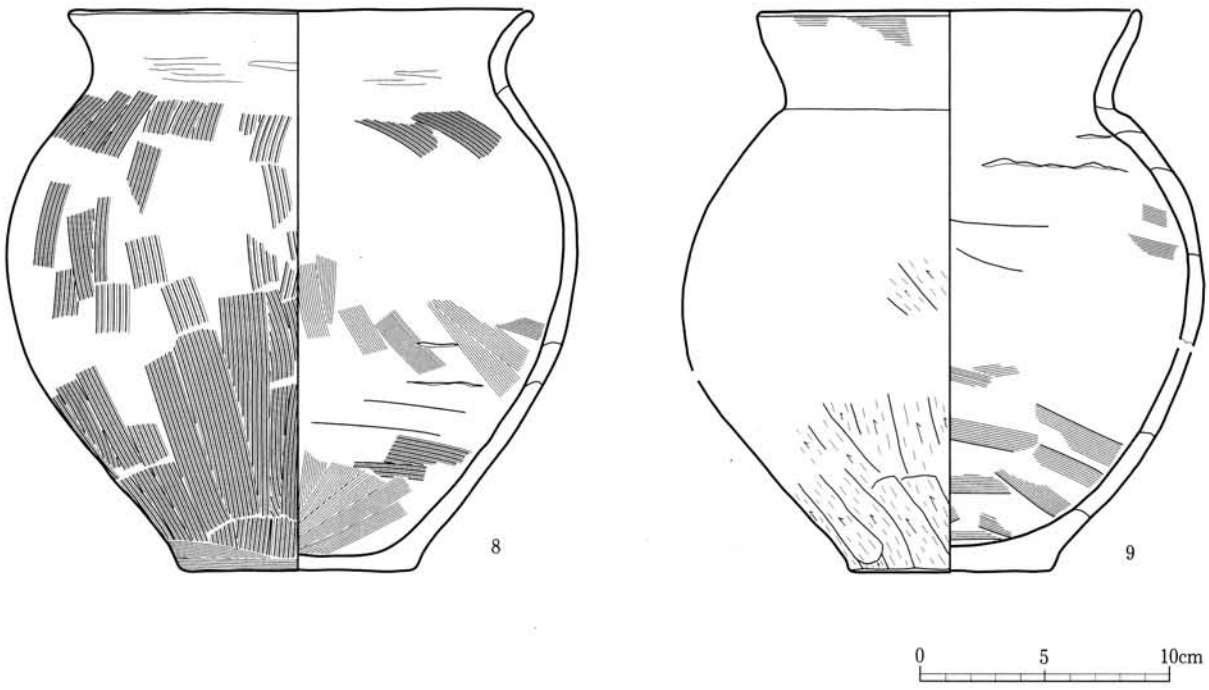
この他にも、床面と竪穴住居の掘方埋土と主柱穴(P1)の柱痕跡から土師器甕の破片が出土した。堆積土からは土師器と須恵器の坏、甕が出土した。

床面出土の土師器はすべて非ロクロ調整である。土師器坏（1）は平底で外面がヘラミガキされている。鉢（2）は体部上半から口縁部まで真っ直ぐに立ち上がるもので、口頸部に段がある。土師器甕には、長胴で口縁部に最大径があるもの（長胴甕・3～7）と球胴で胴部中央から上部に最大径があるもの（球胴甕・8・9）がある。須恵器をみると、坏は皿形で底部の特徴が、回転ヘラ切りで無調整



番号	器　種	層位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
1	土師器・坏	床面	13.5		4.0	7/8	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ→黒色処理	14－11	SI25－21
2	土師器・鉢	床面	(12.0)	5.2	11.9	1/3	外面：ヨコナデ？→ナデ？　内面：ヨコナデ？→ヘラナデ？ orハケメ？　底部：ナデ	14－13	SI25－ 6
3	土師器・甕	床面	13.4	7.7	11.0	ほぼ完形	外面：ヨコナデ→ナデ？　内面：ヨコナデ→ハケメ　底部：木葉痕	14－12	SI25－ 5
4	土師器・甕	床面	(14.4)			一部	内外面：摩滅のため調整不明		SI25－ 7
5	土師器・甕	床面	21.6	8.8	25.4	ほぼ完形	外面：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ→ハケメ　底部：木葉痕	14－14	SI25－19
6	土師器・甕	床面	(22.8)		(30.6)	1/3　底部欠損	外面：ヨコナデ→ヘラミガキ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ	15－ 1	SI25－18
7	土師器・甕	床面	20.5	8.0	24.6	ほぼ完形	内外面：ヨコナデ→ヘラナデ　底部：ナデ	15－ 2	SI25－ 4

第11図　SI25竪穴住居跡出土土器（1）

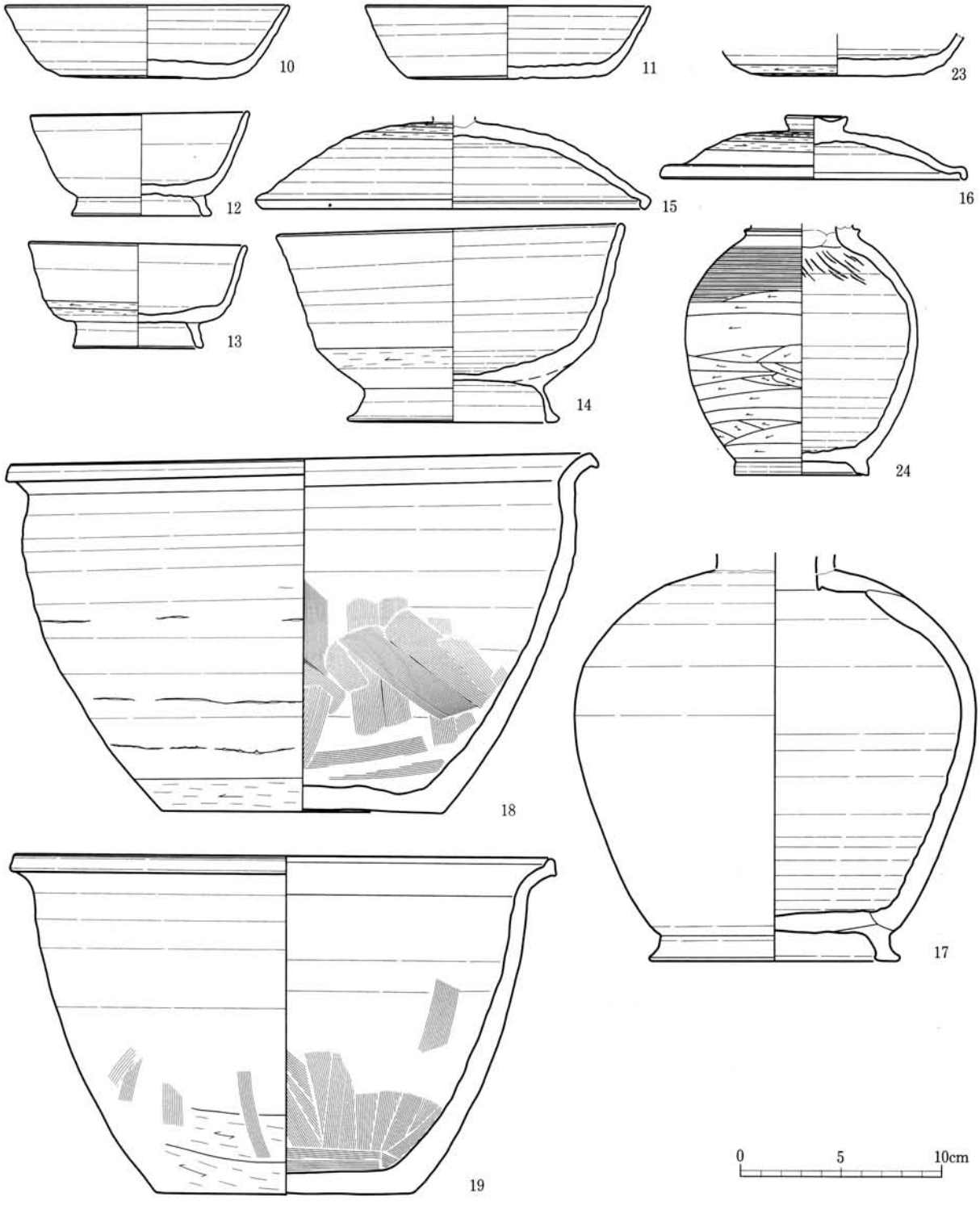


番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
8	土師器・甕	床面	18.5	9.4	22.0	ほぼ完形	外面：ヘラミガキ？→ハケメ→ナデ　内面：ヘラミガキ？→ハケメ→ナデ　底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	15－4	SI25－17
9	土師器・甕	床面	(15.2)	(22.0)	8.0	4/5	外面：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ナデ→ヘラナデ→ナデ　底部：木葉痕？	15－3	SI25－10

第12図　SI25　竪穴住居跡出土土器（2）

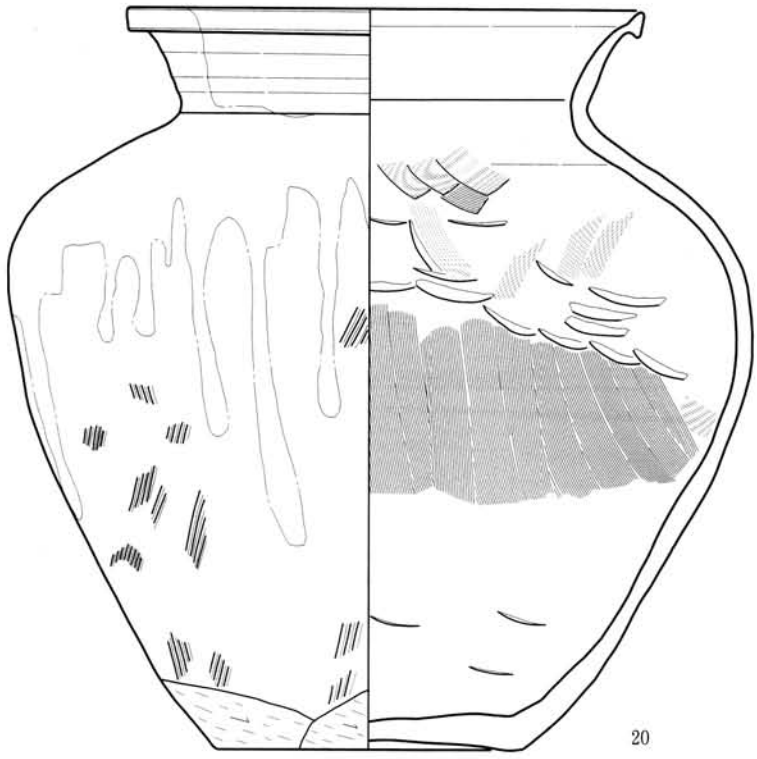
のもの（10）と回転糸切りで切り離し後に底部から体部下端が回転ヘラケズリされるもの（11）がある。高台坏には口径が10cm前後のもの（12・13）と17cm前後のもの（14）がある。切り離し後に底部から体部下端が回転ヘラケズリされており、断面方形状で外に開く高台が付けられている。蓋には口径が15cm前後のもの（16）と18cm前後のもの（15）がある。前者のつまみは扁平な宝珠形である。壺には大型のものと小型のものがあり、大型のもの（17）は頸部が三段接合である。甕には丸底と平底（20）があり、丸底には器高が32cmのもの（21）と67cmの大型のもの（22）がある。

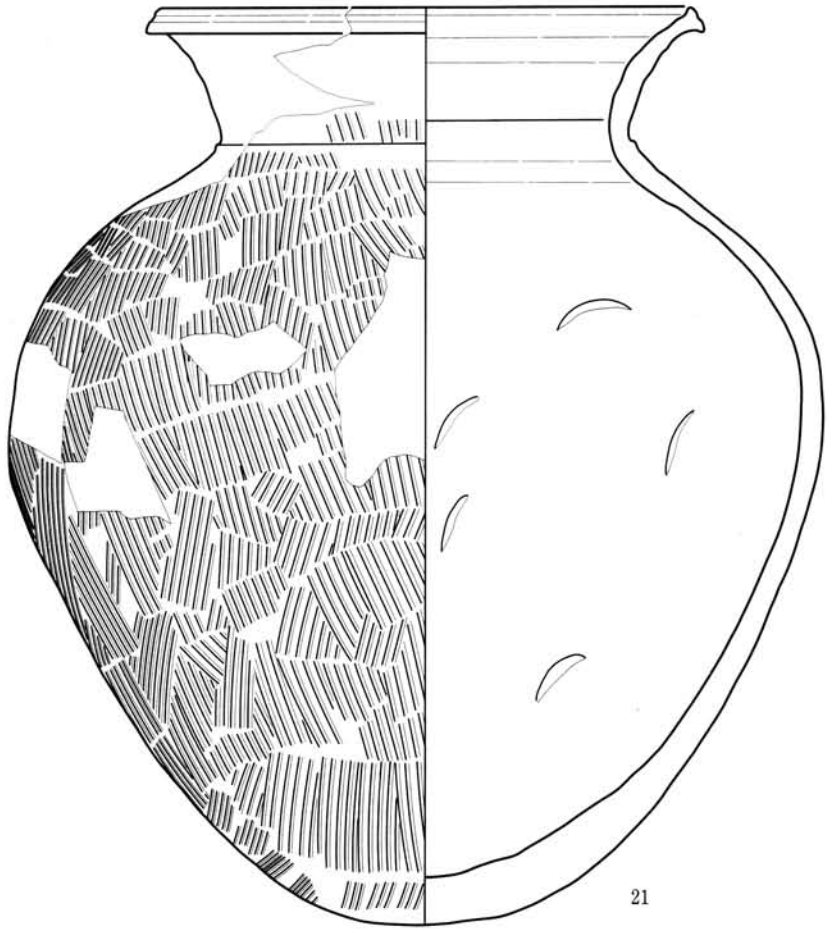
堆積土からは土師器坏・甕、須恵器坏・壺などが出土した。土師器坏には回転糸切り無調整のものが若干みられるが、ほとんどの土師器は非ロクロ調整である。須恵器坏には回転ヘラ切りで切り離し後に底部から体部下端が回転ヘラケズリされるもの（23）がある。須恵器壺（24）は小型で口頸部に突帯が巡る。



番号	器　　種	層位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
10	須恵器・坏	床面	14.0	8.6	3.6	ほぼ完形	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ	15－5	SI25－2
11	須恵器・坏	床面	14.0	9.8	3.6	ほぼ完形	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り	15－6	SI25－22
12	須恵器・高台坏	床面	10.4	6.9	4.0	ほぼ完形	内外面：ロクロナデ　底部：切離し不明	16－1	SI25－20
13	須恵器・高台坏	床面	10.8	6.4	5.1	完形	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ	16－2	SI25－14
14	須恵器・高台坏	床面	17.1	10.4	9.4	ほぼ完形	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ　底部：不明→回転ヘラケズリ→ロクロナデ	16－3	SI25－13
15	須恵器・蓋	床面	(18.8)		(4.3)	3/4	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ	15－9	SI25－15
16	須恵器・蓋	床面	15.1		3.1	完形	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ　つまみ径：3.1	15－8	SI25－16
17	須恵器・壺	床面	12.4	19.6	(19.1)	体～底部2/3	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　底部：ナデ	16－5	SI25－12
18	須恵器・鉢	床面	28.4	13.8	17.3	1/2	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ナデ　底部：ナデ→回転ヘラケズリ	16－7	SI25－8
19	須恵器・鉢	床面	26.6	12.6	16.6	ほぼ完形	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ナデ　底部：摩滅のため不明ナデ？	16－6	SI25－9
23	須恵器・坏	堆積土		8.6	(2.1)	底～体下端2/5	底部：回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	15－7	SI25－24
24	須恵器・壺	堆積土	6.6		(12.2)	体部3/5	外面：ロクロナデ→カキ目→回転ヘラケズリ→一部手持ちケズリ　内面：ロクロナデ→指オサエ→ロクロナデ　底部：静止糸切り　最大径11.4	16－5	SI25－23

第13図　SI25竪穴住居跡出土土器（3）

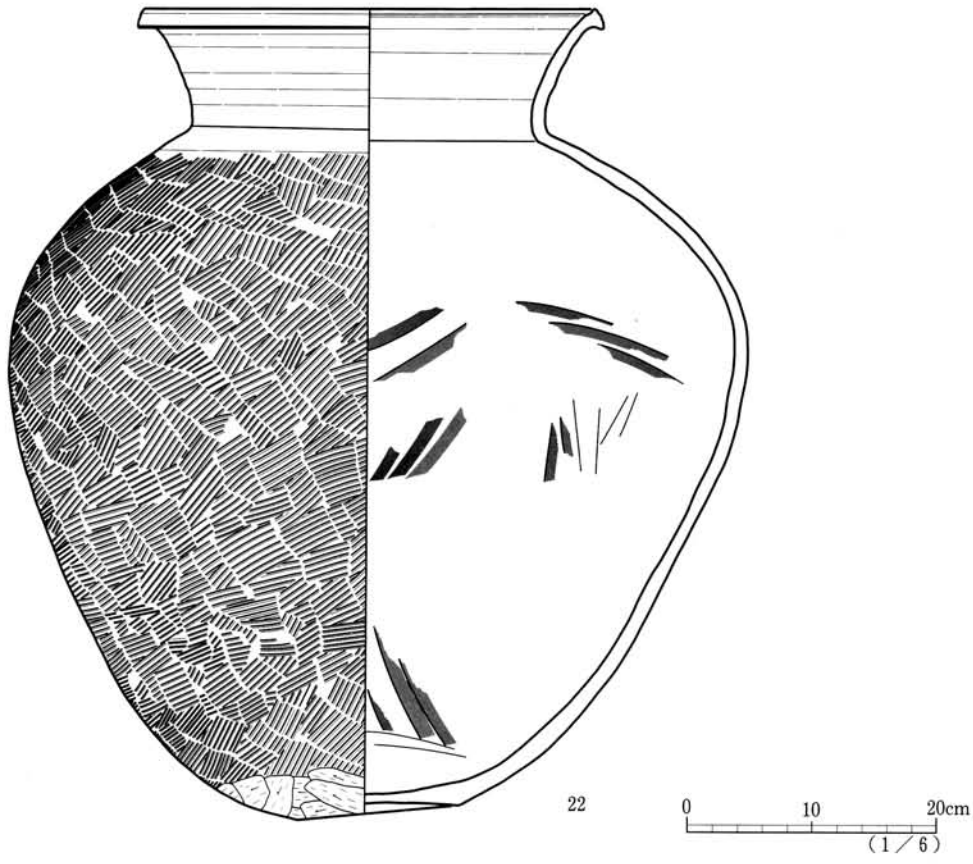


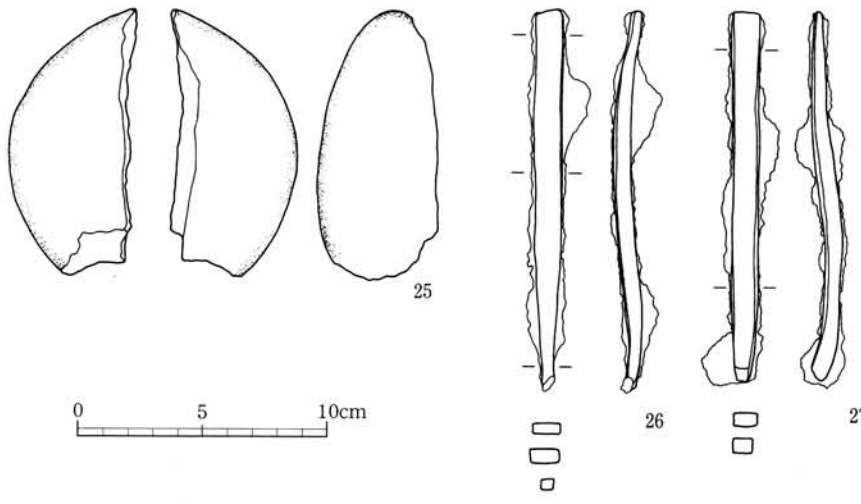


0　5　10cm

番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　徴	写真図版	登録
20	須恵器・甕	床面	20.6	12.2	29.1	7/8	外面：ロクロナデ→平行叩き→ナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ヘラナデ→ナデ（施文の当て具）　底部：工具によるナデ	17－1	3
21	須恵器・甕	床面	(21.1)	36.2	32.4	7/8　口頸部欠損大	外面：ロクロナデ→平行叩き　内面：ロクロナデ→ナデ	17－2	11

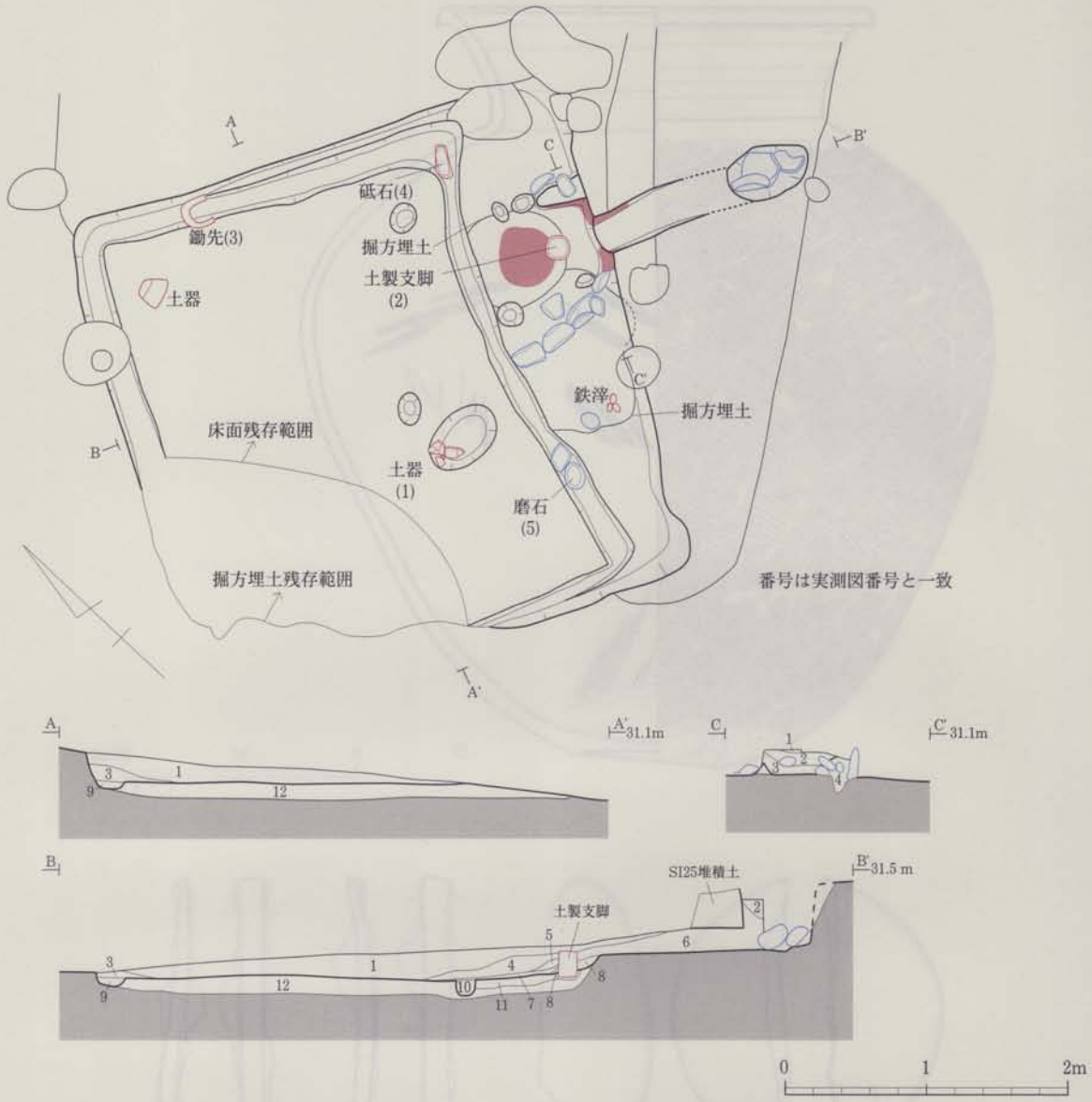
第14図　SI25竪穴住居跡出土土器（4）





番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
22	須恵器・甕	床面	36.0	13.0	68.6	ほぼ完形	外面：ロクロナデ→平行叩き→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ナデ　底部：ナデ	18－1	SI25－1
25	磨石	床面					長：4.8cm　幅：10.0cm　厚：4.7cm　重：284g	22－11	SI25－25
26	鉄製品	床面					長：15.2cm　幅：1.2cm　厚：0.6cm	21－2	SI25－26
27	鉄製品	床面					長：14.8cm　幅：1.2cm　厚：0.6cm	21－1	SI25－27

第15図　SI25竪穴住居跡出土遺物



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI28		暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物少量・地山粒・焼土粒含む・自然堆積
2		煙出ピット堆積土	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・焼土粒含む・人為堆積
3			にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物・地山粒・焼土粒含む・自然堆積
4		カマド天井崩落土	褐色（10YR4/4）	シルト	カマド構築粘土（黄褐色10YR5/6）粒含む・人為堆積
5			黄褐色（10YR5/6）	シルト	カマド構築粘土（黄褐色10YR5/6）ブロック含む・自然堆積
6			暗褐色（10YR2/3）	シルト	焼土ブロック・粒多量含む・自然堆積
7		カマド機能時使用面	黒色（10YR1.7/1）	シルト	炭化物大量含む・人為堆積
8		カマド奥壁崩落土	暗赤褐色（5 YR3/4）	シルト	焼土粒大量含む・自然堆積
9		周溝	黄褐色（10YR5/6）	シルト	炭化物少量・地山粒・焼土粒含む・自然堆積
10		周溝	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	自然堆積
11		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	人為堆積
12		掘方埋土	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山ブロック含む・人為堆積
1	カマド（CC'）		暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物少量・地山粒・焼土粒含む・自然堆積
2			暗褐色（10YR2/3）	シルト	焼土ブロック・粒多量含む・自然堆積
3		カマド崩落土	暗赤褐色（5YR3/4）	シルト	焼土粒大量含む・自然堆積
4		カマド側壁芯材据え方	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	カマド構築粘土（黄褐色10YR5/6）粒含む・人為堆積

第16図　SI28竪穴住居跡

【SI28竪穴住居跡】（第16・17図）

［重複］SI25・SI50竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

［平面形・規模］南西隅を削平のため壊されている。一辺3.6mの隅丸正方形である。

［方向］西辺でみるとN－31°－Eである。

［堆積土］にぶい暗褐色シルトが自然堆積している。

［壁］地山およびSI25竪穴住居跡の堆積土を壁とし、周溝底面からやや外側に傾斜を持って立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で22cmである。

［床面］ほぼ平坦である。掘方埋土を床面としている。

［主柱穴］検出されなかった。

［カマド］住居東辺のやや北寄りに付設されている。カマドの両側壁と煙道、煙出ピット、支脚が残存している。残存するカマド本体は幅約1.2m、奥行き約90cmである。

左側壁には長さ40cm、高さ10cmの褐色シルトで構築された側壁の基部と芯材として用いられた長さ16cm、幅7～10cmの扁平で細長い礫が残存している。右側壁には芯材として用いられた長さ20～26cm、幅12cmの扁平な礫だけが残存している。礫の残存状況からみて、右側壁は長さは90cm、高さ20cm以上であったと推定される。左側壁の延長上にあるピットは位置から判断すると、芯材として用いられた礫の据方の可能性がある。

燃焼部底面中央には直径60cm、深さ6cmでにぶい黄褐色粘土で埋め戻された楕円形の掘方があり、その上面が長軸40cm、短軸35cmの範囲で焼けて堅く締まっている。燃焼部の中央、やや奥壁よりに、高さ17.5cm、直径12cmの円筒形の土製支脚が検出された。土製支脚は平坦な天井部を上にして、径15cmの円形を呈する深さ3cmのピットに据えられていた。焼面の上面には厚さ2～4cmの炭層が堆積し、さらにその上には褐色シルトのカマド崩落土が堆積している。

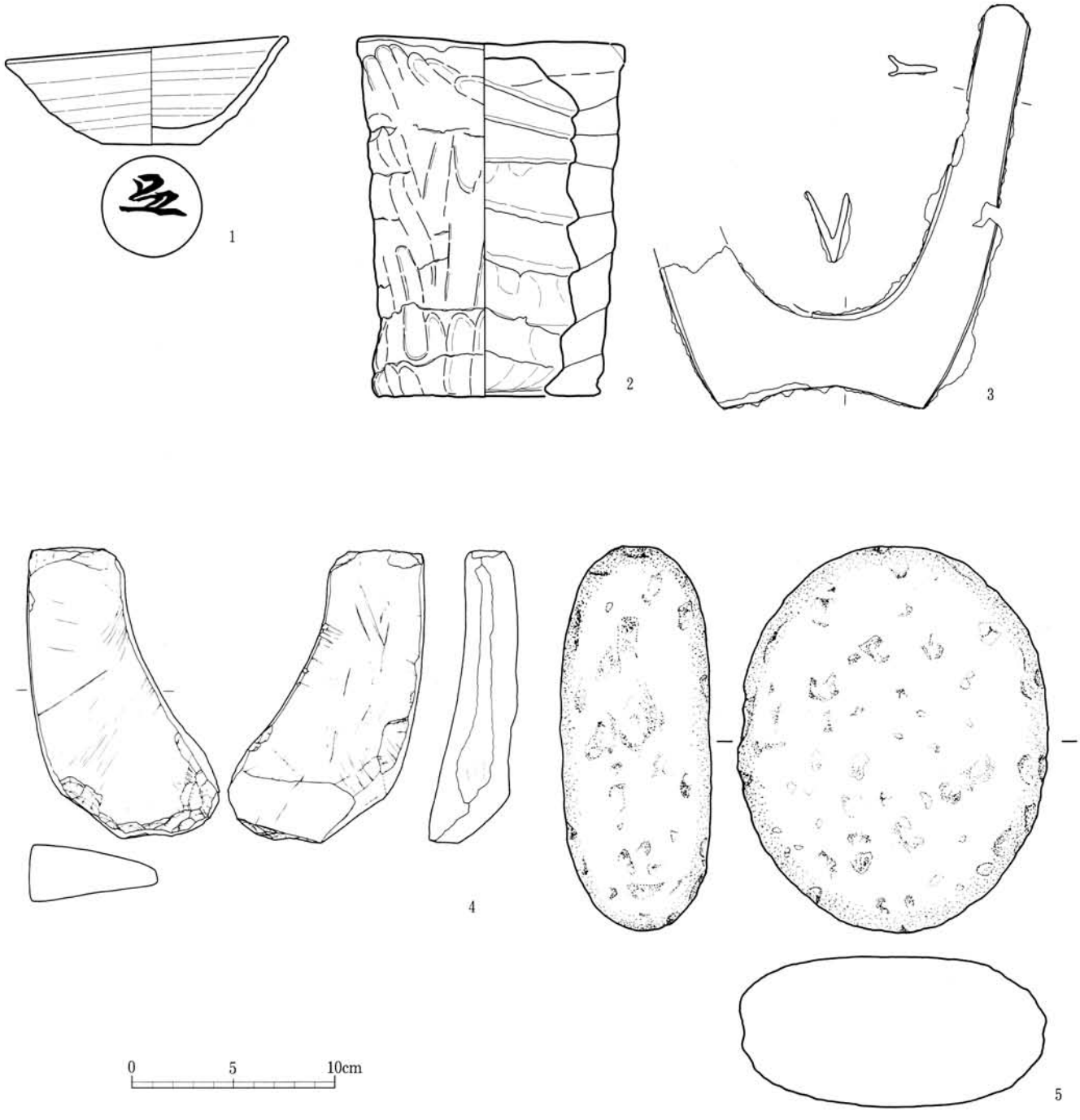
煙道はカマド奥壁より1.0m外側に延び、その先に煙出ピットが付設されている。煙道は地山およびSI25竪穴住居跡の堆積土を幅28cm、深さ18cmの断面四角形に掘り抜いて作られ、煙出ピットに接する付近では天井部も残存していた。煙道の底面は水平である。

煙出ピットは長軸58cm、短軸35cmの楕円形を呈し、深さは47cmで煙道の底面よりもわずかに窪み、底面に長さ20～30cm、幅15～25cmの礫が数個認められた。煙道や煙出ピットには焼土ブロックを多量に含む暗褐色のシルト層が堆積している。また、残存する天井部や煙出ピットの側面には焼けて赤変した部分が認められた。

［周溝］北辺及び西辺北部、南辺東部では壁際を巡っているが、カマドのある東辺では壁際ではなく、カマドの前面に周溝が認められる。幅は10～30cm、深さは5～10cmである。地山ブロックを多く含む黄褐色シルトが自然堆積している。

［その他の施設］カマド右側壁の下部に長軸1.15m、短軸0.95cm、深さ12cmで褐色シルトで埋め戻された不整形の掘方が認められる。

［出土遺物］床面から須恵器坏・甕、鉄滓、磨石、カマド底面から土製支脚が出土した。須恵器坏には底部外面に「足」の墨書のあるものがある（1）。土製支脚（2）は、内外面に輪積み痕を残し、内外



番号	器　　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
1	須恵器・坏	床面	13.8	4.9	4.7	完形	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り　底部に墨書「足」	18－2	SI28－2
2	土製支脚	カマド	13.0		17.0	完形	内外面：ナデ→オサエ　底部：ナデ	20－13	SI28－1
3	鉄製鋤先	周溝上面					長：19.6cm　幅：18.1cm　厚：2.1cm	21－7	SI28－3
4	砥石	周溝上面					長：14.3cm　幅：9.4cm　厚：3.6cm　凝灰岩	22－7	SI28－4
5	磨石	床面					長：18.8cm　幅：14.9cm　厚：7.3cm　重：3360g　花崗岩	22－13	SI28－5

第17図　SI28竪穴住居跡出土遺物

面ともにナデの後にオサエ調整されている。鉄滓（椀形滓）3点と磨石（5）はカマド右脇から出土した。

また床面と同じレベルの周溝堆積土上面からは砥石（4）と鉄製鋤先（3）が出土した。鉄製鋤先は長さが19.6cmと大型で平面形がU字状を呈し、内側に木質の本体を挟むためのV字状の溝が認められる。先端部は破損しており、一部が表面と裏面の両側に折れ曲がっている。側縁は上に向かって大き

く開く。

カマドの崩落土や掘方埋土から土師器甕、須恵器甕が、煙出ピットの底面からは須恵器甕が出土した。堆積土からは土師器坏・甕と須恵器坏・甕が出土した。土師器には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがあり、後者が主体を占める。

【SI34竪穴住居跡】（第18～20図）

［平面形・規模］南西部は削平のため壊されている。一辺7.3mのやや歪んだ隅丸方形である。

［方向］東辺でみるとN－7°－Wである。

［堆積土］にぶい黄褐色シルト（1層）が全面に、暗褐色粘土（2層）が部分的に自然堆積している。住居東部の2層上面に部分的に炭化材が残存していた。炭化材には一部藁状の部分も認められた。床面からは炭化材は検出されず、床面との間に最大厚約10cmの2層を挟んでいることから、住居廃絶後のものである可能性が高い。

［壁］地山を壁とし、周溝底面からやや内側に傾きながら立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で45cmである。

［床面］ほぼ平坦であるが、標高の低い南西に向かってわずかに傾斜している。北東壁際からカマド前面にかけては地山を、それ以外の部分は最大厚が43cmある掘方埋土を床面としている。

［主柱穴］住居平面形の対角線上にある4個を確認した（P1～4）。平面形は長軸46～60cm、短軸42～54cmの楕円形を呈し、深さ22～56cmである。埋土は黒褐色シルトである。P2・4には直径9～16cmの円形の柱痕跡が認められた。堆積土は黒褐色シルトである。P1には柱抜取穴が認められた。またP1・3の底面付近にはそれぞれ20×14cm、40×21cmの方形の扁平な礫が礎板として用いられていた。

［カマド］北辺の中央部に付設されている。カマドの両側の側壁と煙道、煙出ピット、土師器甕を転用した支脚が残存している。残存するカマド本体は幅1.1m、奥行き95cmである。

左側壁は長さ86cm、幅36cm、高さ11cm、右側壁は長さ96cm、幅33cm、高さ18cm残存している。側壁と燃焼部底面は地山土を主体とする褐色粘土で構築されており、側壁内面および底面は熱により赤変している。燃焼部中央は床面よりも4cmほど窪み、奥壁に向かって緩やかに傾斜して、奥壁際の周溝に接する部分で床面よりもわずかに高くなっている。

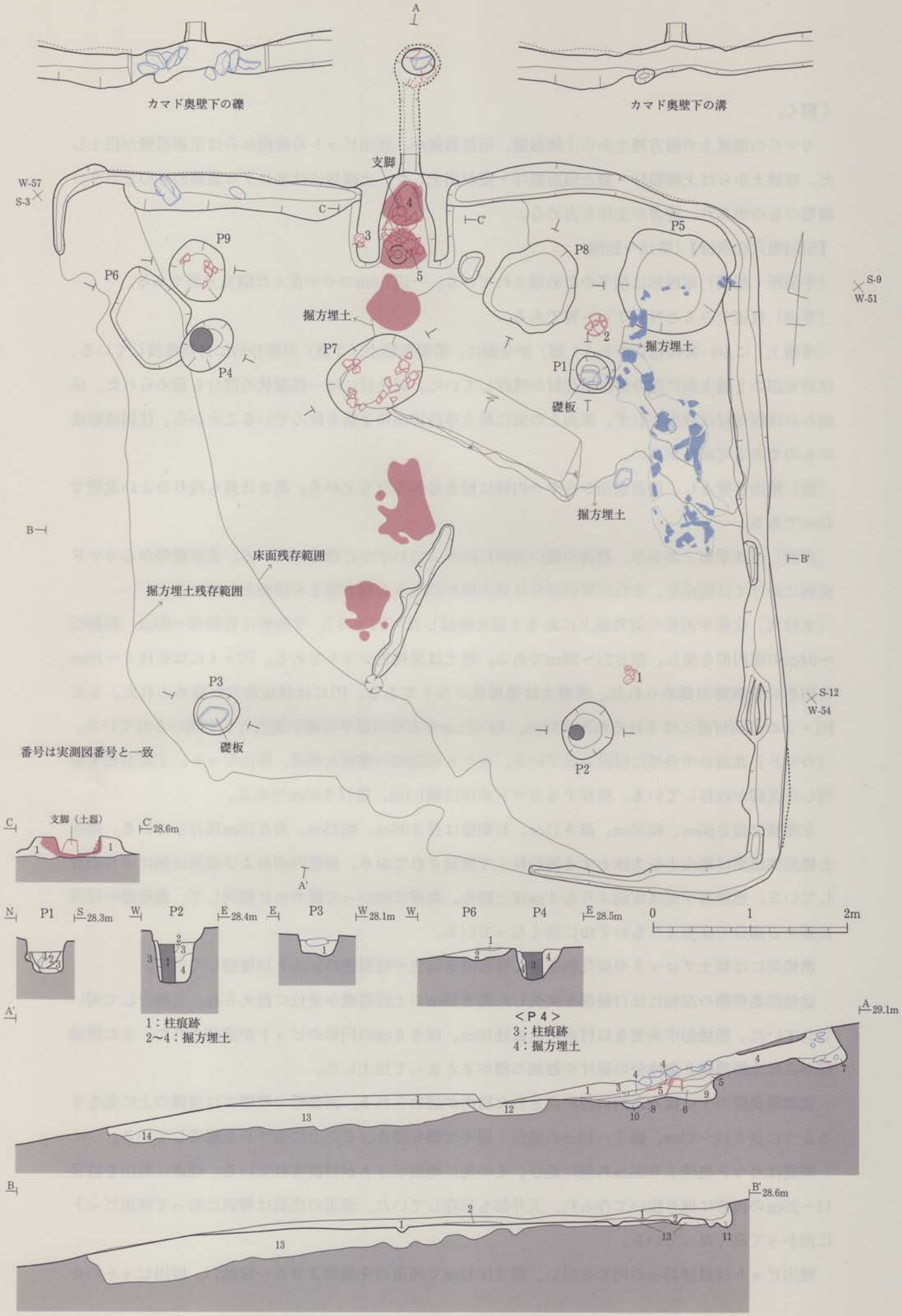
燃焼部には焼土ブロックや炭化物を多く含む暗赤褐色や暗褐色のシルトが堆積している。

燃焼部奥壁際の左側には口縁部を欠失した高さ15cmの土師器甕が逆位に据えられ、支脚として用いられていた。燃焼部中央焚き口付近には直径18cm、深さ6cmの円形のピットが確認された。また燃焼部からは土師器甕9個体分の破片や数個の礫がまとまって出土した。

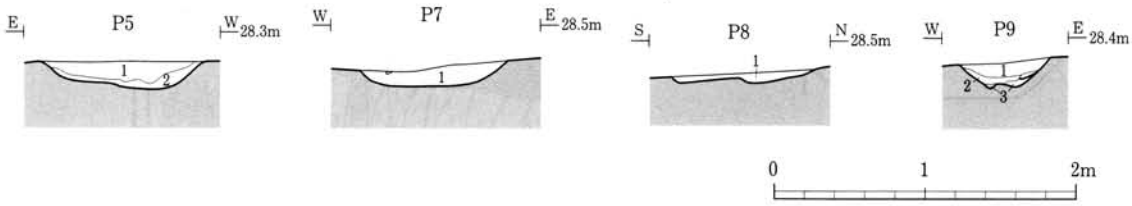
燃焼部奥壁の下には人為的に埋め戻された周溝が認められる。両側壁の壁際には周溝の上に蓋をするように長さ14～20cm、幅8～10cmの細長く扁平な礫を置き、その上にカマドを構築している。

煙道はカマド奥壁より90cm外側に延び、その先に煙出ピットが付設されている。煙道は地山を直径14～20cmの円形に掘り抜いて作られ、天井部も残存していた。煙道の底面は傾斜に沿って煙出ピットに向かって高くなっている。

煙出ピットは直径45cmの円形を呈し、深さは42cmで煙道の先端部よりも一段低い。煙出ピットの中



第18図　SI34竪穴住居跡



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI34		にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	炭化物・地山粒・地山小礫少量含む・自然堆積
2			暗褐色（10YR3/4）	粘土	炭化物多量・地山小ブロック・焼土粒含む・自然堆積
3		カマド内堆積土	黒褐色（10YR3/2）	粘土	炭化物・焼土多量含む・人為堆積
4		カマド内堆積土	褐色（10YR4/6）	粘土	炭化物・焼土ブロック・焼土粒含む・人為堆積
5		カマド内堆積土	暗赤褐色（10YR3/2）	粘土	炭化物少量・焼土ブロック・焼土粒多量含む・人為堆積
6		カマド内堆積土	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土	炭化物少量・焼土小ブロック・含む・人為堆積
7		カマド内堆積土	極暗褐色（7.5YR2/3）	粘土	炭化物・焼土ブロック（赤褐色・暗褐色ブロック）含む・人為堆積
8		カマド内堆積土	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土	炭化物・地山ブロック・焼土ブロック多量含む・人為堆積
9		カマド内堆積土	赤褐色（7.5YR4/6）	粘土	地山ブロック・被熱している・人為堆積
10		カマド内堆積土	黒色（N1.5/0）	炭化物層	炭化物・地山粒含む・人為堆積
11			褐色（10YR4/6）	粘土	地山小ブロック・地山小礫含む・自然堆積
12		Pit 7	暗赤褐色（5 YR3/4）	粘土	焼土痕・焼土ブロック多量・炭化物含む
13		掘方埋土	黄褐色（10YR6/6）	シルト質粘土	地山粘土小ブロック・褐灰色粘土（10YR4/1）混ざる・人為堆積
14		掘方埋土	褐灰色（10YR4/1）	粘土	地山ブロック多量・礫少量含む・人為堆積
1	カマド（CC')	カマド内堆積土	暗赤褐色（5 YR3/4）	粘土	炭化物・地山小ブロック・地山小礫含む・人為堆積
1	P 1	柱抜取穴埋土	黒褐色（2.5Y2/1）	シルト	炭化物多量・地山小ブロック含む・人為堆積
2		掘方埋土	にぶい褐色（7.5YR5/3）	シルト	炭化物少量・地山ブロック多量含む・人為堆積
3		掘方埋土	暗灰黄色（2.5YR5/2）	シルト	地山ブロック多量含む・人為堆積
1	P3		褐灰色（10YR4/4）	シルト	炭化物少量・地山粘土ブロック多量含む・人為堆積
1	P5		赤褐色（2.5YR4/6）	シルト質粘土	炭化物・地山ブロック・焼土含む・人為堆積
2			褐色（7.5YR4/6）	シルト質粘土	炭化物・地山ブロック・焼土含む・人為堆積
1	P7		にぶい赤褐色（2.5YR4/4）	シルト質粘土	炭化物・地山小ブロック・焼土小ブロック・人為堆積
1	P8		暗赤褐色（5 YR3/4）	粘土	炭化物・地山ブロック・焼土ブロック多量・人為堆積
1	P9		暗褐色（10YR3/4）	シルト質粘土	地山小ブロック・地山小礫含む・自然堆積
2			黒褐色（10YR3/2）	粘土	炭化物・焼土粒少量含む・自然堆積
3			暗褐色（10YR3/3）	粘土	焼土ブロック多量含む・自然堆積

第19図　SI34竪穴住居跡Pit断面図

心は煙道の中軸線からやや東にずれている。煙道や煙出ピットには、地山を主体として焼土ブロックや炭化物を含む褐色の粘土が自然堆積し、煙出ピットの底面には、焼土ブロックや炭化物を多量に含む極暗褐色粘土が認められた。

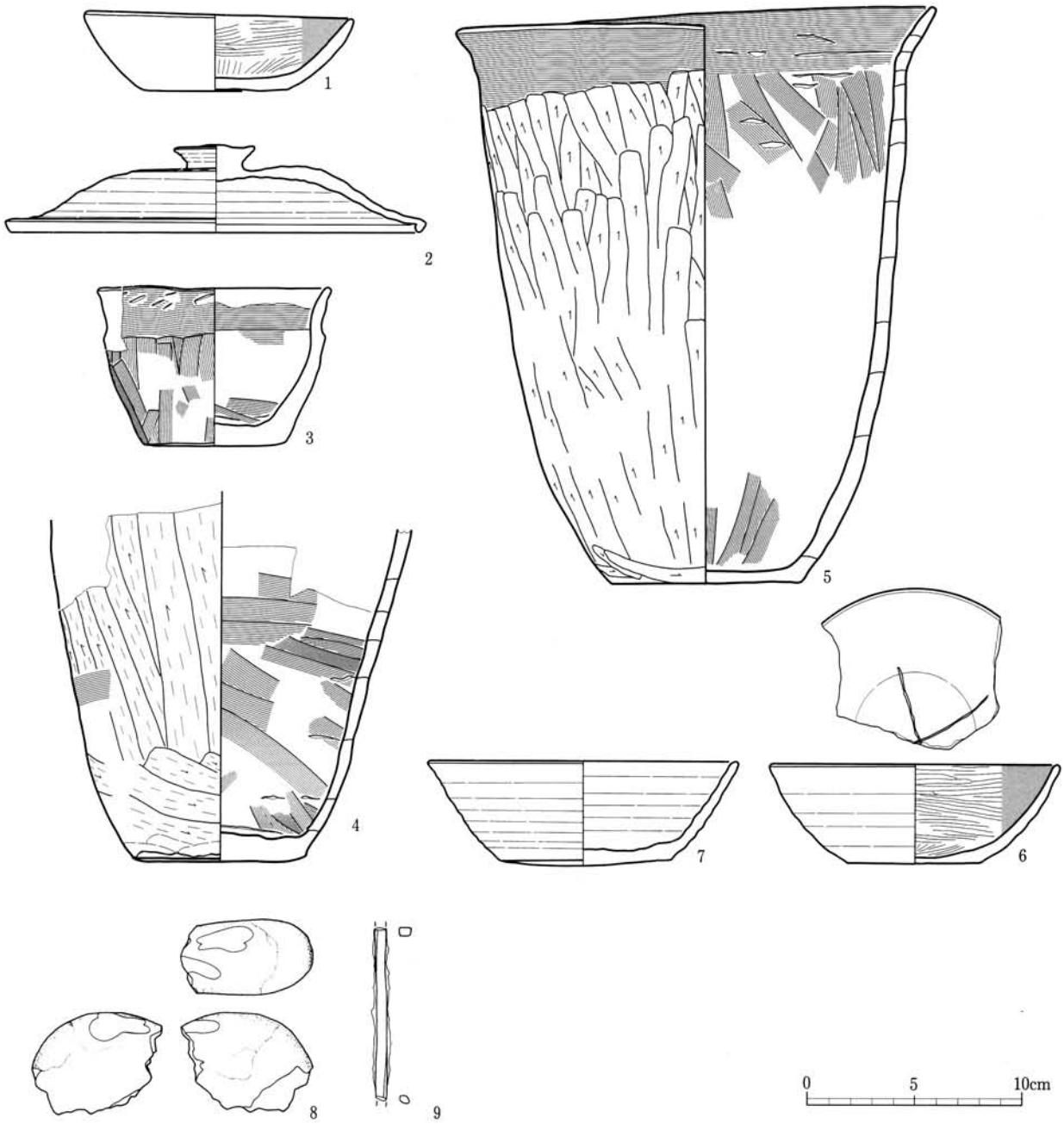
［周溝］西辺および南辺西側を除いた部分で確認された。幅は14～42cm、深さは3～9cmである。褐色の粘土質シルトが自然堆積している。

［貯蔵穴状ピット］床面の北東隅で1カ所確認した（P5）。長軸110cm、短軸100cm、深さ18cmの不整楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。にぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

［床面の焼面］カマド前面で1カ所、床面中央付近で2カ所の焼面を確認した。いずれも、長軸65～80cm、短軸50～60cmの不整形を呈している。カマド前面の焼面は、床面中央の焼面に比べて強く火熱を受けたためか、堅く焼け締まっている。

［その他のピット］床面の北西隅付近に2カ所、カマド前面と右脇でそれぞれ1カ所の合計4カ所のピットを検出した（P6～P9）。いずれも暗赤褐色シルト質粘土で埋め戻されているが、P9は他より小さく、66×56cm、深さ20cmの楕円形を呈する。それ以外は長軸100～118cm、短軸76～110cm、深さ7～18cmの不整楕円形である。

P7、P9の堆積土には、焼土、炭化物、地山ブロックを多量に含み、特にP7の堆積土には焼けて脆くなった土師器甕の破片が多く含まれていることから、壊したカマドの構築土を廃棄したピットの可能性がある。



番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
1	土師器・坏	床面	(12.4)	6.7	3.5	4/5	外底面：調整不明　内面：ヘラミガキ→黒色処理	18－3	SI34－12
2	須恵器・蓋	床面	19.4		4.0	ほぼ完形	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ　つまみ径：3.7	18－7	SI34－13
3	土師器・鉢	カマド	(10.8)	6.5	7.2	2/5	外面：ヘラナデ→ヨコナデ→ヘラナデ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ　底部：ナデ	18－6	SI34－13(2)
4	土師器・甕	カマド底面・支脚		(8.0)	(16.5)	体下半～底部	外面：手持ちヘラケズリ→ナデ→指オサエ　内面：ナデ　底部：ナデ	18－8	SI34－10
5	土師器・甕	カマド	22.2	8.8	26.0	5/6	外面：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ→ナデ（工具→指）　底部：ナデ	18－9	SI34－5・6・8
6	土師器・坏	堆積土	(13.4)	(6.2)	4.6	1/3	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底部：摩滅のため不明　内面底部に「×」の刻書	18－4	SI34－1(2)
7	須恵器・坏	1層	14.3	7.8	4.8	4/5	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り	18－5	SI34－1
8	磨石	P3					長：4.6cm　幅：5.9cm　厚：3.5cm　重：100g	18－9	SI34－14
9	鉄製品	1層					長：7.9cm　幅：0.5cm　厚：0.4cm	18－5	SI34－15

第20図　SI34竪穴住居跡出土遺物

［床面中央付近の溝］床面中央やや南よりで、北東から南西に延びる長さ1.9mの溝を検出した。幅は8～20cm、深さ2～4cmで炭化物、地山ブロックを含む暗褐色のシルト質粘土が自然堆積している。

［出土遺物］床面から土師器坏（1）・甕、須恵器坏・蓋（2）、床面直上からは非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が出土した。カマドからは土師器を主体とする多くの土器がまとまって出土した（3～

5)。このうち土師器甕（4）はカマド奥壁際の右側に倒立で据えられ、支脚として用いられていた。煙出ピットの底面からは非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が出土した。また貯蔵穴状ピット（P5）とP7・P9の堆積土からは非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏が出土した。P7からは磨石（8）も出土した。P6・P8の堆積土や周溝の堆積土、住居掘方埋土から土師器甕、住居堆積土から内面に「×」の刻書のある土師器坏（6）・甕と須恵器坏（7）・甕、棒状鉄製品（9）などが出土した。土師器甕には非ロクロ調整のものがある。

【SI44竪穴住居跡】（第21図）

［方向］東辺でみるとN－23°－Wである。

［平面形・規模］南側と西側は後世の削平のため壊されている。南北3.4m、東西0.6mである。平面形は隅丸方形を基調としていたと推定される。

［周溝］東辺の一部から南東隅を経て南辺の一部に至るまで「L」字状に検出された。上幅6～24cm、深さ4～8cmで、断面はほぼ「U」字状を呈する。地山粒を含む褐色のシルトで埋め戻されている。

［ピット］東辺隅から西へ70cmほどの位置で検出した。住居の床面が残っておらず、検出面からの深さは6～10cmほどである。平面形は長軸72cm、短軸30cmの不整形を呈している。焼土や炭化物を多く含む褐色シルトで埋め戻されている。

［出土遺物］ピットから土師器甕の破片が少量出土した。

【SI51竪穴住居跡】（第22図）

削平のため、北辺と東辺の一部が残存しているにすぎない。

［重複］1回建て直されている。古いものから順にSI51A竪穴住居跡→SI51B竪穴住居跡とする。

《SI51A竪穴住居跡》

［平面形・規模］残存長で南北3.8m、東西2.8m、である。平面形は方形を基調としていたと推定される。

［方向］東辺でみるとN－24°－Eである。

［堆積土・壁・床面］残存していない。

［主柱穴・カマド］検出されなかった。

［周溝］東辺と北辺が検出された。幅8～22cm、深さ2～10cmである。褐灰色シルトで埋め戻されている。

［壁柱穴］北辺の周溝に重複して2個検出された。平面形は長軸32～42cm、短軸25cmの楕円形を基調とし、深さは13～22cmである。褐灰色シルトで埋め戻されている。

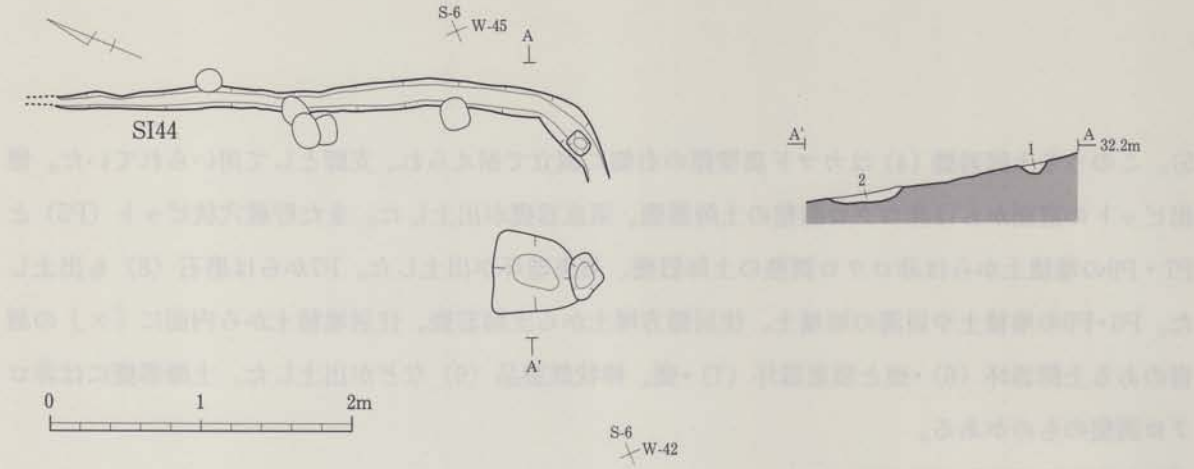
［その他の施設］東辺中央部で周溝と重複して土壙を検出した。長軸70cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈し、深さ24cmである。地山ブロックと炭化物を多く含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

［出土遺物］周溝埋土から土師器甕、堆積土から須恵器坏、高台坏の破片が少量出土した。

《SI51B竪穴住居跡》

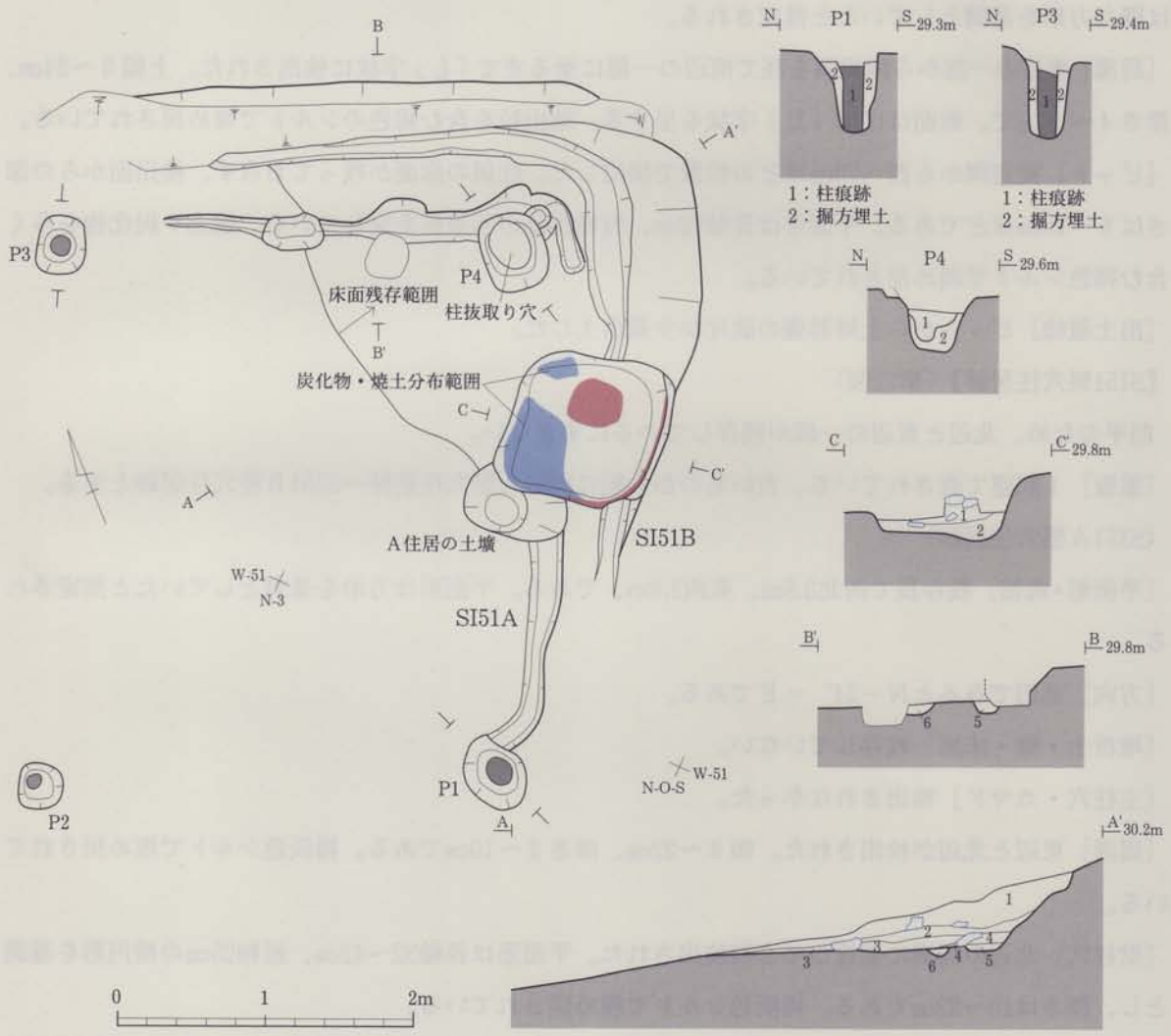
［平面形・規模］残存長で南北3.5m、東西3.8mである。平面形は方形を基調としていたと推定される。

［方向］東辺でみるとN－24°－Eである。



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI44	周溝	褐色（7.5YR4/4）	シルト	地山ブロック含む
2		貯蔵穴	褐色（10YR4/6）	シルト	焼土・炭化物多量含む

第21図　SI44竪穴住居跡



番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI51A		黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物・地山ブロック多量含む・人為堆積
2			暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物・地山ブロック多量含む・人為堆積
3			明褐色（7.5YR5/6）	粘土	2層の土をブロック状に少量含む・人為堆積
4			暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	地山ブロック少量含む・人為堆積
5		周溝	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物少量・地山ブロック多量含む・人為堆積
6	SI51B	周溝	褐色（10YR4/1）	シルト	炭化物・地山ブロック含む・人為堆積
1	SI51Aカマド（CC')		黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物・地山ブロック・焼土粒多量含む・人為堆積
2			褐灰色（10YR4/1）	シルト	炭化物・地山ブロック多量・焼土粒少量含む・人為堆積
1	P4	柱抜取穴埋土	黒（N 2/）	シルト	炭化物・礫多量・地山ブロック・焼土粒少量含む・人為堆積
2		掘方埋土	黄褐色（10YR5/6）	粘土	汚れた地山粘土ブロック・人為堆積

第22図　SI51A・SI51B竪穴住居跡

［堆積土］黒褐色シルト（1層）、暗灰黄色シルト（2層）、明褐色粘土（3層）によって埋め戻されている。

［壁］地山を壁とし、崩落のためか周溝底面から緩やかに立ち上がる。高さは最も残りのよい北東壁で50cmである。

［床面］ほぼ平坦である。東隅しか残存しておらず、地山とSI51B竪穴住居跡周溝埋土を床面としている。

［主柱穴］住居平面形の対角線上にある4個を確認した。平面形は長軸30～53cm、短軸28～42cmの隅丸長方形を呈し、深さ25～52cmである。埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色シルトである。北東柱穴（P4）を除いて直径10～15cmの円形の柱痕跡が認められた。柱痕跡には炭化物を含む褐灰色シルトが自然堆積している。またP4は柱を抜き取られている。

［カマド］東辺の中央付近に付設されており、カマドの燃焼部だけが残存している。燃焼部は一辺1.0m、深さ20cmの方形に掘り込まれ、その底面から、長軸35cm、短軸30cmの焼面が検出された。掘り込みの壁は東辺から南辺にかけて焼けて赤変しており、カマドの奥壁と右側壁の基部と推定される。また、掘り込みの西半分には、カマド機能時に堆積した炭化物、焼土を多く含む黒褐色シルトが認められる。さらにその上にカマド崩落土である明褐色粘土が堆積している。

［周溝］カマド部分を除いて、残存していた壁際で確認された。幅は13～32cm、深さは2～6cmである。暗灰黄色シルト質粘土で埋め戻されている。

［出土遺物］カマド崩落土から土師器甕と須恵器坏、P4の抜取り穴からは土師器坏・甕が出土した。坏は非ロクロ調整で外面に段が認められる。堆積土からは土師器坏、須恵器坏・甕、小型の板状鉄製品1点が出土した。土師器は非ロクロ調整である。

【SI52竪穴住居跡】（第23・24図）

［平面形・規模］西隅は削平のため壊されている。北東辺4.0m、南東辺4.6mの隅丸方形である。

［方向］東辺でみるとN－31°－Wである。

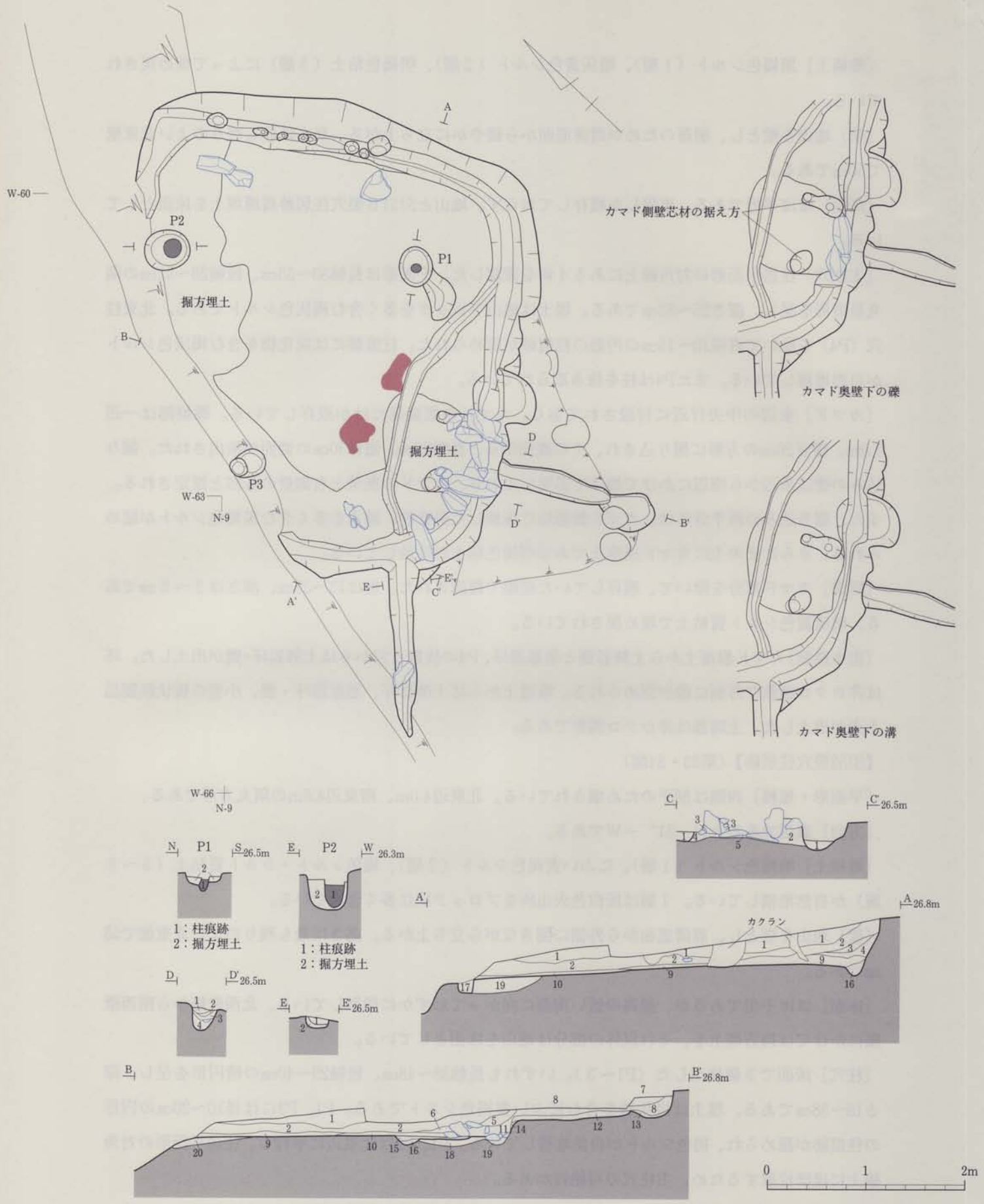
［堆積土］暗褐色シルト（1層）、にぶい黄褐色シルト（2層）、褐色シルト・シルト質粘土（3～8層）が自然堆積している。7層は灰白色火山灰をブロック状に多く含んでいる。

［壁］地山を壁とし、周溝底面から外側に開きながら立ち上がる。高さは最も残りのよい北東壁で55cmである。

［床面］ほぼ平坦であるが、標高の低い南西に向かってわずかに傾斜している。北西壁際から南西壁際にかけては掘方埋土を、それ以外の部分は地山を床面としている。

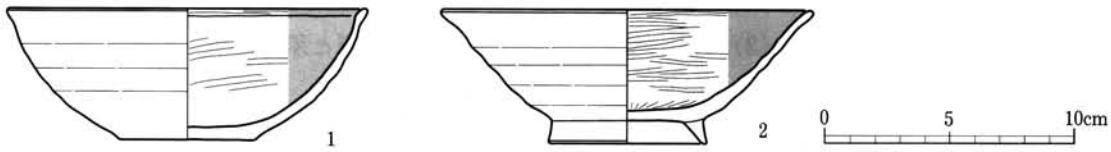
［柱穴］床面で3個検出した（P1～3）。いずれも長軸38～48cm、短軸29～40cmの楕円形を呈し、深さ18～38cmである。埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色シルトである。P1、P2には径10～20cmの円形の柱痕跡が認められ、褐色シルトが自然堆積している。P1、P2は北東辺に平行し、住居平面形の対角線上にほぼ位置するため、主柱穴の可能性がある。

［カマド］南東辺の南寄りに付設されている。カマドの両側壁と煙道、煙出ピットが残存している。残存するカマド本体は幅約1.1m、奥行き約60cmである。



第23図　SI52竪穴住居跡

番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SI52		暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫含む・自然堆積
2			にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物少量含む・自然堆積
3			褐色（10YR4/6）	シルト	地山ブロック含む・自然堆積
4			褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック多量含む・自然堆積
5			褐色（7.5YR4/4）	シルト	炭化物・焼土ブロック少量含む・自然堆積
6			褐色（10YR4/6）	シルト質粘土	炭化物・地山ブロック少量含む・自然堆積
7		煙出しPit	褐色（7.5YR4/3）	シルト質粘土	炭化物・地山ブロック・焼土少量含む・自然堆積
8		煙出しPit	褐色（7.5YR2/4）	シルト質粘土	炭化物・焼土多量含む・自然堆積
9			褐色（10YR4/6）	シルト	灰白色火山灰多量含む・自然堆積
10			褐色（10YR4/6）	シルト質粘土	炭化物・焼土ブロック含む・自然堆積
11			暗褐色（7.5YR3/4）	シルト質粘土	炭化物・地山ブロック多量含む・自然堆積
12		煙出しPit	褐色（7.5YR2/4）	シルト質粘土	炭化物非常に多量・地山ブロック・焼土含む・自然堆積
13		煙出しPit	褐色（7.5YR2/4）	シルト質粘土	地山ブロック多量含む・自然堆積
14		カマド内堆積土	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト質粘土	炭化物・焼土ブロック多量・下面に炭が層状になる部分あり・自然堆積
15			褐色（7.5YR4/4）	シルト質粘土	地山ブロック多量含む・人為堆積
16		周溝	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト質粘土	地山ブロック多量含む・自然堆積
17		周溝	褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物・焼土粒・地山ブロック少量・上部に灰白色火山灰少量含む・自然堆積
18			暗赤褐色（2.5YR3/6）	シルト質粘土	炭化物少量・地山ブロック多量含む・人為堆積
19			褐色（7.5YR4/4）	シルト質粘土	炭化物・焼土ブロック多量含む・人為堆積
20		掘方埋土	褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物・地山ブロック含む・人為堆積
1	カマド（CC')	周溝	褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物・焼土粒・地山ブロック少量・上部に灰白色火山灰少量含む・自然堆積
2		カマド構築土	褐色（10YR4/6）	シルト	焼土ブロック少量含む・人為堆積
3		カマド構築土	黒褐色（7.5YR3/2）	粘土質シルト	炭化物多量・焼土ブロック含む・人為堆積
4		カマド構築土	褐色（10YR4/6）	シルト質粘土	炭化物少量・焼土ブロック含む・人為堆積
5		カマド機能面	褐色（7.5YR4/4）	シルト質粘土	地山ブロック多量含む・人為堆積
1	外延溝（EE')		暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物少量・焼土粒含む・自然堆積
2			暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック・焼土粒少量含む・自然堆積
1	煙道（DD')		にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック・焼土粒少量・上部に地山ブロック大含む・自然堆積
2			にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	灰白色火山灰多量含む・自然堆積
3		地山崩落土	褐色（10YR4/4）	シルト	地山土が混じる・自然堆積
4			にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	炭化物・地山ブロック少量含む・自然堆積



番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　徴	写真図版	登録
1	土師器・坏	床直	(14.3)	5.3	5.2	1/2	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底部：回転糸切り	19－1	SI52－1
2	土師器・高台坏	掘方埋土	(14.8)	(6.3)	5.3	1/4	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底部：摩滅著しい	19－2	SI52－2

第24図　SI52竪穴住居跡出土土器

左側壁は長さ53cm、幅36cm、高さ35cm、右側壁は長さ64cm、幅38cm、高さ36cmである。両側壁には、芯材とした板状あるいは柱状の礫が露出しており、壁際や基部付近にだけ地山土を主体とする褐色粘土が残存している。芯材として用いられた礫は長さ40～50cm、幅約20cmと大型で、厚さ約10cmのカマド構築土の上に置かれ、一端が壁に接するように壁と直交して横たえられている。その上にさらに土でカマド本体を構築していたと思われる。両側壁の焚口附近には、長さ20～25cm、幅８～12cmの細長い礫が据穴に立てられている。礫の据穴は楕円形で、左側壁は長さ43cm、幅14cm、深さ11～18cm、右側壁は長軸30cm、短軸18cm、深さ24cmである。

燃焼部には、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ10cmの楕円形を呈する掘方が認められる。掘方は地山ブロックを多量に含む暗褐色シルト質粘土で埋め戻され、その上面に厚さ数mmの炭層が堆積している。さらにその上にはカマド崩落土である暗褐色シルト質粘土が堆積している。

燃焼部奥壁の下には人為的に埋め戻された周溝が認められる。その上には蓋をするように長さ38～40cm、幅18～21cmの細長く扁平な礫２個が壁に平行して置かれ、さらにその上にカマドが構築されている。

煙道はカマド奥壁より1.2m外側に延び、その先に煙出ピットが付設されている。煙道は先に向かっ

て次第に浅くなり、煙出ピットと接する部分では一段高くなっている。煙出ピットは長軸50㎝、短軸40㎝の楕円形を呈している。煙道との境が一段高くなっているが、煙道と煙出ピットの底面の深さはほぼ同じである。煙道や煙出ピットには機能中に自然堆積した炭や焼土、地山ブロックを多量に含む褐色のシルト質粘土層が認められる。

［周溝］西側を除く全周で確認された。幅は16～30㎝、深さは３～12㎝である。カマド部分を除いて褐色のシルトが自然堆積している。カマド前面の溝と接する部分の東側には、長さ52㎝、幅19㎝の細長く扁平な礫が周溝上に直交して置かれている。

［カマド前面の溝］北東壁北よりの周溝から南隅に向かって、カマドの前面に溝が認められる。幅は10～21㎝、深さ３～10㎝で地山ブロックを多く含む暗褐色のシルト質粘土で埋め戻されている。カマド燃焼部から広がる炭化物や焼土を多量に含む褐色のシルト質粘土が上面に堆積している。

［外延溝］住居跡南隅のやや西寄りから、斜面下方にあたる南西に延びている。長さ1.7m、幅14～30㎝、深さ５～30㎝でにぶい黄褐色や褐色のシルトが自然堆積している。カマド前面の溝が周溝を横断して延長したような位置にある。

［出土遺物］床面およびカマド内から土師器坏・甕、須恵器坏が出土した。床面直上から土師器坏・甕が出土した。坏には回転糸切り無調整のもの（1）があり、甕にはロクロ調整されたものがある。掘方埋土からは土師器坏・高台坏（2）・甕、堆積土からは土師器坏・甕と須恵器坏・甕が出土した。土師器はロクロ調整のものがほとんどである。

【SI55竪穴住居跡】（第25・26図）

［重複］SI60竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模］南西隅は削平のため壊されている。東西4.9m、南北4.3mの隅丸方形である。

［方向］東辺でみるとN－21°－Eである。

［堆積土］黒褐色シルト（１～５層）が自然堆積している。

［壁］地山を壁とし、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で44㎝である。

［床面］ほぼ平坦である。北壁際から東壁中央部にかけては地山を、それ以外の部分は掘方埋土を床面としている。

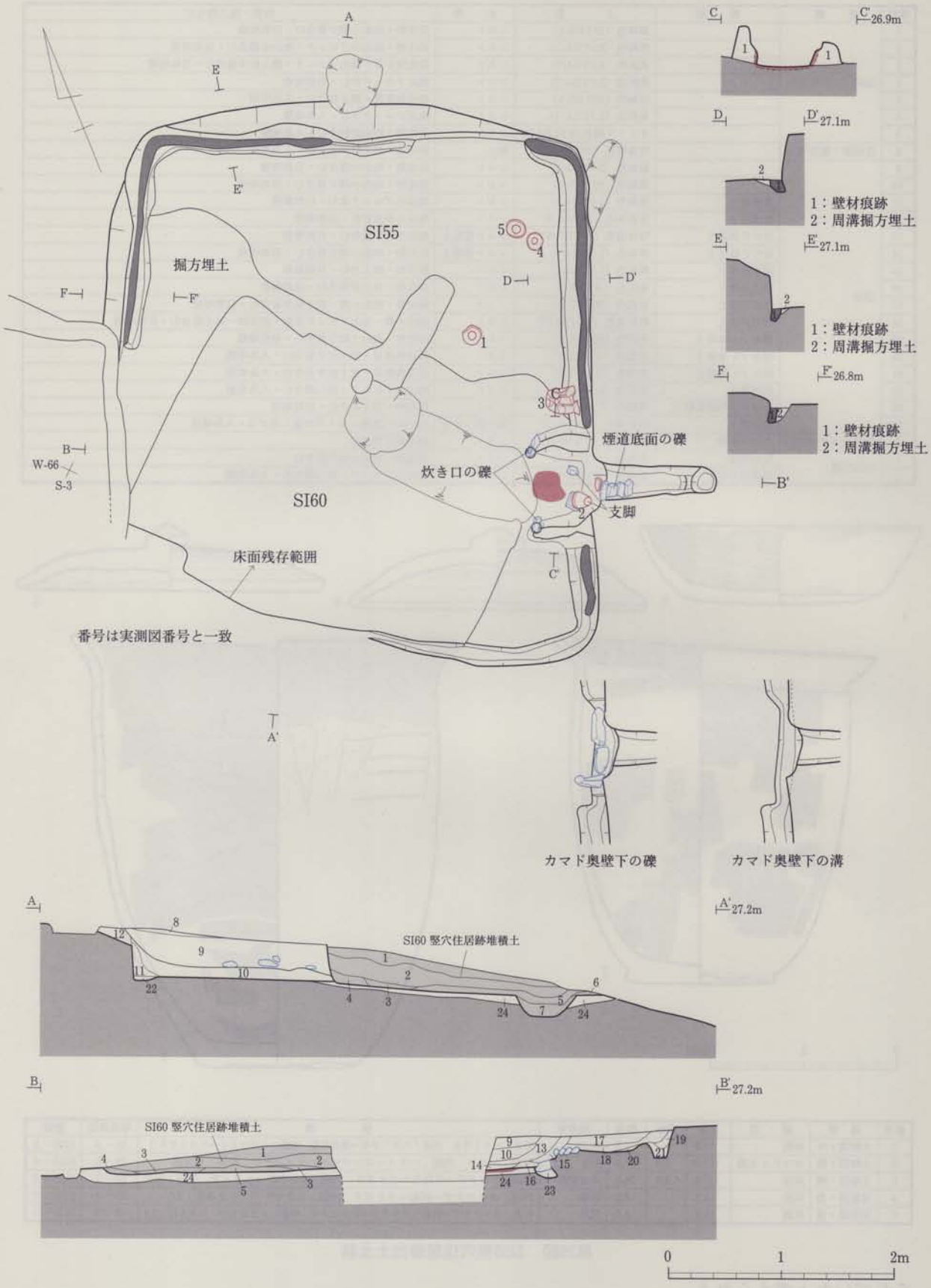
［主柱穴］検出されなかった。

［カマド］東辺の南寄りに付設されている。カマドの両側の側壁と煙道、煙出ピット、支脚が残存している。残存するカマド本体は幅約1.0m、奥行き約60㎝である。

左側壁は長さ55㎝、高さ30㎝、右側壁は長さ45㎝、高さ20㎝で、明黄褐色シルトで構築されている。両側壁の焚口附近には、長さ18～25㎝、幅６～９㎝の細長い礫が、やや焚き口側に傾けて据えられている。礫の据穴は直径約10㎝の楕円形である。

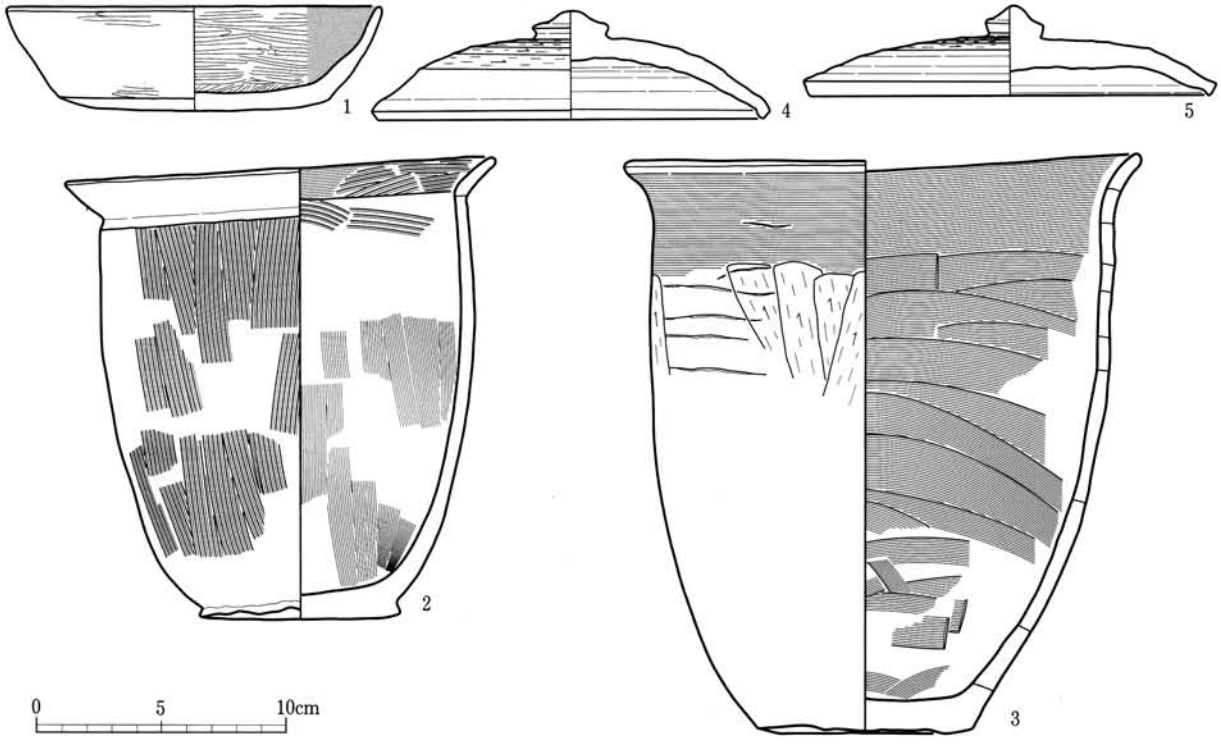
燃焼部は床面よりもわずかにくぼみ、焼土や炭を多量に含むシルトが堆積し、直径約30㎝の不整円形の範囲が焼けて赤変していた。

燃焼部奥壁際の左側には長さ15㎝、一辺6㎝の角柱状の礫が直立していた。また右側には横たえられた長さ15㎝、幅９㎝の板状礫の上に底部を上に向けた甕が置かれていた。どちらも支脚として用い



第25図　SI55竪穴住居跡

番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SI60		黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
2			黒褐色（2.5YR3/1）	シルト	炭化物・地山小ブロック・地山小礫含む・自然堆積
3			黄灰色（2.5YR4/1）	シルト	炭化物少量・地山ブロック・焼土粒少量含む・自然堆積
4			黄灰色（2.5YR4/1）	シルト	地山ブロック含む・自然堆積
5			黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物多量・焼土粒含む・人為堆積
6			黄灰色（2.5YR4/1）	シルト	地山ブロック含む・人為堆積
7			オリーブ褐色(2.5YR4/3)	シルト	炭化物・地山砂粒含む・人為堆積
8	住居跡？掘方埋土		明黄褐色（10YR6/6）	粘土	炭化物・焼土粒少量含む・人為堆積
9	SI55		黒褐色（2.5YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫含む・自然堆積
10			黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
11		壁崩落土	黒褐色（2.5YR3/1）	シルト	地山小ブロック含む・自然堆積
12		壁崩落土	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	地山土多量含む・自然堆積
13		カマド崩落土	明黄褐色（10YR7/6）	シルト質粘土	地山小礫少量含む・自然堆積
14		カマド崩落土	赤褐色（2.5YR4/6）	シルト質粘土	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
15		煙道崩落土	褐灰色（7.5YR4/1）	シルト	炭化物・焼土含む・自然堆積
16		煙道崩落土	褐灰色（5 YR5/1）	シルト	炭化物・焼土多量含む・自然堆積
17		煙道崩落土	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫・焼土粒少量含む・自然堆積
18		煙道崩落土	暗灰黄色（2.5YR4/2）	シルト	地山小礫・地山ブロック多量・炭化物・焼土粒含む・自然堆積
19		煙出 Pit 堆積土	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山土粒少量含む・自然堆積
20		煙出 Pit 堆積土	黒褐色（5 YR2/1）	シルト	炭化物多量・焼土粒少量含む・人為堆積
21		煙出 Pit 堆積土	黒褐色（5 YR2/1）	シルト	炭化物多量・焼土粒少量含む・人為堆積
22		周溝埋土	黄灰色（2.5YR4/1）	シルト	地山小ブロック・地山礫含む・人為堆積
23		カマド下周溝堆積土	黒褐色（7.5YR3/1）	シルト	炭化物・焼土粒含む・自然堆積
24		掘方埋土	明黄褐色（10YR6/6）	粘土質シルト	10YR3/2黒褐シルト不均質に混ざる・人為堆積
1	SI55カマド（CC')	カマド側壁	明黄褐色（10YR6/6）	シルト	地山礫少量含む
1	SI55周溝	壁材痕跡	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山土粒少量含む
2		周溝掘方埋土	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山小ブロック・地山礫含む・人為堆積



番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　徴	写真図版	登録
1	土師器・坏	床面	14.9		4.2	9/10	外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ？	19－3	SI55－3
2	土師器・甕	カマド・支脚	(17.0)	8.0	17.9	2/3	外面：ハケメ　内面：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ→ナデ　底部：木葉痕	19－6	SI55－5
3	土師器・甕	床面	(20.6)	8.6	26.6	ほぼ完形	外面：ヨコナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ　底部：ナデ	19－7	SI55－4
4	須恵器・蓋	床面	15.2		4.3	完形	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ　つまみ径：3.0	19－4	SI55－2
5	須恵器・蓋	床直	15.8		3.6	完形	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ　つまみ径：2.4	19－5	SI55－1

第26図　SI55竪穴住居跡出土土器

られていたと考えられる。

燃焼部奥壁の下にはカマド構築時に人為的に埋め戻された周溝が認められる。カマド側壁の両側では周溝の幅は20～27cmであるのに対して、カマド奥壁では10cmと細くなっている。そしてその上に蓋

をするように長さ22～32㎝、幅12㎝の細長く扁平な礫２個を壁に平行して置き、さらにその上にカマドを構築している。

煙道はカマド奥壁より1.0m外側に延び、その先に煙出ピットが付設されている。カマドに接する煙道の底面には、長さ12～18㎝の角柱状の礫が煙道に直交して並べて据えられていた。煙道は先に向かってやや深くなり、煙出ピットと接する部分では一段高くなっている。

煙出ピットは一辺20㎝の隅丸方形を呈し、深さは28㎝である。煙道や煙出ピットには機能中に自然堆積した黒褐色シルトの上に天井の崩落土と、崩落後に流入した黒褐色シルトが堆積している。

［周溝］西辺南半分と北辺東側、削平のため検出できなかった南辺西側を除いた部分で確認された。周溝の外側は住居の壁よりも外側にオーバーハングするように掘られ、床面側は傾斜が緩やかである。幅は12～30㎝、深さは２～16㎝である。また南辺と北辺中央部を除いて、幅５～10㎝、深さ３～16㎝の黒褐色シルトの壁材痕跡が周溝の壁際に認められた。掘方埋土は黄灰色シルトで人為堆積である。

［出土遺物］床面から土師器坏（1)、甕（3）と須恵器蓋（４・５）が出土した。いずれもカマドの左側にあり、蓋は２点が並んで出土した。土師器坏は非ロクロ調整の平底で、外面はヘラミガキ調整されている。須恵器蓋はいずれも口径15cm前後でつまみは宝珠形を呈する。また、カマドからは支脚として用いられた非ロクロ調整の土師器甕（2）が出土した。この他、煙道や周溝、掘方埋土からも非ロクロ調整の土師器甕が出土した。

【SI60竪穴住居跡】（第27図）

［重複］SI55竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

［平面形・規模］南西半分は削平のため壊されている。北西－南東3.3m、北東－南西2.0m以上の方形を呈する。

［方向］北東辺でみるとN－38°－Wである。

［堆積土］黒褐色シルト（１～６層）が自然堆積している。

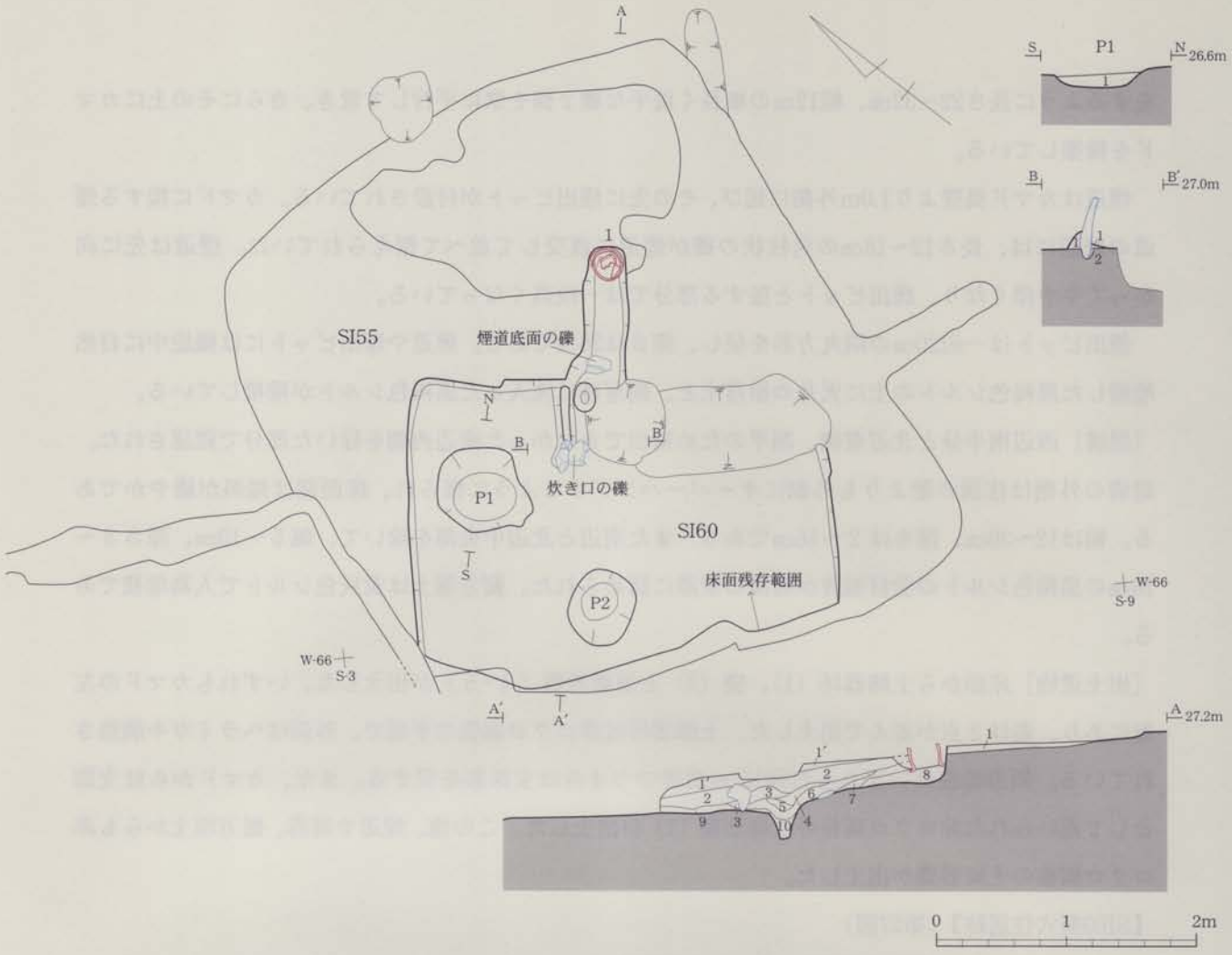
［壁］SI55竪穴住居跡の堆積土を壁とし、やや外側に開きながら立ち上がる。高さは最も残りのよい北東壁で34cmである。

［床面］ほぼ平坦であるが、標高の低い南西に向かってわずかに傾斜している。SI55竪穴住居跡の掘方埋土を床面としている。

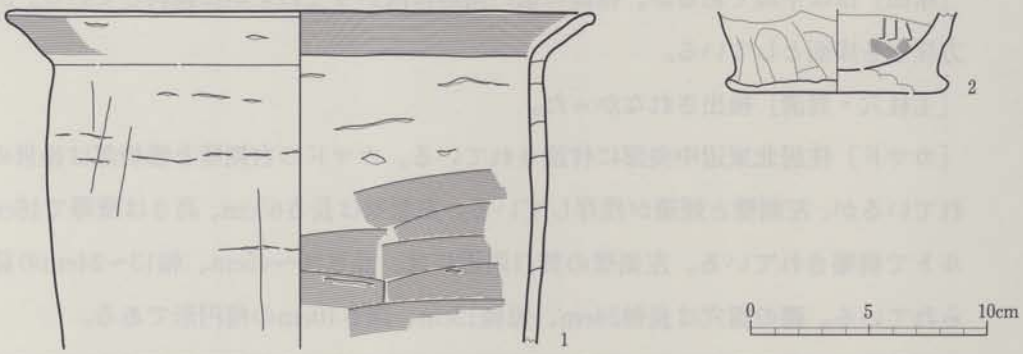
［主柱穴・周溝］検出されなかった。

［カマド］住居北東辺中央部に付設されている。カマドの右側壁と燃焼部は後世の攪乱により破壊されているが、左側壁と煙道が残存している。左側壁は長さ65cm、高さは壁際で16cm、にぶい黄橙色シルトで構築されている。左側壁の焚口附近には、長さ20～45cm、幅13～24cmの扁平な礫３個が据えられている。礫の据穴は長軸24cm、短軸12cm、深さ10cmの楕円形である。

煙道はカマド奥壁より1.0m外側に延び、その先端部に土師器甕が倒立して据えられていた。また、カマドに接する煙道の底面には、長さ20cm、幅12cmの扁平な礫が煙道と直交して置かれていた。煙道は先に向かってやや浅くなり、機能中に自然堆積した赤褐色シルトの上に天井の崩落土と、崩落後

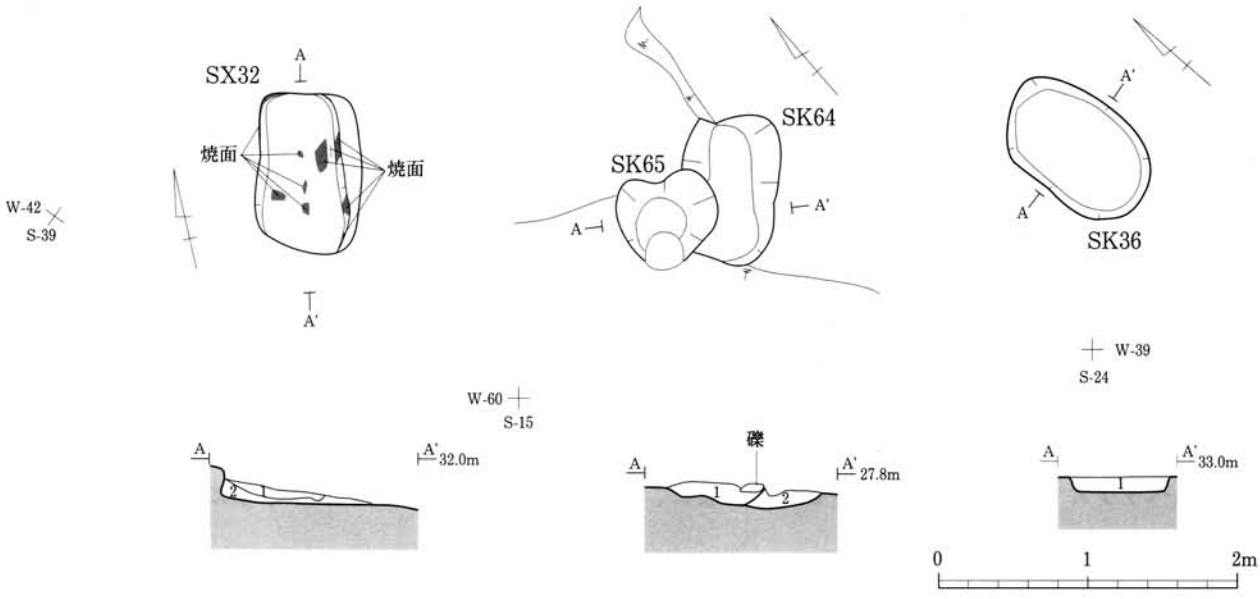


番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI60	SI55堆積土	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
1'		煙道天井崩落土	黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
2			黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
3		カマド崩落土	黒褐色（2.5YR3/2）	シルト	炭化物・焼土・地山小ブロック少量含む
4		カマド崩落土	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物・地山小ブロック・焼土小ブロック含む
5		カマド崩落土	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	4層より炭化物・焼土ブロック多量含む
6		カマド崩落土	赤褐色（2.5YR4/6）	シルト	炭化物・焼土小ブロック・地山小ブロック含む
7		カマド崩落土	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	4層より炭化物・焼土ブロック多量含む
8		煙道崩落土	黒褐色（2.5Y2/1）	シルト	炭化物・焼土粒多量・地山ブロック少量含む
9			黒褐色（10YR3/1）	シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
10		カマド燃焼部の pit	黄灰色（2.5YR4/1）	シルト	地山砂粒含む
1	P1		暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	炭化物・地山小ブロック少量含む・自然堆積
1	カマド左壁（BB'）	カマド構築土	にぶい黄橙色（10YR6/4）	シルト	人為堆積
2		掘方埋土	暗灰黄色（2.5YR5/2）	シルト	人為堆積



番号	器種	層位	口径	底径	器高	残存率	特徴	写真図版	登録
1	土師器・甕	煙道ピット	(24.6)		(13.8)	口～体上半部	外面：ヨコナデ→ナデ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ	19－8	SI60－1
2	土師器・甕	堆		(9.3)	(3.4)	底部1/4	外面：ナデ　内面：ヘラナデ→ナデ　底部：ナデ？		SI60－2

第27図　SI60竪穴住居跡・出土土器



番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SX32		褐色（10YR4/4）	シルト質粘土	炭化物・地山ブロック多量・焼土含む・人為堆積
2			暗赤褐色（5 YR3/2）	シルト質粘土	炭化物非常に多量・焼土含む・人為堆積
1	SK65		黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炭化物・地山小礫少量含む・自然堆積
2	SK64		暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山小礫少量含む・自然堆積
1	SK36		褐色（10YR4/6）	シルト	炭化物含む・自然堆積

第28図　SX32焼土遺構・SK36・64・65土壙

に流入した黒褐色シルトが堆積している。

［貯蔵穴］カマド左脇の床面北隅付近で１基確認した（P1）。長軸80cm、短軸65cm、深さ14cmの不整楕円形で暗灰黄色シルトが自然堆積している。

［ピット］床面中央付近やや西寄りで１個確認した（P2）。長軸55cm、短軸45cm、深さ20cmの楕円形で、オリーブ褐色のシルトで埋め戻されている。

［出土遺物］煙道から土師器甕（1）と須恵器坏が出土した。堆積土からは土師器甕（2）と須恵器坏、甕が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整である。

２．焼土遺構

【SX32焼土遺構】（第28図）

南辺が削平されている。長軸106cm、短軸70cmの隅丸長方形を呈している。深さは北辺で21cmで、壁は北壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁、西壁はやや外側に開いて立ち上がる。内面は壁から中央部にかけて熱を受け赤変している。底面はほぼ水平である。埋土は２層確認された。１層は黄褐色の地山ブロックを多く含むややしまりのある褐色のシルト質粘土で、炭化物や焼土も含んでいる。２層はややしまりのある暗褐色のシルト質粘土で炭化物を非常に多く含んでおり、焼土も含んでいる。いずれの層とも人為堆積である。土師器甕と須恵器甕の破片が堆積土の上部から出土した。

3．土壙

【SK22土壙】（第29図）

SI24竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。平面形は長軸2.9m、短軸2.6mの不整円形を呈している。壁は緩やかに立ち上がり、底面はわずかに凹凸が認められる。深さは35cmである。地山礫を多量に含むにぶい黄褐色の粘土質シルトにより埋め戻されており、最上層に灰白色火山灰がレンズ状に堆積している。

堆積土下部から土師器坏・甕、須恵器坏・鉢（5）・甕が出土した。土師器坏には回転糸切り後底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整が施されたものがある（1）。土師器甕にはロクロ調整されたものがある。須恵器坏には回転糸切り無調整のもの（2・3）と回転糸切り後に底部と体部下端に手持ちヘラケズリ調整するもの（4）がある。また、4は須恵器坏であるが、内面が丁寧にヘラミガキされている。

B　近世の遺構

近世の遺構には掘立柱建物跡7棟（SB27・29・31・37・58・67・68）（第30～35図）、井戸跡1基（SE37）、石垣1条（SX39）、土壙1基（SK54）（第38図）、溝跡4条（SD38・40・42・43）（第2・31～33図）などがある。主なものについて以下に説明する。土壙、掘立柱建物跡、溝跡については一覧表に示した（第1～3表）。

1．掘立柱建物跡

【SB37掘立柱建物跡】（第33・38図）

上屋と下屋からなる大型の東西棟である。

上屋は東西5間、南北1間で、北側柱列の東側一間が北側に0.9m張り出している。SI20A・B竪穴住居跡、SB27掘立柱建物跡と重複し、いずれよりも新しい。

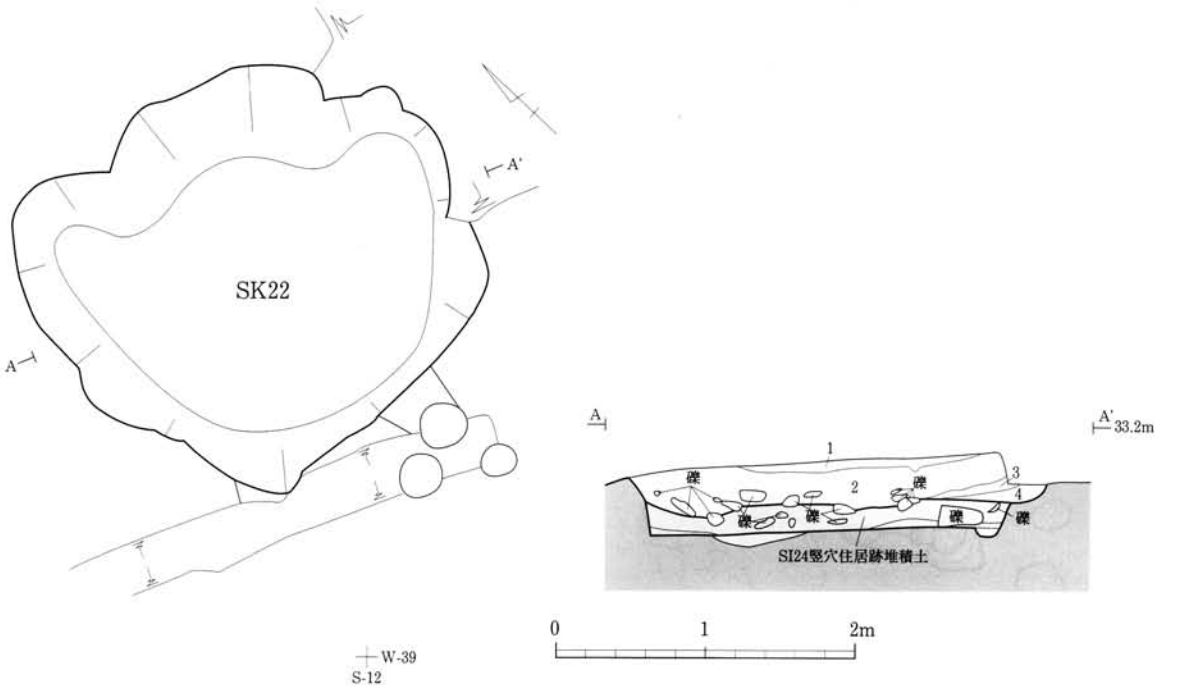
上屋の総長は南側柱列で18.2m、柱間寸法は東から4.5m、3.5m、4.6m、2.7m、2.9m、北側柱列で総長18.1m、柱間寸法は東から4.5m、3.4m、2.3m、4.7m、3.2mである。梁行は東妻が6.4m、西妻が5.3mである。

上屋の柱列の1～1.2m外側を囲んで、下屋の柱列が認められる。

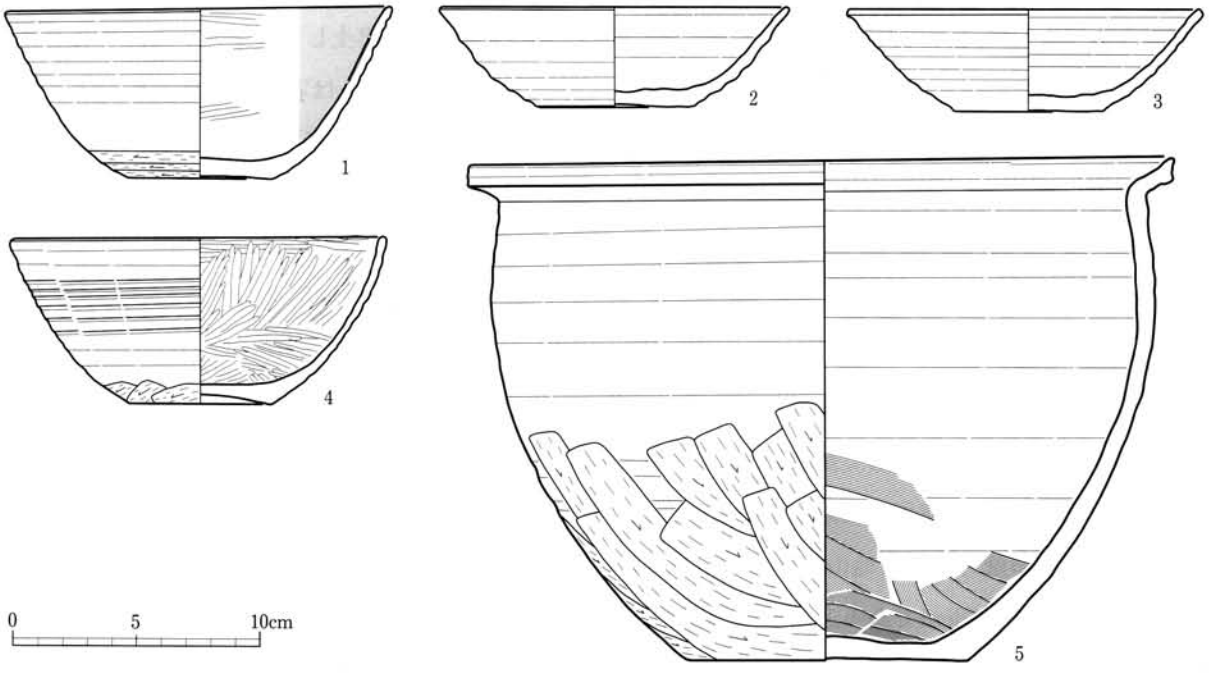
上屋の柱穴は12個検出しており、平面形は長軸0.9～1.7m、短軸0.7～1.1mの長方形を基調とし、深さは56～112cmである。南側柱列の西端と東から2番目の柱穴を除く10個の柱穴には径18～32cmの円形の柱痕跡が認められた。

下屋の柱穴は37個検出しており、平面形は長軸0.3～1.1m、短軸0.25～0.8mの長方形や楕円形など様々である。深さは35～98cmである。37個検出した柱穴のうち、22個に柱痕跡が認められた。柱痕跡は径15～20cmのほぼ円形を呈する。

上屋の南側柱列の東から2本目から4本目の柱の北側には間仕切りの柱穴が認められる。この柱穴の特徴は、下屋のものと同様である。また、南側柱列西端と西から2本目の柱穴の北側には、「L」字形に曲がる、径20～30cmの円形を呈する、やや規模の小さな柱穴列が認められる。これも間仕切りの可能性がある。

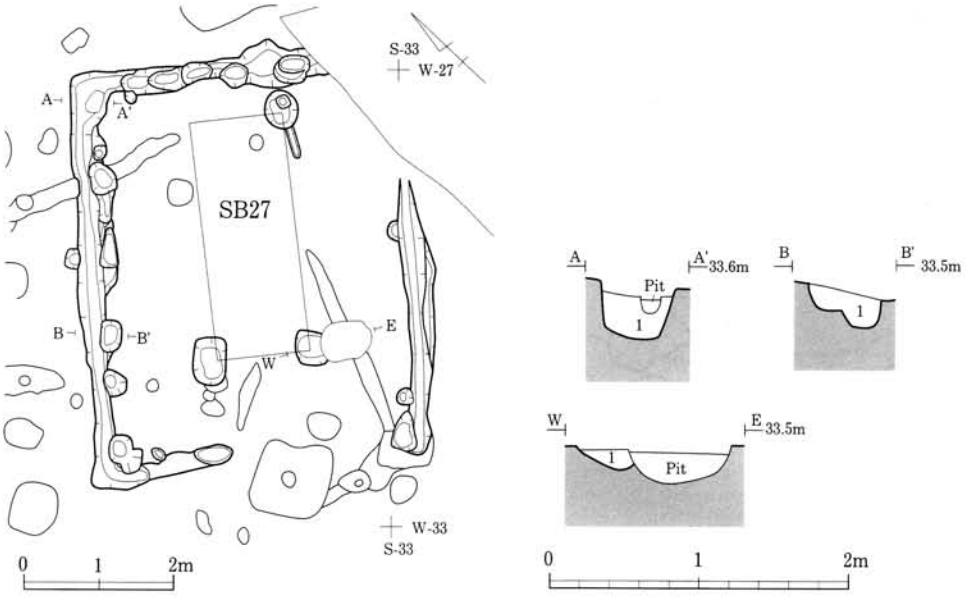


番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SK22	灰白色火山灰層			
2			にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土・地山礫含む・人為堆積
3			明黄褐色（10YR6/6）	シルト	炭化物・焼土含む・人為堆積
4			にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土多量含む・人為堆積



番号	器　種	層　位	口径	底径	器高	残存率	特　徴	写真図版	登録
1	土師器・坏	2層	(15.5)	5.8	6.8	1/2	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底部：切離し不明→回転ヘラケズリ	19－9	SK22－4
2	須恵器・坏	2層	14.3	6.0	4.1	1/2	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り	19－10	SK22－3
3	須恵器・坏	2層	(14.0)	(6.4)	4.0	1/3	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ	19－11	SK22－5
4	須恵器・坏	2層	15.1	5.7	6.6	ほぼ完形	外面：ロクロナデ→工具によるロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ　底部：回転糸切り	19－12	SK22－2
5	須恵器・鉢	2層	28.3	11.1	20.0	4/5	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ナデ　底部：ナデ	20－1	SK22－1

第29図　SK22土壙・出土土器



第30図　SB27堀立柱建物跡

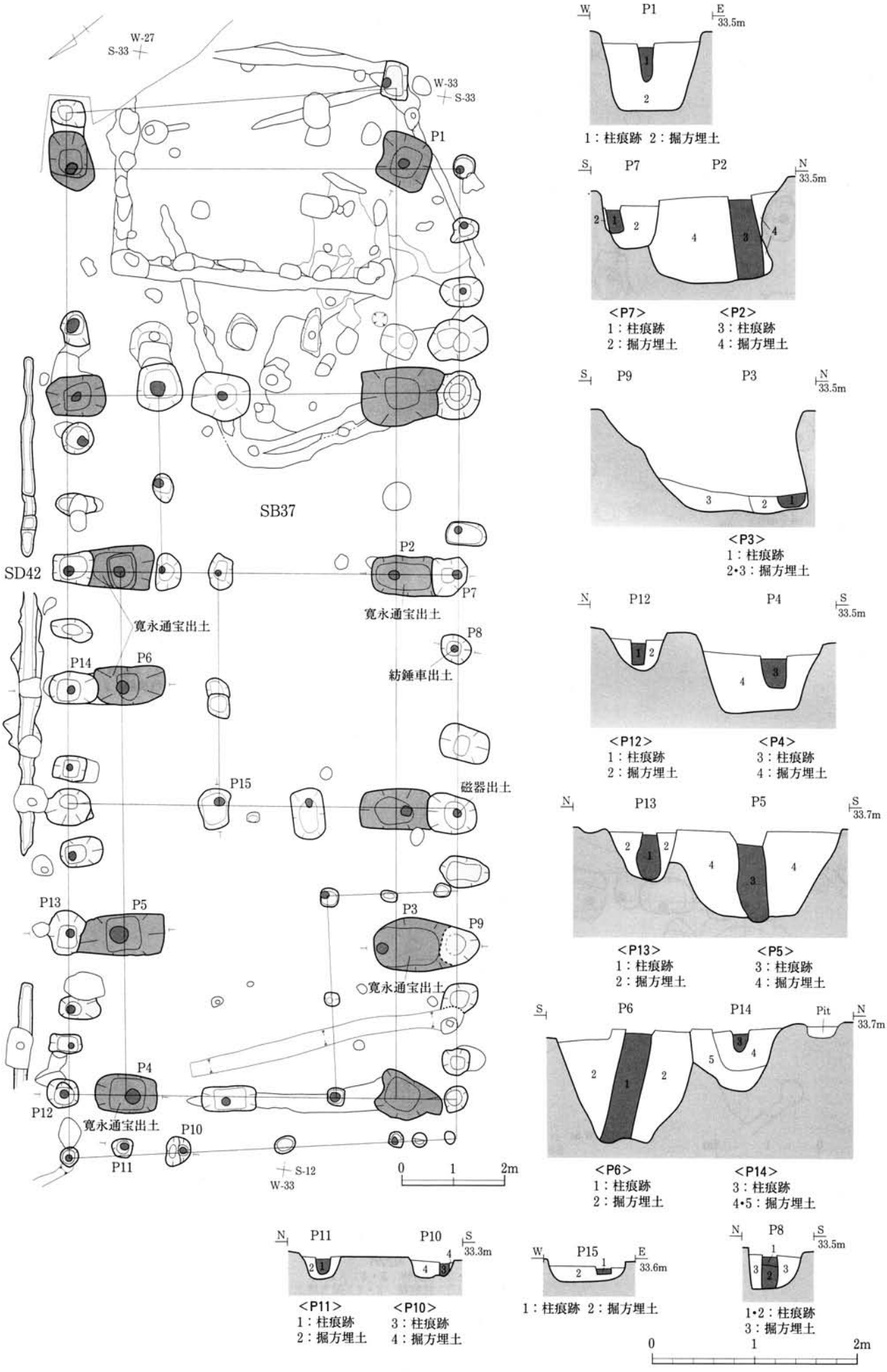
柱穴の堆積土は上屋、下屋、間仕切り、ともに掘方埋土が明黄褐色の地山ブロックを含む明黄褐色シルト、柱痕跡が黄褐色あるいはにぶい黄褐色シルトである。柱穴埋土は上部は固く締まっているが、下部は柱痕跡と同様に締まりがない。

遺物は上屋の柱穴5個の掘方埋土からそれぞれ1点ずつの寛永通宝が出土した(2～5)。柱穴を埋め戻すときに意図的に入れられたと考えられ、底面の5～50cm上位から出土した。また、上屋の柱痕跡からは磁器の底部破片1点（図版22－16）が出土した。下屋の柱痕跡からは石製紡錘車1点（6）と磁器の破片が少量出土した。この他、上屋と下屋の掘方埋土から土師器坏、甕と須恵器坏、甕の破片も少量出土した。

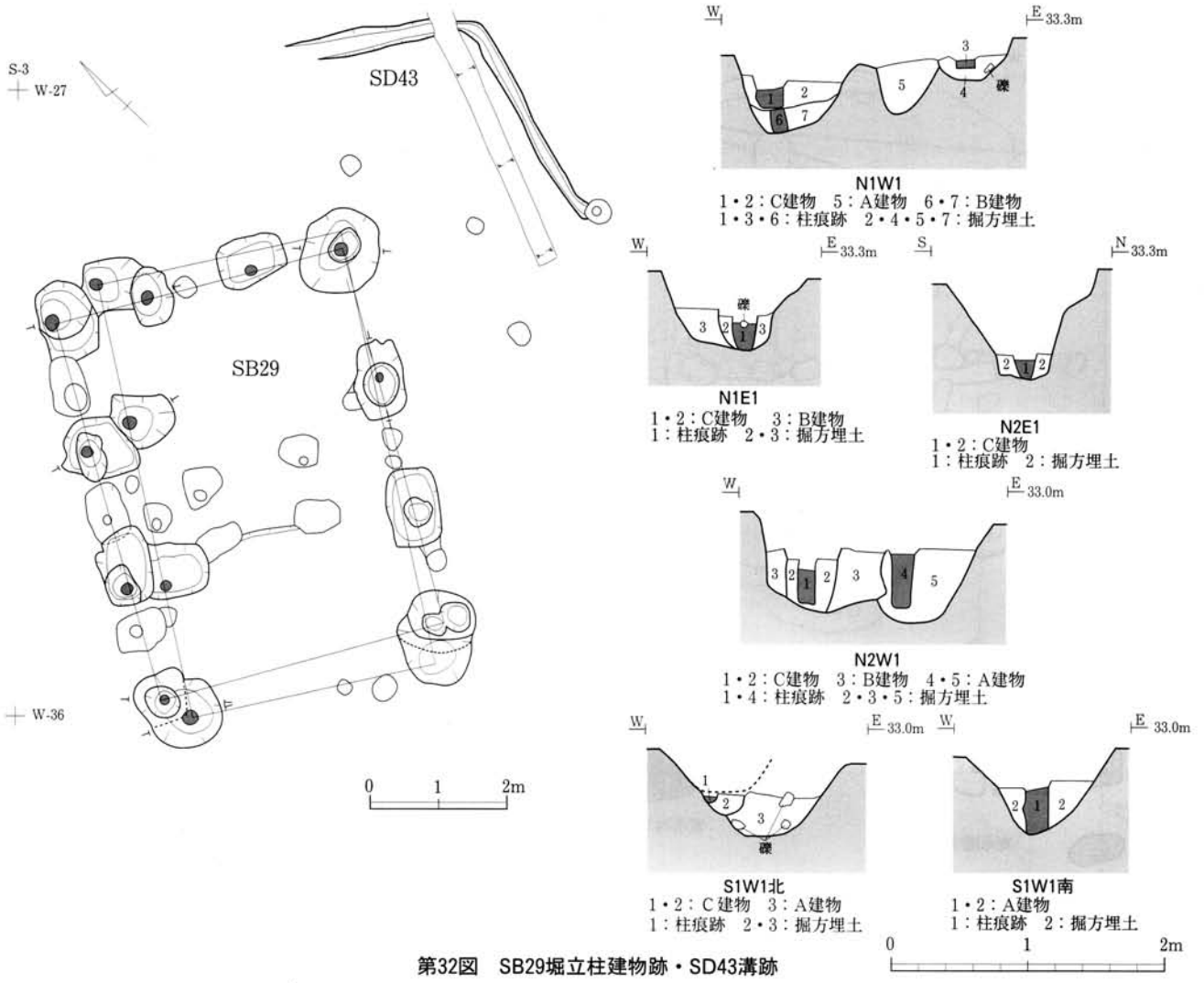
2．井戸跡

【SE57井戸跡】（第36図）

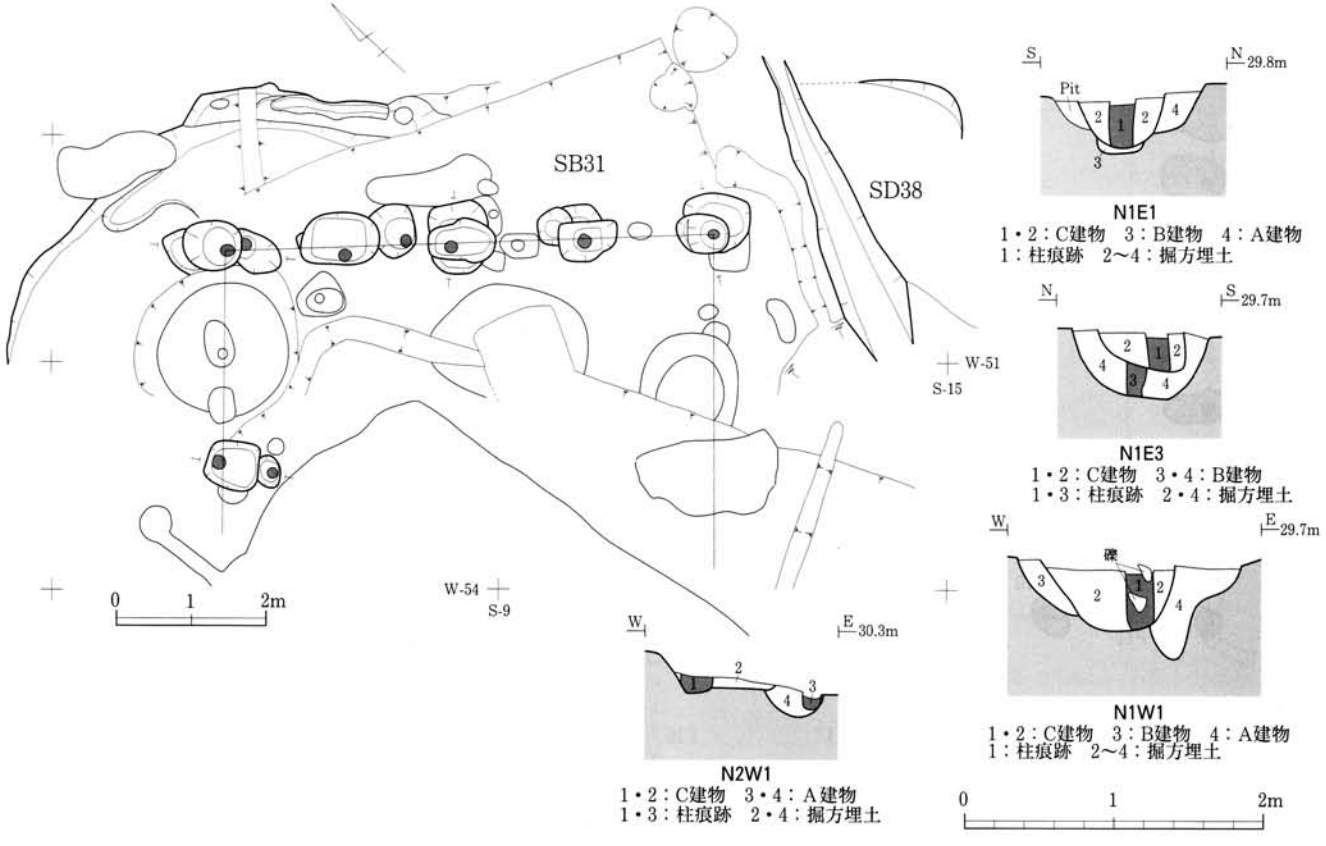
石組み井戸跡である。SB58掘立柱建物跡と重複し、それよりも新しい。掘方の平面形は確認面で長軸3.4m、短軸2.5m、底面で長軸1.95m、短軸1.55mの楕円形を呈し、断面は漏斗状を呈する。深さは3.45mで、底面は基盤岩層に達している。内側に板状・角柱状に割った人頭大の礫を30段ほど積み上げ、掘方埋土の壁とに間に地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトの裏込め土を入れている。石組みの内径は70～80cmである。上層は黒褐色を基調とするシルトで、下層は拳大～人頭大の礫を多量に含むにぶい黄褐色～黒褐色の粘土～シルトで埋め戻されている。底面には砂が堆積し、その上に未分解の有機質を含む黒褐色粘土が堆積している。遺物は堆積土の上部から土師器甕と須恵器坏、甕の破片が少量出土した。



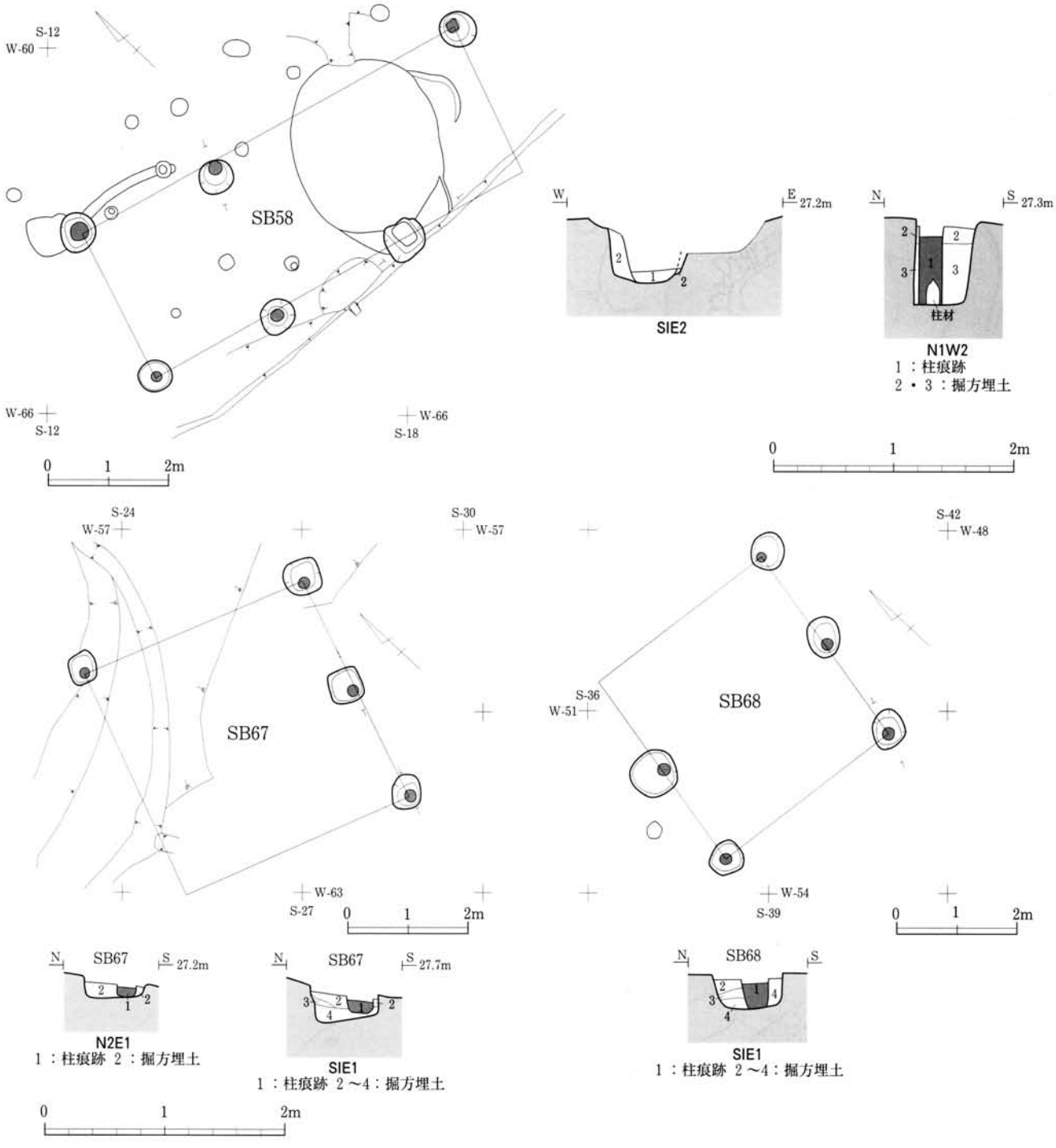
第31図　SB37・SD42堀立柱建物跡



第32図　SB29堀立柱建物跡・SD43溝跡



第33図　SB31堀立柱建物跡・SD38溝跡

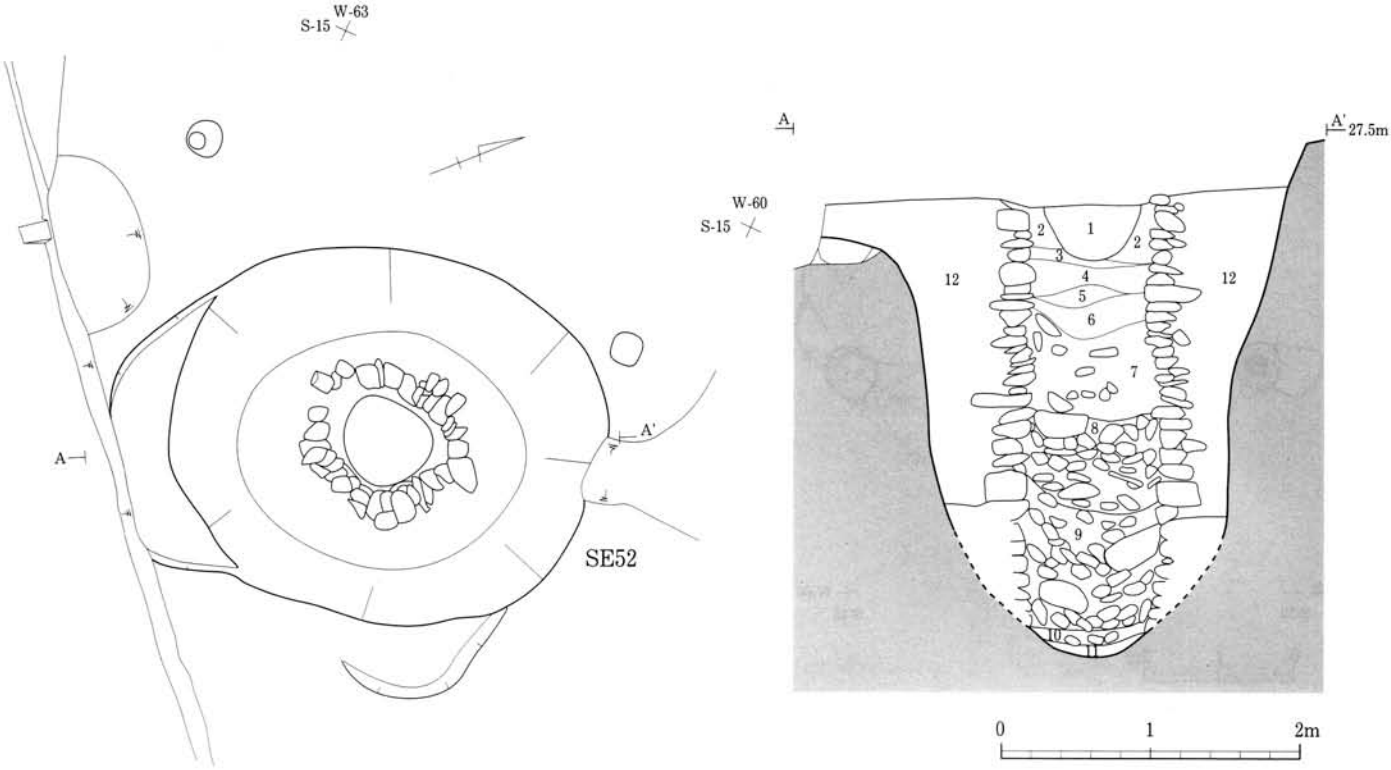


第34図　SB58・SB67・SB68堀立柱建物跡

3．石垣

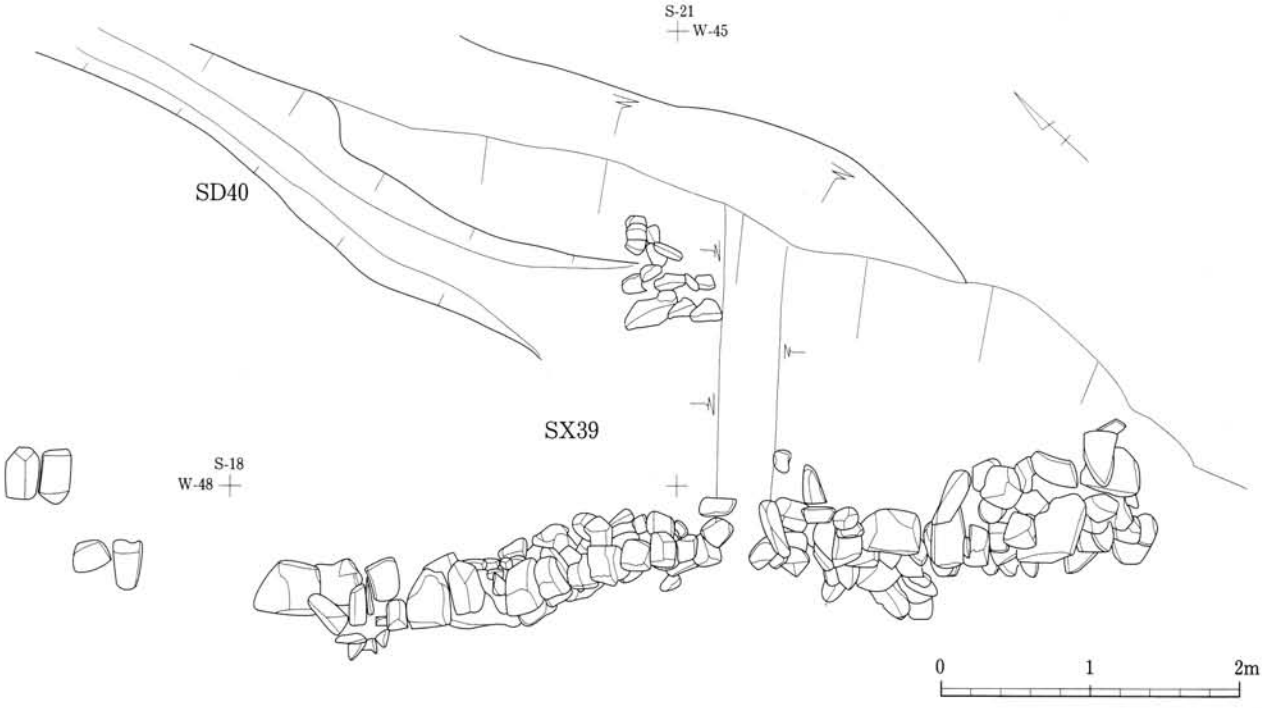
【SX39石垣】（第37図）

人頭大の加工されていない川原石を積み上げた野面積みで、裏込めなどはなされていない。長さ3.0m、高さ92cmである。遺物は近世陶磁器が出土した。（図版22－17～28）

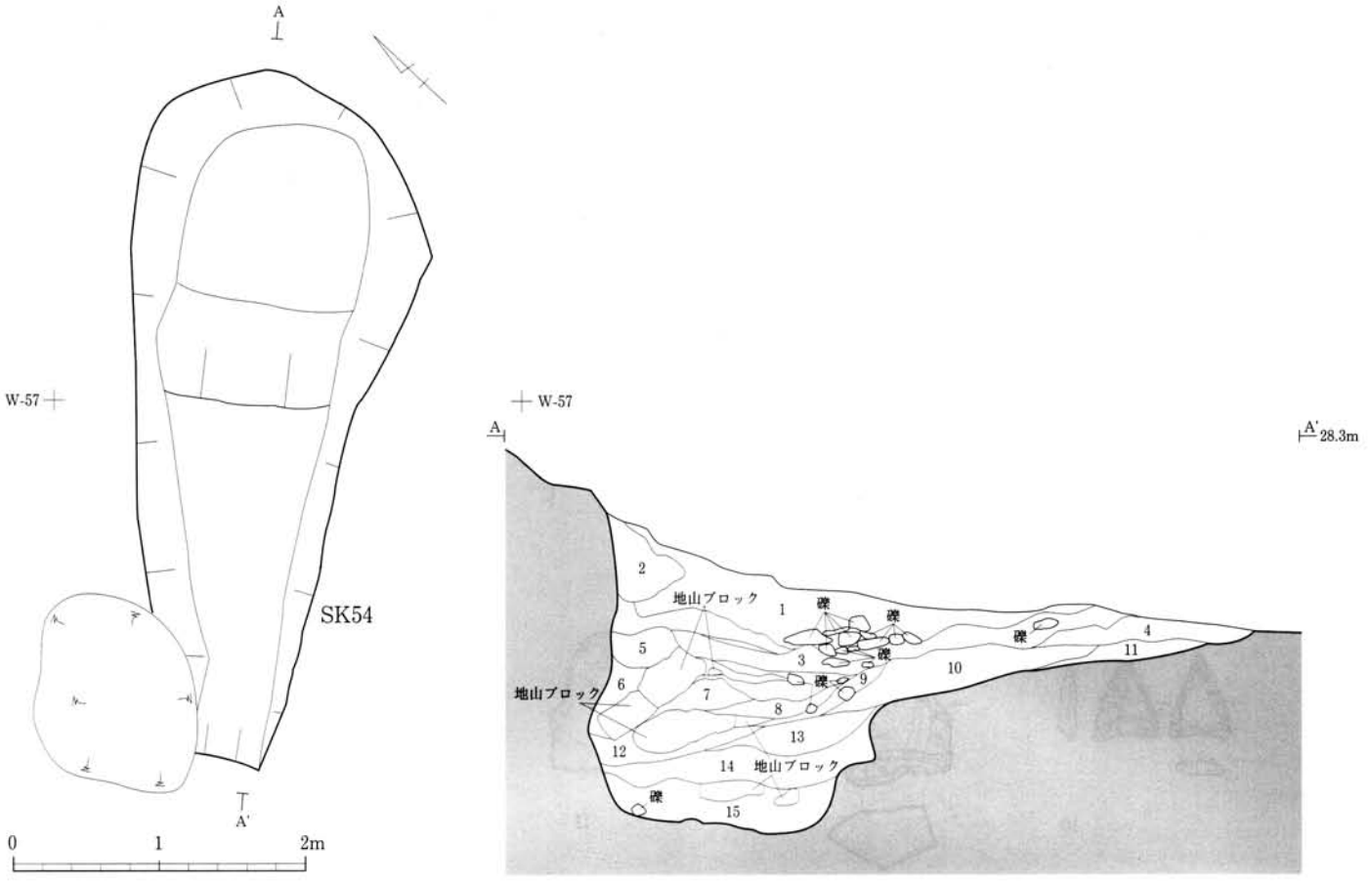


番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SE57		暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山粒含む・人為堆積
2			黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロック多量含む・人為堆積
3			黒褐色（10YR3/2）	シルト	人為堆積
4			褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロック多量含む・人為堆積
5			黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山粒少量含む・人為堆積
6			黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山ブロック含む・人為堆積
7			黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山ブロック多量・地山礫含む・人為堆積
8			暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロック・地山礫大量含む・人為堆積
9			にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック・地山礫大量含む・人為堆積
10			黒褐色（2.5YR3/1）	シルト	未分解有機質（木葉？）少量含む・人為堆積
11			浅黄色（2.5YR7/4）	シルト	均質な砂・人為堆積
12		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR45/4）	シルト	地山ブロック・少量の礫・人為堆積

第35図　SE57井戸跡

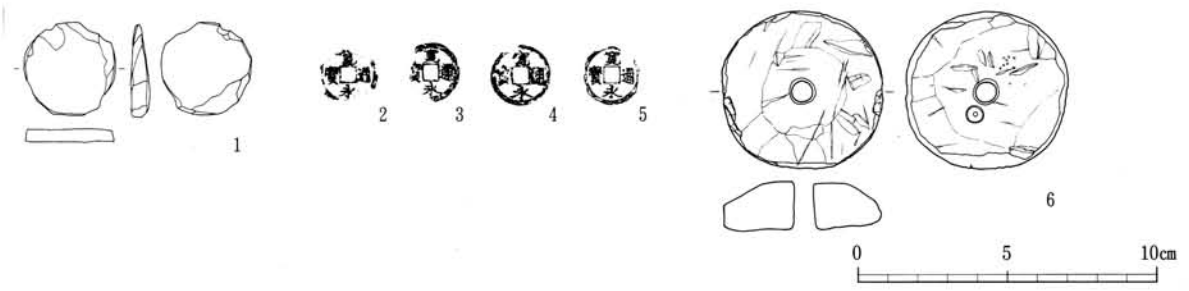


第36図　SX39石垣



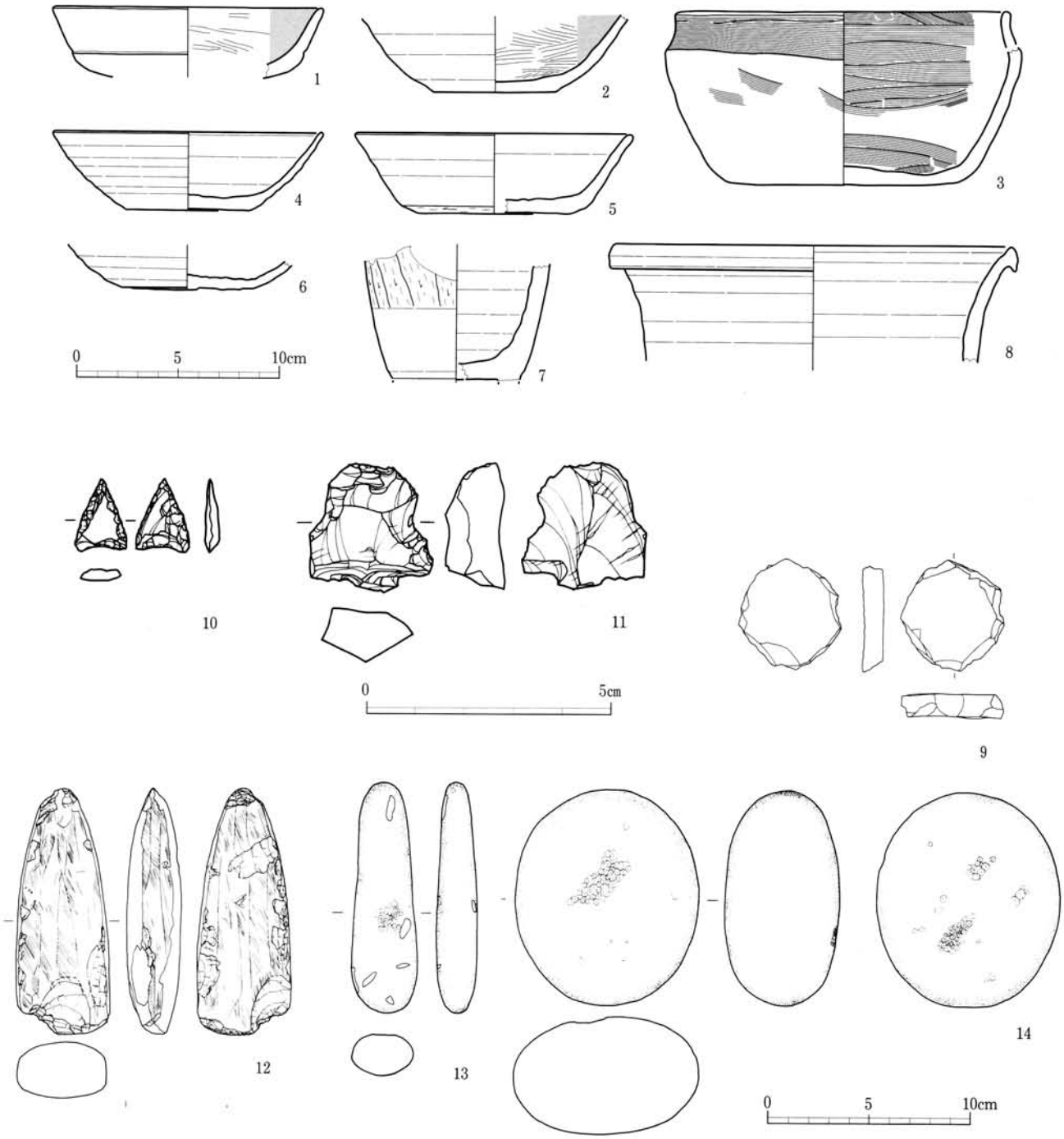
番号	遺　構	種　類	土　色	土　性	特徴・混入物など
1	SK54		黒色（10YR2/1）	粘土質シルト	地山ブロック・焼土粒少量含む・石が3層上面に密集している・人為堆積
2		崩落土	褐色（7.5YR4/4）	粘土	地山ブロック・焼土粒少量含む・自然堆積
3			褐色（7.5YR4/6）	粘土	地山土と黒色土（10YR2/1）互層状をなす・人為堆積
4			褐色（7.5YR4/6）	粘土	地山ブロック含む・人為堆積
5		崩落土	赤褐色（5 YR4/6）	粘土	均質で緻密・自然堆積
6		崩落土	褐色（7.5YR4/6）	粘土	地山シルトブロック多量含む・自然堆積
7			褐色（7.5YR4/4）	粘土	地山小ブロック・黒色土粒・地山粒・黒色土ブロックが混じる・人為堆積
8			赤褐色（5 YR4/6）	粘土	地山小ブロック・黒色土ブロック少量含む・人為堆積
9			褐色（7.5YR4/4）	粘土	地山小ブロック・黒色粘土が層理面に入る・人為堆積
10			褐色（7.5YR4/6）	粘土	地山小ブロック・黒色土粒少量含む・人為堆積
11			褐色（7.5YR4/4）	粘土	地山小ブロック・種々の地山小ブロックからなる・人為堆積
12			褐色（7.5YR4/4）	粘土	黒色粘土が層理面に入る・人為堆積
13			褐色（7.5YR4/6）	粘土	地山シルト小ブロックを含む・黒色粘土が層理面に入る・人為堆積
14			褐色（7.5YR4/4）	粘土	地山ブロック・黒色土小ブロック少量含む・人為堆積
15			赤褐色（5 YR4/6）	粘土	地山シルト大ブロック多量含む・人為堆積

第37図　SK54土壙



番号	器　種	層　位	直径	厚	特　徴	写真図版	登録
1	円盤状石製品	SB31N1W5	3.7	0.5	重さ10g　粘板岩	22－2	SB37－1
2	寛永通宝	SB37P2	2.4		古寛永	21－9	SB37－2
3	寛永通宝	SB37P3	2.4		古寛永	21－10	SB37－3
4	寛永通宝	SB37P6	2.4		古寛永		SB37－4
5	寛永通宝	SB37P6東	2.4		古寛永	21－8	SB37－5
6	石製紡錘車	SB37P8	6.5	2.1	裏面に錐状工具による穿孔痕　凝灰岩	22－6	SB37－6

第38図　SB31・SB37堀立柱建物跡出土遺物



番号	器　　種	出土地区	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
1	土師器・坏	SB58N2W2Pit	(13.2)		(3.4)	1/4	外面：摩滅のため調整不明　内面：ヘラミガキ→黒色処理	20－2	SB58－1
2	土師器・坏	SI23付近表土		(6.0)	(3.8)	底～体部一部	外面:ロクロナデ　内面:ヘラミガキ→黒色処理　底部:切離し不明→回転ヘラケズリ	20－3	XX－4
3	土師器・鉢	南東部表土	(16.4)	11.2	(8.4)	1/3	内外面：ヨコナデ→ナデ　底部：ナデ	20－7	XX－5
4	須恵器・坏	南東部表土	(13.2)	6.0	3.8	1/3	内外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り	20－4	XX－1
5	須恵器・坏	SI23付近表土	(13.6)	(7.4)	3.9	1/4	外面:ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面:ロクロナデ　底部:切離し不明→回転ヘラケズリ	20－5	XX－3
6	須恵器・坏	表土		6.4	(2.1)	底～体下半一部	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り	20－6	XX－2
7	須恵器・壷	表土				底～体部一部	外面：手持ちヘラケズリ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ　底部：ロクロナデ	20－8	XX－6
8	須恵器・甕	南東部表土	(19.4)		(5.6)	口縁1/4	内外面：ロクロナデ	20－9	XX－7
9	円盤状土製品	表土					長：5.0cm　幅：5.0cm　厚：1.0cm　重：39.0g・須恵器甕転用	22－1	XX－9
10	石鏃	表土					長：1.8cm　幅：1.3cm　厚：0.3cm　黒曜石	22－3	XX－10
11	不定形石器	SB21・平坦面					長：3.1cm　幅：3.0cm　厚：1.3cm　珪化木（黒）	22－4	SB21－13
12	磨製石斧	SB37P8柱痕跡					長：12.1cm　幅：4.6cm　厚：2.7cm　稜線全て磨滅　刃部先端はつぶれている	22－5	SB37－7
13	敲石	SB21・1層					長：11.2cm　幅：3.0cm　厚：2.0cm　重：89.0g	22－10	SB21－14
14	磨石	SI28・堆積土					長：10.6cm　幅：9.1cm　厚：5.7cm　重：820g	22－12	SI28－6

第39図　Ⅱ区表土ほか遺物

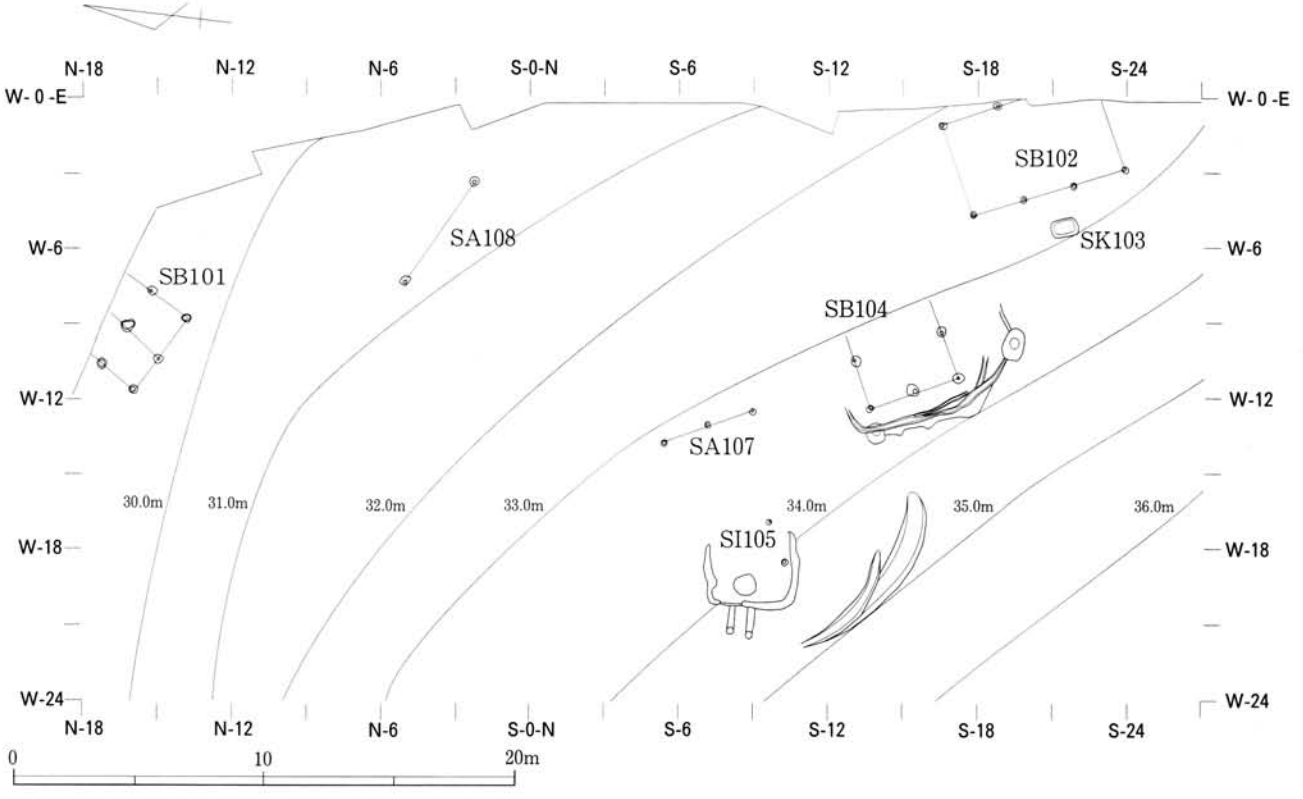
Ⅳ　Ⅲ区で発見された遺構と遺物

Ⅲ区で発見された遺構は、掘立柱建物跡３棟、竪穴住居跡１軒、柱列２条、土壙２基などである。

Ⅲ区は調査区北東側の斜面下部で比較的平坦な部分に遺構が散布している。しかし、各遺構の斜面下部側が削平されており残存状況は良くない。遺物は少なく、竪穴住居跡から出土した土師器・須恵器などを中心に整理用平箱で２箱ほどである。

A　古代の遺構

古代の主な遺構は、掘立柱建物跡１棟（SB104）、竪穴住居跡１軒（SI105）、柱列１条（SA107）などである。主なものについて以下に説明する。

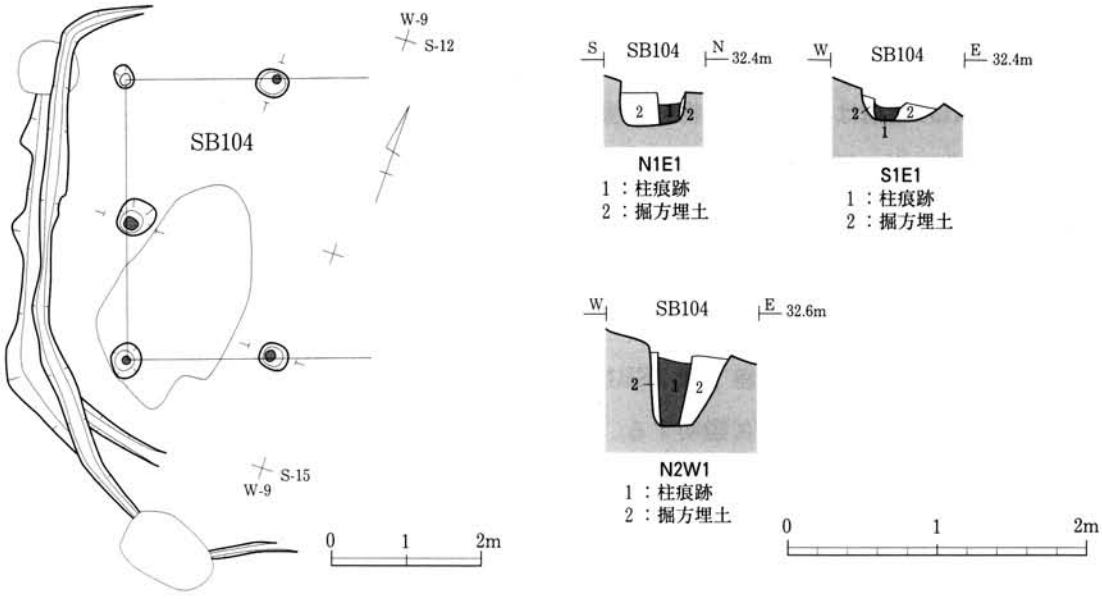


第40図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）

１．掘立柱建物跡

【SB104掘立柱建物跡】（第41図）

南北２間、東西１間以上の建物跡である。東側にさらに延びる可能性があるが、削平されており延長は不明である。桁行は西側柱列で総長3.8m、柱間は北から2.0m・1.8mである。梁行は北妻、南妻ともに2.0mである。建物の方向は西側柱列でみるとN－10°－Wである。柱穴は５個検出しており、平面形は径20～40㎝の円形または長方形を呈し、深さは13～48㎝である。柱穴埋土は褐色を基調とするシルトが堆積している。検出したすべての柱穴に柱痕跡が認められた。柱痕跡は径12～18㎝の円形



第41図　SB104堀立柱建物跡

で、にぶい黄褐色シルトが自然堆積している。遺物は出土していない。

当建物の斜面上部にあたる西、南側で、外周溝が検出された。新旧２時期からなり、古い溝は新しい溝に壊されており詳細は不明であるが、建物を囲むように湾曲しており検出長は4.0m、幅10～23㎝、深さ5㎝で断面形は皿状を呈する。黄褐色シルトで埋め戻されている。新しい溝は南隅を攪乱で壊されている。平面形は「コ」の字状を呈し、標高の高い部分にある西辺は検出長は7.5m、北辺、南辺はともに検出長は1.0mである。幅12～33㎝、深さ4～12㎝で断面形は皿状を呈する。炭化物を含む褐色シルトが自然堆積している。新しい溝の堆積土からは土師器の坏、甕が出土した。土師器の坏には回転ヘラ切り無調整のものがある。

２．竪穴住居跡

【SI105竪穴住居跡】（第42・43図）

［平面形・規模］東半分は削平のため壊されている。南北3.8m、東西は南辺で3.1m以上の隅丸方形を呈する。

［方向］北東辺でみるとN－５°－Wである。

［堆積土］壁際には地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトが、全面には地山礫や炭化物を含む暗褐色シルトがそれぞれ自然堆積している。

［壁］地山を壁とし、ほぼ垂直に立ち上がる。高さは最も残りのよい西壁で32㎝である。

［床面］ほぼ平坦である。地山ブロックを含むにぶい黄褐色の掘方埋土を床面としている。

［主柱穴］検出されなかった。

［周溝］残存する壁際で確認された。カマドのある西辺南寄りの部分で85㎝途切れる。幅17～36㎝、深さ３～15㎝で、炭化物や地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

［カマド］住居西辺で検出した。１回作り替えられており、古いカマドをＡカマド、新しいカマドを

Ｂカマドとする。

〈Ａカマド〉住居西辺の中央部に煙道と煙出ピットのみが残存している。煙道はカマド奥壁より95cm外側に延び、その先に煙出ピットが付設されている。煙道は幅26～32cm、深さ７～11cmで断面は「Ｕ」字形を呈し、地山の傾斜に沿って先端部が高くなっている。

煙出ピットは長軸30cm、短軸24cmの楕円形を呈し、深さは30cmで煙道よりも深くなっている。煙出ピットには機能時に堆積した、炭化物を多量に含む黒色シルトが認められ、その後煙道とともに地山ブロックを多く含む褐色シルトで埋め戻されている。

〈Ｂカマド〉住居西辺の北部に両側壁と煙道、煙出ピットが残存している。残存するカマド本体は幅約90cm、奥行き約40cmで、左側壁は長さ40cm、高さは10cm、右側壁は長さ35cm、高さ８cm、地山ブロックを多く含む褐色シルト質粘土で構築されている。

燃焼部は床面よりもわずかにくぼみ、底面と両側壁の内側と奥壁が焼けて赤変している。焼面と一部重なるように、カマドの前面に長軸85cm、短軸60cmの範囲に厚さ２cmほどの炭化物や焼土の層が広がっている。その上に焼土ブロックや炭を多量に含むにぶい黄褐色のシルトが堆積している。カマド前面からは側壁の芯材に用いられていたと推定される、長さ15～28cm、幅９～18cmの礫が出土した。

煙道はカマド奥壁より80cm外側に延び、その先に煙出ピットが付設されている。煙道は幅22～25cm、深さ7～10cmで断面は「Ｕ」字形を呈し、地山の傾斜に沿って先端部が高くなっている。

煙出ピットは長軸30cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さは23cmで煙道よりも深くなっている。煙道や煙出ピットには機能中に自然堆積した炭や地山ブロックを多量に含む黒褐色シルトが認められ、煙道にはその上に崩落した天井部と考えられる黄褐色シルトが認められる。

［外周溝］住居の約2.5m南で確認した。２時期あり、どちらも平面形は「ノ」字形、断面形は皿状を呈している。古い溝は長さ5.3m、幅20～45cm、深さ11cmでにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。新しい溝は長さ8.2m、幅35～100cm、深さ18cmで暗褐色シルトが自然堆積している。

［床面の焼面］北辺中央壁際付近で長軸40cm、短軸30cmの焼面が認められた。

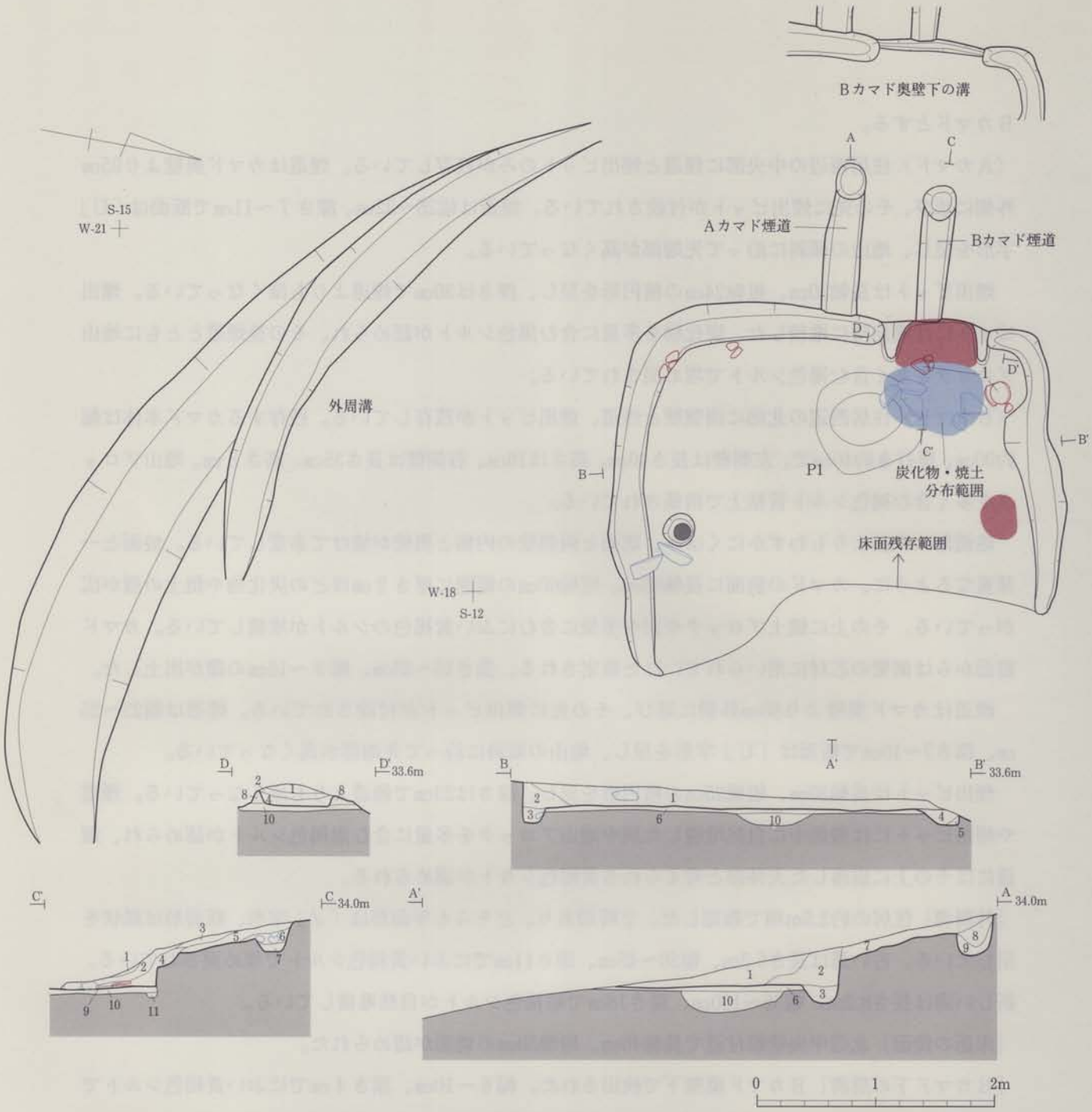
［Ｂカマド下の周溝］Ｂカマド奥壁下で検出された。幅６～10cm、深さ４cmでにぶい黄褐色シルトで埋め戻されており、その上に住居掘方埋土が堆積している。

［その他の施設］西辺のＡカマド推定位置の東側でピットを１個確認した(P1)。長軸90cm、短軸80cm、深さ20cmの楕円形を呈し、にぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。

［出土遺物］Ｂカマドの燃焼部と右脇の床面から、同一個体の非ロクロ調整の土師器甕が出土した(1)。この他、床面の南西隅からも非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。堆積土からは土師器甕、須恵器坏（2）が出土した。須恵器坏は底部が回転ヘラ切り後ナデ調整されている。外周溝の堆積土からは非ロクロ調整の土師器甕（4）、須恵器坏・高台坏（3）、表面に磨面や敲打痕の認められる大型の台石（5）が出土した。

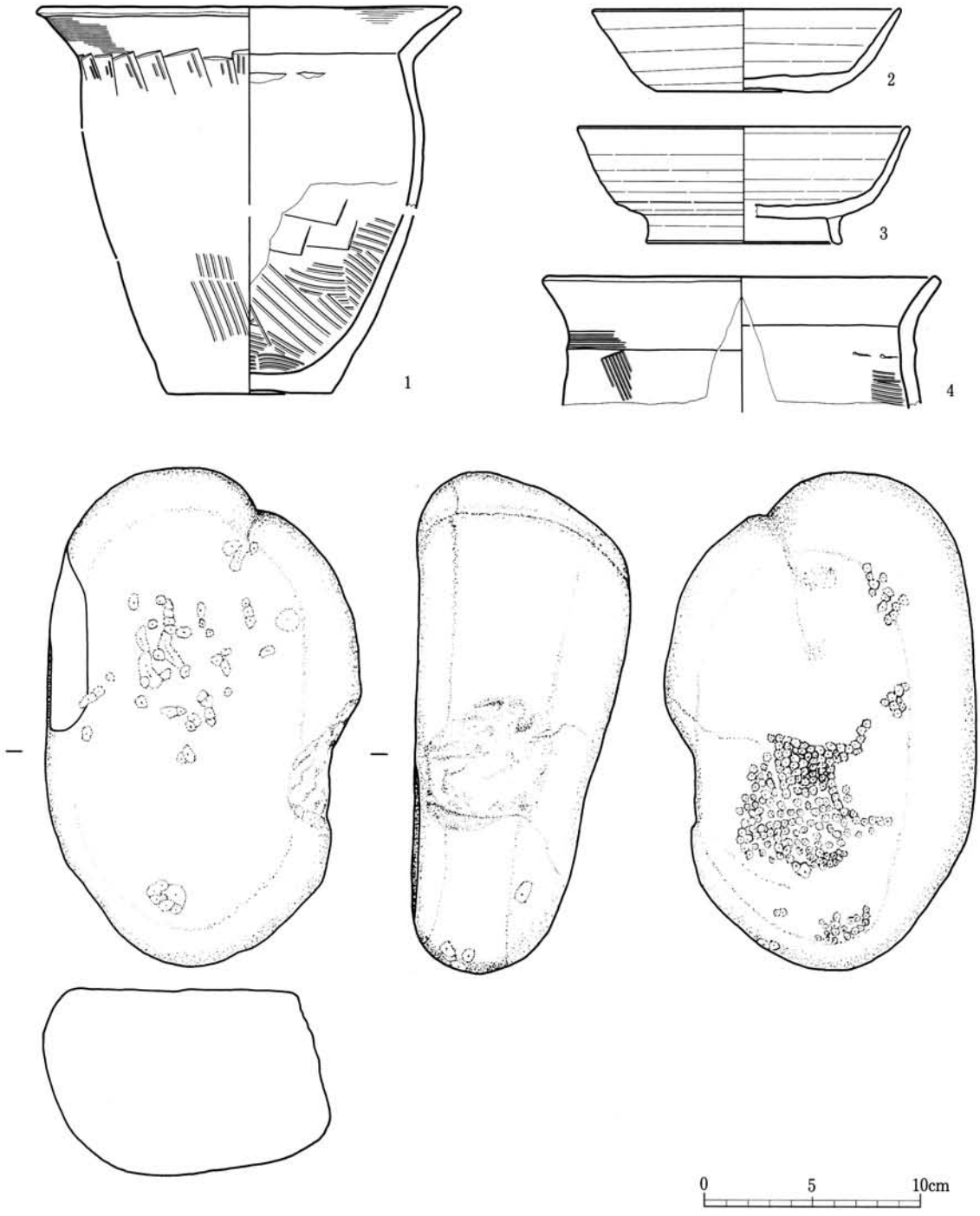
Ｂ　近世の遺構（第１・44図）

近世の主な遺構は、掘立柱建物跡２棟（SB101・102）、柱列１条（SA108）、土壙２基（SK103・109）などである。内容については第４・５表に示した。



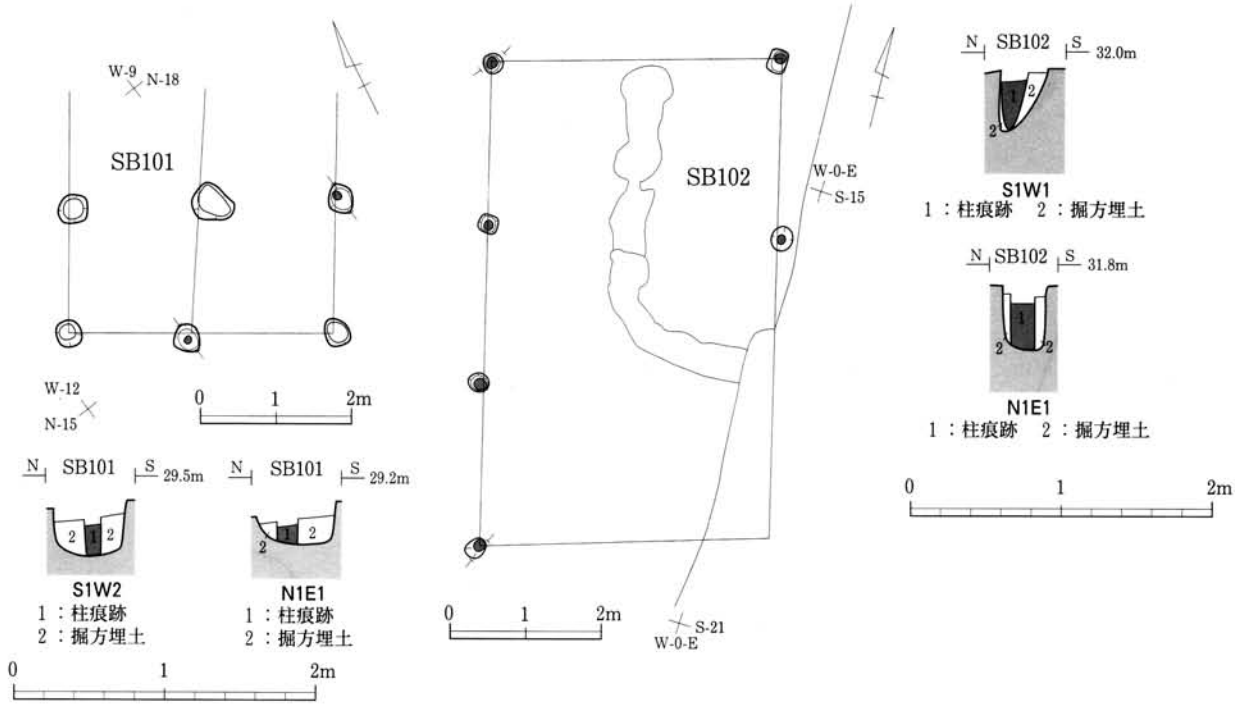
番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SI105A（AA'・BB'）		暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・礫含む・自然堆積
2			にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック含む・自然堆積
3		周溝	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・小礫・地山粒含む・人為堆積
4		周溝	褐色（10YR4/4）	シルト	地山粒含む・人為堆積
5		周溝	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック多量含む・人為堆積
6		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック含む・人為堆積
7	SI105B	煙道堆積土	褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロック粒含む
8		煙出 pit 堆積土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック多量に含む
9		煙出 pit 堆積土	黒色（10YR2/1）	シルト	炭化物を多量に含む
10		P1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山粒含む
1	SI105A（CC'・DD'）		暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・礫含む・自然堆積
2			にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック含む
3		煙道堆積土	黄褐色（10YR5/8）	シルト	地山ブロック含む
4		カマド天井崩落土	にぶい黄褐色（2.5YR4/3）	シルト	地山ブロック・焼土ブロック・炭化物含む
5		煙道堆積土	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山粒・木炭多量含む
6		煙出 pit 堆積土	黒褐色（10YR2/1）	シルト	炭化物多量に含む
7		煙出 pit 堆積土	黒褐色（10YR2/1）	シルト	炭化物多量に含む
8		カマド構築土	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山ブロック多量に含む
9	SI105A	カマド内堆積土	黄褐色（10YR5/6）	シルト	炭化物・地山ブロック含む
10		掘方埋土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック含む
11	SI105B	周溝			壁材痕の底面

第42図　SI105竪穴住居跡

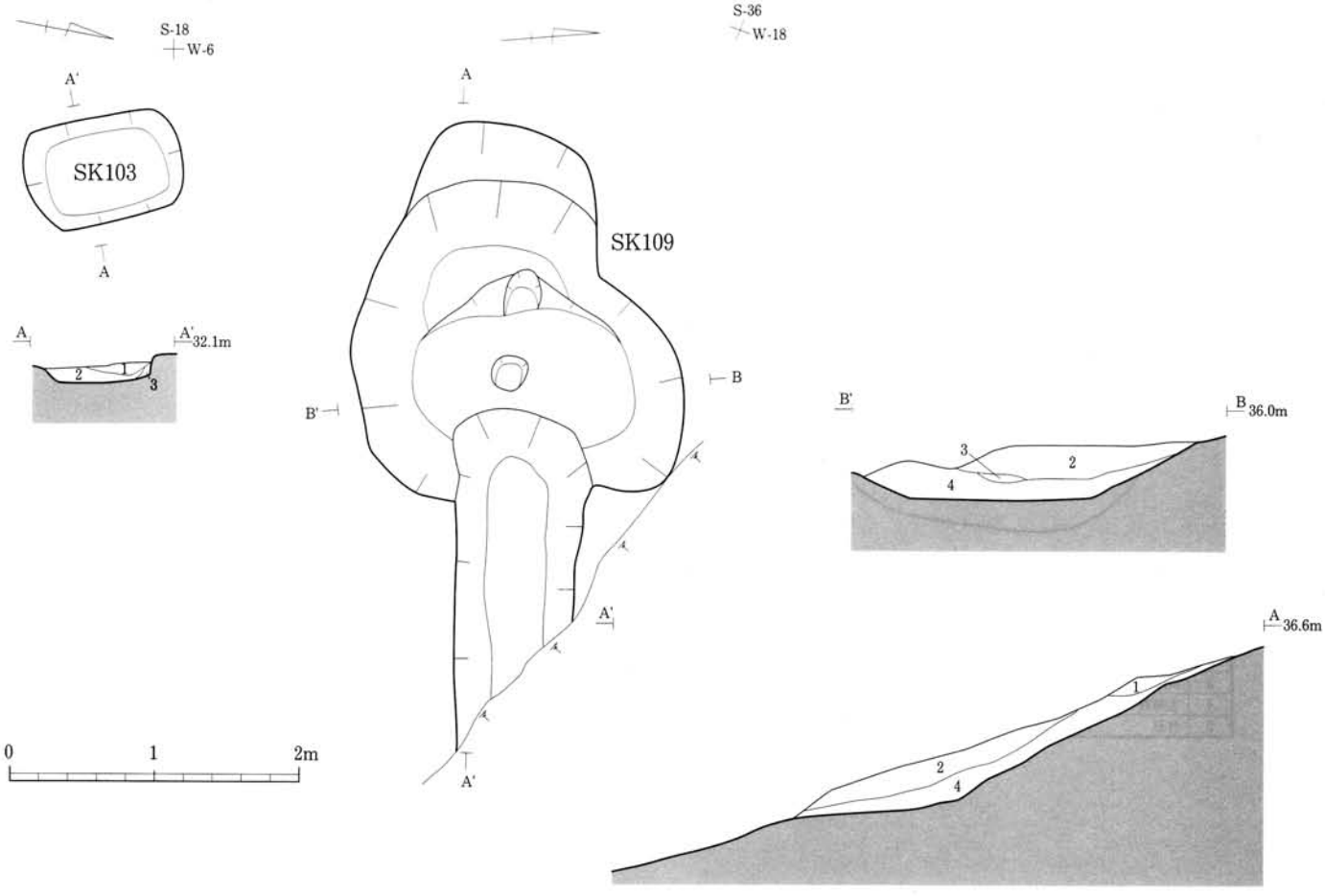


番号	器　　種	層　　位	口径	底径	器高	残存率	特　　徴	写真図版	登録
1	土師器・甕	床直	19.4	7.6	(17.5)	1/2	外面：ヨコナデ→ハケメ　内面：ヨコナデ→ヘラナデ→ハケメ　底部：ナデ？	20－10	SI105－1
2	須恵器・坏	堆　1層	14.1	7.8	3.7	完形	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	20－11	SI105－4
3	須恵器・高台坏	外周溝　堆	(15.2)	(9.0)	5.3	2/3	内外面：ロクロナデ　底部：切離し不明→回転ヘラケズリ→ロクロナデ	20－12	SI105－3
4	土師器・甕	外周溝　堆	(18.2)		(5.7)	口～頸部1/4	外面：ヨコナデ？→ハケメ　内面：ハケメ		SI105－2
5	台石	外周溝　堆					長：22.8cm　幅：13.2cm　厚：8.4cm　重：4300g	22－15	SI105－5

第43図　SI105竪穴住居跡出土遺物



第44図 SB101・SB102堀立柱建物跡



第45図 SK103・SK109土壙

番号	時代	重複	平面形	長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ	断面形	堆　積　土	出土遺物
SK36土壙	古代		楕円形	1.1m	0.7m	10～14cm	箱形	自然	須恵器坏
SK64土壙	古代	SK65土壙より新	隅丸長方形	1.0m	65cm	18cm	皿状	暗褐色粘土質シルト・自然	
SK65土壙	古代	SK64土壙より古	不整円形	径65		34cm	皿状	黒褐色粘土質シルト・自然	
SK54土壙	近世		長楕円形	4.7m	2.0m	2.3m		褐色粘土・黒色土・赤褐色粘土・人為	

第１表　Ⅱ区土壙一覧表

番　号	重複	規模	桁行(m)	梁行(m)	柱間(m)	柱　穴					出土遺物
						平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	
SB27掘立柱建物跡	SI20竪穴住居跡より新・SB37掘立柱建物跡より古	1間×1間	3.2	1.8		楕円形	55～70	45～50	10～23	明黄褐色粘土質シルト	
SB29A建物跡		3間×1間	6.4	3.7	2.0・2.4・2.0	長方形・不整形	80～120	60～90	22～62	暗褐色シルト	
SB29B建物跡		3間×1間	5.6	3.7	1.9・1.8・1.9	長方形・不整形	60～130	40～110	22～59	黒褐色シルト	
SB29C建物跡		3間×1間	5.6	4.4	2.0・2.0・1.6	楕円形・不整形	40～100	32～80	28～64	暗褐色シルト	
SB31A建物跡		4間×1間以上	7.0	2.8	1.8・1.8・1.8・1.8	長方形・不整形	90～95	80	44～53	にぶい褐色～暗褐色シルト	
SB31B建物跡		3間×1間以上	6.2	3.0	2.1・2.0・2.1	不整形	46～72	36～58	22～66	灰黄褐色～にぶい褐色シルト	
SB31C建物跡		4間×1間以上	6.5	2.8	1.5・1.5・1.8・1.7	長方形・不整形	70～106	52～65	27～50	灰黄褐色～暗褐色・黒褐色シルト	土師器甕・須恵器坏・石製円盤
SB58掘立柱建物跡	SE58井戸跡より古	3間×1間	7.0	2.7	4.5・2.5	円形	50～60	18～24	26～86	暗褐色～黒褐色シルト	土師器坏
SB67掘立柱建物跡		2間×1間	4.0	4.0	2.0・2.0	方形	55～60	45～60	21～55	灰黄褐色～褐色シルト質粘土	
SB68掘立柱建物跡		2間×1間	3.6	3.4	1.8・1.8	楕円形	58～78	52～74	9～44	灰黄褐色～褐色シルト質粘土	

第２表　Ⅱ区近世掘立柱建物跡一覧表

番号	時代	重複	方向	長さ	幅	深さ	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SD33溝跡	古代	SD41溝跡より新	N－30°－W	2.2m	20～32cm	7～10cm	U字状	黄褐色シルト質粘土・自然		
SD41溝跡	古代	SB21掘立柱建物跡・SD33溝跡より古	E－23°－S	8.6m	44～72cm	3～15cm	U字状	暗褐色シルト・自然		
SD46溝跡	古代		南北N－35°－W 東西N－27°－E	南北2.6m・東西0.6m	34～76cm	9～31cm	皿状	暗褐色シルト・自然		
SD47溝跡	古代	SI20竪穴住居跡より古	N－22°－E	3.0m	12～42cm	8～12cm	皿状	にぶい黄褐色シルト・自然		
SD48溝跡	古代	SI20竪穴住居跡より古	N－15°－E	2.6m	16～32cm	4～8cm	皿状	にぶい黄褐色シルト・自然		
SD38溝跡	近世			4.4m	24～96cm	8～30cm	皿状	オリーブ褐色シルト・自然	近世陶器	
SD40溝跡	近世	SX39石垣遺構より古		8.0m	32～60cm	1～18cm	皿状	黒褐色シルト・自然	近世陶磁器	
SD42溝跡	近世			16.1m	12～34cm	5～10cm	U字状	明黄褐色シルト・自然		SB37掘立柱建物跡の雨落ち溝
SD43溝跡	近世			南北3.2m・東西2m	12～36cm	4～8cm	U字状	明黄褐色シルト・自然		SB29掘立柱建物跡の外周溝

第３表　Ⅱ区溝跡一覧表

番　号	規模	桁行(m)	梁行(m)	柱間(m)	柱　穴					出土遺物
					平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	堆積土	
SB101掘立柱建物跡	2間×1間以上	3.6	1.8	1.6・2.0	円形・不整形	径36～56		28～35	黄褐色シルト	
SB102掘立柱建物跡	3間×1間以上	3.2	1.9	1.1・1.0・1.1	円形・隅丸方形	径24～26		18～36	黄褐色シルト	
SA108柱列	1間	4.8			楕円形	38～48	24～35	7～18	黄褐色シルト	

第４表　Ⅱ区近世掘立柱建物跡一覧表

番号	時代	平面形	長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ	断面形	堆　積　土	出土遺物
SK103土壙	近世	隅丸長方形	1.1m	0.7m	10～12cm	箱形	褐色～黒褐色粘土質シルト・人為	
SK109土壙	近世	不整形	2.6m	2.2m	8cm		暗褐色シルト・自然	

第５表　Ⅱ区土壙一覧表

V 考 察

1．遺物について

出土遺物には、土師器、須恵器のほかわずかに赤焼土器や縄文土器、石器、近世陶磁器などが認められる。

a．土器

古代の土器には、土師器、須恵器、赤焼土器がある。これらの多くは竪穴住居跡の床面や堆積土中などから出土しているが、図示できた点数は少ない。

比較的多くの土器が出土した遺構には、SI25竪穴住居跡とSK22土壙がある。SI25竪穴住居跡出土土器は、焼失住居跡の床面から一括して出土したものである。また、SK22土壙出土土器は、灰白色火山灰が最上層に堆積し、その下層の人為堆積土の底面からまとまって出土したものである。SI25竪穴住居跡出土土器の土師器は、製作にロクロを使用せず（以下「非ロクロ調整」と記載）、SK22土壙出土土器の土師器は、製作にロクロを使用する（以下「ロクロ調整」と記載）という特徴が認められる。

前者をⅠ群土器、後者をⅡ群土器として、以下、それぞれの特徴を述べる。また、それらと共通する特徴を持つ土器について、遺構単位に記述する。

〈特徴〉

(1) Ⅰ群　SI25竪穴住居跡床面出土土器

○土師器

土師器には坏・鉢・甕がある。

坏は平底で、外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。

鉢は体部上半から口縁部までほぼ真っ直ぐ立ち上がる器形で、口頸部に段を持つものである。口径13.7㎝、器高11.0㎝である。磨滅が著しく調整は不明な点が多いが、口縁部はヨコナデ、体部内面はハケメで調整されている。

甕には、長胴で口縁部に最大径があるものと球胴で胴部中央から上部に最大径があるものがあり、長胴甕には器高が約12㎝の小型のものと、20㎝以上の大型のものがある。いずれも、調整は口縁部の内外面がヨコナデ、外面の体部上半がハケメまたはヨコナデ・ナデ、体部下半が縦方向のヘラケズリで、内面は体部がヘラナデ・ナデで調整されている。

○須恵器

須恵器には、坏・高台坏・蓋・鉢・壺・甕がある。

坏は口径に対する底径の比が大きく（0.55～0.7）、体部下端と底部外周が丸みをもち、体下部から口縁部が直線的に外傾するものである。底部の切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがある。また、回転ヘラケズリで再調整されるものもある。

高台坏は坏部が深く、底部から体部下端が回転ヘラケズリされ、断面方形状で外に開く高台が付けられている。底部の切り離しは不明である。口径が10～12㎝で器高／口径比が0.43～0.49のものと口

径が約17cmと大きく、器高／口径比が0.55のものがある。

蓋はつまみ部が扁平な宝珠形を呈し、口縁部が短く折れ曲がるものである。口径は約15cmである。

鉢は体上部から口縁部が緩やかな「S」字状あるいは「く」字状に外反する。外面の体下部が手持ちヘラケズリされるものと底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリされているものがある。内面はロクロナデ後にナデで再調整されている。

壺は大型で体部が丸みを帯びるものである。頸部内面に接合痕が明瞭に残っており3段接合である。外面はロクロナデされている。

甕には底部が平底のものと丸底のものがある。前者は器高約29cmで、外面は平行叩き後ナデ調整されている。底部はナデ、体部下端は手持ちヘラケズリ調整である。後者には、器高は約32cmで、外面には平行叩き目痕が残るものと、器高約67cmと大型で、外面に平行叩き目痕が残り、底部は手持ちヘラケズリされているものがある。

以上、SI25竪穴住居跡床面出土資料について特徴を列記した。

SI34・SI55・SI105竪穴住居跡およびSB21掘立柱建物跡出土土器は上記のSI25竪穴住居跡出土土器と共通する特徴を持つが、口縁部の形態や口径、調整などに一部違いが認められるので、以下に記述する。

SI34竪穴住居跡出土の土師器鉢は、体部がやや外反しながら立ち上がり、口頸部に段を持ち、口縁部がやや外反する。口径10.8cm、器高7.2cmである。口縁部は内外面ともヨコナデで、体部は内外面ともヘラナデされている。底部はナデ調整である。須恵器蓋はつまみ部が扁平な宝珠形を呈し、口縁部が短く折れ曲がるもので口径が約19cmの大型のものである。

SI55竪穴住居跡出土の須恵器蓋は、つまみ部がやや高い宝珠形を呈し、口縁部がわずかに折れ曲がる。口径は約15cmである。

SI105竪穴住居跡出土の須恵器高台坏は口径が約15cmで坏部が浅く、器高／口径比が0.35である。

また、図示はできなかったが、SB21掘立柱建物跡の柱穴埋土、SI50・SI51B竪穴住居跡周溝堆積土からⅠ群土器と同様の特徴を持つ土師器坏・甕が出土した。

(2) Ⅱ群　SK22土壙出土土器

○土師器

土師器には坏がある。

坏は、体部がやや膨らみながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾する。底部の切り離しは不明で、回転ヘラケズリで再調整されている。器高が高く、器高／口径比が0.44である。

○須恵器

須恵器には坏・鉢がある。

坏は口径に対する底径の比が小さく(0.36～0.46)、体部下端から口縁部が直線的に外傾するもので、底部の切り離しは回転糸切りで、再調整されていないものが主体である。また、器高が6cmを超え、底部が回転糸切り後手持ちヘラケズリで再調整され、内面はヘラミガキされているものもある。

鉢は体上部から口縁部が強く「く」字状に外反する。外面はロクロナデ後に体部下半が手持ちヘラ

ケズリされ、内面はロクロナデ後にナデで再調整されている。

SI23・SI28・SI52竪穴住居跡出土土器は上記のSK22土壙出土土器とロクロ調整という点では共通する特徴を持つが、異なる点なども認められる。

SI23竪穴住居跡出土の土師器甕は、器高が約12cmと小型で、胴上部が直立し、口頸部が「く」字状に外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、再調整されていない。赤焼土器坏は、体部がやや丸みをもって立ち上がり、口縁部は体部から直線的に外傾する。底部は回転糸切り後一部ナデ調整されている。

SI52竪穴住居跡出土の土師器坏は、体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、再調整されていない。器高／口径比が0.36、底径／口径比が0.37である。土師器高台坏は、体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

また、図示はできなかったが、SI20B竪穴住居跡床面直上土からⅡ群土器と同様の特徴を持つ土師器坏・甕が出土した。

〈年代と位置づけ〉Ⅰ群土器は、一昨年度調査が行われた新田東遺跡出土のⅠ群土器に類例が認められる。新田東遺跡Ⅰ群土器の特徴として、非ロクロ調整の土師器坏を主体とする点や、須恵器坏では、体部下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾するという器形を呈し、底部の切り離しが分かるものではヘラ切りで、体部下端から底部が回転ヘラケズリで再調整されているものが多い点、などが挙げられている。これらの特徴は本遺跡の土師器坏、須恵器坏と共通している。新田東遺跡Ⅰ群土器は8世紀第3四半期頃に位置づけられており、本遺跡のⅠ群土器もその頃のものと思われる。

Ⅱ群土器はロクロ調整という点では共通する特徴が認められる。しかし、点数が少ない現時点では、本遺跡Ⅱ群土器の年代は、9世紀頃から灰白色火山灰降灰以前に位置づけるにとどめておきたい。

b．土製品

SI28竪穴住居跡のカマドから出土した土製支脚は、高さ17.0cm、天井部径13.0cm、下端部径11.1cmである。器壁厚は厚いところで2.2cmと厚いが、天井部の厚さは0.7cmとかなり薄くなっている。下端部径が天井部径よりもやや小さく、下端部から天井部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。体部の孔や下端部の切り込みなどは認められない。径2～3cmの粘土紐を、天井部から巻き上げて製作している。内外面に巻き上げ痕を残し、内外面ともにナデの後にオサエ調整されている。

このような特徴をもった土製品は、県内では類例がなく、秋田県にわずかに類例が認められる。秋田県の土製支脚を集成・分類した柴田陽一郎の分類による円筒形土製支脚AⅡ類c1種は、本遺跡出土資料と類似しており、秋田城跡や払田柵跡からの出土で9世紀中頃から10世紀前半に位置づけられている（柴田1993）。

2．遺構について

古代の遺構は、Ⅱ区では竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟、土壙4基、溝跡5条、焼土遺構1基など、Ⅲ区では竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、柱列1条、溝跡1条などである。近世の遺構は、Ⅱ区では掘立柱建物跡7棟、井戸跡1基、石垣1条、土壙1基、溝跡4条など、Ⅲ区では掘立柱建物

跡2棟、柱列1条、土壙2基などである。以下では、Ⅱ区とⅢ区をまとめて、古代と近世の遺構について若干の考察を加える。

a．古代の遺構

(1) 遺構群の設定と年代

古代の遺構では以下のものに重複関係が認められる。

SI20A→SI20B

SI24→SK22

SI50→SI25→SI28

SI51A→SI51B

SI55→SI60

堆積土中に灰白色火山灰が認められた遺構は、SI23・25・28・50・52竪穴住居跡、SK22土壙である。

出土土器から時期が推定できる遺構には以下のものがある。

Ⅰ群［8世紀後半］…SI25・SI34・SI55・SI60・SI105竪穴住居跡

Ⅱ群［9世紀頃～灰白色火山灰降灰以前］…SI23・SI28・SI52竪穴住居跡、SK22土壙

SI50・SI51B竪穴住居跡、およびSI20B竪穴住居跡は出土遺物が少なく、年代を決定する資料に乏しいが、少量の土器から判断すると、前者はⅠ群に、後者はⅡ群に位置づけられる可能性がある。

SI20A・SI24・SI44・SI51A竪穴住居跡は出土遺物がほとんどなく、遺物からの時期決定はできない。

また、SB21掘立柱建物跡の柱穴や平坦面の直上、堆積土などからはⅠ群土器しか出土していない。これらの北側に位置する斜面の上部には、Ⅱ群土器の出土したSI20B竪穴住居跡や近世の遺構も分布している。しかし、Ⅰ群土器よりも新しい時期の遺物は一切含まれていないことから、SB21掘立柱建物跡はⅠ群の時期に含まれると考えられる。

以上をまとめると次のようになる

8世紀後半（A期）	9世紀頃～灰白色火山灰降灰以前（B期）
	SI24→SK22
SI50→SI25 ―――→	SI28
SI55→SI60	
SB21	SI23
SI34	SI52
SI105	
(SI51A→SI51B)	
	(SI20A→SI20B)

切り合いから時期が推定されるものとして、SI50竪穴住居跡（Ⅰ群以前）、SI24竪穴住居跡（Ⅱ群以前）がある。

以上より、古代の遺構はA期（8世紀後半）、B期（9世紀頃～灰白色火山灰降灰以前）の2時期に分けられる。

(2) 竪穴住居跡の特徴

時期ごとの竪穴住居跡の特徴を第6表に示した。

A期の竪穴住居跡は一辺が3～4mのものが主体を占め、一辺7mを超える大型のものが1軒（SI34）のみ認められる。カマドの方向は、北、北東、南東、西など一定ではない。カマドが残存している4軒中3軒（SI34・55・60）で側壁の芯材に礫を用いている。またカマド奥壁下の溝に蓋をするように礫が置かれたり（SI34・55）、煙道のカマド寄りの底面に礫が敷かれる例（SI55・60）もそれぞれ2軒に認められる。周溝は1軒（SI60）を除いたすべてのものに認められ、壁材痕跡も2軒（SI25・55）に認められた。

B期の竪穴住居跡は一辺2～4mのものがほとんどで、B期と推定されるSI20B竪穴住居跡のみが一辺6mを超えるが、A期に比べて小さい傾向がある。カマドは南東辺もしくは南辺に設けられることが多く、カマドが残存している3軒（SI23・28・52）はすべての側壁の芯材に礫が用いられている。煙道に礫が蓋をするように用いられているものが1軒（SI23）に認められ、地山を刳り抜いた煙道ではなかったことが分かる。周溝はすべてに認められるが、壁材痕跡は検出されなかった。また、周溝が壁際を巡らず、カマドの前面を通るものが2軒（SI23・28）に、周溝以外にカマド前面を通る溝も1軒（SI52）に認められる。カマド前面の溝には、カマド付近にのみ蓋をするように礫が置かれている。外延溝は3軒（SI20B・23・52）で確認され、南もしくは南西隅から延び、溝の壁を護るように礫が据えられているものも1軒（SI20B）に認められた。

A、B期共通している特徴として、カマド及びそれに付属する施設に礫を多用している点が挙げられよう。新田東遺跡の竪穴住居跡では、B期（8世紀第3四半期頃）はカマドが残存するもの7軒中5軒、C期（9世紀後葉～10世紀中葉）はカマドが残存するもの3軒すべてで礫を使用している。本遺跡の南西約4kmに位置する河南町須江丘陵上に立地する遺跡群においてもカマドに礫を使用する例が認められる。しかし、礫を用いる例は、8世紀中葉～後葉の関ノ入遺跡では、カマドが残存するもの10軒中3軒であり本遺跡程の高い比率ではない。礫の使用率の高い遺跡は、現時点では本遺跡や新田東遺跡の位置する河北町から桃生町にかけての地域に多くみられるようである。

住居No.	群	規模（東西×南北）	主柱穴（本）	カマド					煙道			周溝				外延	
				有無	方向	側壁礫使用	奥壁下溝	礫敷	有無	礫蓋	礫敷	有無	壁材痕	カマド前溝	礫蓋	有無	礫使用
SI25	Ⅰ	5.6 × 6.8	4	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	?	?
SI34	Ⅰ	7.3 × 7.3	4	○	北	○	○	×	○	×	×	○	×	×	×	?	?
SI55	Ⅰ	4.9 × 4.3	0	○	南東	○	○	○	○	?	○	○	○	×	×	?	?
SI60	Ⅰ	3.3 ×(2.0)	0	○	北東	○	×	?	○	?	○	×	×	×	×	?	?
SI105	Ⅰ	(3.1)× 3.8	0	○	西	×	×	×	○	?	×	○	×	×	×	?	?
SI50	＜Ⅰ	3.2 × 4.2	0	?	?	?	?	?	?	?	?	○	×	?	?	?	?
SI51A	＜Ⅰ	(2.8)×(3.8)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	○	×	?	?	?	?
SI51B	＜Ⅰ	3.8 ×(3.5)	4	○	南東	?	×	×	?	?	?	○	×	×	×	?	?
SI20B	Ⅱ	6.1 × 6.0	4	?	?	?	?	?	?	?	?	○	×	×	×	○	○
SI23	Ⅱ	3.2 × 3.0	1	○	南東	○	×	×	○	○	×	○	×	○	○	○	×
SI28	Ⅱ	3.6 × 3.6	0	○	南東	○	×	×	○	×	×	○	×	○	○	?	?
SI52	Ⅱ	4.0 × 4.6	2 ?	○	南東	○	○	○	○	?	×	○	×	○	○	○	△
SI20A	＜Ⅱ	(3.7)× 6.4	?	焼面のみ	西	?	?	?	△	?	?	○	×	?	?	○	?
SI24	?	2.2 × 2.2	0	○	南	○	×	○	○	?	?	○	×	×	×	○	○
SI44	?	(0.6)×(3.4)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	○	×	?	?	?	?

第6表　竪穴住居跡属性表

(3) SB21掘立柱建物跡について

Ⅱ区で検出されたSB21掘立柱建物跡は、東西3間、南北が西妻2間、東妻3間の東西棟である。大きさは東西6.5m、南北5.3mで、柱穴の掘方が長軸60～80㎝、短軸50～70㎝、深さが84～94㎝、柱痕跡は直径14～25㎝である。東妻中央2本の柱穴は、長軸1.15～1.35m、短軸65～70㎝の隅丸長方形や長楕円形を呈し、外側が浅く、建物の中心側が深くなるように段掘りされている。

柱間に認められた溝は柱痕跡と重複し、柱穴の掘方埋土よりも新しく、柱痕跡よりも古い。溝は柱を立てた後に掘られている。このような溝は柱筋溝状遺構と呼ばれ、壁材の据え付け痕跡あるいは抜き取り痕跡と捉えられている（奈文研2003）。当掘立柱建物跡では、幅20～34㎝、深さ16～20㎝の掘方に、幅13～20㎝の壁材を埋めて据えていたと考えられる。

柱痕跡や柱間の溝の壁材痕跡から多量の焼土塊や炭化物が検出されたことから、当建物は火災にあったと思われる。

SB21掘立柱建物跡は、平面形が東西12.7m、南北3.7m以上の台形を呈する平坦面に建てられている。平坦面の壁は緩やかに立ち上がり、壁際には浅い周溝が巡っている。同様な例は、河南町関ノ入遺跡、須江糠塚遺跡などで認められる。いずれも傾斜地に立地しており、幅5～12m前後、高さ数10㎝の緩やかな壁を持つ竪穴部分に、壁に沿って柱痕跡のある柱穴が一列に並んでいる。おおむね古代に位置づけられており、年代が特定できるものでは、8世紀後葉から9世紀初頭に位置づけられているものもある。関ノ入遺跡5号竪穴遺構は幅9.28mで壁は緩やかに立ち上がり、東壁際に深さ2～9㎝、幅20～24㎝の周溝が巡るが、南北の壁際では周溝は80㎝前後離れて壁と平行している。そして東壁に沿って4本からなる長さ5.7mの柱列が認められる。このように、規模、構造、年代ともに本遺跡と類似している。

(4) SI25竪穴住居跡について

〔土葺き屋根について〕A期のSI25竪穴住居跡は焼失住居跡である。床面上には、炭化材、焼土塊を大量に含む暗赤褐色シルトが、床面中央部で4～6㎝、壁際で9～13㎝、平均9㎝の厚さで堆積していた。同時期の新田東遺跡の焼失住居跡であるSI8・34D竪穴住居跡では、床面の上に焼土塊・焼土・炭片・小礫片を多量に含む層が、壁際で20～25㎝、中央部で3～12㎝の厚さで堆積し、この層は屋根に葺かれていた葺土と推定されている。これらと当竪穴住居跡の暗赤褐色シルト層は特徴が類似している。したがって、当竪穴住居跡の暗赤褐色シルト層は葺かれていた葺土が火災とともに崩れ落ちたものと推定される。

〔床面の土器〕床面からは焼失時の状態を保ったままで土師器9点、須恵器13点の合計22点の土器が出土した。土師器は北東辺の中央部に、須恵器は東隅に集中し、それぞれ集中域が明確に異なっている。集中域の接点に位置する土師器甕内の口縁部付近から須恵器坏と重なって出土した1点の坏を除いて、土師器はすべて鉢・甕である。須恵器は高台坏・蓋・鉢・甕が2～3点ずつそれぞれまとまっており、やや離れたところに坏と甕が1点ずつ分布する。

土師器・須恵器を食膳具（土師器坏、須恵器坏・高台坏・蓋）、煮沸具（土師器甕）、貯蔵具（土師器鉢、須恵器鉢・壺・甕）に分けると、それぞれ8点（36%）、7点（32%）、7点（32%）となる。床

A期の遺構　　B期の遺構

第46図　各期の遺構

面が良好に残存していない本住居跡では、厳密な検討はできないが、貯蔵具の高い比率は指摘できるであろう。

〔大甕据え用ピット〕 床面東隅には、器高約69㎝、最大径約59㎝の須恵器大甕が、器体の約1/3を埋めるように円形のピットに据えられていた。床面の隅にピットなどの施設を設けて大甕を据えた例として伊治城跡第1次調査SI04竪穴住居跡、第2次調査SI12・13竪穴住居跡が挙げられる。当該竪穴住居跡では、カマドの対辺の西隅（SI04）、あるいはカマド右脇の床面北東隅（SI12・13）に、周囲を土手状の粘土で盛り上げた直径60㎝の大甕据え穴が検出されている。同様なピットは古川市名生館官衙遺跡などにも類例が認められる。いずれも時期は8世紀後半頃に位置づけられており、伊治城跡では、やや大型の竪穴住居跡に伴う傾向性があるという。本遺跡竪穴住居跡と年代的に一致した特徴が認められる。本遺跡竪穴住居跡では、大甕のすぐ脇からは須恵器高台坏などが出土していることから、周囲に大甕を据えるための土を盛ってはいなかったと推定され、上記例とは若干の相違点も認められる。

以上のように、SI25竪穴住居跡は焼失住居であり、土葺き屋根であったことが分かった。また、床

面出土土器では、貯蔵具の比率が高い点や、床面の隅に大甕を据えるためのピットが設けられている点など、注意すべき部分が指摘できた。

〔集落の構成〕各時期ごとの分布図を第46図に示した。

A期の遺構はⅡ区とⅢ区にB期の遺構はⅠ区、Ⅱ区に分布している。

A期とB期の間に位置づけられる遺構・遺物は認められず、古代の中でも一時期、空白の時期がある。

A期のSI25竪穴住居跡には、他の竪穴住居跡とは様相の異なった構造や遺物出土状況が認められる。また、SB21掘立柱建物跡には壁が構築されていたことも確認できた。どちらも火災に遭っていることも注意すべき点であり、当該期における集落内の、一般的なものとはやや様相の異なる建物の一端が明らかとなった。

A、B期ともにⅡ区に多くの遺構が集中しているが、分布密度は決して高いものではない。しかし、16軒検出された竪穴住居跡の中で9軒が重複している。当遺跡は傾斜地に立地しており、平坦地と比較して竪穴住居を構築する際の労働量はかなり大きいものと推定される。重複する遺構は、従前の竪穴住居跡の掘り込みを有効利用するという、傾斜地特有のあり方を示していると思われる。

b．近世の遺構

近世の掘立柱建物跡は9棟検出されているが、その中でもSB29・SB31・SB37掘立柱建物跡はいずれも柱穴の掘方が1m前後と大型である。

特にSB37掘立柱建物跡は桁行の長さは18.1mで、本遺跡の遺構の中でも、もっとも高い場所に位置し、規模も大きい。SB37掘立柱建物跡は、上屋柱と、その周りを囲む下屋柱からなる。上屋柱は掘方や柱痕跡が深く大きいのに対して、下屋柱は規模が小さい。また、上屋柱の北側柱列が一列に並ばず、東側2本の柱が外側に張り出して下屋柱と並んでいる。上屋柱の内側には間仕切りの柱穴が認められる。上屋の柱穴掘方埋土からは、宗教的な意味で意図的に入れられたと思われる寛永通宝が5枚出土した。この中にはいわゆる古寛永と新寛永があることから、本遺構の年代は17世紀後半以降である。

平面形態や規模は、近世仙台藩領であった岩手県平泉町泉屋遺跡、志羅山遺跡の近世掘立柱民家を分析した羽柴直人によるC類に類似している(羽柴1997)。C類は掘立柱民家の中でも柱配置が複雑になり、間取りが定形化してくるもので、礎石民家へと移行する時期の直前に現れるという。その時期は17世紀末頃で、礎石民家が現れるのが18世紀後半から19世紀前半とされる。これは17世紀後半以降と推定される本掘立柱建物跡の年代と整合的である。

平面形態や規模、位置などから推定すると、このSB37掘立柱建物跡が母屋であり、SB29掘立柱建物跡やSB31掘立柱建物跡などは納屋などの建物であったと思われる。これらに、石垣や井戸跡などが伴うかは、遺物などからは判断できなかった。しかし、遺構の配置から判断すると、同一の屋敷内に存在したものの可能性が考えられよう。

Ⅵ　まとめ

沢田山西遺跡からは、これまでの３カ年にわたる調査によって、竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡14棟、井戸跡１基、土壙11基、溝跡13条、石垣１条、焼土遺構１基などが検出された。遺物は古代を中心に縄文時代と近世のものが認められた。古代の遺構は大きくＡ期・Ｂ期の２時期に分けられる。Ａ期（８世紀後半）は竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡１棟、Ｂ期（９世紀頃～灰白色火山灰降灰以前）は竪穴住居跡７軒、柱列１条、土壙１基などである。

Ａ期とＢ期には間隙があるが、どちらの時期の竪穴住居跡にも、カマドなどには礫を多用するという共通する特徴が認められた。

Ａ期にはSI25竪穴住居跡やSB21掘立柱建物跡のように、特徴的な遺構が存在し、当該期における本遺跡の性格を考える上で重要な点と考えられる。

Ｂ期の竪穴住居跡にはすべてに外延溝が認められるなど、傾斜面における竪穴住居跡の画一的なあり方が把握できた。

古代の遺構が立地するのは緩斜面あるいは傾斜面で、特にⅡ区にあたる南斜面に集中する傾向性が認められる。傾斜の比較的緩やかなⅠ・Ⅲ区にも遺構は分布するが、それらよりも傾斜のあるⅡ区に集中するということは、傾斜の角度よりも南向きという条件を優先して選地していたことが伺われる。そのため、同じ場所で竪穴住居を建て替えたり、以前の竪穴住居の窪みを利用して後世に竪穴住居を新たに建てることなどが繰り返されたことが、重複する竪穴住居跡の様子からも見て取れる。また同じ場所には、丘陵の一部を切り崩すなどの大規模な土木工事を伴って近世の遺構や現代の住居が存在する。

今回の調査は、居住に適した平坦面の少ない北上川下流域における、古代から現代に至る土地の利用方法の一面を示したものといえよう。

〈引用・参考文献〉

河南町教育委員会　1987　『須江糠塚遺跡』　河南町文化財調査報告書第１集

河南町教育委員会　1993　『須江窯跡群　代官山遺跡』　河南町文化財調査報告書第６集

河南町教育委員会　1993　『関ノ入遺跡』　河南町文化財調査報告書第７集

柴田陽一郎　1993　「秋田県内における土製支脚について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第８号pp.44～71

瀬峰町教育委員会　1983　『大境山遺跡』　瀬峰町文化財調査報告書第四集

奈良文化財研究所　2003　『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』

羽柴直人　1997　「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について　－泉屋遺跡、志羅山遺跡の事例を中心に－」『紀要ⅩⅦ』pp.41～60　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

宮城県教育委員会　1978　「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集

宮城県教育委員会　1982　「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第83集

宮城県教育委員会　2001　『沢田山西遺跡』宮城県文化財調査報告書第189集

宮城県教育委員会　2003　『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第191集

宮城県多賀城跡調査研究所　1978　『伊治城跡Ⅰ』

宮城県多賀城跡調査研究所　1979　『伊治城跡Ⅱ』

宮城県多賀城跡調査研究所　1982　『名生館遺跡Ⅱ』

遺跡遠景（北から）

調査区全景
（崎山B遺跡含む・
右が北）

Ⅰ・Ⅱ区北側全景
（右が北）

図版 1

II区北側全景（下が北）

II区全景（南から）

II区全景（南東から）

II区全景（西から）

図版 2

SB21掘立柱建物跡
（南から）

左：SB21掘立柱建物跡
NIWI柱穴断面
右：SB21掘立柱建物跡
S2E 1 柱穴断面

SI20竪穴住居跡
SB27掘立柱建物跡
（北東から）

図版 3

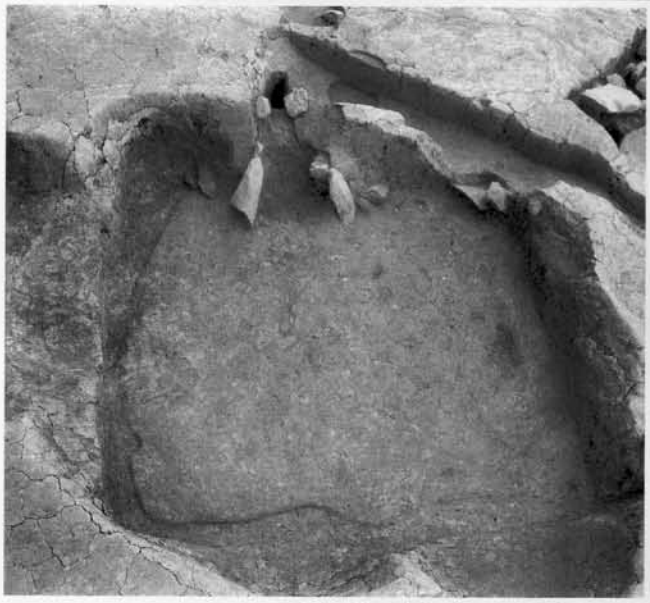
SI20竪穴住居跡
SB27掘立柱建物跡

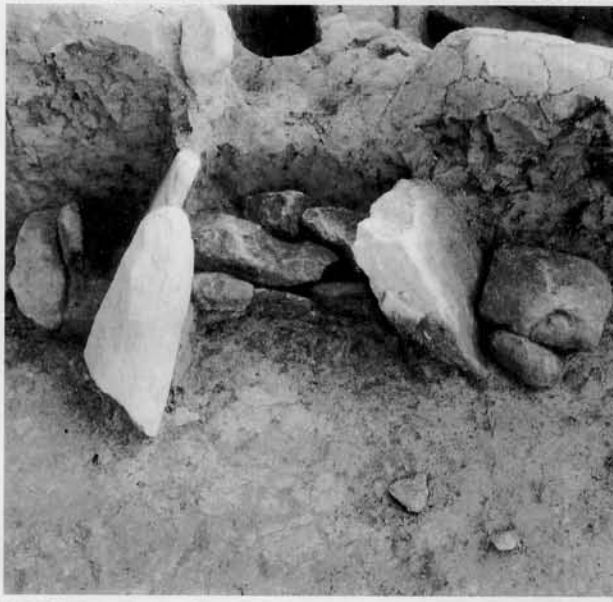
SI23竪穴住居跡
（西から）

左：SI23竪穴住居跡
完掘状況
右：SI23竪穴住居跡
カマド近接
（西から）

図版 4

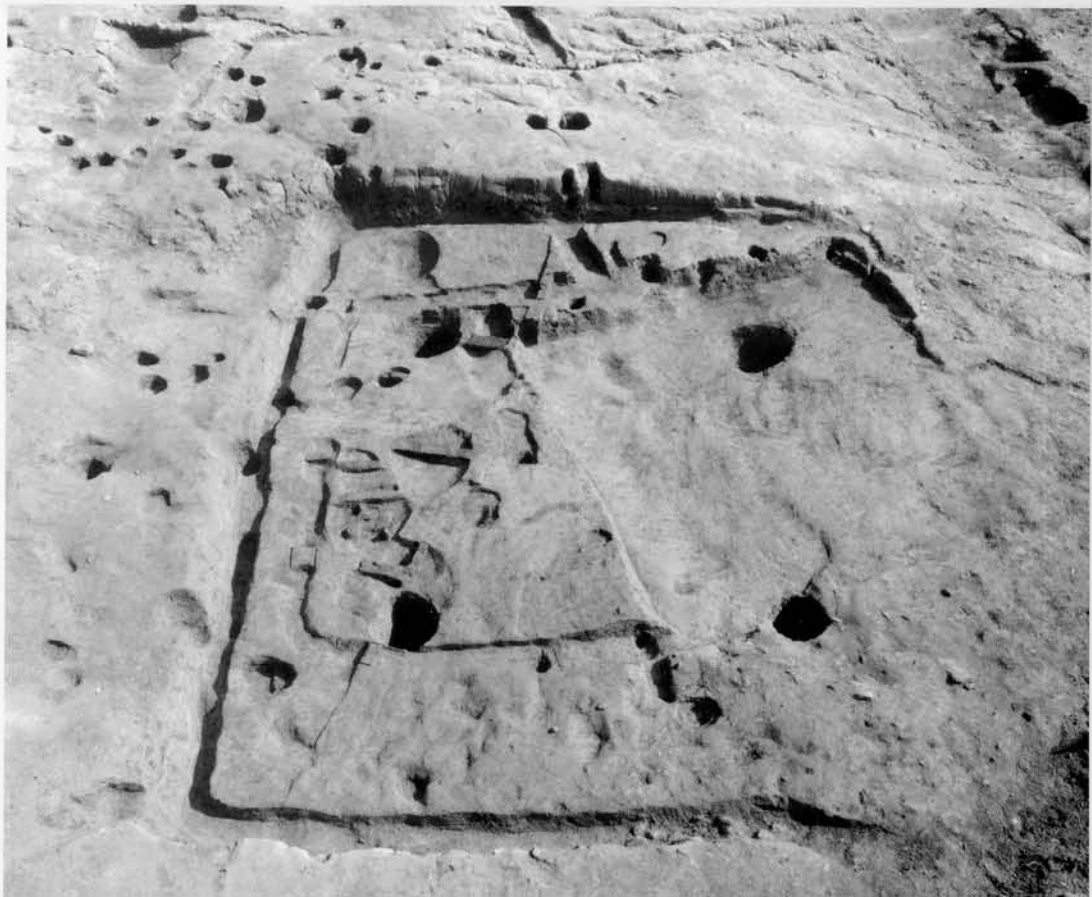
SI24竪穴住居跡



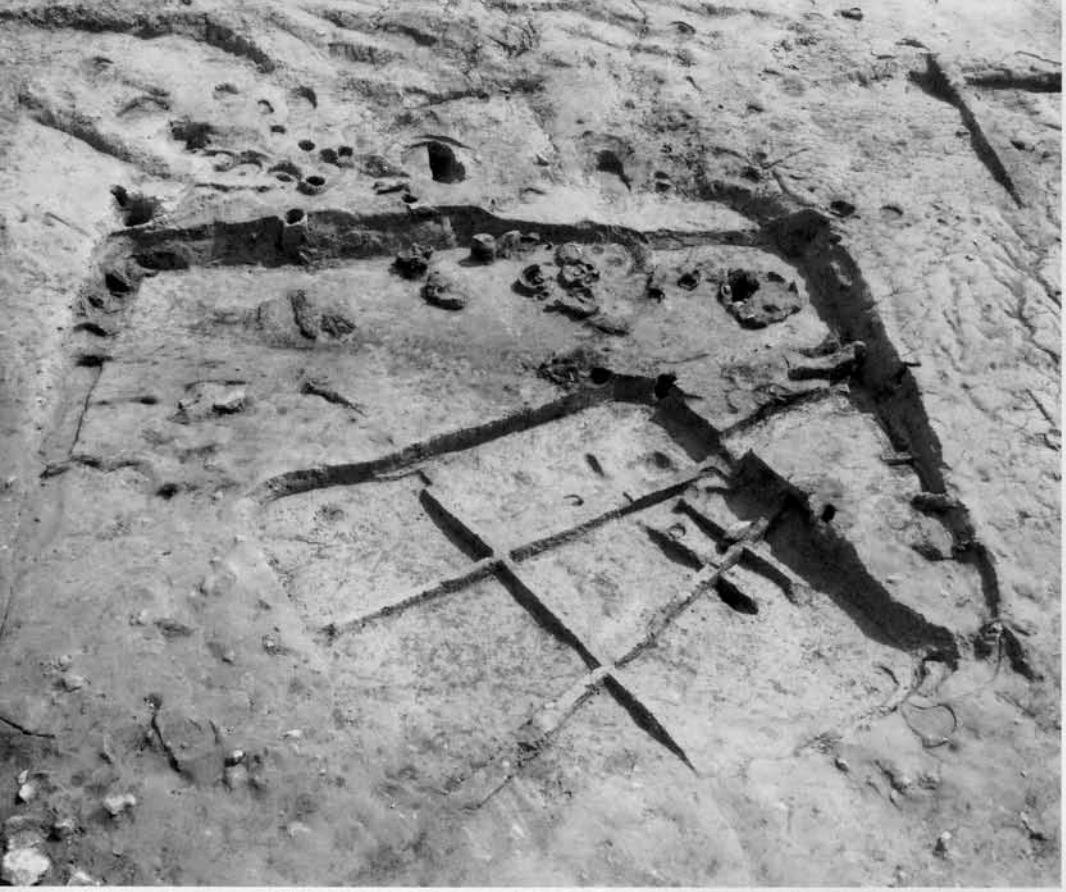


左：SI24竪穴住居跡
（北東から）
右：SI24竪穴住居跡
カマド近接
（北東から）

SI25・28・50竪穴住居跡
（北西から）



図版 5



SI25・28竪穴住居跡
（南西から）

左：SI25竪穴住居跡
床面遺物出土状況
（南西から）
右：SI25竪穴住居跡
床面大甕出土状況
（西から）

SI25・28竪穴住居跡
完掘状況

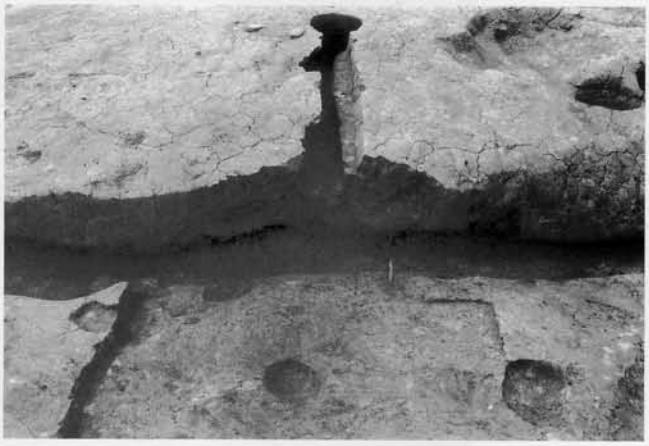
SI28竪穴住居跡
（西から）

SI28竪穴住居跡
鉄製鋤先出土状況

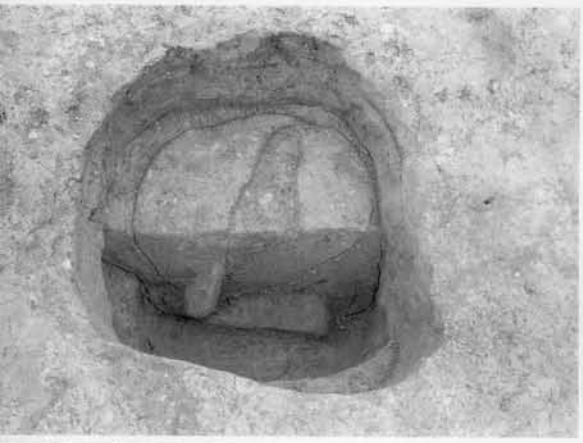
SI34竪穴住居跡
（南から）

図版 7

左：SI34竪穴住居跡
カマド遺物出土状況
右：SI34竪穴住居跡
カマド完掘状況



左：SI34竪穴住居跡
カマド側壁基部下面
の礫検出状況
右：SI34竪穴住居跡
カマド奥壁下の溝
検出状況



左：SI34竪穴住居跡
P1断面
（南から）
右：SI34竪穴住居跡
炭化材・遺物出土状
況（北から）

SI51竪穴住居跡
（西から）

図版 8

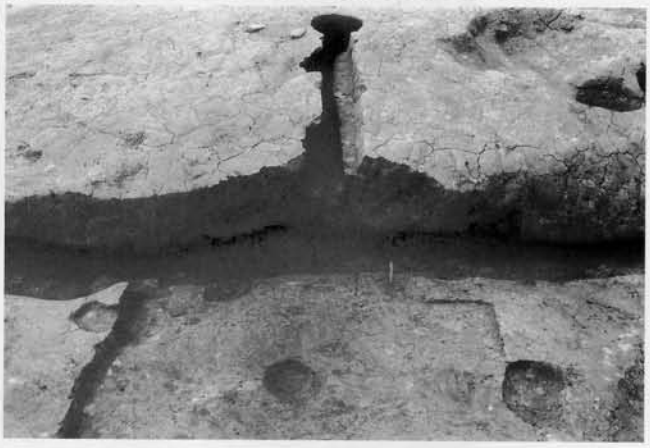
SI28竪穴住居跡
（西から）

SI28竪穴住居跡
鉄製鋤先出土状況

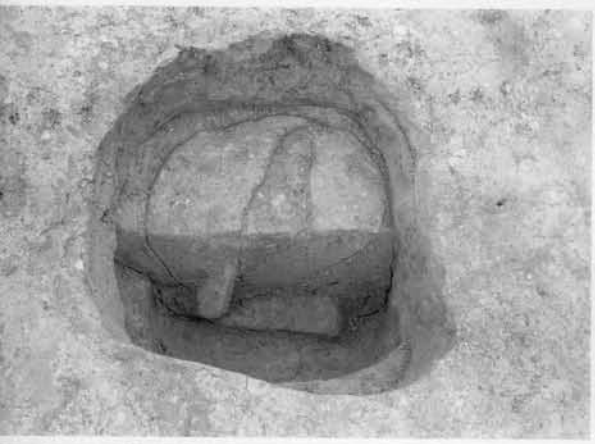
SI34竪穴住居跡
（南から）

図版 7

左：SI34竪穴住居跡
カマド遺物出土状況
右：SI34竪穴住居跡
カマド完掘状況



左：SI34竪穴住居跡
カマド側壁基部下面の礫検出状況
右：SI34竪穴住居跡
カマド奥壁下の溝検出状況



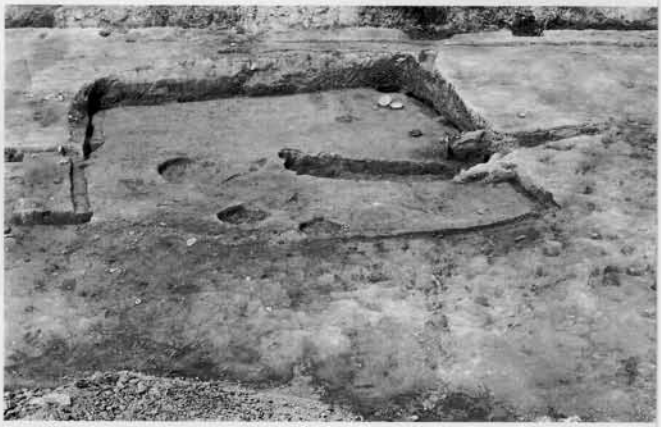
左：SI34竪穴住居跡
P1断面
（南から）
右：SI34竪穴住居跡
炭化材・遺物出土状況（北から）

SI51竪穴住居跡
（西から）

図版 8

SI52竪穴住居跡
（北西から）

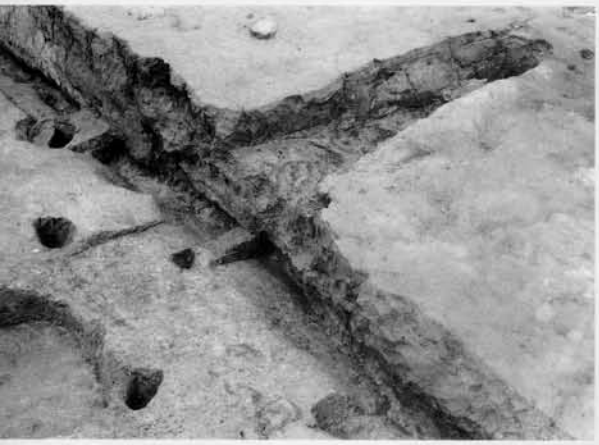
左：SI52竪穴住居跡
カマド近接
（北西から）
右：SI55竪穴住居跡
（南から）



SI55竪穴住居跡
（西から）

図版 9

左：SI55竪穴住居跡
カマド近接
（西から）
右：SI55竪穴住居跡
カマド炊き口、奥壁
下の礫検出状況



左：SI55竪穴住居跡
カマド奥壁下の溝検
出状況
右：SI60竪穴住居跡
カマド近接
（南西から）

SI60竪穴住居跡
（南西から）

左：SX32焼土遺構
（西から）
右：SK22土壙
（南西から）

II区北側全景
（左上が北）

左：SB29掘立柱建物跡
（北東から）
右：SB31掘立柱建物跡
（南西から）

左：SB37掘立柱建物跡
（北東から）
右：SB67掘立建物跡
（南から）

左：SB68掘立柱建物跡
（南から）
右：SE52井戸跡
（東から）

図版11

左：SX39石垣
（南東から）
右：SK54土壙
（北西から）

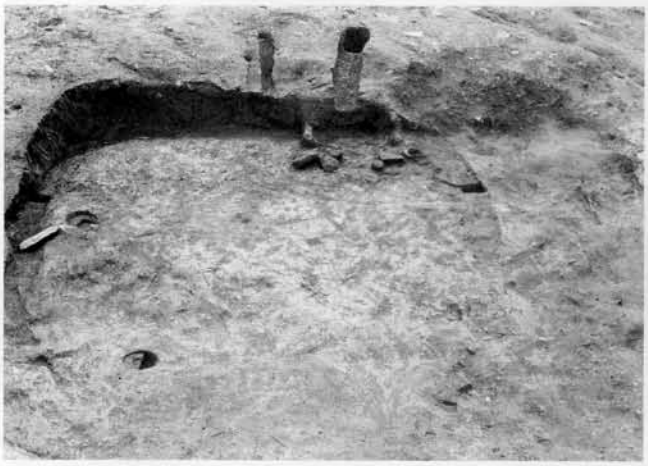
III区遠景
（II区から）

III区全景
（東から）

図版12

SI105竪穴住居跡
（東から）

左：SI105竪穴住居跡
（東から）
右：SI105竪穴住居跡
カマド近接
（東から）

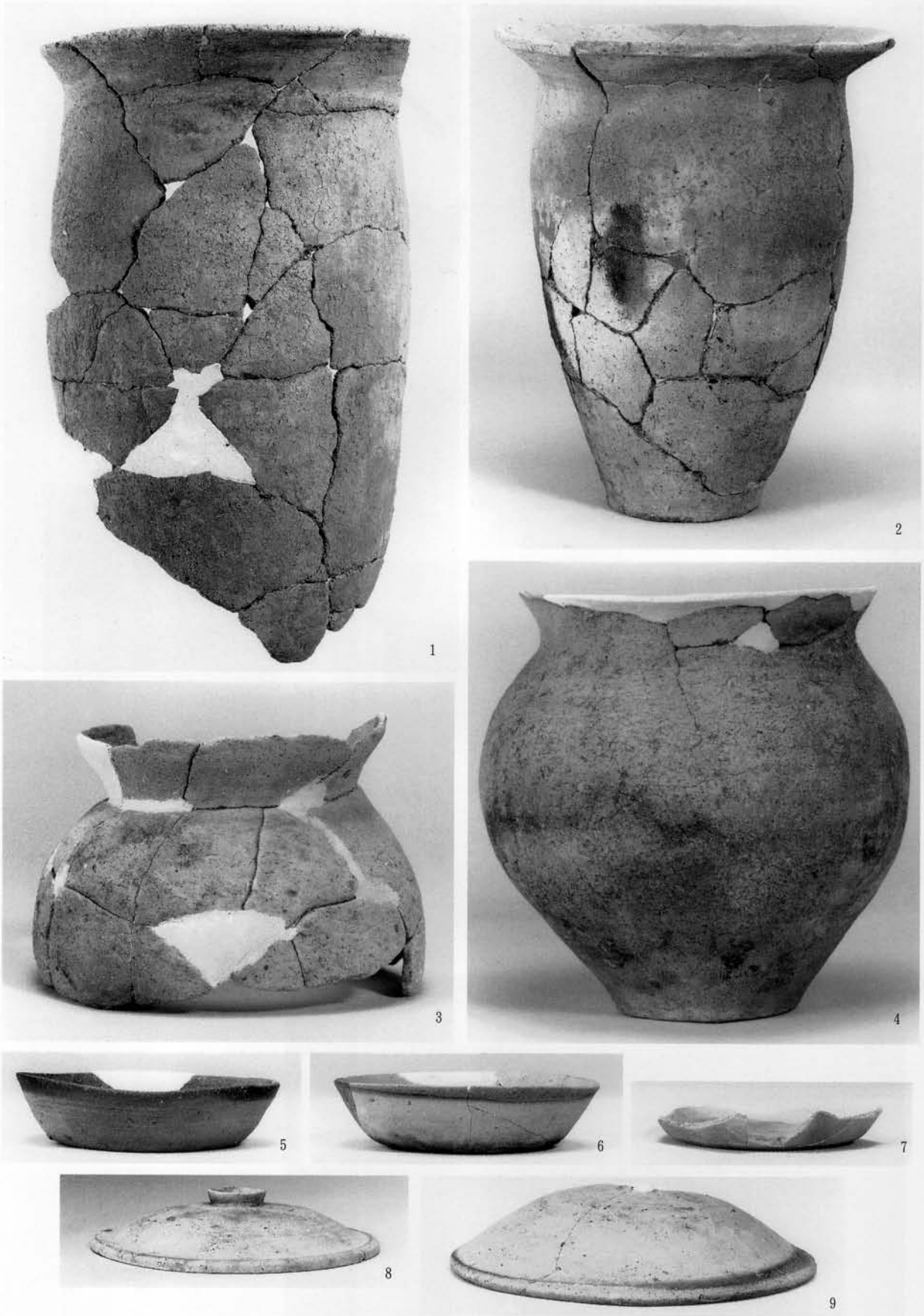


SB104掘立柱建物跡
（東から）

左：SB101掘立柱建物跡
（北東から）
右：SB102掘立柱建物跡
（北から）

図版13

1：4－1（挿図番号－挿図内番号）　2：4－2　3：4－3　4：4－9　5：4－4　6：4－10　7：4－12　8：7－2　9：7－1
10：7－3　11：11－1　12：11－3　13：11－2　14：11－5（縮尺：1/3）

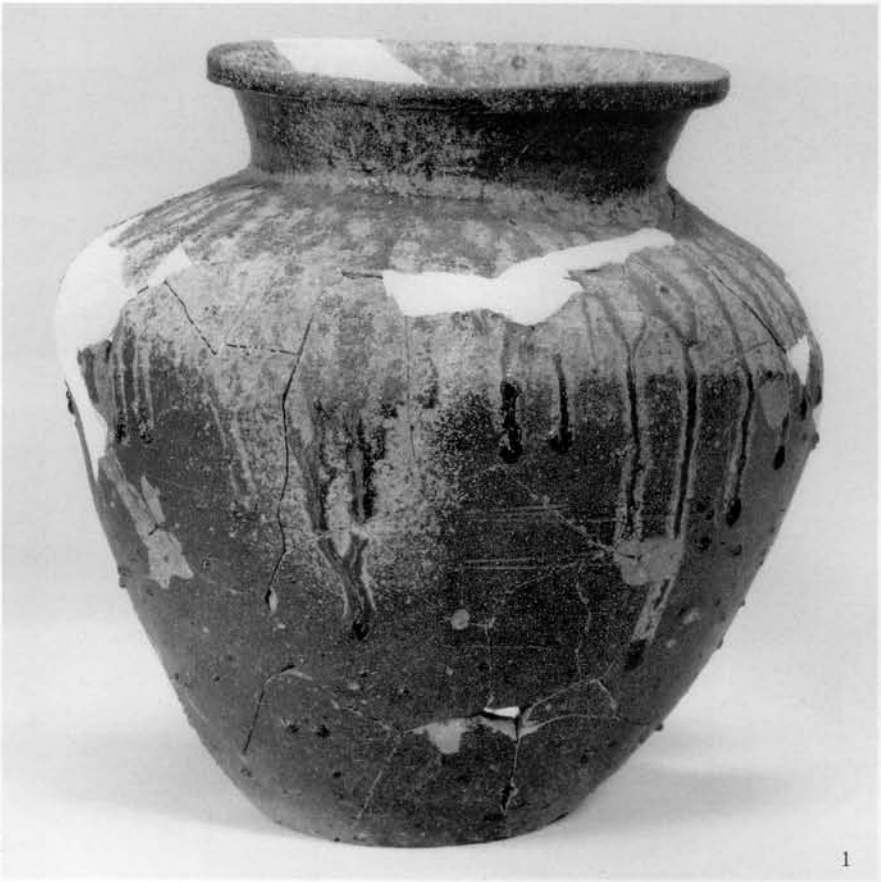


1：11－6（挿図番号－挿図内番号）　2：11－7　3：12－9　4：12－8　5：13－10　6：13－11　7：13－23　8：13－16　9：13－15

（縮尺：1/3）

図版15

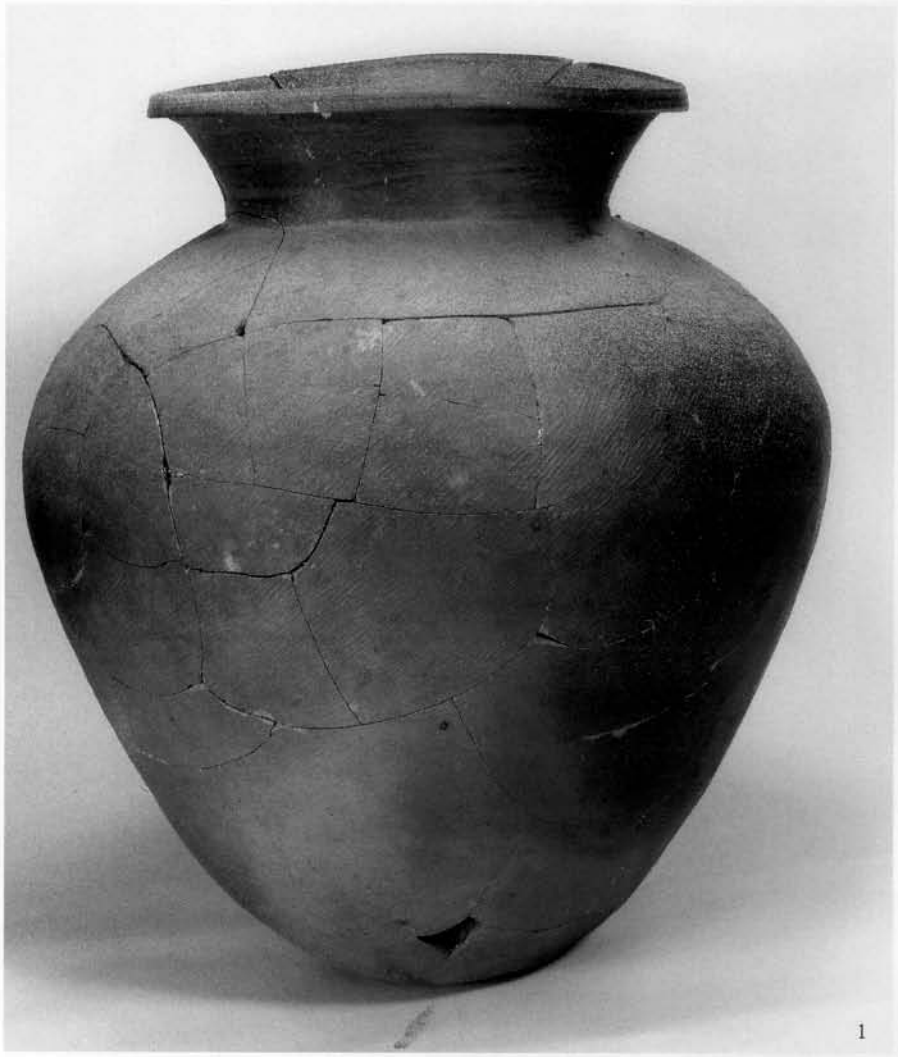
1：13－12（挿図番号－挿図内番号）　2：13－13　3：13－14　4：13－17　5：13－24　6：13－19　7：13－18　（縮尺：1/3）



1

2

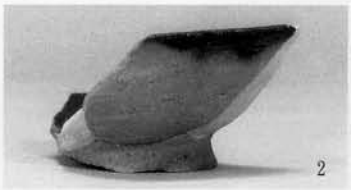
図版17　1：14－20（挿図番号－挿図内番号）　2：14－21（縮尺：1/3）



1：15－22（挿図番号－挿図内番号）　2：17－1　3：20－1　4：20－6　5：20－7　6：20－3　7：20－2　8：20－4　9：20－5

（縮尺：1/3）

図版18



1：24－1（挿図番号－挿図内番号）　2：24－2　3：26－1　4：26－4　5：26－5　6：26－2　7：26－3　8：27－1　9：29－1
10：29－2　11：29－3　12：29－4（縮尺：1/3）

図版19

1

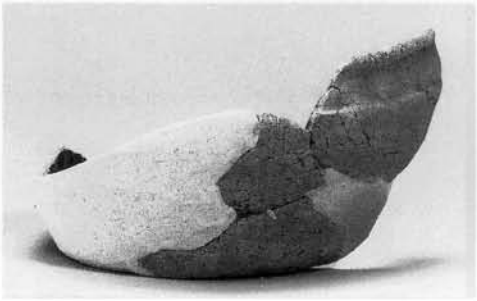
2

3

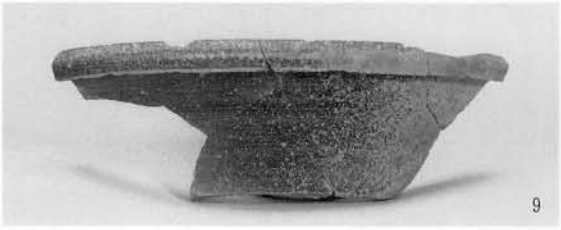
4

5

6


7

8


9

10

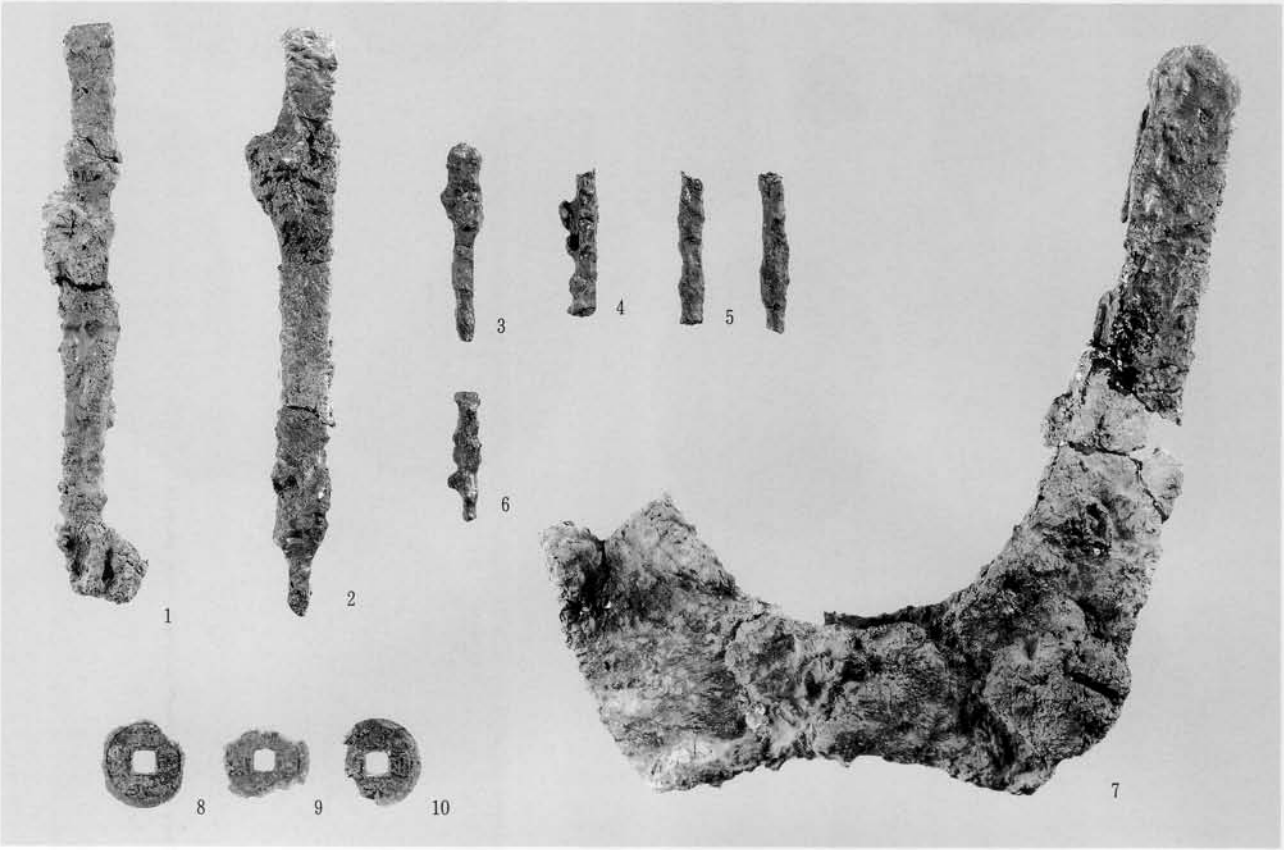
13

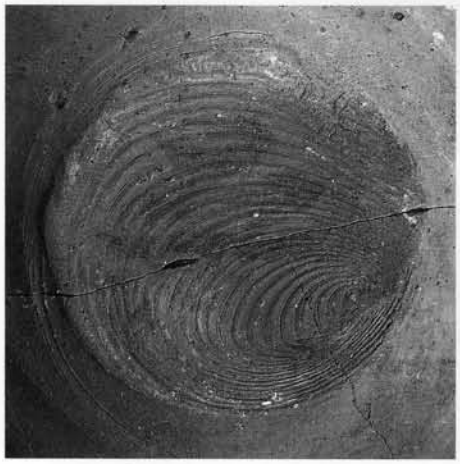
11

12

14

1：29－5（挿図番号－挿図内番号）　2：39－1　3：39－2　4：39－4　5：39－5　6：39－6　7：39－3　8：39－7　9：39－8
10：43－1　11：43－2　12：43－3　13：17－2　14：4－11（縮尺：1/3）





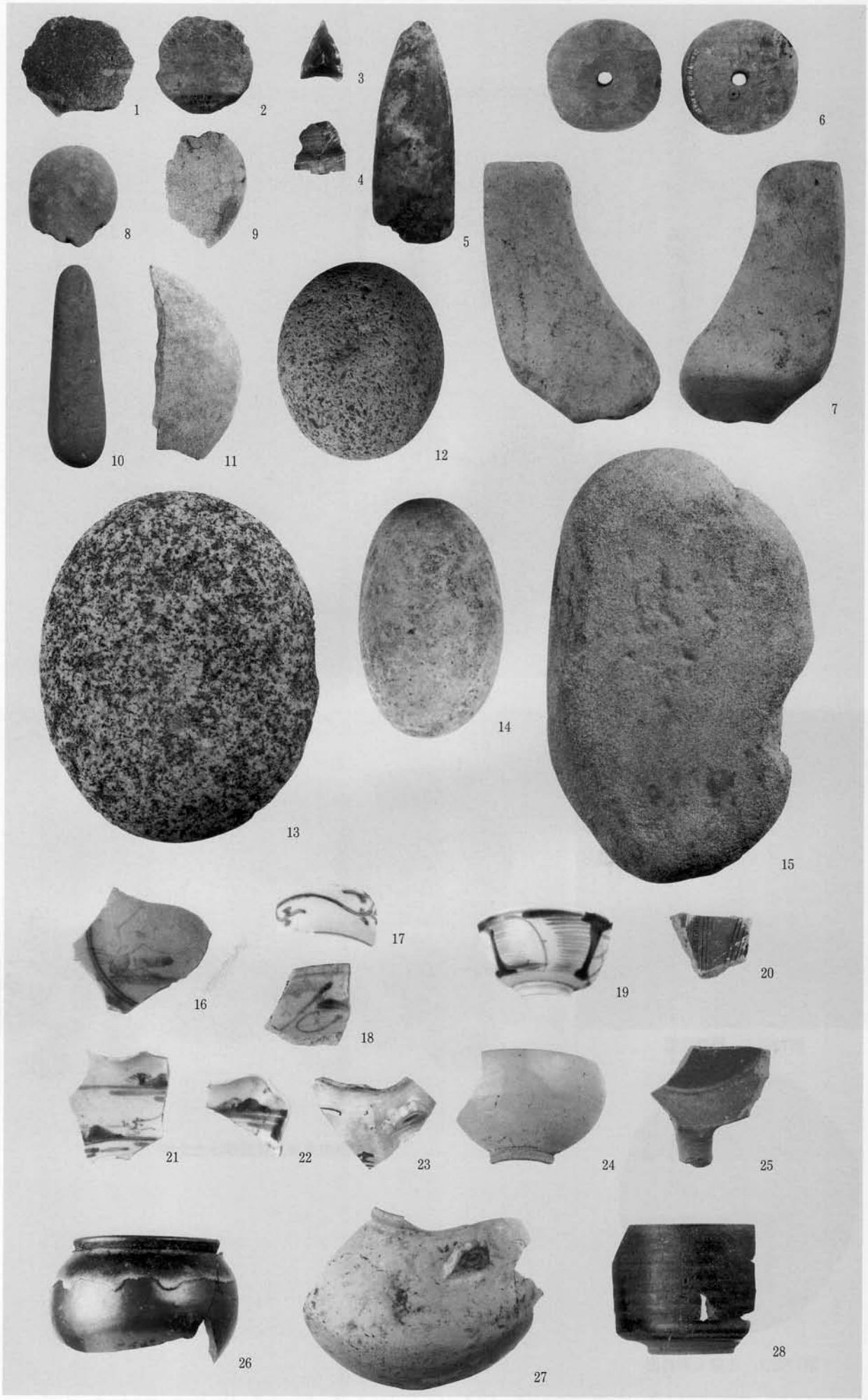
第17図１　墨書土器

SI25焼失竪穴住居跡出土土器

第17図２　土製支脚内面

1：15－27（挿図番号－挿図内番号）　2：15－26　3：6－3　4：6－4　5：20－9　6：5　7：17－3　8：31－4　9：34－2
10：34－3（縮尺1～7：1/3　8～10：1/2）

図版21



1：39－11（挿図番号－挿図内番号）　2：34－1　3：39－9　4：39－10　5：39－12　6：34－5　7：17－4　8：6－1　9：20－8
10：39－13　11：15－25　12：39－14　13：17－5　14：6－2　15：43－5（縮尺：1/3　2・3のみ1/2）

図版22

崎山（さきやま）B遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境…… 101
Ⅱ　調査の方法と経過…… 101
Ⅲ　発見された遺構と遺物…… 101
Ⅳ　まとめ…… 103

調　査　要　項

遺跡名：崎山Ｂ遺跡（さきやまＢ）（宮城県遺跡地名表記載番号66077、遺跡記号SO）

所在地：宮城県桃生郡河北町小船越字崎山

調査担当：相原淳一・須田良平・奥山芳明

調査期間：平成14年（2002年）６月３日～７月23日

調査対象面積：20,000㎡

調査面積：6,000㎡

Ⅰ　遺跡の位置

崎山Ｂ遺跡は桃生郡河北町小船越字崎山に所在し、旧北上川を望む標高59ｍを頂部とする丘陵の比較的傾斜が強い南斜面および東斜面に立地する。遺跡は沢田山西遺跡の南側に隣接し、沢田山西遺跡の遺跡範囲の延長を確認する段階で新たに発見された。遺跡西側の丘陵先端部には崎山遺跡が存在したため、これを崎山Ａ遺跡と改称し、本遺跡を崎山Ｂ遺跡として登録した。

Ⅱ　調査の方法と経過

本遺跡は平成14年４月に行われた沢田山西遺跡における現地協議の際に、標高59ｍの丘陵北斜面において須恵器甕の破片が採集されたことで発掘調査を行った。

当初は町道を挟んで北側を沢田山西遺跡、南側を崎山Ｂ遺跡としていたが、調査によって町道南側の丘陵北から北東斜面で検出された遺構は沢田山西遺跡と一連であると認められた。したがって地形をもとに、南～南東斜面を崎山Ｂ遺跡、北～北東斜面を沢田山西遺跡とした。

調査は平成14年６月３日～７月23日に、沢田山西遺跡の調査と並行して行った。

調査の対象となった道路路線敷は遺跡東部の、丘陵頂部から東側に設定されており、丘陵を大きく切り崩す計画となっている。範囲内は傾斜の急な南～東斜面で、杉が植林されていた。傾斜のある地形のため堆積層が発達せず、ほとんどの範囲で厚さ20～30㎝のしまりのない褐色砂質シルトの表土下に、地山の基盤岩層や崩落した基盤岩の角礫を含む明黄褐色シルト層が認められ、これらが遺構の検出面である。

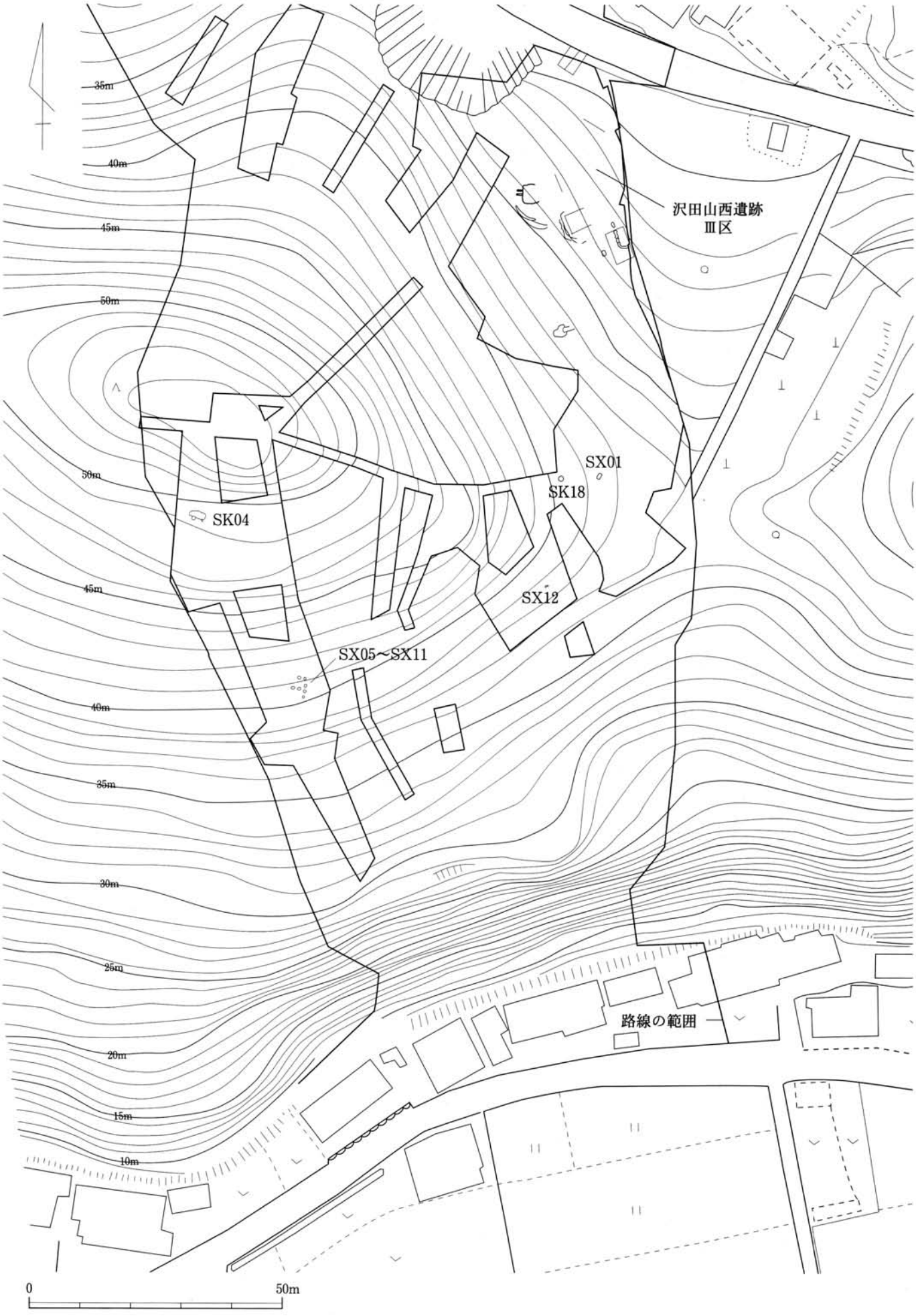
遺構は非常にまばらに検出されたため、遺構ごとに1/20平面図・断面図を作成し、平板測量による1/100平面図により全体の遺構配置図を作成した。同時に35㎜と６×７のモノクロ・カラーリバーサル、デジタルカメラによる写真記録も行った。

Ⅲ　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、南斜面の墓壙７基と土壙１基、東斜面の土壙１基、焼土遺構２基である。遺物は非常に少なく、ごく少量の土師器、須恵器と墓壙から出土した銭貨や磁器などのわずかな副葬品のみである。

１．墓壙群（第２図、第１表）

近世の墓壙７基（SX05～11）を検出した。平面形は楕円形～隅丸長方形を基調として、長軸44～78㎝、短軸39～60㎝、深さ20～84㎝で、地山礫や地山ブロックを含むにぶい黄褐色～黒褐色のシルトで埋め戻されている。また、SX08墓壙のみ壁際に礫を巡らしている。副葬品には六道銭や銅製容器、鉄製品、漆器、磁器、土製紡錘車などがある。副葬品はいずれも墓壙底面あるいは底面直上から出土した。六道銭は寛永通宝が主体であるが永楽通宝や元豊通宝もある。銅製容器は径約3㎝の碗状のもので仏具と思われ、木質部に乗るように出土した。木質部は極小さな板状の破片であるが、詳細は不明である。漆器は赤漆や黒漆の皮膜のみである。



第１図　調査区の位置（1/1000）

	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	出　土　遺　物
SX05	楕円形	67	57	26	永楽通宝１枚・寛永通宝５枚・小礫２個
SX06	楕円形	67	60	47	銅製容器（下に木質部）・小礫６個
SX07	円形	57	57	29	漆器（漆膜のみ）・飯茶碗・元豊通宝１枚・寛永通宝１枚
SX08	楕円形	51	45	52	石組みあり・土製紡錘車・漆器（漆膜のみ）・リング状鉄製品
SX09	隅丸長方形	61	50	84	なし
SX10	隅丸長方形	44	39	20	なし
SX11	楕円形	78	49	31	なし

第１表　墓壙属性表

２．土壙（第３図）

【SK04土壙】平面形は長軸3.3m、短軸1.4mの楕円形で、深さ20cm、断面形は皿状を呈する。最上層に灰白色火山灰が堆積している。堆積土からは土師器坏と須恵器壺の破片が少量出土した。土師器坏には回転糸切り無調整で内面が黒色処理されているものがある。

【SK18土壙】平面形は径1.0mの円形で、深さ35cm、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

３．焼土遺構（第３図）

【SX01焼土遺構】平面形は長辺120cm、短辺65cmの長方形で、深さ32cm、断面形は「U」字状を呈する。内部のほぼ全面が火熱を受けて赤変している。底面直上には部分的に厚さ2cmの炭化物層が認められる。遺物は出土していない。

【SX12焼土遺構】削平などにより壊されているため詳細は不明であるが、残存部で長軸85cm、短軸46cmの楕円形を呈し、深さ20cm、断面形は「L」字状を呈する。北壁が火熱を受けて赤変している。底面直上に厚さ1～2cmの炭化物層が全面に認められる。遺物は出土していない。

４．遺構の年代

発見された遺構の中で時期がわかるものとして以下の遺構があげられる。

SK04土壙の堆積土上部には灰白色火山灰が認められる。堆積土から出土した土器はいずれも破片であるが、回転糸切り無調整の土師器坏の底部や小型の須恵器壺などがあり、いずれも９世紀後半頃から10世紀前葉頃のものである。

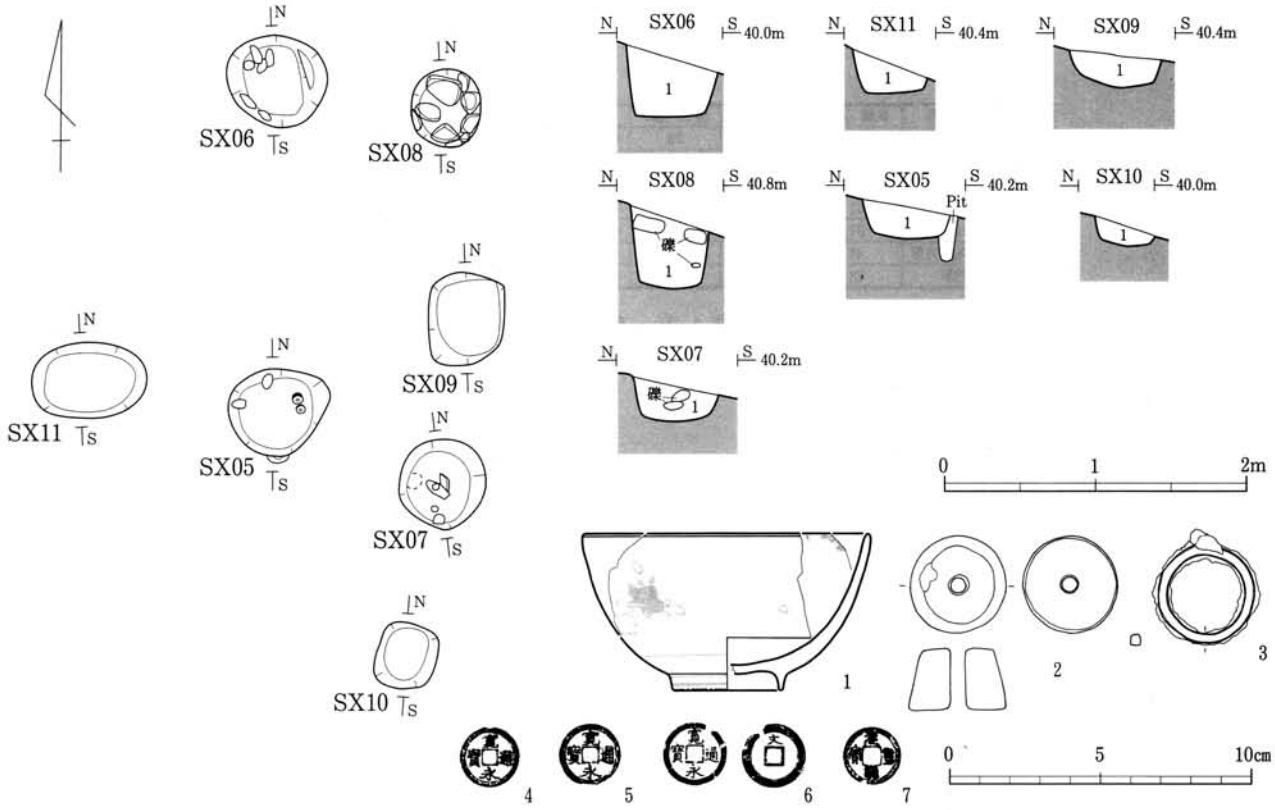
墓壙からは副葬された様々なものが出土した。これらの中で時代が推定できるものとして銭貨がある。SX05墓壙からは永楽通宝と寛永通宝が、またSX07墓壙からは元豊通宝と寛永通宝が出土した。寛永通宝には「古寛永」と「新寛永」の両者が認められることから、この墓壙群は近世初頭以降のものとして捉えられよう。

焼土遺構からは遺物の出土はなく時期は不明である。

Ⅳ　まとめ

崎山Ｂ遺跡で発見された遺構は少なく、墓壙７基、焼土遺構２基、土壙２基である。今回の調査区は傾斜の比較的急な斜面部であり、遺構の分布は非常に散漫であった。時期の分かるものは、９世紀後半頃から10世紀前葉頃の土壙１基と近世の墓壙群のみである。

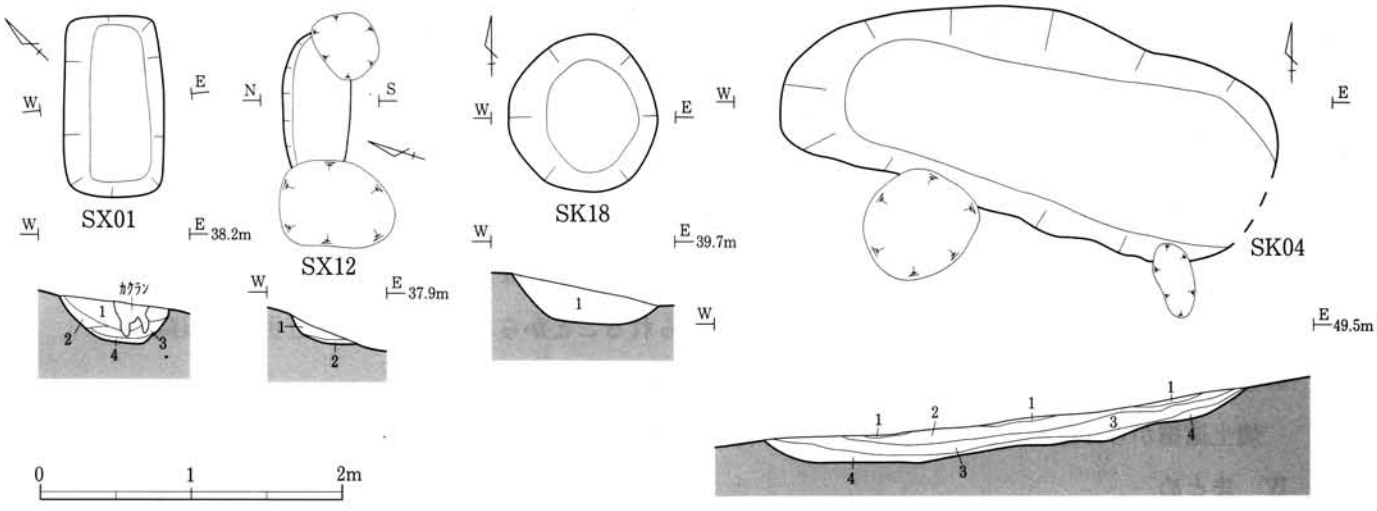
調査区には石巻平野や北上川を望む、標高54.5mの丘陵頂部も含まれていたが、そこには遺構は全く認められなかった。調査区外側の遺跡西部には平坦面や傾斜の緩やかな南斜面があり、この部分が当遺跡の中心部と考えられる。



崎山B

番号	器種	出土遺構	直径	厚	特徴	写真図版	登録
1	陶器・碗	SX07			口径：11.4cm　器高：6.2cm　底径：4.4cm　梅花文	2－1	SX07－1
2	土製紡錘車	SX08	3.9	2.5		2－2	SX08－1
3	鉄製品	SX08	3.9	0.5	リング状	2－3	SX08－2
4	寛永通宝	SX05	2.4		古寛永	2－9	SX05－1
5	寛永通宝	SX05	2.4		古寛永	2－7	SX05－2
6	寛永通宝	SX07	2.4		背文に「文」	2－8	SX07－1
7	元豊通宝	SX07	2.4			2－5	SX07－2

第2図　墓壙と出土遺物



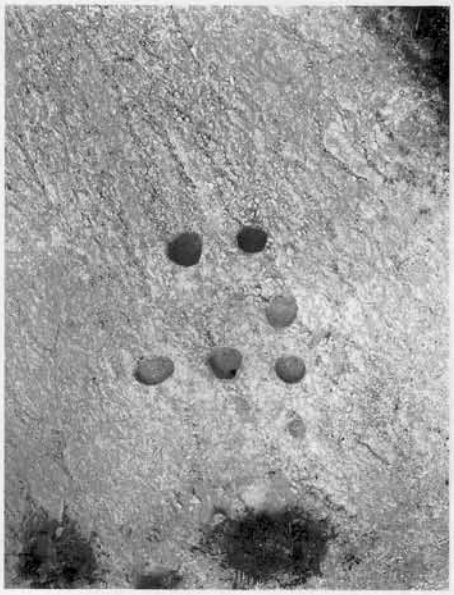
番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SX01		にぶい黄褐色（10YR3/4）	シルト	地山角礫含む・自然堆積
2			黄褐色（10YR5/6）	シルト	崩落土
3			にぶい黄褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫・焼面含む・崩落土
4			黄褐色（10YR5/6）	シルト	炭化物多量含む
1	SX12	壁崩落土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	焼土粒・礫含む
2			黒褐色（10YR2/3）	シルト	炭化物多量含む
1	SK04	灰白色火山灰層			
2			黒色（10YR1.7/1）	シルト	炭化物含む・自然堆積
3			暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物・地山粒含む・自然堆積
4		壁崩落土	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	炭化物・地山礫含む・自然堆積
1	SK18		暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫含む・自然堆積

第3図　その他の遺構

遺跡遠景
（南から）

遺跡遠景
（南から）

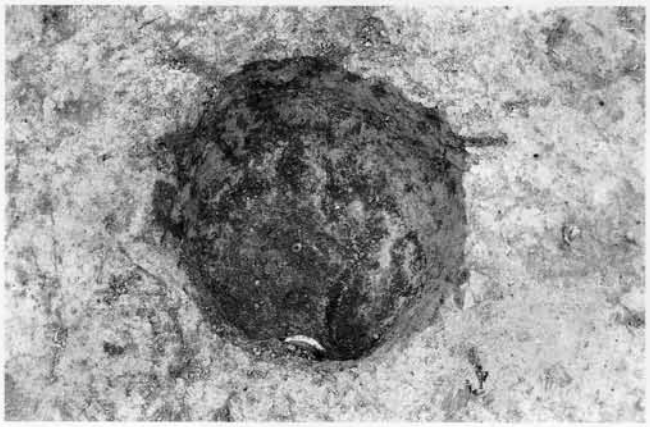
墓壙群
（南から）



墓壙群
（上が北）

SX05墓壙（南から）

SX06墓壙（南から）



SX07墓壙（南から）

SX08墓壙（南から）

SK04土壙（東から）

SX01焼土遺構（南から）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1：2－1（挿図番号－挿図内番号）　2：2－2　3：2－3　4：銅製品（小型容器）　5：2－7　6：永楽通宝　7：2－4　8：2－6
9：2－5　10～12：寛永通宝（縮尺1～3：1/3　4～12：1/2）

図版 2

万歳山（まんざいやま）C遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境…… 109
Ⅱ　調査の方法と経過…… 109
Ⅲ　発見された遺構と遺物…… 109
Ⅳ　まとめ…… 116

調　査　要　項

遺遺跡名：万歳山Ｃ遺跡（まんざいやまＣ）（宮城県遺跡地名表記載番号70036、遺跡記号ＳＦ）

所在地：宮城県桃生郡桃生町字万歳山

調査担当：相原淳一・須田良平・岩見和泰

調査期間：平成15年（2003年）4月7日～5月16日

調査対象面積：1,000㎡

調査面積：700㎡

Ⅰ　遺跡の位置

万歳山Ｃ遺跡は桃生郡桃生町万歳山に所在する。桃生町役場の南東約4.3㎞に位置し、北上山地の南西端部で、東側を南流する北上川により分断された東西約3.5㎞、南北約4㎞の独立丘陵上に立地する。この丘陵は様々な方向から沢が入る複雑な地形を呈しており、平坦面も少ない。遺跡は桃生城跡と同じ丘陵上に立地し、桃生城跡の外郭北東隅の北側約250ｍに位置する。遺跡は南から入る沢の西側に面した、標高53ｍ付近の痩せ尾根鞍部と西側斜面に立地する。

Ⅱ　調査の方法と経過

本遺跡は平成14年12月に行なった三陸自動車道工事予定地内の桃生城跡の確認調査の際に発見されたものであり、平成15年２月に追加の確認調査を行った。

本調査は平成15年４月７日～５月16日に、桃生城跡の調査と一部並行しながら行った。その結果、遺構は桃生城跡外郭北東隅から北に延びる尾根の鞍部、標高53ｍ付近で検出された。

範囲内は人家や畑により一部削平されており、遺構の残存状況は良くない。遺構は、尾根部分と東斜面部では削平後に盛られた厚さ約20～100㎝の表土下で、西側斜面部では厚さ20～30㎝の褐色砂質シルトの表土下で確認された。検出面はいずれも基盤の礫を多く含む暗褐色シルトである。

検出した遺構は、真北方向を示す基準点（Ａ①・Ｂ②）を結んだ線を基準とした3ｍ×3ｍのグリッドをもとに、1/20平面図・断面図を作成した。同時に35ｍｍと６×７のモノクロ・カラーリバーサルおよびデジタルカメラによる写真記録も行った。

基準線の呼称はＢ②杭を基準として、東がＥ－３、Ｅ－６、・・・、西がＷ－３、Ｗ－６・・・、北がＮ－３、Ｎ－６・・・、南がＳ－３、Ｓ－６・・・とした。

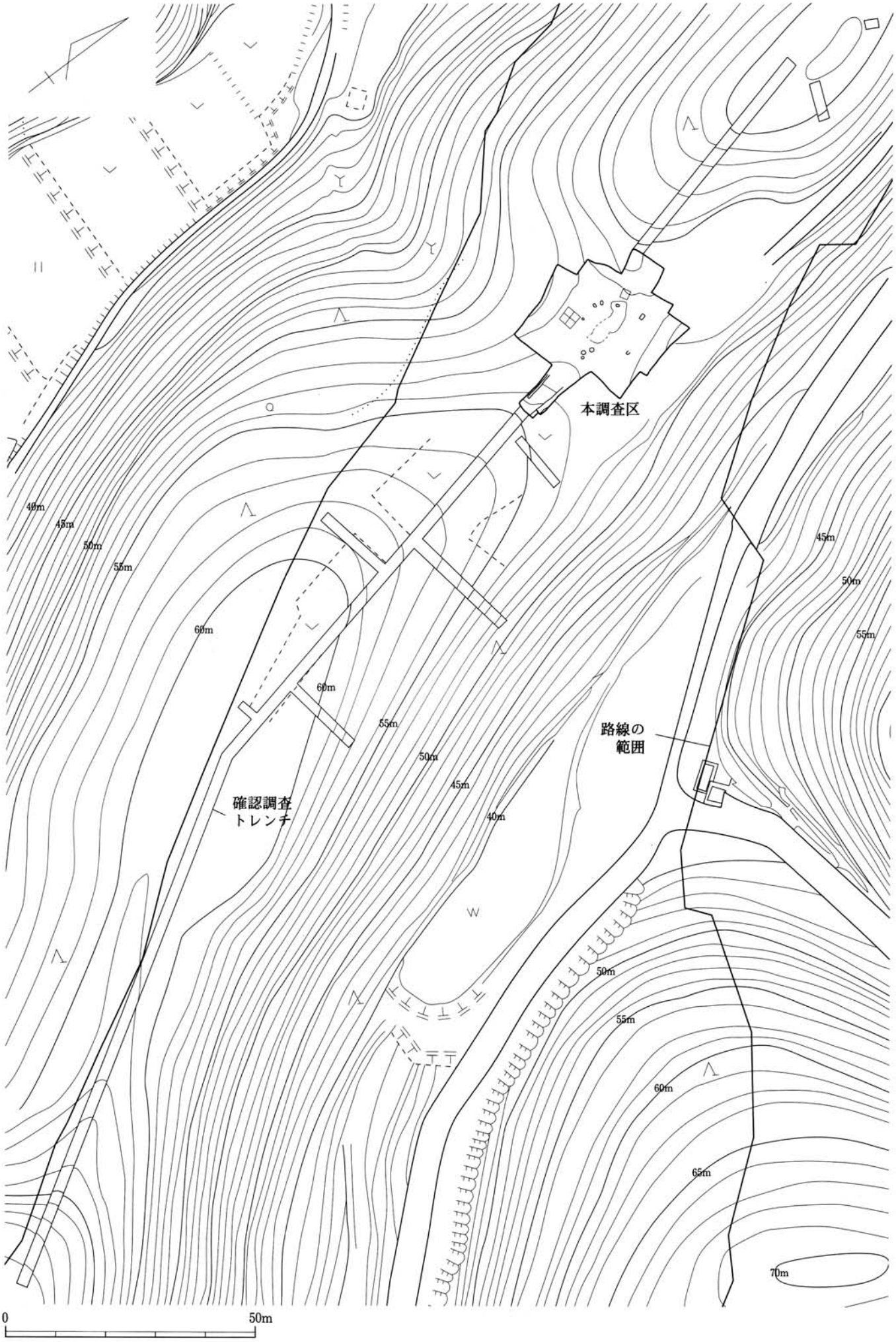
基準点の国家座標は　Ａ①……Ｘ＝－162,500.0000　Ｙ＝39,050.0000

Ｂ②……Ｘ＝－162,467.0750　Ｙ＝39,050.0000　（日本測地系）である。

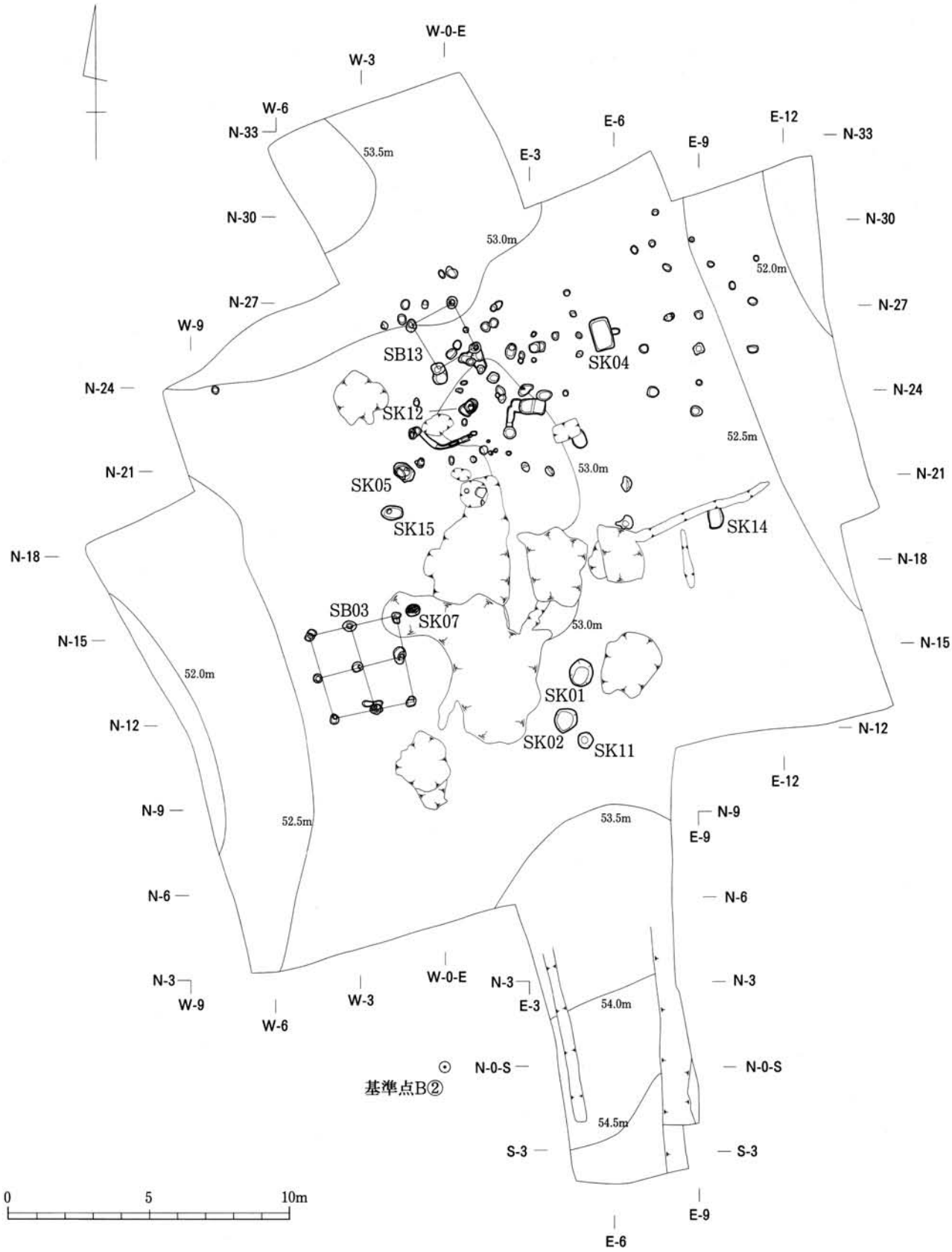
Ⅲ　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡２棟、土壙９基、ピットなどである。遺構は調査区北側の尾根状部分に集中し、両側の西側斜面と東側斜面にも僅かにピットが分布する。また、多数の倒木痕も確認された。

遺物は非常に少なく、土壙、ピットから出土した縄文土器などを中心に整理用平箱で１箱ほどである。



第１図　調査区の位置（1/1000）



第２図　遺構配置図（1/200）

1．掘立柱建物跡

【SB03掘立柱建物跡】（第３図）２間×２間の総柱建物跡である。平面形は正方形を呈し、南北の柱列がいずれも3.0mで柱間が1.5mであるのに対して、東西柱列は北側で3.2m、柱間が東から1.7m、1.5m、南側で2.8m、柱間が東から1.3m、1.5mである。柱の掘方は長軸32～50cm、短軸25～38cmの楕円形もしくは円形で、深さ14～22cmである。９個検出した柱穴のうち、６個から径13～18cmの円形の柱痕跡が確認できた。堆積土は掘方埋土が地山礫を多く含む黒褐色砂質シルト、柱痕跡が地山礫や炭化物を多く含む黒褐色砂質シルトである。北側柱列中央の柱穴の掘方埋土から、縄文土器片が２点出土した。垂下する隆帯に楕円形の刺突のある体部破片と無文の口縁部である。

【SB13掘立柱建物跡】（第３図）１間×１間の建物跡である。柱間は東、西側柱列で1.8m、北、南側柱列で1.6mである。柱の掘方は長軸43～47cm、短軸37～39cmの楕円形もしくは円形で、深さ17～30cmである。４個検出した柱穴のうち、３個から径15～18cmの円形の柱痕跡が確認できた。この建物が検出された範囲は尾根状の部分で表土が薄く、遺構もかなり削平されていた。このような遺構の残存状況や柱穴の配置などから、この建物は竪穴住居跡の主柱穴の可能性もある。堆積土は掘方埋土が地山礫を多く含む暗褐色シルト、柱痕跡が地山礫を含む黒褐色シルトである。南西隅の柱穴の掘方埋土から、斜縄文の施された縄文土器の体部破片が１点出土した。

2．土壙（第４図）

【SK01土壙】平面形は長軸95cm、短軸83cmの楕円形で、深さ34cm、断面形は碗状を呈する。堆積土から隆線や斜縄文の施された縄文土器の体部破片や黒曜石製の石鏃が出土した。

【SK02土壙】平面形は長軸90cm、短軸80cmの楕円形で、深さ23cm、断面形は碗状を呈する。堆積土から斜縄文の施された縄文土器の口縁部破片や珪質頁岩製の鋸歯縁石器が出土した。

【SK04土壙】平面形は長辺115cm、短辺72cmの長方形で、深さ30cm、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

【SK05土壙】平面形は長軸79cm、短軸53cmの楕円形で、深さ32cm、断面形は碗状を呈する。堆積土中から斜縄文の施された縄文土器の体部破片が出土した。また、堆積土中に長さ20～40cmの扁平な角礫が３点認められた。

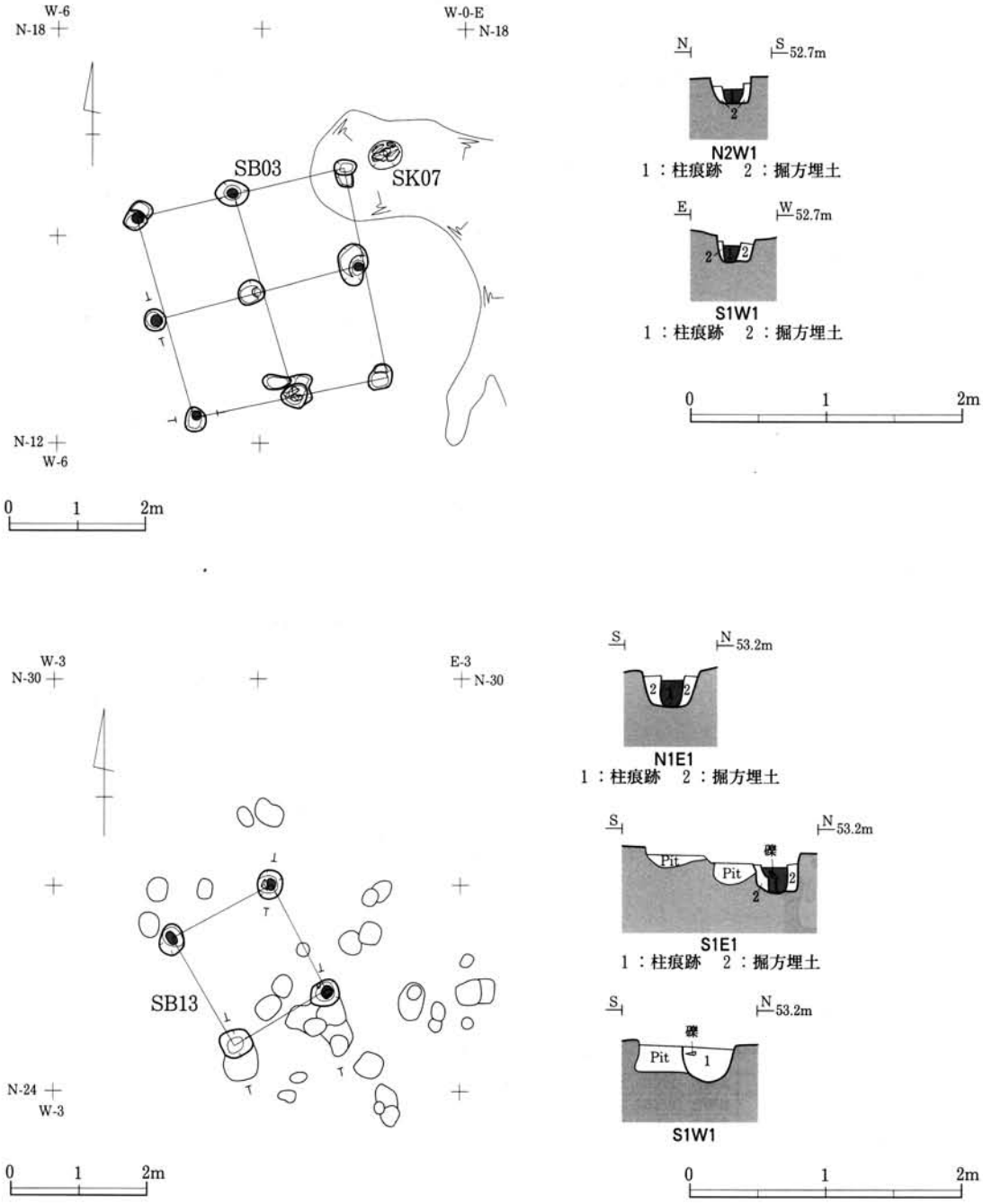
【SK07土壙】平面形は長軸49cm、短軸39cmの楕円形で、深さは40cmである。壁は急角度に立ち上がり、北壁は一部オーバーハングしている。堆積土中に長さ5～30cmの扁平な角礫が10点認められた。

【SK11土壙】平面形は径55cmの円形で、深さ10cm、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

【SK12土壙】平面形は長軸54cm、短軸43cmの楕円形で、深さ24cm、壁は比較的急角度に立ち上がる。堆積土中に長さ30cmの大型で扁平な角礫１個と長さ10cm前後の小型の角礫が３点認められた。

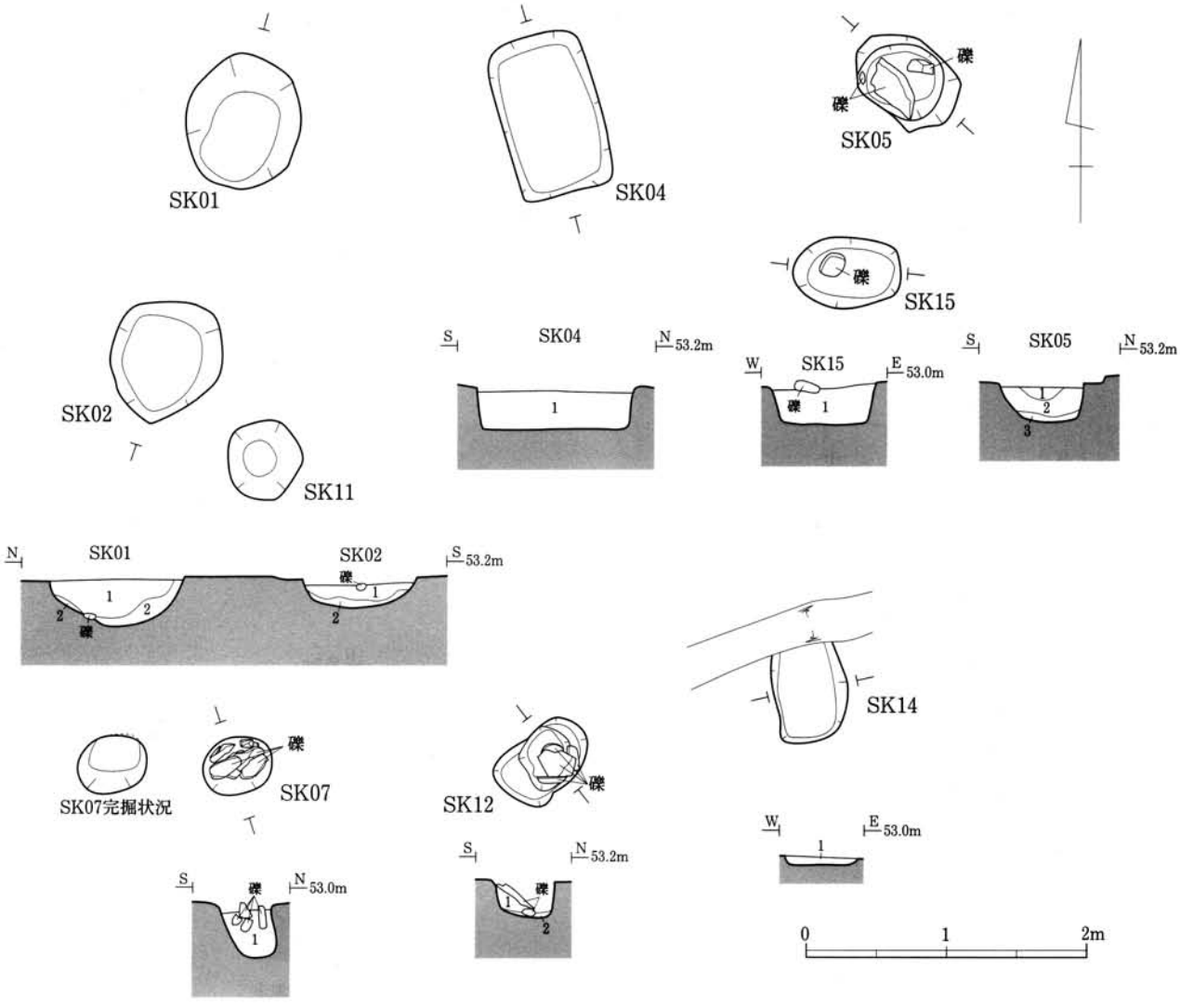
【SK14土壙】北側を攪乱により壊されているが、残存長で長辺68cm、短辺53cmの長方形で、深さ９cm、断面形は皿状を呈する。遺物は出土していない。

【SK15土壙】平面形は長軸76cm、短軸48cmの楕円形で、深さ28cm、断面形は碗状を呈する。堆積土中に長さ20cmほどの扁平な角礫が２点認められた。



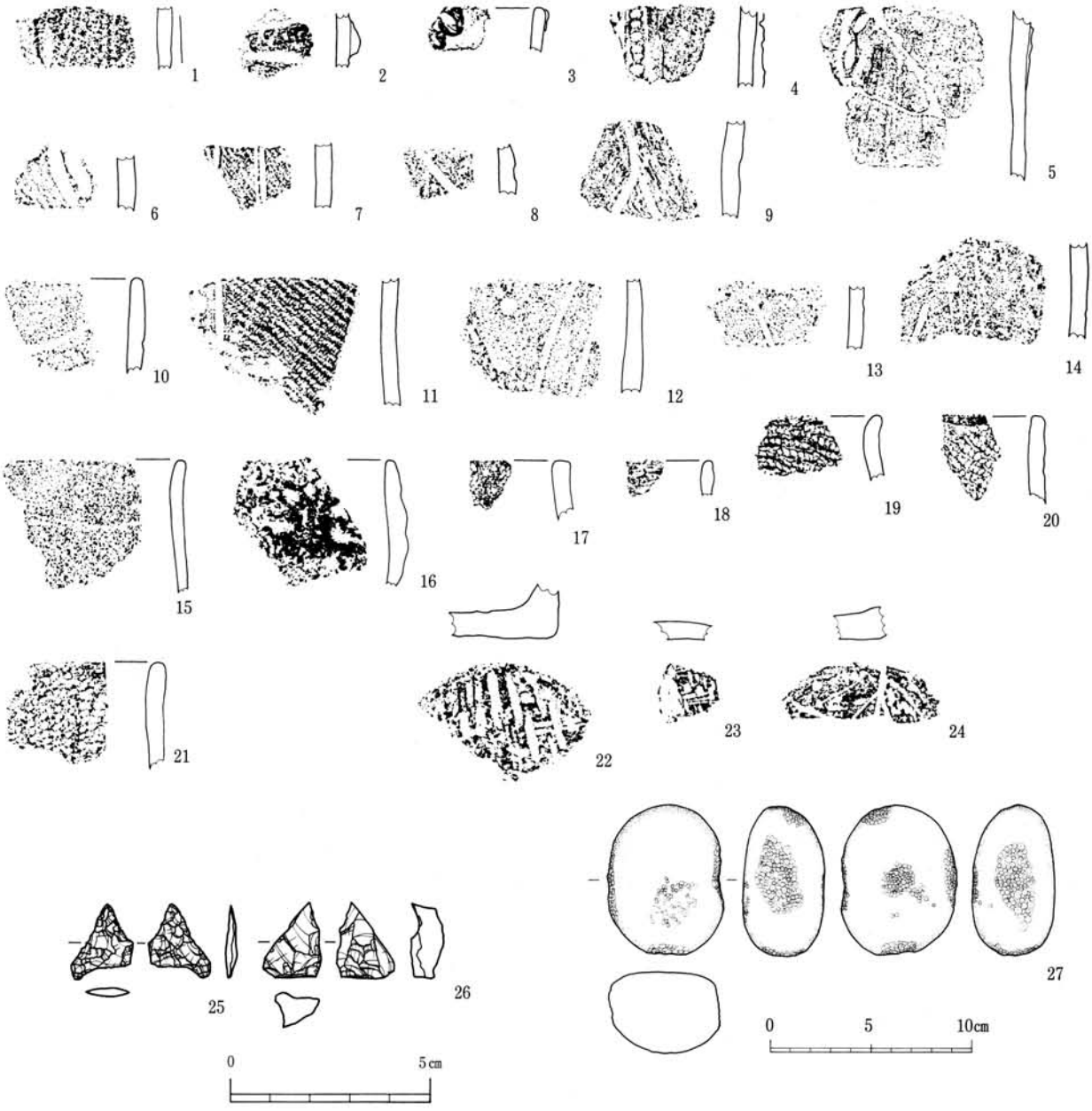
番号	遺構	種類	土色	土性	特徴・混入物など
1	SB03（N2W1）柱穴	柱痕跡	黒褐色（10YR1/3）	砂質シルト	炭化物・地山礫含む・人為堆積
2		掘方埋土	黒褐色（2.5YR3/2）	砂質シルト	地山礫多量含む
1	SB03（SI3W1）柱穴	柱痕跡	黒褐色（10YR1/3）	砂質シルト	炭化物・地山礫含む・人為堆積
2		掘方埋土	黒褐色（2.5YR3/2）	砂質シルト	地山礫多量含む
1	SB13（N1E1）柱穴	柱痕跡	黒褐色（10YR3/2）	シルト	炭化物若干・地山礫含む
2		掘方埋土	黒褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫多量含む
1	SB13（S1E1）柱穴	柱痕跡	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化物少量・地山礫含む
2		掘方埋土	黒褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫多量含む
1	SB13（S1W1）柱穴		黒褐色（10YR3/4）	シルト	地山礫含む

第3図　SB03・SB13堀立柱建物跡



番号	遺構	土色	土性	特徴・混入物など
1	SK01	黒褐色（10YR1/2）	砂質シルト	炭化物・地山礫含む・人為堆積
2	SK02	暗褐色（10YR3/3）	砂質シルト	炭化物・地山礫少量含む・人為堆積
1	SK04	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロック多量含む・人為堆積
1	SK05	黒褐色（10YR2/2）	シルト質粘土	2層に似るが2層より黒味が強い・人為堆積
2		黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	炭化物・地山礫含む・人為堆積
3		黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	炭化物・地山礫少量含む
1	SK06	暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	炭化物・地山礫多量含む
2		暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	地山礫多量含む・人為堆積
1	SK07	暗褐色（10YR3/4）	シルト質粘土	地山礫多量含む・人為堆積
1	SK12	黒褐色（10YR3/2）	砂質シルト	炭化物少量・地山礫多量含む・人為堆積
2		暗オリーブ褐色（2.5YR3/3）	シルト	炭化物少量・地山礫多量含む・人為堆積
1	SK14	黒褐色（10YR3/2）	シルト	地山ブロック多量含む・人為堆積

第4図　土壙



番号	遺構	層位	長	幅	厚	石材	特徴	写真図版	登録
25	石鏃	SK01	1.8	1.6	0.3	黒曜石		4－25	25
26	不定形石器	SK02	1.9	1.5	0.8	珪質岩		4－26	26
27	敲石	確認面	7.4	5.7	4.0	安山岩	重さ：260g	4－27	27

第5図　出土遺物

Ⅳ　まとめ

今回の調査で検出された遺物、遺構は非常に少ない。以下では土器と掘立柱建物跡、土壙について簡単に触れることにする。

1．土器について

今回の調査で出土した遺物のほとんどは縄文土器で、その他には少量の剥片石器、礫石器と土師器、須恵器が認められるのみである（第5図）。

縄文土器には、a：隆線あるいは隆帯が施されるもの（1～5）、b：沈線が施されるもの（6～14）、c：縄文のみが施されたもの（19～21）、d：無文のもの（15～18）、が認められる。

aには隆帯に刺突が施されるものがある(3～5)。bには沈線により地文部と無文部が分かれているものがあり（9～13）、円形竹管文が施されているものも認められる（12）。22～24は底部破片である。

これらの特徴を持つ土器は縄文中期末～後期初頭の土器群に類例がみられ、当該期に位置づけられよう。

また、古代の土器も僅かに認められる。土師器はロクロ調整された坏の破片で、内面がヘラミガキ後に黒色処理されている。須恵器は坏の口縁部破片である。いずれも小破片で時期などの詳細は不明である。

2．遺構について

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡2棟、土壙9基、ピットなどである。掘立柱建物跡については先にも述べたように、SB13掘立柱建物跡は遺構の残存状況が悪く、詳細は不明である。SB03掘立柱建物跡についても、柱穴の埋土から縄文土器が出土しているが、付近からは土師器や須恵器が出土していることから、縄文時代以降のものと捉えるに留めておきたい。

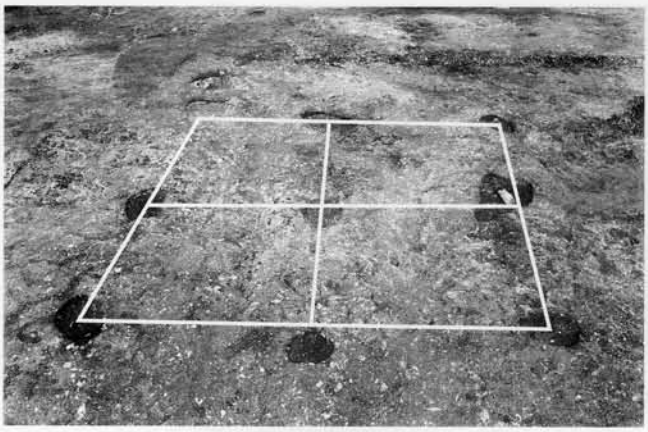
土壙は9基検出した。堆積土はいずれも人為的なものである。これらのうち、SK01・02土壙は出土遺物からみて縄文時代のものである可能性がある。他の7基については時期不明であるが、SK03・14は他の土壙とは堆積土の特徴が異なり、より新しい時代の可能性がある。

調査区全景
（南から）

調査区全景
（北西から）

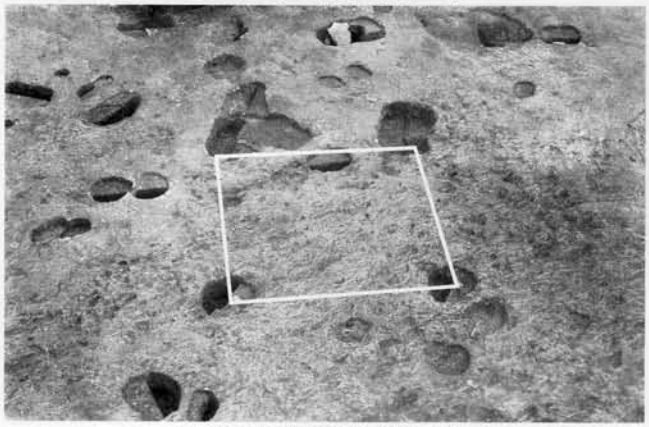
調査区全景
（北から）

図版 1

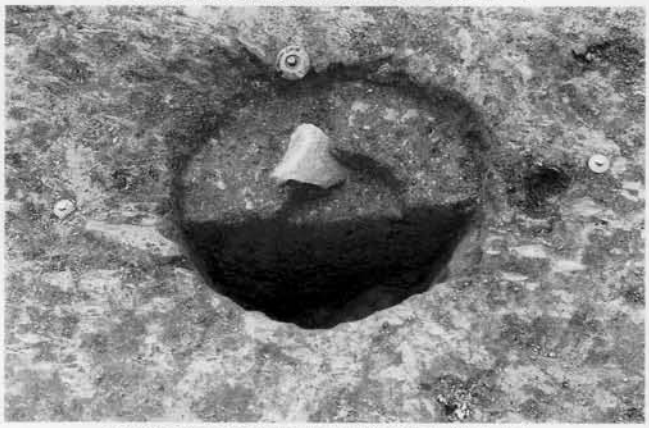


SB03掘立柱建物跡（西から）

SB03掘立柱建物跡SIW1柱穴断面（北から）



SB13掘立柱建物跡（北から）

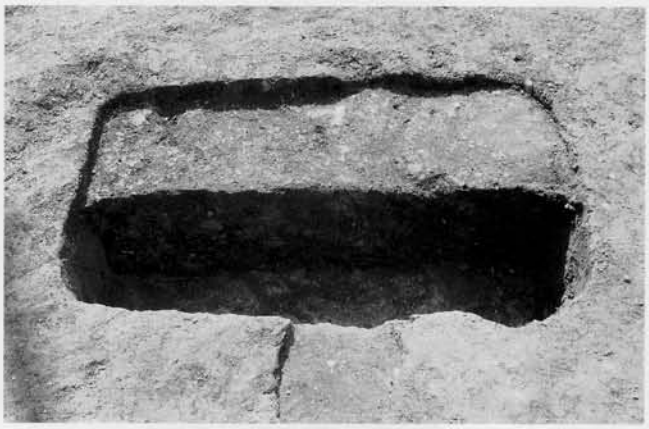


SB13掘立柱建物跡NIE1柱穴断面（東から）

SK01・SK02・SK11土壙（西から）

SK01土壙断面（西から）

SK02土壙断面（西から）



SK04土壙断面（東から）

図版 2

SK05土壙断面（北東から）

SK05土壙完掘状況（北東から）

SK07土壙断面（東から）

SK07土壙完掘状況（東から）

SK12土壙断面（北から）

SK12土壙内の礫検出状況（北から）

図版 3

出土遺物

図版 4

八幡遺跡

目　　次

Ⅰ　はじめに
1. 遺跡の位置と地理的環境…… 123
2. 歴史的環境…… 123
3. 調査の方法と経過…… 124
Ⅱ　発見された遺構と遺物
1. Ⅰ区…… 127
2. Ⅱ～Ⅳ区…… 134
Ⅲ　考察…… 140
Ⅳ　まとめ…… 144
写真図版…… 145

調　査　要　項

遺 跡 名：八幡（はちまん）遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 70035、遺跡記号 ＳＪ）

所 在 地：宮城県桃生郡桃生町永井字八幡・黄竜渕（きりぶち）

調査担当：相原淳一・佐久間光平・須田良平・岩見和泰・吉野武・奥山芳明・西村力・田中政幸

調査期間：平成14年10月４日～11日（確認調査）

平成15年７月17日～８月７日・９月１日～10月８日（事前調査）

調査対象面積：5,400㎡

調査面積：2,540㎡

Ⅰ　はじめに

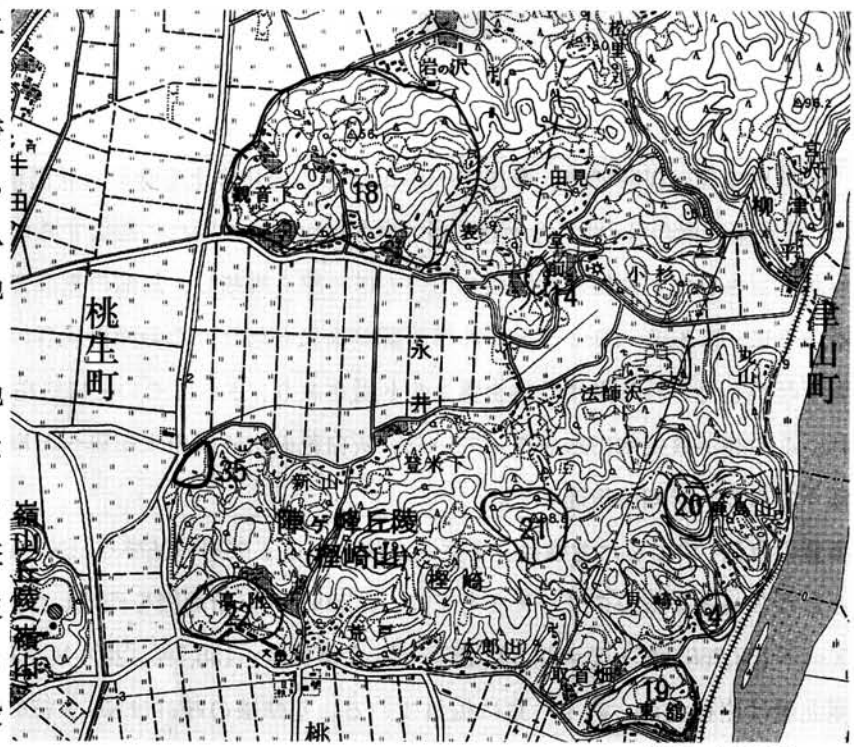
1．遺跡の位置と地理的環境

八幡遺跡は桃生郡桃生町永井字八幡・字黄竜渕（きりぶち）に所在し、桃生町役場の東約2.1km に位置する。東西に延びる独立丘陵（字八幡地区）上及びそれを取り巻く沖積地（字黄竜渕地区）内に遺跡は立地している。この丘陵は桃生丘陵から西に延びる丘陵のひとつで、北上川によって北上水系から分断された独立丘陵（陣ヶ峰丘陵・樫崎山）となっている。丘陵北側に広がる沖積地では、現在の昆布沼排水路と永井排水路が合体（かったい）橋付近で合流して古川（排水路）となり、さらに桃生城の南側を流下して追波川と合流する。沖積地の標高は遺跡の付近で２～３ｍと極めて低平である。

2．歴史的環境

桃生町の中でも北東に位置する永井地区（旧藩時代－永井村）の遺跡として、永井館跡・黄竜渕館跡の中世城館跡が古くから知られている。永井館跡は『封内風土記』(1772) では、館主を葛西家臣畑崎内膳と伝えている。また、南北朝～文安年間に関しては、菅原氏を館主とする記録（桃生町史編纂委員会：1996）が残されている。黄竜渕館跡 (註1) が所在する陣が峰丘陵（樫崎山）には、このほか壇ノ森館跡・陣ヶ峰館跡・樫崎内館跡の３館跡（樫崎館跡群）があり、樫崎内館については「城主男沢内膳」と『葛西御家臣衆座列』は伝えている。樫崎山中にはこれらの山城の郭が見られ、土師器の散布も認められることから、研究者の一部からはかつて桃生城跡に擬定されたこともあった。遺跡の所在する八幡地区には、八幡宮がかつて鎮座（『封内風土記』）しており、「八幡太郎義家勧請」〔文政11年『桃生南北本吉南方風土記』〕、「夷征伐乃節御勧請」〔嘉永３年『風土記御用書出』〕の諸伝が残されている。神社は昭和20年代に倉埣の八雲神社に合祀され、現在は地名のみとなっている。

以上のように、この永井地区は古代末以降のさまざまな記録や伝承が残されてはいるものの、考古学的な発掘調査は行われたことがなく、歴史的に未解明の部分が多かった。今回、三陸自動車道建設に先立つ遺跡の分布調査や確認調査、事前調査などを通して、ようやく古代以前の様相



縮尺　1:25,000

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
18	永井館跡	中世	20	陣ヶ峰館跡	中世
35	八幡遺跡	古代	19	樫崎内館跡	中世
22	壇ノ森館跡	古代・中世	4	樫崎貝塚	縄文（早・中期）
21	黄竜渕館跡	中世	14	十所貝塚（津山町）	縄文（早・中期）・古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

や文献史料の残る近世期についてもより具体的な姿が明らかになってきたところである。

（註１）「黄竜渕」の地名は、「切り渕」からの転訛（桃生町史編纂委員会:1990）とされ、現在遺跡地の字黄竜渕（囲名）のほかに、黄竜渕を屋号とする屋敷が字名とは離れた場所に２軒あり、黄竜渕館跡は黄竜渕屋敷の所在する場所が遺跡地となっている。

３．調査の方法と経過

本調査は三陸自動車道桃生登米道路建設に伴うものである。平成14年10月３日の分布調査で土師器破片が採集され、遺跡の存在が明らかとなった。当初遺構が存在するのは、丘陵部だけと見られた。

確認調査：平成14年10月４日～11日に遺跡の範囲を確定するための確認調査を行った。調査の結果、遺跡は丘陵部からさらに沖積地に広がっていることが明らかとなった。

丘陵部の確認調査では、遺構の種類と仕事量を把握するために表土をすべて撤去した。調査終了後、確認面を多数の土嚢などで保護し、翌年の本調査に備えた。沖積地では８本のトレンチを設けて確認調査を行った。このうち、灰白色火山灰に覆われた明瞭な畦畔状遺構が発見されたのは、第１トレンチと第２トレンチであった。遺構の確認面まで約１～２ｍほどあり、湧水とトレンチ壁の崩落が著しく、写真のみを撮影して、すべて埋め戻した。

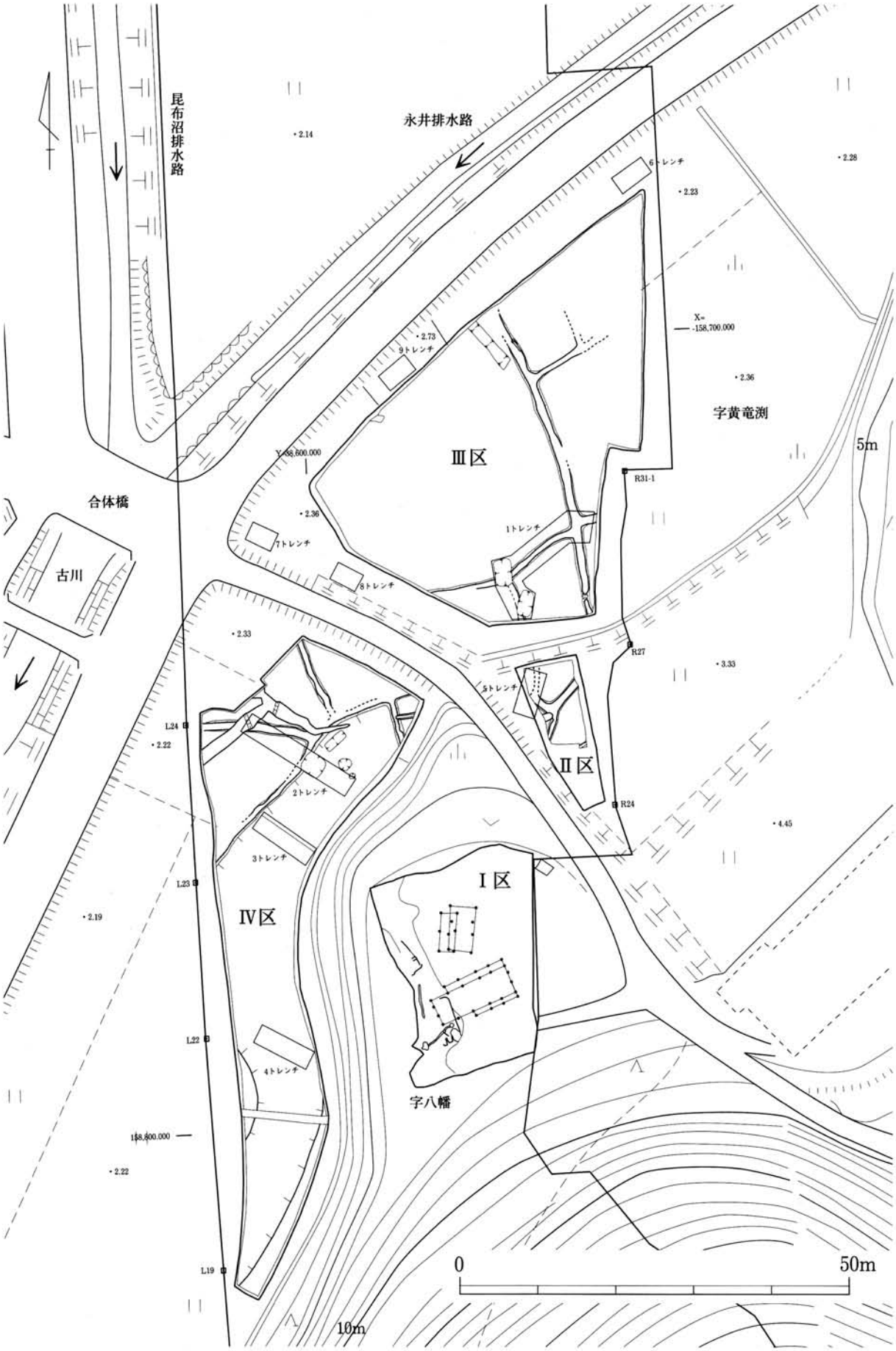
事前調査：事前調査は丘陵部（Ⅰ区）の調査と沖積地（Ⅱ～Ⅳ区）の調査とに分けて行った。

Ⅰ区：丘陵部の調査は平成15年７月17日から８月７日にかけて実施した。前年度に確認していた掘立柱建物跡と竪穴住居跡の精査を行った。遺構確認面は基盤岩の風化した暗褐色シルト層もしくは基盤岩層である。特にⅠ区の北側では後世の削平のために、厚さ約10㎝の表土下には地山の基盤岩層が認められた。

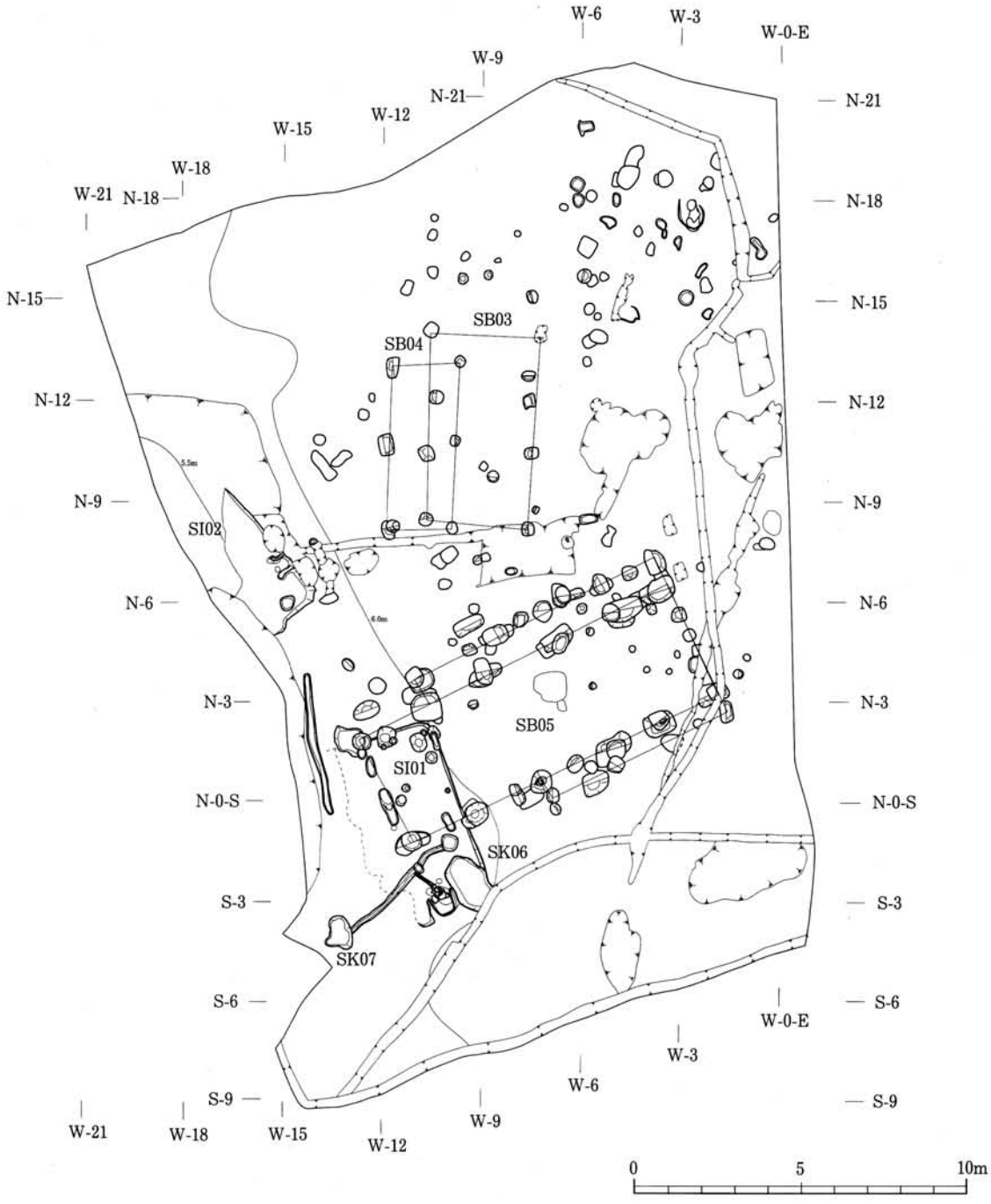
Ⅱ～Ⅳ区：沖積地の調査は平成15年９月１日～10月８日にかけて行った。遺構を覆う表土が１ｍ以上あり、精査終了後、調査区の壁崩落が著しく危険を伴うため、地区ごとにただちに埋め戻した。

沖積地のⅡ～Ⅳ区では、厚さ20～90㎝ほどの現耕作土を含めた新旧耕作土・床土あるいは盛土の下に、丘陵東斜面のⅡ・Ⅲ区を中心に最大厚120㎝の土砂崩れに起因すると見られるにぶい黄褐色の砂礫層が確認された。砂礫層は斜面の上の方ほど厚く堆積し、斜面の裾部では薄くなっていた。これらの層の下に、厚さ25～50㎝ほどの沖積層群が検出された。この沖積層群の下に、厚さ０～10㎝ほどの旧表土起源と見られる黒褐色粘土質シルト層があり、さらにその下に灰白色火山灰層（To-a）が認められ、この層が直接水田跡を覆っていた。灰白色火山灰層の水田跡への堆積の仕方や耕作土のあり方は様々であり、詳細は後述する。

調査の方法：検出した遺構は、Ⅰ区（丘陵部）は工事用の基準点（No.２、No.３）を結んだ線を基準とした３ｍ×３ｍのグリッドをもとに、1/20平面図・断面図を作成した。基準点の国家座標はNo.２がＸ＝－158,766.904・Ｙ＝38,627.287、No.３がＸ＝－158,790.120・Ｙ＝38,627.013である。グリッドの南北軸は座標北から約１°東に振れている。基準線の呼称はNo.３杭の北３ｍに位置するNo.１杭を基準として、西がＷ－３、Ｗ－６…、東がＥ－３、Ｅ－６…、北がＮ－３、Ｎ－６…、南がＳ－３、Ｓ－６…とした。Ⅱ～Ⅳ区（沖積地）は平板測量による1/100平面図と1/20断面図を作成した。平面図にはあらかじめ国家座標が明らかとなっている工事用基準杭を記入した。調査区ごとの基準杭と国


昆布沼排水路
永井排水路
合体橋
古川
字黄竜渕
字八幡
Ⅰ区
Ⅱ区
Ⅲ区
Ⅳ区
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
6トレンチ
7トレンチ
8トレンチ
9トレンチ
R31-1
R27
R24
L24
L23
L22
L19
X=
-158,700.000
Y=38,600.000
158,800.000
2.14
2.28
2.23
2.73
2.36
2.36
2.33
3.33
2.22
4.45
2.19
2.22
5m
10m
0
50m

第2図　調査区の位置



第３図　Ⅰ区遺構配置図（1/200）

家座標は以下の通りである。

Ⅱ区……R24杭……X＝－158,760.667　Y＝38,638.216
　　R27杭……X＝－158,740.196　Y＝38,638.216
Ⅲ区……R27杭……X＝－158,740.196　Y＝38,638.216
　　R31－１杭…X＝－158,717.821　Y＝38,640.960
Ⅳ区（南部）…L19杭……X＝－158,817.404　Y＝38,585.298
　　L22杭……X＝－158,787.845　Y＝38,584.400
Ⅳ区（北部）…L23杭……X＝－158,767.809　Y＝38,583.955
　　L24杭……X＝－158,747.751　Y＝38,583.549（日本測地系）

写真撮影は35㎜と６×７のモノクロ・カラーリバーサルおよびデジタルカメラを用いた。

Ⅱ　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、丘陵部のⅠ区では、竪穴住居跡２軒、土壙５基、掘立柱建物跡３棟以上など、沖積地のⅡ～Ⅳ区では、水田跡、溝跡である。遺物は土師器・赤焼土器・須恵器などが整理用平箱で４箱出土した。

以下、丘陵部のⅠ区と沖積地のⅡ～Ⅳ区に分けて記述する。

１．Ⅰ区　Ⅰ区は陣ヶ峰丘陵から北に延びる標高約６ｍの丘陵部に位置する。竪穴住居跡は西側の緩斜面で発見した。調査区中央部では掘立柱建物跡３棟以上を検出した。なお、掘立柱建物跡として構造を把握できたのは３棟のみであるが、このほかにも明らかに柱痕跡を持つ柱穴が若干数ある。

Ａ．古代の遺構

①　竪穴住居跡

【SI01竪穴住居跡】

［重複］SK06・07土壙、SB05掘立柱建物跡、SD08溝跡と重複し、これらよりも古い。

［平面形・規模］住居跡の西側は土壌の流出のために残っていない。残存長で南北5.8m、東西3.4mである。平面形は隅丸方形を基調としていたと推定される。

［堆積土］東側半分に残存しており、地山礫を含む黒色～暗褐色の粘土が自然堆積している。

［壁］南北辺の東側と東辺が残存し、地山を壁としている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは最も残りのよい北東隅で29㎝である。

［床面］残存している東側半分では黒褐色の掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦であるが、西側にやや傾斜している。

［主柱穴］確認できなかった。

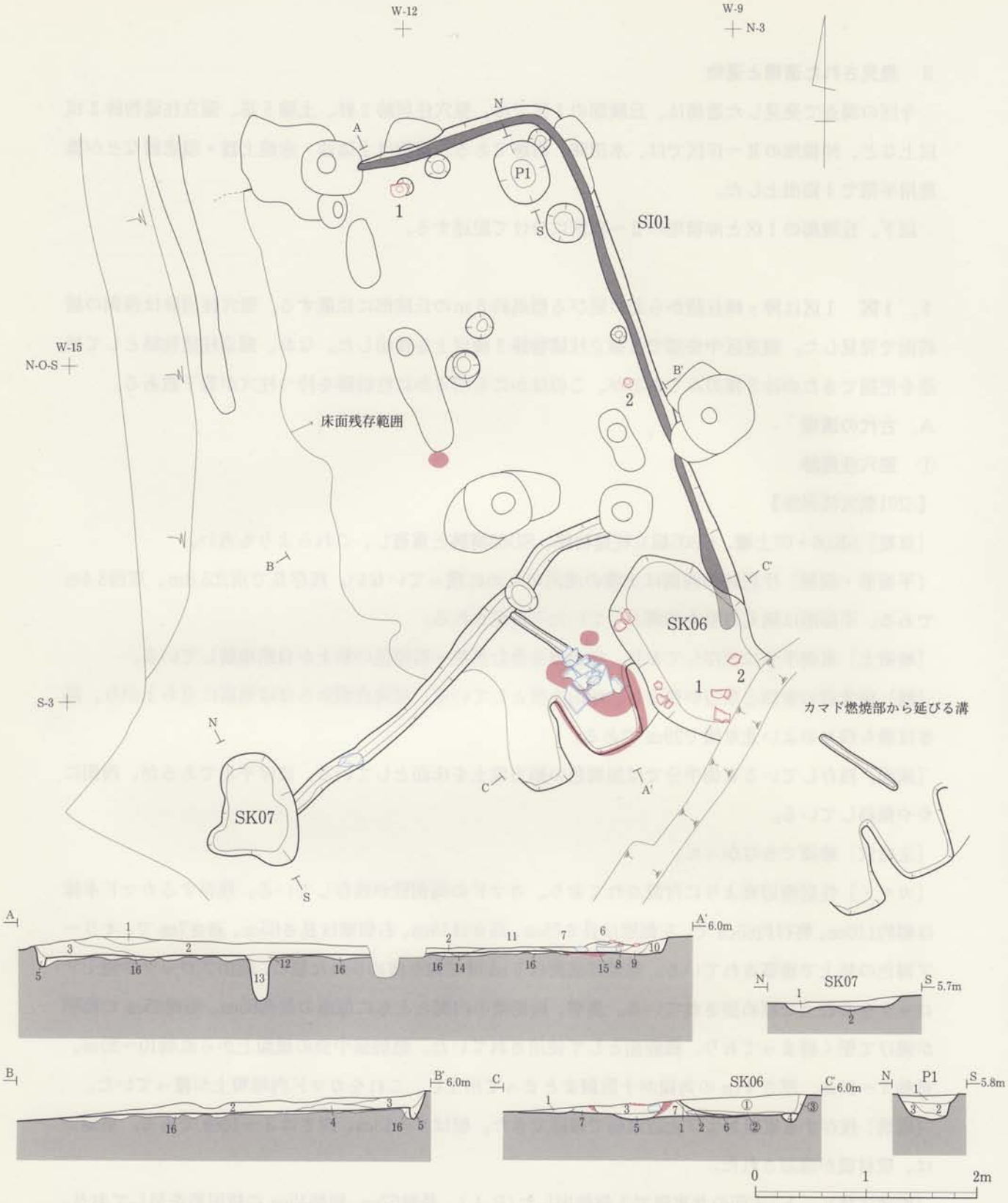
［カマド］住居南辺東よりに付設されており、カマドの両側壁が残存している。残存するカマド本体は幅約110㎝、奥行約65㎝で、左側壁は長さ55㎝、高さは13㎝、右側壁は長さ65㎝、高さ7㎝で、オリーブ褐色の粘土で構築されている。燃焼部底面は５㎝ほど掘り窪められた後に、地山ブロックや焼土ブロックを含む土で埋め戻されている。奥壁、両側壁の内側とともに底面の長軸85㎝、短軸45㎝の範囲が焼けて堅く締まっており、機能面として使用されていた。燃焼部中央の焼面上から直軸10～30㎝、短軸５～20㎝、厚さ４㎝の角礫が十数個まとまって出土し、これをカマド内堆積土が覆っていた。

［周溝］残存する東辺および北辺東側で確認できた。幅は６～13㎝、深さは８～10㎝である。東側では、壁材痕が確認された。

［貯蔵穴状ピット］床面の北東隅で１個検出した（P.１）。長軸57㎝、短軸45㎝の楕円形を呈しており、深さは22㎝である。堆積土は自然堆積の褐色～暗褐色の粘土質シルトで地山礫を含んでいる。

［その他のピット］床面北側で５個検出した（P.２～７）。いずれも平面形は円形で、直径15～34㎝、深さ10～38㎝、堆積土は暗褐色の粘土である。柱痕跡は認められない。

［床面の溝］床面の南側を東西に延びる溝を検出した。幅は15～24㎝、深さ３～６㎝で断面形は皿状を呈し黒褐色の粘土が自然堆積している。この溝と直交し、カマドの前面の焼面に延びる北西方向の



遺構	No.	土色	土性	特徴・混入物など	種類	備考
SI01（A－A'）	1	黒褐色（10YR2/3）	粘土	地山小礫少量含む	住居内堆積土	
	2	黒色（10YR2/1）	粘土	地山粒少量・地山小礫含む	住居内堆積土	
	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土	地山小礫・地山粒少量含む	住居内堆積土	
	4	黒褐色（10YR3/2）	粘土	地山小礫・地山粒少量・炭化物微量含む	住居内堆積土	
	5	暗褐色（10YR3/4）	粘土	地山小礫・地山粒少量含む	掘溝堆積土	
	6	黒褐色（10YR3/2）	粘土	地山小ブロック・焼土ブロック多量・地山小礫含む	カマド内堆積土	
	7	黒褐色（10YR3/1）	粘土	炭化物・焼土粒多量・地山粒・地山小礫含む		
	8	暗褐色（10YR3/3）	粘土	焼土粒多量含む		
	9	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土	焼土粒・地山粒含む		
	10	黒褐色（2.5Y3/2）	粘土	炭化物・焼土粒・地山粒含む		
	11	黒褐色（2.5Y3/2）	粘土	焼土粒・炭化物微量・地山粒・地山小礫含む		
	12	黒褐色（10YR2/2）	粘土	地山粒・地山小ブロック・地山小礫少量含む		
	13	黒褐色（10YR3/2）	粘土	地山粒・地山小礫微量含む　比較的均質な土		
	14	黒褐色（10YR3/2）	粘土	地山粒・地山小礫含む（黒色粘土小ブロック含む）		
	15	暗褐色（7.5YR3/4）	粘土	地山ブロック・地山小礫・焼土小ブロック多量含む		
	16	黒褐色（10YR3/1）	粘土	地山土主体、地山粒・地山小ブロック・地山小礫多量含む		

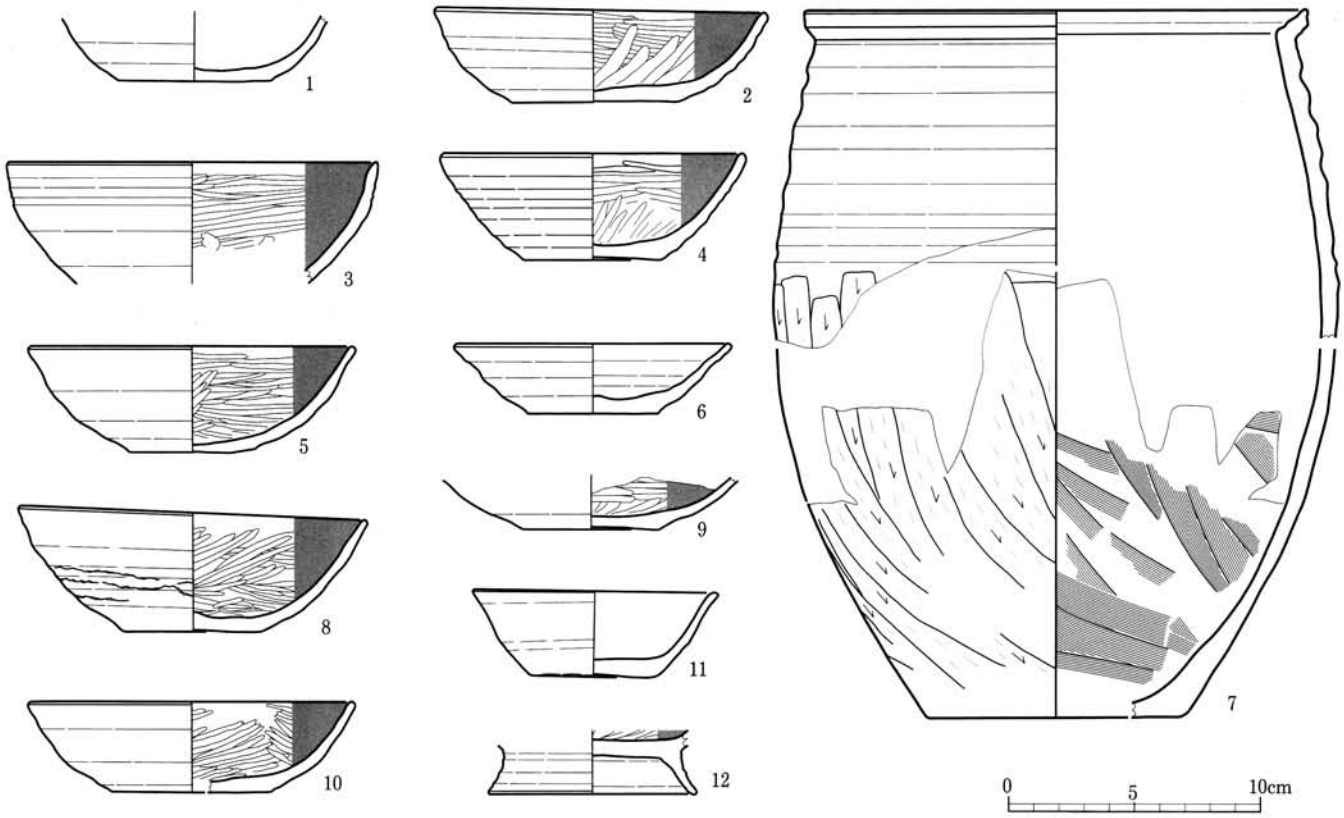
遺構	No.	土色	土性	特徴・混入物など	種類	備考
SK07（N－S）	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土	地山小礫・炭化物少量含む		
	2	暗褐色（10YR3/4）	砂質土	砂の単純層		
SI01－P1（N－S）	1	暗褐色（10YR3/4）	粘質シルト	地山凝灰岩粒やや多く・炭化物・焼土粒微量含む		自然堆積
	2	褐色（10YR4/4）	粘質シルト	地山凝灰岩粒やや多く・炭化物粒微量含む		自然堆積
	3	褐色（10YR4/6）	粘質シルト	地山凝灰岩粒やや多く含む		自然堆積
SI01（カマド横断面）（B－B'）	1	黒褐色（10YR3/2）	粘土	地山粒・地山小礫多量・炭化物・焼土含む		
	2	黒褐色（10YR3/1）	粘土	地山粒・地山小礫少量・炭化物・焼土含む		
	3	黒褐色（10YR2/3）	粘土	炭化物・焼土粒少量含む	カマド内堆積土	
	4	暗褐色（10YR3/3）	粘土	地山粒・地山小礫少量含む	掘溝堆積土	
	5	暗赤褐色（5YR3/6）	粘土	地山粒・地山小礫少量含む	カマド混合焼土	
	6	暗褐色（10YR3/3）	粘土	炭化物多量・地山小ブロック・地山粒・焼土ブロック含む	掘方埋土	
	7	オリーブ褐色（2.5Y4/4）	粘土	地山小ブロック・地山粒・地山小礫からなる	カマド外壁構築土	
SK06（C－C'）	①	暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	炭化物・地山小礫含む		
	②	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト質粘土	炭化物少量・地山小礫・焼土ブロック含む		
	③	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘土	地山小礫・焼土粒微量含む		

第４図　SI01竪穴住居跡・SK06・SK07土壙

溝を検出した。幅7㎝、深さ3～5㎝、長さ85㎝で断面形は「U」字状を呈する。堆積土は黒褐色の粘土で地山礫、炭化物を含んでいる。

［床面の焼面］床面中央部で直径16㎝の円形の焼面を確認した。

［出土遺物］床面から土師器坏2点が出土した。土師器坏は底部がともに回転糸切り無調整、内面に疎らなミガキが施され、黒色処理されている。P.1から土師器坏・赤焼土器坏、P.3から土師器高台坏が出土した。土師器坏は底部が手持ちヘラケズリによって調整されている。内面は疎らなヘラミガキの後、黒色処理されている。赤焼土器土器坏は内面の摩滅が著しい。高台坏は二次加熱により赤変している。カマド内堆積土からは土師器甕1点・坏1点、赤焼土器坏1点が出土した。土師器甕は



No.	器種	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版	登録
1	赤焼土器・坏	SK06・1～3層	外面：ロクロナデ　底部：回転糸切り　内面：コテナデ		6.0	(2.7)	底～体部下半一部	7－1	10
2	土師器・坏	SK06・底面（Po.1）	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ（口端部ミガキ残し）→黒色処理　底部：不明→手持ちヘラケズリ	(13.2)	6.5	3.6	2/3	7－2	9
3	土師器・坏	SI01・1層	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ（口端部ミガキ残し）→黒色処理／火ハジケ	(14.8)		(4.8)	口～体部一部	7－3	5
4	土師器・坏	SI01・床直・C1～2層	外面：ロクロナデ　内面：疎らなヘラミガキ→黒色処理／二次加熱による赤変　底部：回転糸切り	(12.2)	5.5	4.2	1/2	7－4	7
5	土師器・坏	SI01・ｶﾏﾄﾞ内	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ（ミガキ残し多い）→黒色処理／二次加熱による赤変　底部：回転糸切り→一部手持ちヘラケズリ／斑状に一部炭化物付着	(13.0)	5.0	4.2	2/5	7－5	8
6	赤焼土器・坏	SI01・ｶﾏﾄﾞ内	内外面：ロクロナデ／二次加熱による赤変　底部：回転糸切り	(11.0)	(5.2)	2.8	1/3	7－6	6
7	土師器・甕	SI01・カマド内・SK06（Po.2）	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ナデ→工具によるナデ　底部：ケズリ　／二次加熱痕	(20.0)	(10.2)	(27.9)	1/4	7－7	2・4
8	土師器・坏	SI01・床面(Po.1)	外面：ロクロナデ　内面：コテナデ→疎らなヘラミガキ→黒色処理　底部：回転糸切り	13.8	5.4	4.7	ほぼ完形	7－8	1
9	土師器・坏	SI01・床面(Po.2)	外面：ロクロナデ　内面：疎らなヘラミガキ→黒色処理 底部：回転糸切り		(5.4)		1/2	7－9	2(2)
10	土師器・坏	SI01・Pit.1	外面：ロクロナデ　内面：疎らなヘラミガキ→黒色処理　底部：不明→手持ちヘラケズリ	(13.0)	(6.4)	3.6	2/5	7－10	1(2)
11	赤焼土器・坏	SI01・Pit.1・床直	外面：ロクロナデ　内面：摩滅　底部：回転糸切り	(9.8)	4.9	3.4	2/3	7－11	11
12	土師器・高台坏	SI01・Pit.3	外面：ロクロナデ　内面：疎らなヘラミガキ→黒色処理／二次加熱による赤変　底部：回転糸切り		(8.3)	(2.3)	底～高台部1/3	7－12	3
	縄文土器・深鉢	SI01・堆積層	外面：縄文（LR）　器厚：5㎜				胴部片	7－13	11

第5図　SI01竪穴住居跡・SK06土壙出土遺物

SK06土壙底面から出土した破片と接合した。土師器坏・赤焼土器坏ともに二次加熱による赤変が見られる。堆積土及び床面直上からは、土師器坏２点が出土している。土師器坏はともに、二次加熱の痕跡がある。

【SI02竪穴住居跡】

［平面形・規模］東辺と南辺の一部を除いて後世の削平のため壊されている。残存長で南北4.3m、東西1.9mである。平面形は隅丸方形を基調としていたと推定される。

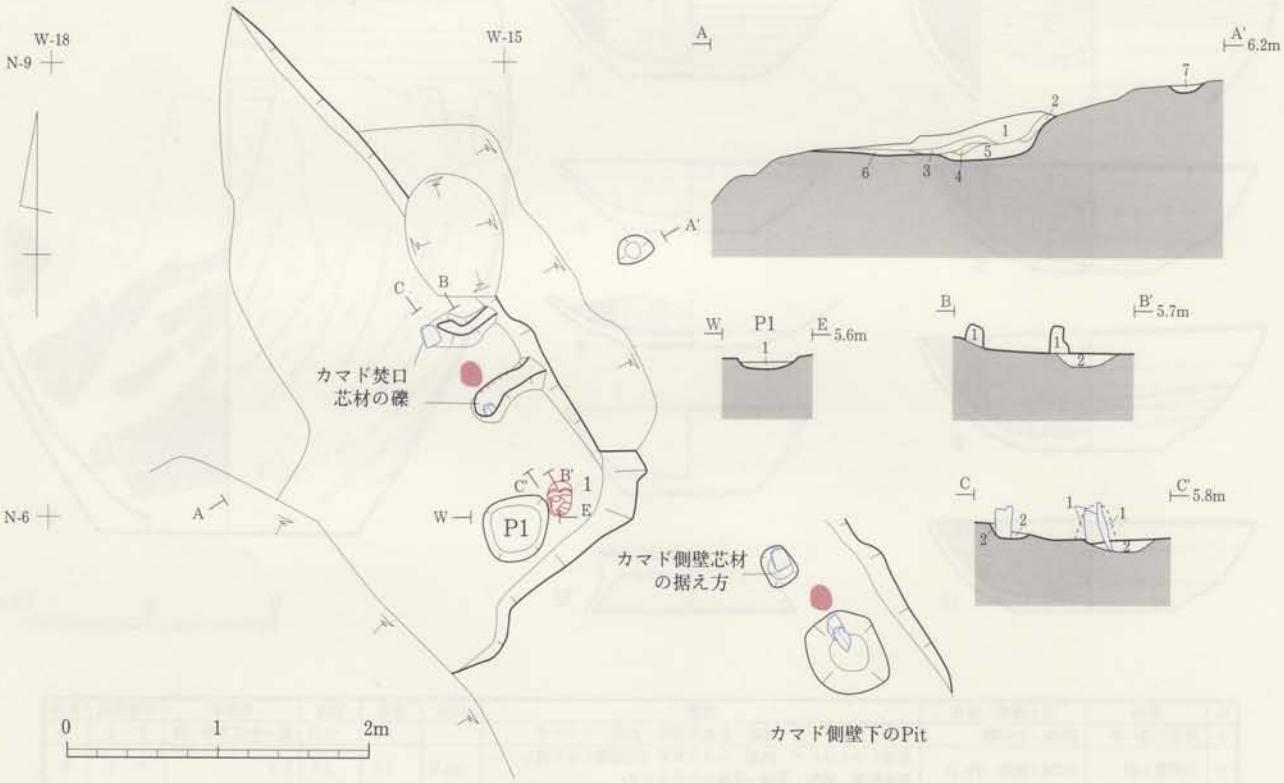
［堆積土］南東側に残存しており、炭化物を少量含む黒褐色のシルトが自然堆積している。

［壁］東辺と南辺の一部が残存し、地山を壁としている。床面から外側に開きながら立ち上がり、高さは最も残りのよい南東隅で34cm である。

［床面］残存している南東側では地山を床面としている。ほぼ平坦である。

［主柱穴］確認できなかった。

［カマド］住居東辺南よりに付設されており、カマドの両側の側壁と煙出ピットが残存している。残



SI02　A－A'

No.	土　色	土性	特徴・混入物など	種　類	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物少量・地山砂粒含む	住居内堆積土	
2	にぶい黄褐色（10YR6/4）	シルト	炭化物少量・焼土小ブロック含む	カマド崩落土	
3	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物多量・焼土小ブロック含む　1層の土の粒少量混じる	カマド崩落土	
4	にぶい橙（5YR6/4）	シルト	焼土主体の土　3,5層の土少量混じる	カマド崩落土	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土小ブロック・炭化物と1層土の混合土　灰少量含む	カマド崩落土	
6			うすい炭化物層・地山小ブロック・焼土粒少量含む	住居内堆積土	
7	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	地山(旧表土)砂粒・炭化物含む	煙出Pit堆積土	

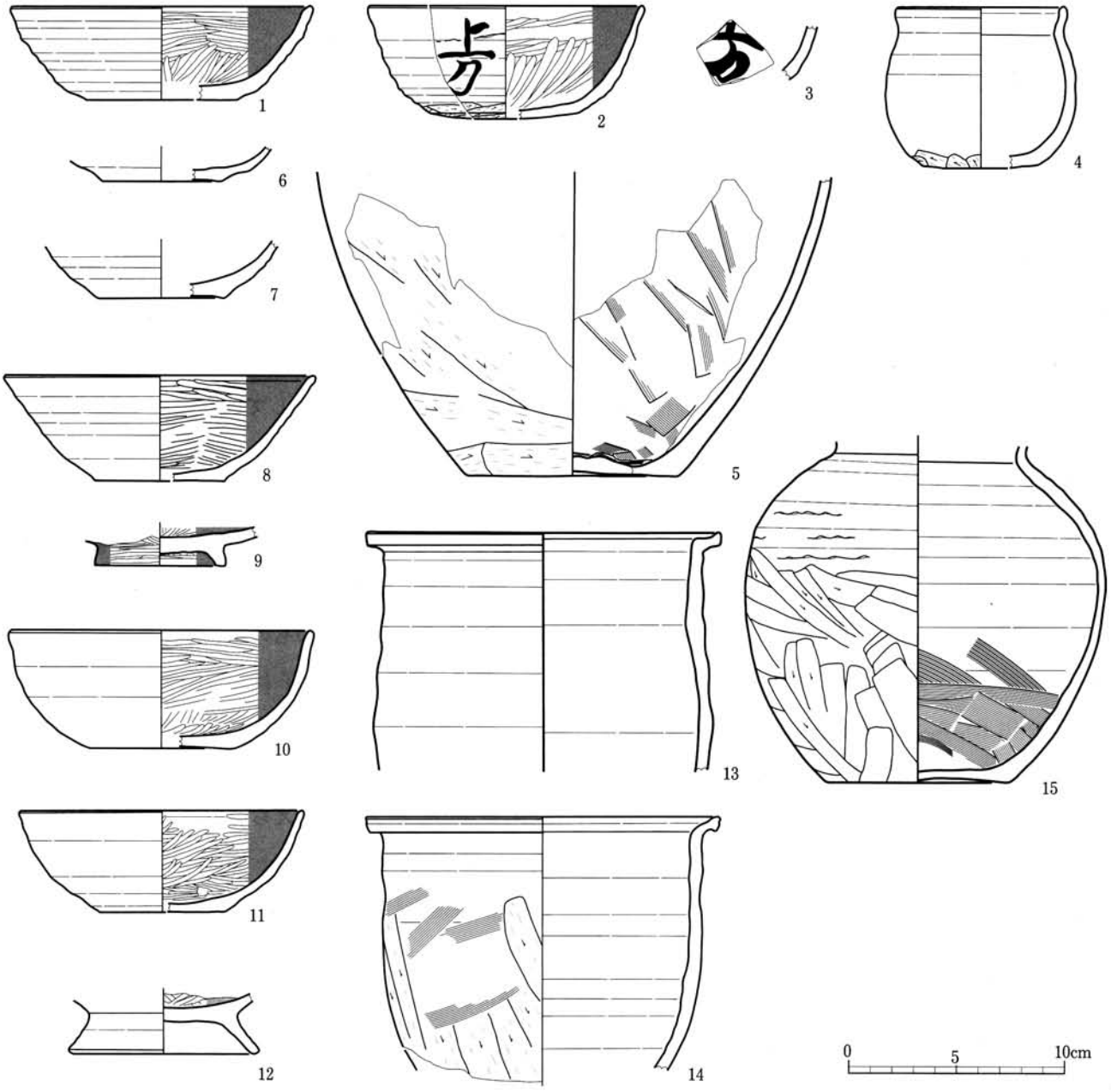
SI02－P1　E－W

No.	土　色	土性	特徴・混入物など	種　類	備　考
1	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	地山粒・炭化物含む		焚口部

SI02　カマドC－C'

No.	土　色	土性	特徴・混入物など	種　類	備　考
1	黄褐色（2.5Y5/3）	シルト	地山小礫少量含む	側壁構築土	
2	暗灰黄色（2.5Y4/2）	シルト	地山小ブロック・地山小礫多量含む	側壁芯材　埋土？	

第６図　SI02竪穴住居跡



No.	器種	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版	登録
1	土師器・坏	堆積層	外面：ロクロナデ　内面：疎らなヘラミガキ（口端部を除く）→黒色処理／二次加熱による赤変　底部：回転糸切り	(14.0)	(7.0)	4.3	1/4	8－1	14
2	土師器・坏	堆積層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：疎らなヘラミガキ→黒色処理　底部：不明→手持ちヘラケズリ　外体部墨書「上万」	(12.8)	(6.8)	5.2	1/2	8－2	3
3	土師器・坏	堆積層	外面：ロクロナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　外体部墨書「□上。」「万」					8－3	15
4	土師器・小型甕	堆積層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ／頸部に炭化物被膜　内面：ロクロナテ／底近くに炭化物付着・火ハジケ　底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ／二次加熱痕	(8.0)	(5.4)	7.4	1/2	8－4	2
5	土師器・甕	堆積層	外面：ヘラケズリ→ナデ　内面：ナデ　底部：ナデ／二次加熱痕		(9.8)	(13.9)	底1/3～体部下半一部	8－5	5
6	赤焼土器・坏	堆積層	外面：ロクロナデ　内面：コテナデ／内面に炭化物付着（灯火具？）　底部：回転糸切り		5.5		底～体下部	8－6	13
7	赤焼土器・坏	堆積層	外面：ロクロナデ　内面：コテナデ／内面に炭化物付着(灯火具？)　底部：回転糸切り		(5.8)		底～体下部	8－7	12
8	土師器・坏	堆積層	外面：ロクロナデ／下部に炭化物被膜　内面：疎らなヘラミガキ（口端部を除く）→黒色処理　底部：回転糸切り	(14.5)	(6.0)	4.9	1/4	8－8	10
9	土師器・高台付	堆積層	内外面：疎らなヘラミガキ→黒色処理　底部：ロクロナデ→疎らなヘラミガキ→黒色処理		6.1		底部～高台	8－9	11
10	土師器・坏	C-1・2層	外面：ロクロナデ／炭化物ヨゴレ　内面：ヘラミガキ（口端部を除く）→黒色処理／二次加熱による赤変　底部：回転糸切り	(14.2)	(6.6)	5.5	1/4	8－10	9
11	土師器・坏	カマド崩壊土	外面：ロクロナデ／炭化物ヨゴレ　内面：疎らなヘラミガキ（口端部を除く）→黒色処理／炭化物付着　底部：回転糸切り	(13.2)	(5.8)	4.7	1/3	8－11	8
12	土師器・高台坏	カマド崩壊土	外面：ロクロナデ／炭化物ヨゴレ　内面：疎らなヘラミガキ→黒色処理／火ハジケ　底部：不明→ロクロナデ		(8.8)		底部～高台	8－12	7
13	土師器・甕	カマド崩壊土	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ（下部）／下部二次加熱痕　内面：工具によるロクロナデ	(16.4)		(11.0)	口縁1/6～体上半一部	8－13	4
14	土師器・甕	カマド崩壊土	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ→ナデ／下部二次加熱痕　内面：ロクロナデ	(16.4)		(12.2)	口2/5～体部一部	8－14	1
15	須恵器・広口壺	床面（Po.1）	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ハケメ→ナデ　底部：ナデ　最大径（16.7）		8.4	(15.5)	体～底部2/3	8－15	6
	須恵器・甕	堆積層	外面：格子タタキ　内面：アテ→ハケメ→ナデ　器厚：5mm				胴部３片	8-16・17・18	18~20
	須恵器・甕	C－1・2層	外面：ケズリ　内面：ナデ　器厚：7mm				胴部片	8－19	17
	須恵器・壺	堆積層	内外面：ロクロナデ				胴部片	8－20	21
	鉄滓	堆積層						8－21	22
	縄文土器・深鉢	C－1・2層	外面：非結束横帯羽状縄文（LR、RL）　器厚：6mm				胴部片	8－22	16

第７図　SI02竪穴住居跡出土遺物

存するカマド本体は幅約80cm、奥行約70cmで、左側壁は長さ60cm、高さは15cm、右側壁は長さ55cm、高さ18cmである。焚口部の両側には、長さ20～32cm、厚さ4～12cmの板状あるいは柱状の礫がほぼ直立して残存している。柱状の礫は左側壁で長軸25cm、短軸20cm、深さ10cmの楕円形のピットに、右側壁で長軸56cm、短軸48cm、深さ8cmの楕円形のピットに据えられている。これらの礫を芯材として、黄褐色シルトによってカマドは構築されている。燃焼部底面は床面よりも4cmほど低く、長軸18cm、短軸14cmの楕円形の範囲が焼けて堅く締まっている。

カマド奥壁から75cmのところで、煙出ピットが検出された。煙出ピットは長軸24cm、短軸18cmの楕円形を呈し、深さは4cmで地山礫と炭化物を含む黒褐色のシルトが自然堆積している。

［周溝］検出されなかった。

［貯蔵穴状ピット］カマドの右側で1個検出した（P1）。長軸48cm、短軸42cmの不整楕円形を呈しており、深さは7cmである。堆積土は自然堆積の黄灰色のシルトで地山礫、炭化物を含んでいる。

［出土遺物］床面から須恵器広口壷1点が出土した。口頸部は欠失している。カマド崩壊土中からは、土師器甕2点・坏1点・高台坏1点が出土した。土師器甕2点は同一口径のものである。カマド出土の土師器坏・高台坏ともに炭化物の付着や火ハジケの痕跡がある。堆積土からは比較的まとまって遺物が出土した。土師器坏5点、高台坏（両黒）1点、大型・小型甕2点、赤焼土器坏2点、須恵器甕3個体5片、鉄滓1塊である。うち土師器坏2点には「上万」、「□上ヵ万」と墨書されていた。赤焼土器坏は2点とも内面に炭化物が付着（図版8-6b・7b）しており、灯火具と考えられる。土師器小型甕は器高がわずかに7.4cmしかないが、頸部には炭化物の被膜（図版8-4）があり、底部には二次加熱の痕跡が残されている。土師器坏5点は底部が回転糸切り無調整のものと手持ちヘラケズリを加えたものとがある。内面のヘラミガキは疎らでミガキ残しが際立っているものが多い。特に口端部はロクロナデのまま残され、ほとんど磨かれていない。二次加熱により赤変しているものや炭化物の付着するものが目立つ。両黒土師器高台坏は疎らなヘラミガキの後、黒色処理が施されている。須恵器では甕の破片が3個体5片出土している。

② 土壙（第4図）

【SK06土壙】SI01竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。残存長で長軸1.8m、短軸1.1m、深さ28cmで平面形は不整楕円形を呈する。堆積土は暗褐色から黒褐色の粘土が自然堆積している。底面直上は焼土粒を含むオリーブ黒色土が堆積している。

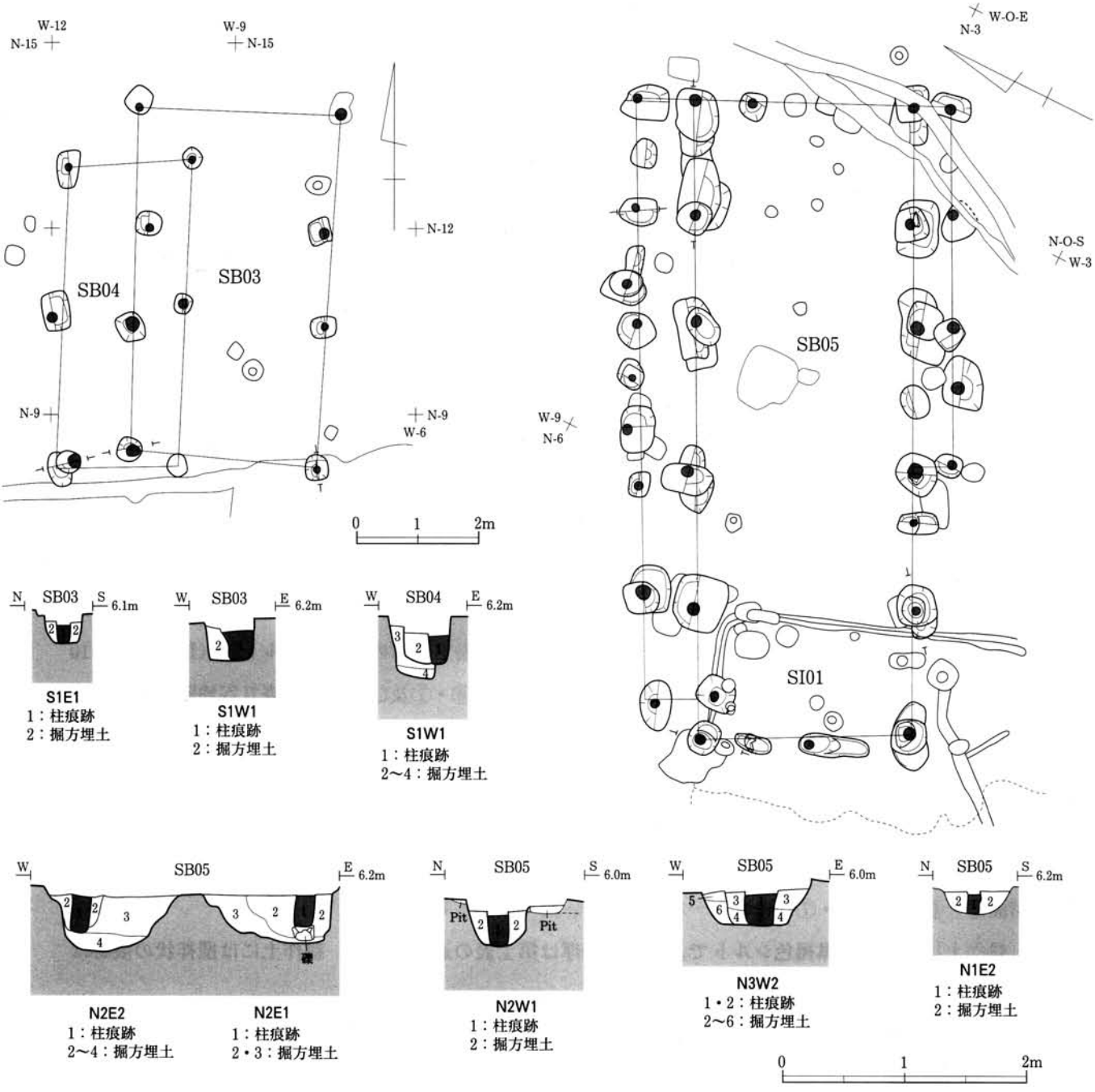
遺物は土壙底面から土師器坏1点が出土した。堆積土からは赤焼土器坏1点が出土している。

【SK07土壙】SI01竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。長軸110cm、短軸85cmで平面形は不整楕円形、断面形は深さ8cmの皿状を呈する。底面は若干の凹凸があり、中央部の窪んだ部分に厚さ3cmの純粋な砂層が堆積し、その上に地山礫、炭化物を少量含む黒褐色の粘土が堆積している。遺物は出土していない。

B．近世以降の遺構

・掘立柱建物跡

3棟以上の掘立柱建物跡建物跡（第8図）を検出した。このうち、SB05掘立柱建物跡建物跡は北



遺構名	SB03掘立柱建物跡	SB04掘立柱建物跡	SB05掘立柱建物跡
確認面	暗褐色～黄褐色シルト（標高約6.0m）		
規模	南北３間×東西１間	南北２間×東西１間	東西５間×南北３間（母屋）　縁（南・北）を伴う
方向	南北線	南北棟	東西棟
	N－７°－E（東桁）	N－５°－E（東桁）	N－20°－W（東妻）
重複	SB04掘立柱建物跡（新旧不明）	SB05掘立柱建物跡（新旧不明）	SI01竪穴住居跡（SB05が新しい）
桁行	総長5.8m（東側柱列）	総長4.9m（東側柱列）	総長10.3m（母屋北側柱列）
	1.9・1.6・2.3m（北から）	2.3・2.6m（北から）	1.8・1.7→2.4・2.2・2.2m（東から）
梁行	3.3m（北妻）	2.0m（北妻）	総長3.6m（母屋東妻柱列）
			0.9・1.3・1.4m（北から）
柱穴	８個検出	６個検出	16個検出
	長方形基調	長方形～楕円形	方形基調（変異多い）
	長軸40～55cm	長軸35～65cm	長軸45～95cm
	短軸35～45cm	短軸30～45cm	短軸30～80cm
	深さ10～42cm	深さ13～39cm	深さ29cm ～45cm
柱穴掘方埋土	褐色～黄褐色シルト（含地山ブロック）	褐色シルト（含地山ブロック・炭化物）	暗褐色粘土（含地山ブロック・礫）
柱痕跡	すべての柱穴	南東隅の除く５個	攪乱以外のすべての柱穴
	円形	円形	円形
	径14～24cm	径10～20cm	径８～20cm
柱痕跡堆積土	褐色～黄褐色シルト（含地山ブロック・炭化物）	暗褐色シルト（含地山ブロック・炭化物）	黒褐色～にぶい黄褐色粘土（含地山ブロック・礫）
出土遺物	なし	なし	陶器碗１片　角釘状鉄製品１点

第８図　SB03・SB04・SB05掘立柱建物跡

縁・南縁を伴う建物で、同じ場所で１回以上建て替えられている。この建物跡の柱穴掘方埋土から近世陶器碗１片ほかが出土している。

２．Ⅱ～Ⅳ区

Ⅱ～Ⅳ区の灰白色火山灰層（Vb層）下からは古代の水田跡（SF09）、旧谷地（SX11）の灰白色火山灰層降下後のVa層から土師器・赤焼土器・須恵器、第Ⅱ層下で溝跡（SD08・10）が検出された。

Ａ．古代の遺構

①　水田跡

【SF09水田跡】

［確認面］Ⅱ区で地表下1.9～2.2m、Ⅲ区で地表下0.8～1.1m、Ⅳ区で地表下0.7～0.9mの灰白色火山灰１次堆積層（Vb層）で、水田跡の畦畔状遺構を確認した。

［堆積土］Ⅱ区では、水田耕作土をラミナ状の灰白色火山灰１次堆積層（Vb層）が約20cm 直接覆っている。この１次堆積層は畦畔状遺構の高まりを越えるものはない。その上には汚れた灰白色火山灰２～３次堆積層（Va1～a2層）が覆い、さらにその上を旧表土起源の黒褐色シルト層（Ⅳ層）が約10cm ほど覆っていた。同様の堆積はⅢ区丘陵寄りの田面⑤・⑥・⑦及びⅣ区丘陵寄り谷地頭の田面⑫で見られた。丘陵から離れたⅢ区田面⑧・⑨・⑩・⑪及びⅣ区田面⑬・⑭・⑮では、灰白色火山灰は次第に団塊状の散漫な堆積に変化していく。

［重複］SD08・10溝跡と重複する。SD08・10溝跡が新しい。

［田面標高］畦畔で区画された田面が15枚確認された。個々の標高は第１表の通りである。このうち、田面②・⑥、田面③・⑦はほぼ同一水準であり、同一田面と考えられる。

［耕作土］耕作土は黒褐色シルトで、個々の層厚は第１表の通りである。耕作土には攪拌状の痕跡は残されておらず、よくこなれた耕土である。

［耕作土底面］Ⅱ区丘陵寄りの田面③の耕作土底面は、丘陵部の地山～旧表土の漸移層部分に相当するにぶい黄褐色シルト層（Ⅷb層）である。田面②の耕作土底面はにぶい黄褐色シルト層（Ⅷb層）～黒褐色シルト層（Ⅶa層）である。谷側の黒褐色シルト中には、截断面のある径10cm ほどの材が含まれていた。このことから谷側への盛土の一部と考えられる。田面①の耕作土底面は黒褐色シルト（Ⅶa層）～暗褐色粘土質シルト（Ⅶb層）の盛土と旧表土（Ⅷa層）である。Ⅲ区田面⑤～⑦の底面は旧表土の黒褐色シルト質粘土である。一部、截断面ある材などが含まれ、盛土整地に由来すると見られる土壌もあったが、明確に旧表土から識別することはできなかった。田面⑧～⑪の底面は概ね、ラミナ状をなす水成堆積のいわゆるスクモ層（Ⅷa1層）となっていた。耕作土がこれらの底面のスクモ土壌を切る形で形成されていた。Ⅳ区田面⑫～⑮の底面は旧表土の黒褐色シルト質粘土である。一部、截断面ある材などが含まれ、盛土整地に由来すると見られる土壌もあったが、明確に旧表土から識別

調査区	Ⅱ区				Ⅲ区							Ⅳ区			
田面	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
標高（m）	1.3～1.4	1.1～1.2	1.4～1.45	1.15～1.25	1.2～1.25	1.3	1.4～1.45	1.28	1.25	1.25	1.15～1.3	1.2～1.3	1.37	1.32	1.45～1.5
耕作土層厚（cm）	10～20	10～20	10	10	10～15	10～20	10	15	10	5～15	10	10～20	15	15	15

第１表　水田属性表

することはできなかった。

［畦畔状遺構］Ⅱ区畦畔は上幅30～70㎝、基底部で60～120㎝である。田面①と田面②との間の畦畔内からは炭化した径１㎝程の篠竹(？)がまとまって検出された。Ⅲ区畦畦は上幅70～120㎝、基底部で90～140㎝である。田面⑨の西側大畦畔には土留のためにいれたと見られる材（図版5-4）が見つかった。

Ⅳ区畦畔は上幅70～120㎝、基底部で90～140㎝ である。SX11谷地跡と谷地頭の田面⑫との間の畦畔状遺構の残存状況が特に良好である。

［出土遺物］なし。

② 旧谷地

【SX11旧谷地】

丘陵の西側縁辺を取り巻くように、幅９～12ｍの旧谷地が検出された。確認面の灰白色火山灰層は上部と下部に分けられ、上部は汚れた灰白色火山灰層（Va層）、下部はラミナ状の純堆積（Vb層）であった。灰白色火山灰層以下はラミナ状水成堆積の黒褐色シルト層で、層中には多量の未分解植物質が含まれていた。この層の底面には直角に截断された材（図版6-4・5）や、斜めに枝打ちされた木（図版6-6）が見つかった。これらは水田を開く際に伐採された木材の一部が投棄されたものと考えられた。土器や木製品の類は発見されなかった。

［出土遺物］SX11谷地跡の遺構確認の際、比較的上部のよごれた灰白色火山灰層（Va層）中から、土師器坏約20～30個体分を中心に、若干の赤焼土器坏・鉢、土師器甕、須恵器甕・壷が出土した。このうち、土師器坏は略完形品を含め最も多く、面的に押し潰された状態で発見されたもの（第14図１、２）があり、人為的に投棄されたものも含まれている。下部のラミナ状をなす水成堆積の灰白色火山灰層中から、遺物は出土していない。

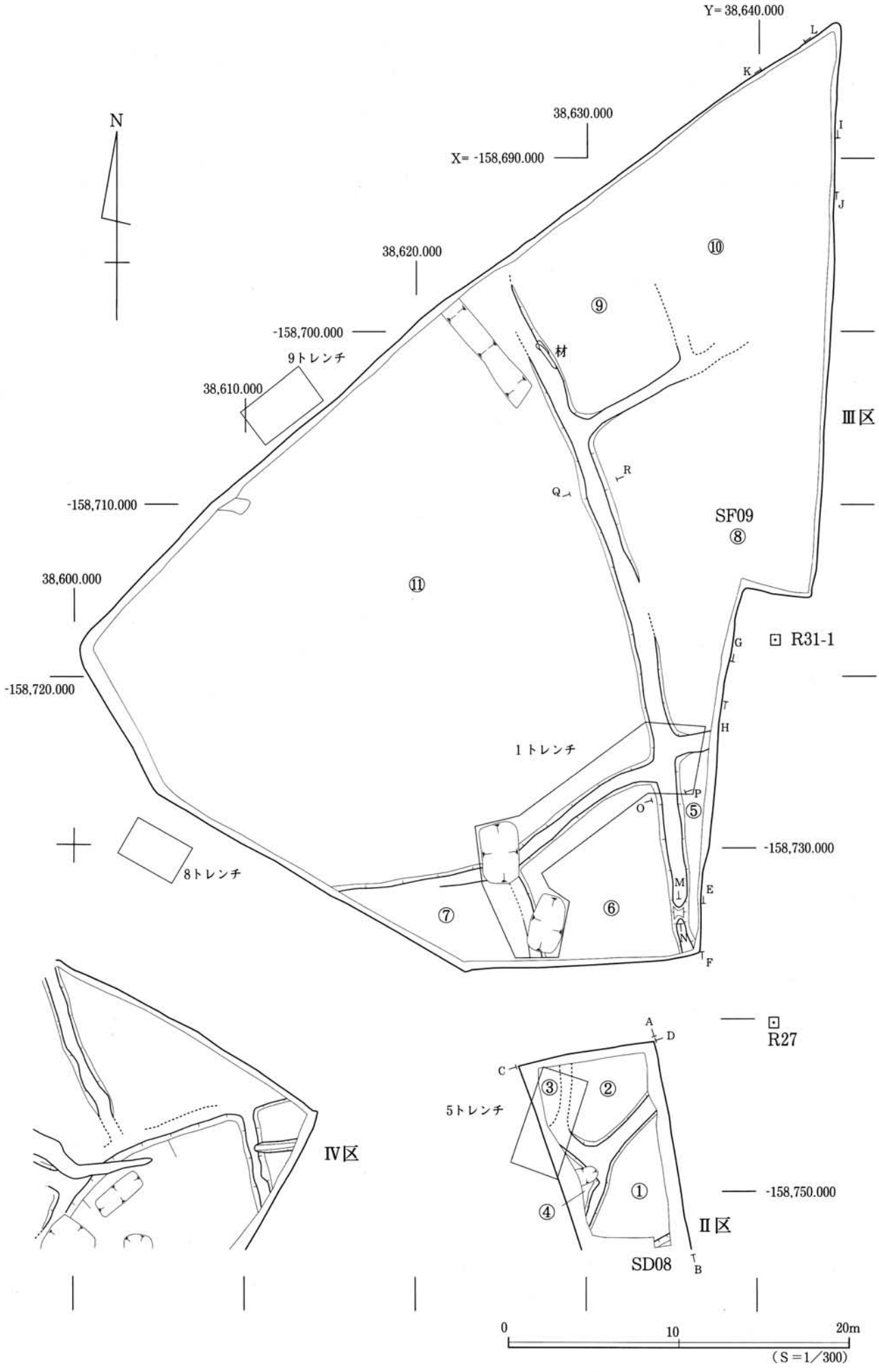
Va層から出土した土師器坏で、底部に二次加熱の痕跡の見られるものや内面に火ハジケの痕跡が認められるもの、外面に炭化物が薄い被膜として付着しているものなどがある。赤焼土器鉢では、灯火具として用いられた痕跡（図版９－8b）のあるものも出土している。これらの中には、墨書の施されたものが４点あり、１は「□万ヵ」、２は「大」、９の文字は「聚」か「衆」の残画、10は「□廿ヵ」である。

B．時期不明の遺構

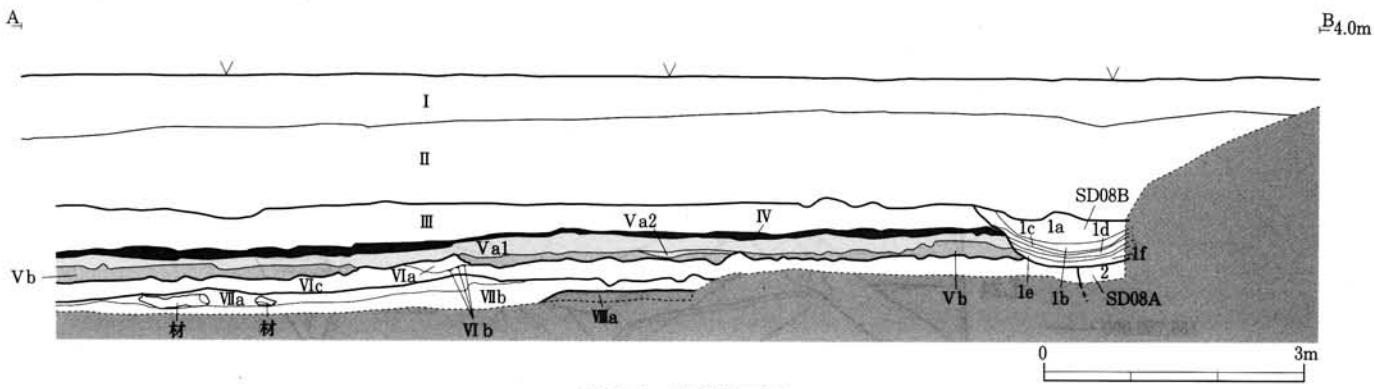
・溝跡

【SD08Ａ・Ｂ溝跡】Ⅱ区南東部で一部が確認された。溝は調査区外へと延びている。Ⅲ層より新しく、Ⅱ層より古い。新旧ふたつの溝跡が重なっており、SD08Ａ溝跡は埋め戻され、SD08Ｂ溝跡が作られている。新しい溝跡SD08Ｂの上幅は1.8ｍ以上、ラミナ状をなす水成堆積である。出土遺物はない。

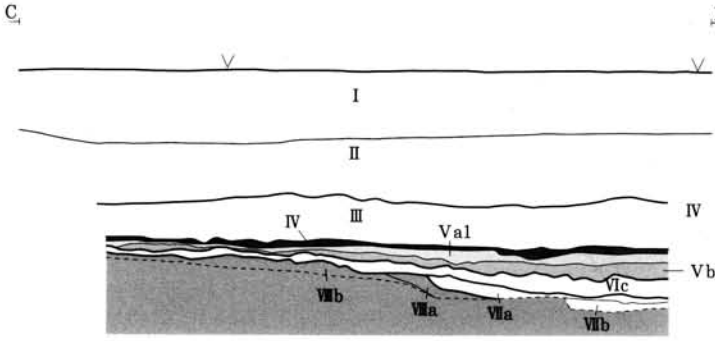
【SD10溝跡】Ⅳ区北側で確認された。溝は調査区外へと延びている。第Ⅲｂ層を掘込面とし、SF09水田跡より新しい。溝跡は調査区北東部からほぼ西に進み、北西方向に進路を変えて、北西部で２つに分岐する。上幅は1.6ｍ、下幅0.2ｍ、深さ0.6ｍで、断面形はほぼＶ字状をなす。下部はラミナ状をなす水成堆積である。出土遺物はない。



第9図　Ⅱ・Ⅲ区　ＳＤ08溝跡・ＳＦ09水田跡



①Ⅱ区　東壁断面図



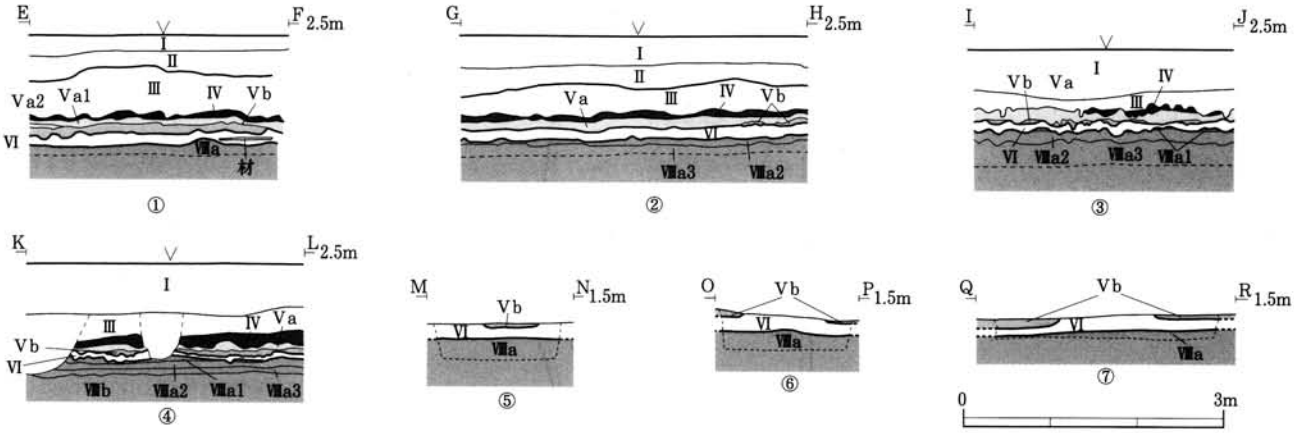
②Ⅱ区　北壁断面図

層名	土　色	土　性	備　考
1a～f	オリーブ黒色(5Y3/2)	粘土質シルト	SD08B堆積土。下部はラミナ状の水成堆積
2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	SD08A堆積土。埋め戻し。～5mmの黄褐色礫を少し含む

SD08堆積土

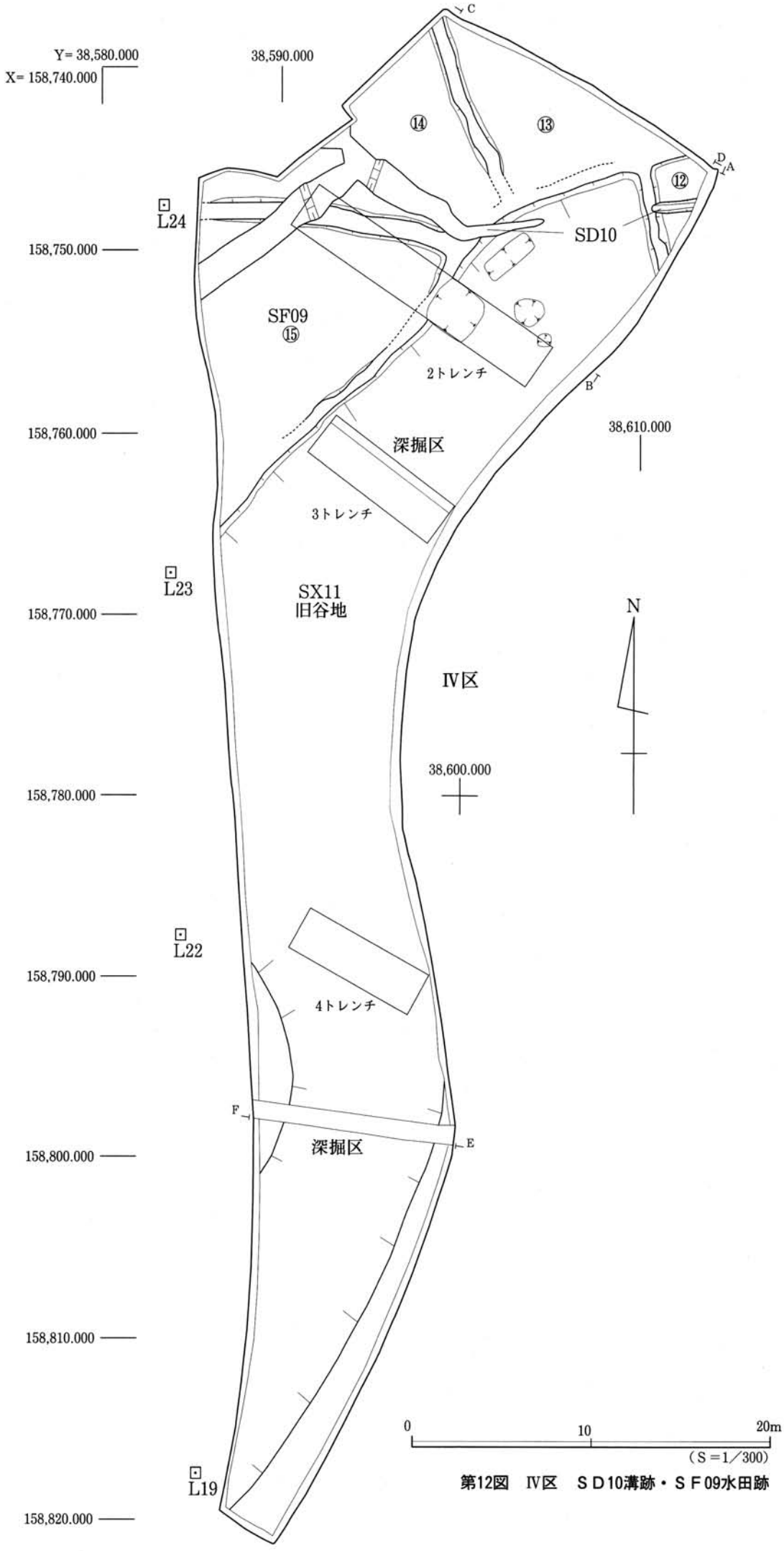
層名	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	現耕作土。ややしまる。やや粘性あり
Ⅱ	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂礫	崖錐性堆積物。崩れやすい。明黄褐色ブロックを含む。～5mmの黄褐色礫を多く含む。下部は水分が染み出ている
Ⅲ	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	沖積層。～20mmのグライ化した礫を含む。水分を多く含む
Ⅳ	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	旧表土。～50mmのグライ化した礫を含む。オリーブ黒色ブロックを含む。水分を多く含む
Va1	灰色（7.5Y5/1）	砂質シルト	灰白色火山灰ブロックを多く含む。～40mmのグライ化した礫をまばらに含む。水分を多く含む
Va2	黄灰色（2.5Y5/1）	砂質シルト	灰白色火山灰ブロックを非常に多く含む。水分を多く含む。
Vb	灰白色（5Y7/1）	（火山灰層）	灰白色火山灰1次堆積層。灰白色火山灰がラミナ状に水成堆積している
VIa	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	SF09水田跡畦畔構築土。～20mmのグライ化した礫を含む。植物根等から入り込んだ灰白色火山灰粒を若干含む
VIb	黒色（2.5Y2/1）	（炭化物層）	径1cm程の篠竹状炭化物の薄層
VIc	黒褐色（10YR3/2）	シルト	SF09水田跡耕作土。～5mmほどの礫をわずかに含む。植物根等から入り込んだ灰白色火山灰粒を少し含む。水分を含む
VIIa	黒褐色（10YR2/2）	シルト	SF09水田跡造成時の盛土。截断面のある材が含まれる。植物根等から入り込んだ灰白色火山灰粒を少し含む。水分を含む
VIIb	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	SF09水田造成時の盛土。植物根等から入り込んだ灰白色火山灰粒を少し含む。水分を含む
VIIa	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト質粘土	SF09水田造成時の旧表土。しまりがある
VIIb	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山漸移層。しまりがある

第10図　Ⅱ区　断面図

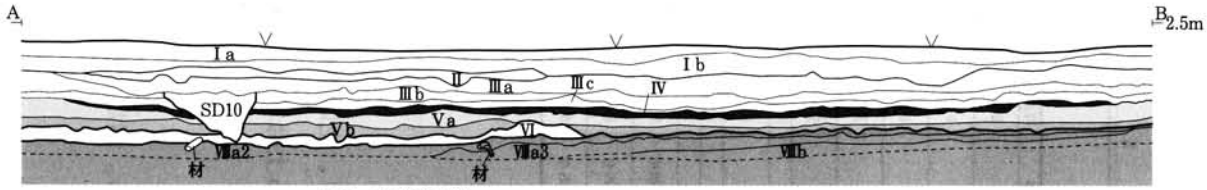


層名	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	灰黄褐色（10YR4/2）	砂質シルト	現耕作土。ややしまる。やや粘性あり
Ⅱ	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂礫	崖錐性堆積物。崩れやすい。明黄褐色ブロックを含む。～5mmの黄褐色礫を多く含む
Ⅲ	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	沖積層。～20mmのグライ化した礫を含む。しまりあり
Ⅳ	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	旧表土。ややしまりあり
Va	灰色（7.5Y5/1）	砂質シルト	灰白色火山灰ブロックを多く含む。～40mmのグライ化した礫をまばらに含む
Vb	灰白色（5Y7/1）	（火山灰層）	灰白色火山灰1次堆積層。灰白色火山灰がラミナ状に水成堆積しているVb層（断面E－F）と団塊状に堆積しているVb´層（断面G－H、I－J、K－L）とに層相は変化する
VI	黒褐色（10YR3/2）	シルト	SF09水田跡耕作土。～5mmほどの礫をわずかに含む。
VIIa1	暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	ラミナ状をなす水成堆積層。植物遺存体に富む。水分に富む。いわゆるスクモ層。低所（断面I－J、K－L）にのみ分布
VIIa2	黒褐色（10YR3/2）	シルト質粘土	旧表土。しまりがある
VIIa3	黒褐色（2.5YR3/2）	シルト質粘土	旧表土。しまりがある
VIIb	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山漸移層。しまりがある

第11図　Ⅲ区　断面図



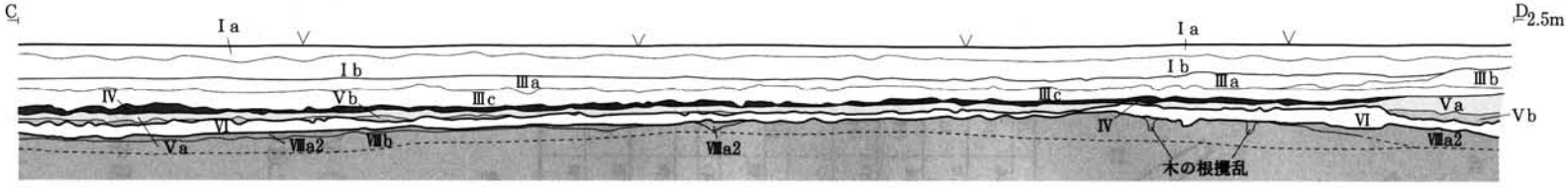
第12図　Ⅳ区　ＳＤ10溝跡・ＳＦ09水田跡



Ⅳ区　東壁断面図

層名	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	下部は水成堆積

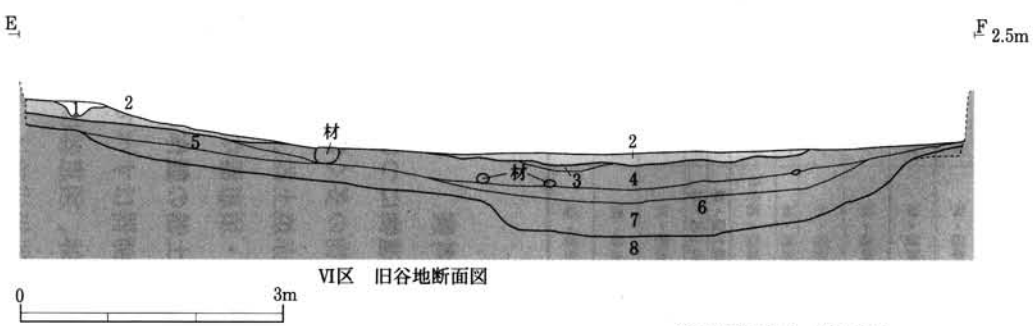
SD10堆積土



Ⅵ区　北壁断面図

層名	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	現耕作土。ややしまる。やや粘性あり
Ⅰb	褐灰色（10YR4/1）	シルト	現床土。グライ化した礫（～5mm）を含む。ややしまる。やや粘性あり
Ⅱ	にぶい黄褐色（10YR4/3）	砂礫	崖錐性堆積物。崩れやすい。明黄褐色ブロックを含む。～5mmの黄褐色礫を多く含む。東壁北側にのみ分布
Ⅲa	オリーブ黒色（5Y3/2）	粘土質シルト	沖積層。～5mmのグライ化した礫を含む。しまりあり
Ⅲb	オリーブ黒色（5Y3/1）	粘土質シルト	沖積層。～30mmのグライ化した礫を多く含む。しまりあり
Ⅲc	オリーブ黒色（7.5Y3/1）	粘土質シルト	沖積層。～70mmのグライ化した礫を多く含む。しまりあり
Ⅳ	黒褐色（10YR3/1）	粘土質シルト	旧表土。～50mmのグライ化した礫を多く含む。オリーブ黒色ブロックを含む
Ⅴa	灰色（7.5Y5/1）	砂質シルト	灰白色火山灰ブロックを多く含む。～40mmのグライ化した礫をまばらに含む。水分を多く含む
Ⅴb	灰白色（5Y7/1）	（火山灰層）	灰白色火山灰1次堆積層。灰白色火山灰がラミナ状に水成堆積している
Ⅵ	黒褐色（10YR3/2）	シルト	SF09水田跡耕作土。～5mmほどの礫をわずかに含む。植物根等から入り込んだ灰白色火山灰粒を少し含む。水分を含む
Ⅶa2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	SF09水田造成時の旧表土。しまりがある。水田下には截断面ある材が認められ、盛土（Ⅶ層）と見られるが、肉眼では区別できなかった
Ⅶa3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	礫はほとんど含まない。しまりがある。水の影響を強く受ける
Ⅶb	黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山漸移層。しまりがある。水の影響を強く受ける

Ⅳ区　堆積土

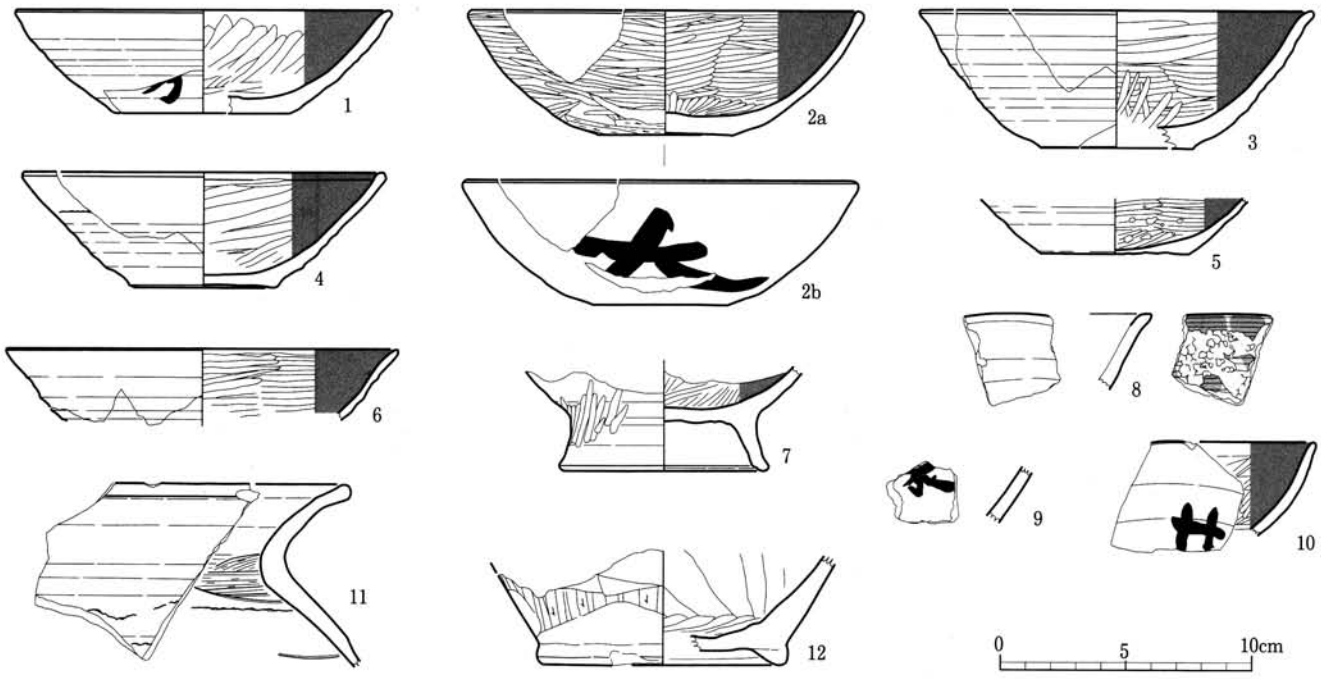


Ⅵ区　旧谷地断面図

層名	土　色	土　性	備　考
1	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）	シルト	攪乱
2	灰白色（5Y7/1）	（火山灰層）	上部2次堆積。下部1次堆積
3	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	グライ化した小礫を含む
4	黒褐色（10YR2/2）	シルト	ラミナ状に未分解植物質が堆積
5	黒褐色（2.5Y3/2）	シルト	グライ化した小礫を含む
6	黒色（19YR2/1）	シルト	上面に加工痕ある木材
7	黒褐色（10YR2/2）	シルト	炭化の進んだ木質を含む
8	オリーブ灰色（10Y4/2）	シルト	地山

SX11堆積土

第13図Ⅳ区　断面図



No.	器種	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版	登録
1	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ→疎らなヘラミガキ（口縁部を除く）→黒色処理　外体部墨書「□万。」　底面：回転糸切り	(15.0)	(7.0)	4.1	1/2	9－1	1
2	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ→疎らなヘラミガキ→黒色処理　内面：ロクロナデ→疎らなヘラミガキ→下部手持ちヘラケズリ　外体部墨書「大」　底面：回転糸切り	15.8	5.4	4.9	4/5	9－2	3
3	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ→疎らなヘラミガキ（口縁部を除く）→黒色処理　底面：摩滅／二次加熱による赤変	(15.6)	(6.0)	5.4	1/4	9－3	4
4	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ／炭化物ヨゴレ　内面:ロクロナデ→ヘラミガキ（口端部を除く）→黒色処理　底面：回転糸切り	(14.5)	6.0	4.5	1/4	9－4	7
5	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ　内面:ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理／火ハジケ　底面：回転糸切り／二次加熱による赤変		6.1		1/3	9－5	6
6	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ　内面:ヘラミガキ→黒色処理	(15.5)			1/5	9－6	5
7	土師器・高台坏	Va層	外面：ロクロナデ→接合部にナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理　底面：回転糸切り→付け高台（ロクロナデ）		8.4		1/4	9－7	2
8	赤焼土器・鉢	Va層	外面：ロクロナデ　内面：コテナデ／火ハジケ・炭化物付着（灯火具）				口縁部片	9－8	8
9	赤焼土器・坏	Va層	外面：ロクロナデ　内面：コテナデ　外体部墨書「□」				体部片	9－9	10
10	土師器・坏	Va層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ→疎らなミガキ　外体部墨書「□廿。」				口縁部～体部片	9－10	9
11	須恵器・甕	Va層	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ（口縁部）ケズリ風のナデ（頸部）ヘラナデ（胴部）	(22.0)			他に胴部片あり	9－11	11
12	須恵器・壺	Va層	外面：ヘラケズリ→ナデによる付け高台・ナデ／被膜状に炭化物付着　底面：ナデ／被膜状に炭化物付着　内面：ナデ／炭化物付着		(10.0)		他に胴部片あり	9－12	12

第14図　SX11旧谷地出土遺物

Ⅲ　考察

1．遺物について

遺物の多くは竪穴住居跡２軒（SI01・02）と旧谷地（SX11）Va層から出土しており、土師器を中心に赤焼土器、須恵器、鉄滓等が認められる。ここでは、出土遺物のほとんどを占める土師器・赤焼土器・須恵器などを中心に、若干の考察を行う。

A．土器の製作と年代

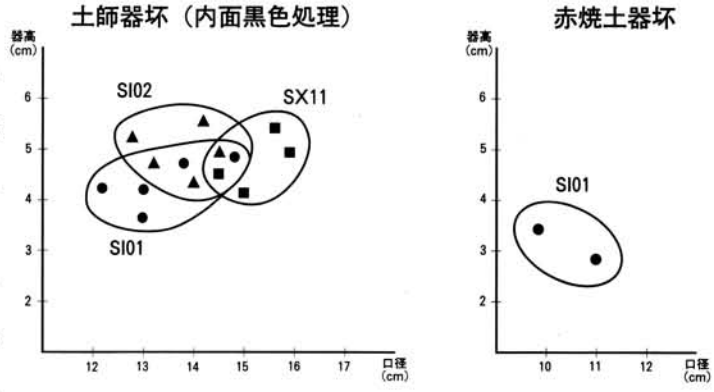
土師器はすべてロクロ調整によるもので、坏・高台坏（両黒を含む）・甕などがある。赤焼土器は坏・鉢、須恵器は壷・甕がある。以下に、その特徴を述べる。

①土器組成では、SI01は土師器坏（内面黒色処理、うち１点台付）が大半を占め、若干の赤焼土器と土師器甕１点が伴う。SI02も土師器坏（内面黒色処理－うち１点両黒、台付含む）が大半を占め、若

干の土師器甕及び赤焼土器、須恵器広口壷、甕を伴う。SX11旧谷地Va層では、土師器坏（内面黒色処理、うち１点台付）が大半を占め、若干の土師器甕、赤焼土器坏・鉢、須恵器甕・壷がある。土器組成はいずれもほぼ共通し、須恵器坏は全く出土していない。

②土師器坏の器高と口径の関係（第２表）を見ると、SX11Va層のものがやや大ぶりな傾向性があるものの、概ね口径14.8cm・器高4.8cm を中心に分布し、大きな差異は認められない。土師器坏の製作では、SI01・02、SX11Va層すべてに共通し、ロクロナデ整形の後に疎らなミガキ調整を施したものが多く、特に口端部付近はロクロナデのまま全く磨かれずに黒色処理が施されているものが多かった。底面は回転糸切り無調整のものと、手持ちヘラケズリを加えたものの両方が認められた。

③赤焼土器では、SI01竪穴住居跡のカマド・貯蔵穴（Ｐ.１）から、坏の小型品が出土している。破片資料も含め、小型品と見られるものが多い。



第２表　土師器杯と赤焼土器杯の口径・器高

以上、SI01・02竪穴住居跡出土土器及び、SX11旧谷地Va層出土土器の間に顕著な様相の違いは認められない。

類似の土器は河北町新田東遺跡（宮城県教育委員会：2003）では、平安時代のⅡ群土器中に類例を求めることができる。Ⅱ群土器はさらに、ⅡＡ群土器とⅡＢ群土器に分けられ、ⅡＡ群土器は土師器が主体を占め、次いで須恵器が多く、灰釉陶器をわずかに伴い、赤焼土器（須恵系土器）は伴わないとされている。ⅡＢ群土器は土師器が主体を占め、次いで赤焼土器が多く、若干の須恵器と製塩土器を伴っている。八幡遺跡の土器組成には、赤焼土器が含まれており、土器組成上はⅡＢ群土器に含まれる。このうち、ⅡＢ群土器の坏類にはごく少数の須恵器坏が含まれている点に違いが認められるものの、遺構別に見る限り、土師器坏と赤焼土器坏のみで坏の組成が成り立つものが大半を占めており、齟齬はない。須恵器坏の激減期にあたっており、須恵器坏が恒常的に土器組成の一部をなすものではないと考えられる。他器種の形態上の特徴や製作技法においても、八幡遺跡の土器は新田東遺跡ⅡＢ群土器の範疇で捉えることに概ね矛盾はないものと考えられる。

新田東遺跡ⅡＢ群土器は、新田東遺跡Ｃ－２期の竪穴住居跡等から出土している。Ｃ－２期竪穴住居跡はSI19、SI37Ａ・Ｂ、SI40Ａ－Ｄがあり、このうちSI19は切り合い関係で灰白色火山灰層より古く、SI37とSI40の堆積土には灰白色火山灰は含まれない。実年代としては、灰白色火山灰の降下前後の10世紀前葉ころ～中葉ころとされている。また、海道地方最大の須恵器生産地である須江関ノ入遺跡では、灰白色火山灰降下後のSEK4窯段階（河南町教育委員会：1993）以降は全く須恵器坏は焼成されておらず、八幡遺跡の土器組成中に須恵器坏を全く含まない点を積極的に評価するのであれば、10世紀前半の中でも灰白色火山灰降下後の土器の様相に類似していると言えよう。

八幡遺跡では、SI01・02竪穴住居跡の堆積土はともに自然流入の黒色土層（図版2-1、3-2）で、堆

積土中に灰白色火山灰を全く含んでおらず、少なくとも住居の廃絶時期が灰白色火山灰降下直前・直後とは考えられない。灰白色火山灰降下後しばらくして、地表の灰白色火山灰流出後に、住居が廃絶し、住居内に黒色土層が形成されたと考えられよう。SX11旧谷地のVa層の形成時期も、灰白色火山灰の降下以後であり、整合性をもって捉えられる。

灰白色火山灰降下の実年代については、陸奥国分寺の七重塔焼失に伴う焼土層が灰白色火山灰層を直接覆っていることから、陸奥国分寺七重塔焼失年〈承平4（934）年〉を下限とする10世紀前半とする見解（白鳥：1980）が有力である。近年では、『扶桑略記』にある記録から延喜15（915）年に灰白色火山灰（To-a：十和田a火山灰）が降下したとする説が現在最も有力（町田・新井：2003、小口：2003）となっている。こうした点から、八幡遺跡の竪穴住居の廃絶時期は、灰白色火山灰降下以後の10世紀前半の中でも後半ごろと考えることができよう。

また、このほか、県内のいくつかの遺跡で灰白色火山灰の降下後の様相が明らかにされている。多賀城市多賀城跡鴻の池地区第8～6層（宮城県多賀城跡調査研究所：1992)、仙台市藤田新田遺跡SD302C河川跡第3B層（宮城県教育委員会：1994)、多賀城市山王遺跡多賀前地区SD2000河川跡第4層（宮城県教育委員会：1996a,b)、多賀城市市川橋遺跡SX5222河岸跡第6～3層（宮城県教育委員会：2001）などがある。単純な比較はできないものの、須恵器坏の欠落ないしは激減、土師器坏の内面ミガキの簡略化、赤焼土器の小型化などは、八幡遺跡の土器にも通じる共通した傾向性を示している。

B．土器の使用

SI01・02竪穴住居跡ともにカマドから土師器甕といっしょに坏類が出土し、概して二次加熱による赤変、火ハジケ、炭化物の付着するものが多く見られた。このことは、土器組成の中で主体を占める坏類が、食膳具の域を越え、煮沸にも供されたものが存在することを示すものと考えられる。土師器甕は住居跡では、カマドを中心に1～2点出土しているに過ぎない。赤焼土器では坏・鉢ともに灯火具としての使用痕跡のあるものが含まれている。

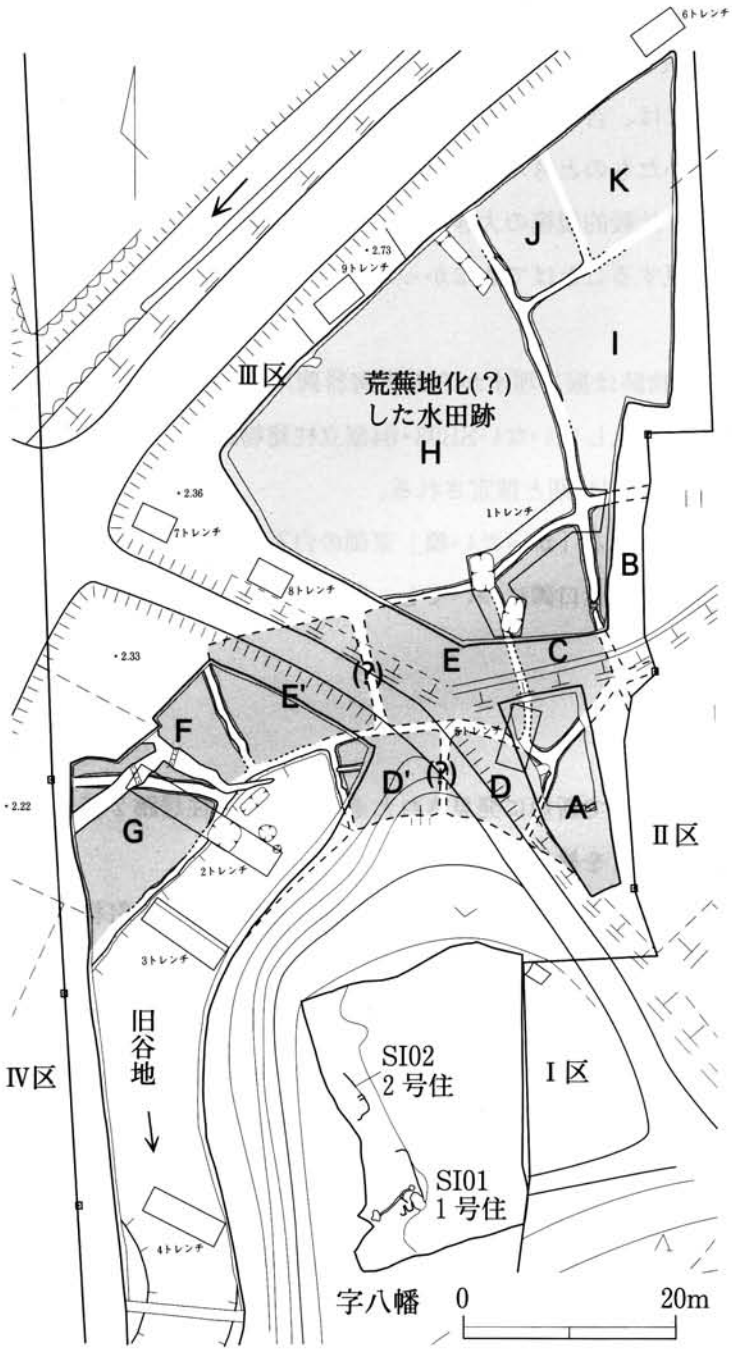
C．墨書

墨書の施された土器はSI02竪穴住居跡の堆積土とSX11旧谷地Va層から出土した。判読できた墨書は、「上万」「□上ヵ万」「□万ヵ」「大」「□廿ヵ」「□」（「聚」か「衆」の残画）の6つがあり、土師器坏体部に5点、赤焼土器鉢に1点、正位で書かれていた。合わせ文字1字で「上万」と書く例は宮城県内では、多賀城市山王遺跡多賀前地区SI579竪穴住居跡（宮城県教育委員会1996a・b）中にあり、10世紀前葉のものである。「万」の文字は吉祥の意があり、このほか「十万」「千万」「中万」などの合わせ文字が用いられ、東日本各地の集落遺跡に散見（平川2000）される。「大」の文字も吉祥句と言われ、多賀城跡周辺をはじめ比較的多くの遺跡で出土例がある。

2．遺構について

今回の調査ではⅠ区から掘立柱建物跡3棟以上、竪穴住居跡2軒、土壙5基、溝跡1条など、Ⅱ～Ⅳ区からは溝跡1条、水田跡などが検出された。

A．古代



第15図　古代の遺構（模式図）

灰白色火山灰降下以前の遺構として、Ⅱ～Ⅳ区で発見された水田跡がある。検出された畦畔から推定される水田跡の田面は、第15図のA～Kに整理される。このうち、田面D－D′間及び田面E－E′間には、その規模と形状から畦畔が存在する可能性があるものの、現道下のために不明である。

灰白色火山灰層の堆積の仕方は、概ね丘陵寄りの田面A～Dと丘陵から離れた田面E～Kとでは、異なる様相を呈していた。降下火山灰の豊富な供給を受ける丘陵寄りでは、畦畔の高さまでラミナ状の水成堆積の灰白色火山灰層が埋め尽くしていた。このことは、少なくとも田面A～Dは水が充満した状態で放棄され、畦畔高まで灰白色火山灰がラミナ状に水成堆積したものと考えられる。丘陵から離れた田面E～Kでは、次第に散漫な団塊状の堆積に変化する。特に田面H～Kでは、明らかに耕作層は認められるものの、発見された遺構は大畦畔以外は明瞭ではなく、降灰時すでに耕作は放棄され、荒蕪地化していた可能性も考えられよう。

水田は丘陵側では、切土・盛土を伴う棚田として造られ、丘陵から離れた水田ではスクモ層上部を直接切り込むような形で、耕作層が形成されていた。畦畔の一部では、沈下防止のための篠竹(？)や土留めのための材が発見された。

Ⅳ区で検出された幅9～11mのSX11旧谷地の灰白色火山灰層下では、ラミナ状水成堆積が認められ、若干の水流を伴っていたものと考えられたが、旧河道と考えるには明確な河床を検出することができず、谷地の跡と考えられた。水成堆積土中からは加工痕のある材が検出されている。

灰白色火山灰降下後の10世紀前半の後半ごろに、丘陵部のⅠ区にSI01・02竪穴住居などが廃絶したと考えられた。SI01と02ではカマドの設置場所が全く異なっており、さらに細かい時期差に起因する

可能性がある。

SI02竪穴住居跡堆積土の一部や灰白色火山灰層降下後に形成されたSX11旧谷地Va層からは、土師器や赤焼土器、須恵器が出土し、これらの中には、吉祥句の墨書された土器や灯火具などが含まれており、小規模ながら何らかの祭祀が行われていたものと考えられる。

また、今回発見された棚田を伴う水田跡は、比較的規模の大きい集落による経営が考えられるが、調査区内で確実に同時期に営まれた集落を発見することはできなかった。

B．近世以降

Ⅰ区の掘立柱建物跡のうち、SB05掘立柱建物跡は掘方埋土から近世陶器碗片や角釘状の鉄製品が出土しており、近世以降のものである。遺物の出土していないSB03・04掘立柱建物跡についても、掘方埋土がSB05掘立柱建物跡と類似しており、ほぼ同時期と推定される。

元禄11（1698）年の伊達村和知行所絵図に描かれる「かったい橋」東側の白石源左ヱ門の除屋敷やかつて「二郎屋敷」がこの遺跡地にあったという地元口碑についても、積極的に関連性を裏付けるような遺物は出土しなかった。

Ⅳ．まとめ

八幡遺跡は、三陸自動車道建設に先立つ分布調査で新規に発見された遺跡で、竪穴住居跡２軒、土壙５基、掘立柱建物跡３棟以上、水田跡、溝跡などを検出した。

遺物は10世紀前半の土師器、赤焼土器、須恵器のほかに、縄文土器、鉄滓、近世陶器、角釘状鉄製品が出土した。

古代の遺構は灰白色火山灰（To-a）が直接覆う棚田を含む水田跡、灰白色火山灰降下以後に廃絶したと考えられる竪穴住居跡２軒ほかが発見された。このほか、近世以降の掘立柱建物跡建物跡、時期不明の溝跡などが発見された。

〔引用・参考文献〕

尾口雅史 2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題－十和田ａと白頭山（長白山）を中心に－」『日本律令制の展開』pp.421～456　吉川弘文館

河南町教育委員会 1993『須江窯跡群関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書第７集

白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会 1984『富沢水田遺跡』仙台市文化財調査報告書第67集

多賀城跡調査研究所 1975『桃生城跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第１冊

平川　南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館

町田　洋・新井房夫 2003『新編　火山灰アトラス－日本列島とその周辺』東京大学出版会

松本秀明 1984「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城の研究』１　pp.7～52　清文堂出版

水沢市教育委員会 2002「伯済寺遺跡」『水沢遺跡群範囲確認調査』岩手県水沢市文化財報告書第36集

宮城県教育委員会 1994『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第163集

宮城県教育委員会 1996ａ『山王遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第170集

宮城県教育委員会 1996ｂ『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第171集

宮城県教育委員会 2001『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第184集

宮城県教育委員会 2003『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第191集

宮城県多賀城跡調査研究所 1992『多賀城跡　60・61次』宮城県多賀城跡調査研究所年報1991

村田晃一 1995「宮城県における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号　福島県考古学会

桃生町史編纂委員会 1988『桃生町史』第２巻　資料編

桃生町史編纂委員会 1990『桃生町史』第３巻　自然民俗編

桃生町史編纂委員会 1996『桃生町史』第５巻　通史編

1．遺跡全景（北から）

2．Ⅰ区全景（南から）

3．SB03・SB04（南から）

図版 1

1．SB05（西から）
（右下黒色部がSI01）

2．柱穴断面

3．柱穴断面

4．SI01住居跡（北から）

5．SI01周溝堆積状況

図版 2

1．SI01カマド完掘状況

2．SI02確認状況（南から）
（左下がSX11旧谷地の上部）

3．SI02住居跡（西から）

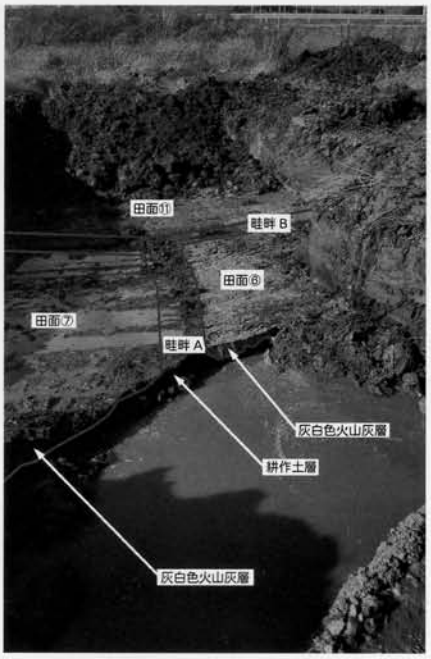
4．SK06（北から）

5．Ⅱ区全景（西から）

6．畦畔断面
（畦畔底面に篠竹(?)状炭化物）

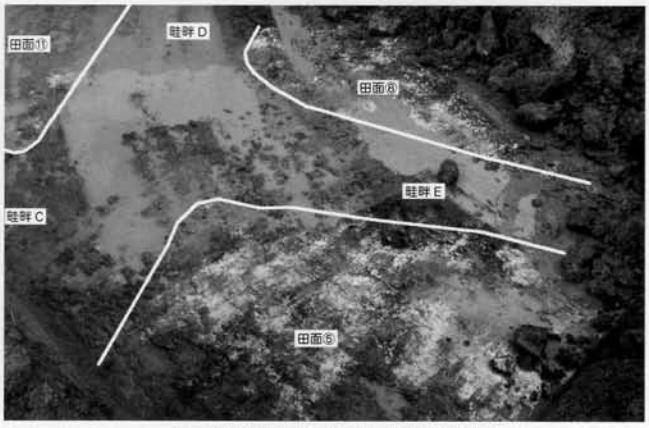
図版 3

1．Ⅲ区全景（南から）



2．試掘1トレンチ（南から）

3．試掘1トレンチ（西から）



4．試掘1トレンチ（南から）

5．Ⅲ区田面⑥・⑦（北から）

6．Ⅲ区田面⑧・⑨・⑩・⑪（南西から）

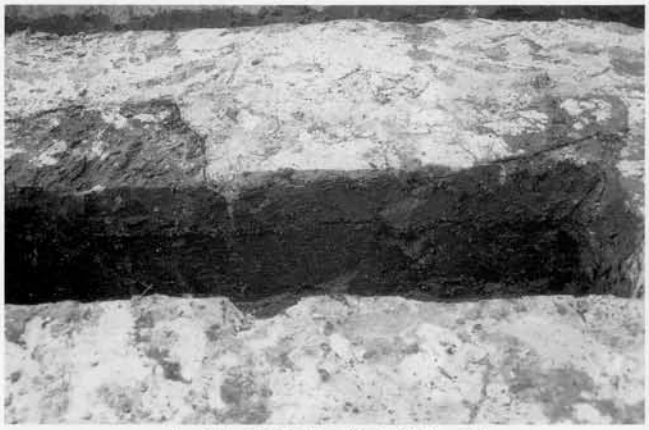
7．Ⅲ区断面（E－F）

8．Ⅲ区断面（G－H）

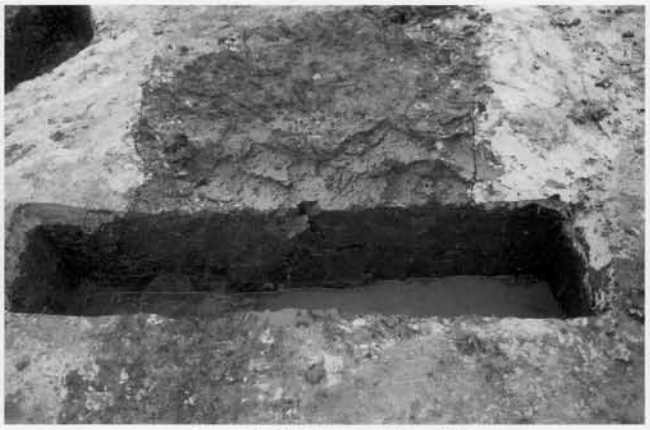
9．Ⅲ区断面（I－J）

10．Ⅲ区断面（K－L）

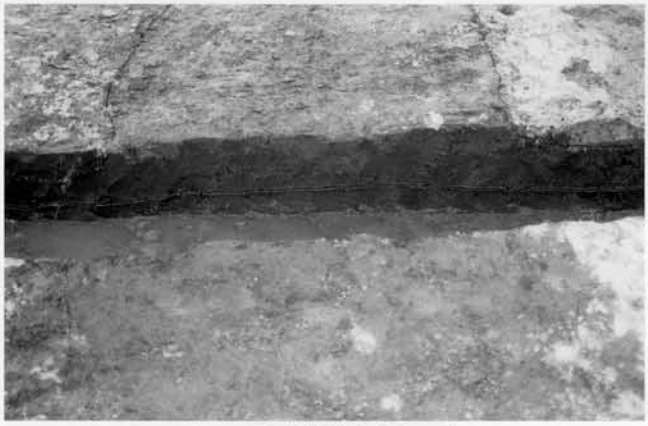
図版4



1．Ⅲ区畦畔水口断面（M－N）



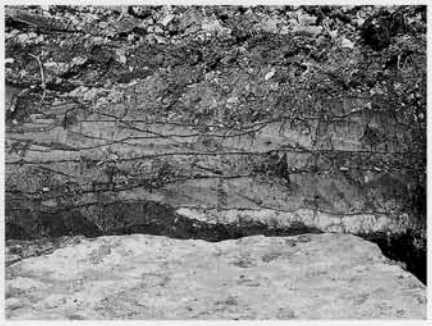
2．Ⅲ区畦畔断面（O－P）



3．Ⅲ区畦畔断面（Q－R）

4．Ⅲ区畦畔土留施設

5．Ⅳ区北側（西から）



6．Ⅳ区北壁断面

7．Ⅳ区東壁断面

8．Ⅳ区畦畔

図版 5

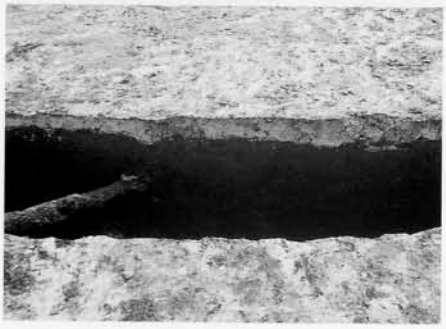
1．Ⅳ区南側（北から）

4．伐採痕のある材

2．Ⅳ区　SX11旧谷地（西から）

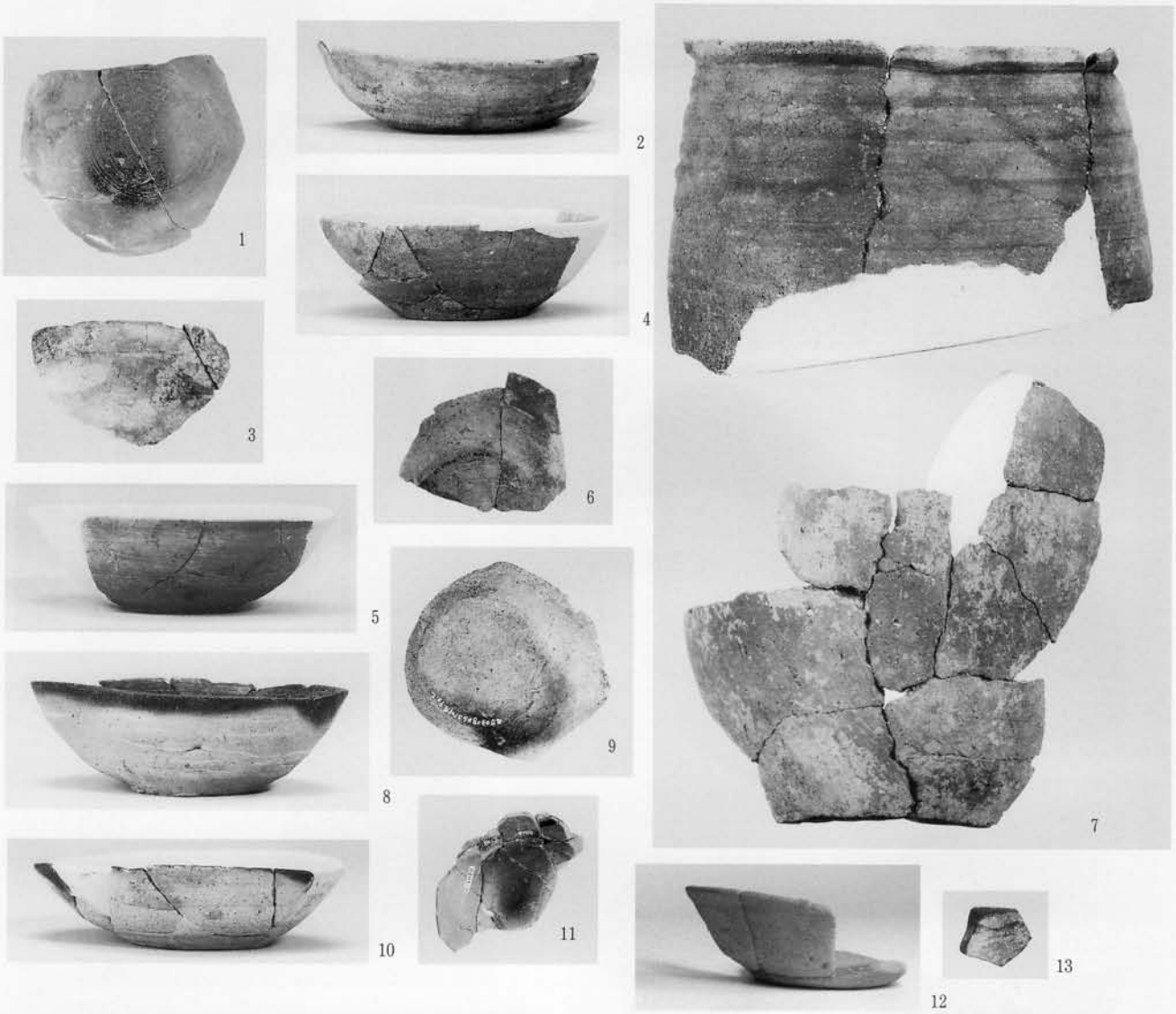
5．木口部分

6．截断面のある材



3．Ⅳ区　SX11旧谷地断面
（北から）

図版 6

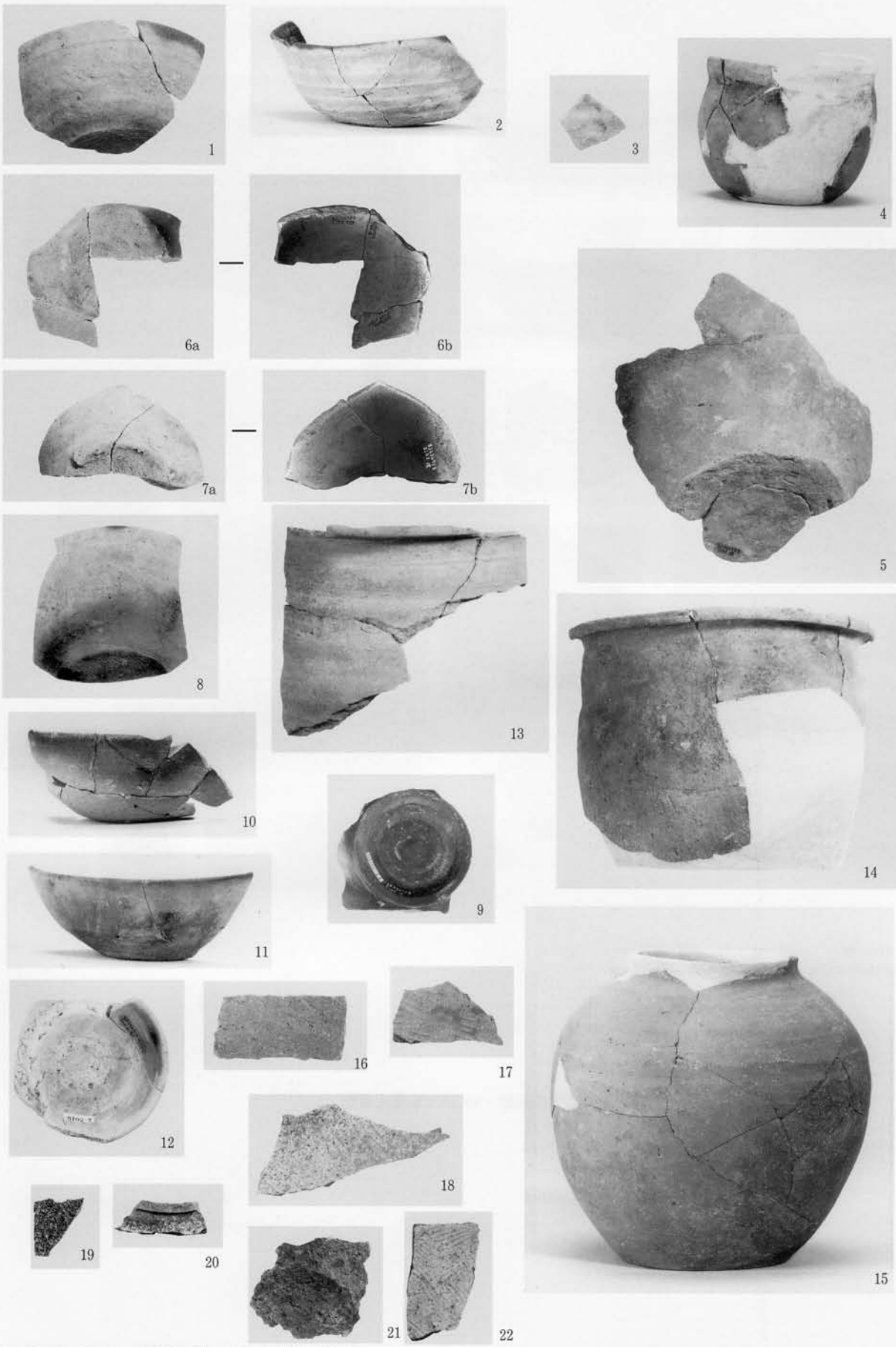


1～2　SK06土壙
3～13　SI01竪穴住居跡

1・6・12　赤焼土器・杯
2～5、8～10　土師器・杯
7　土師器・甕
11　土師器・高台杯
13　縄文土器

SI01竪穴住居跡・SK06土壙出土遺物

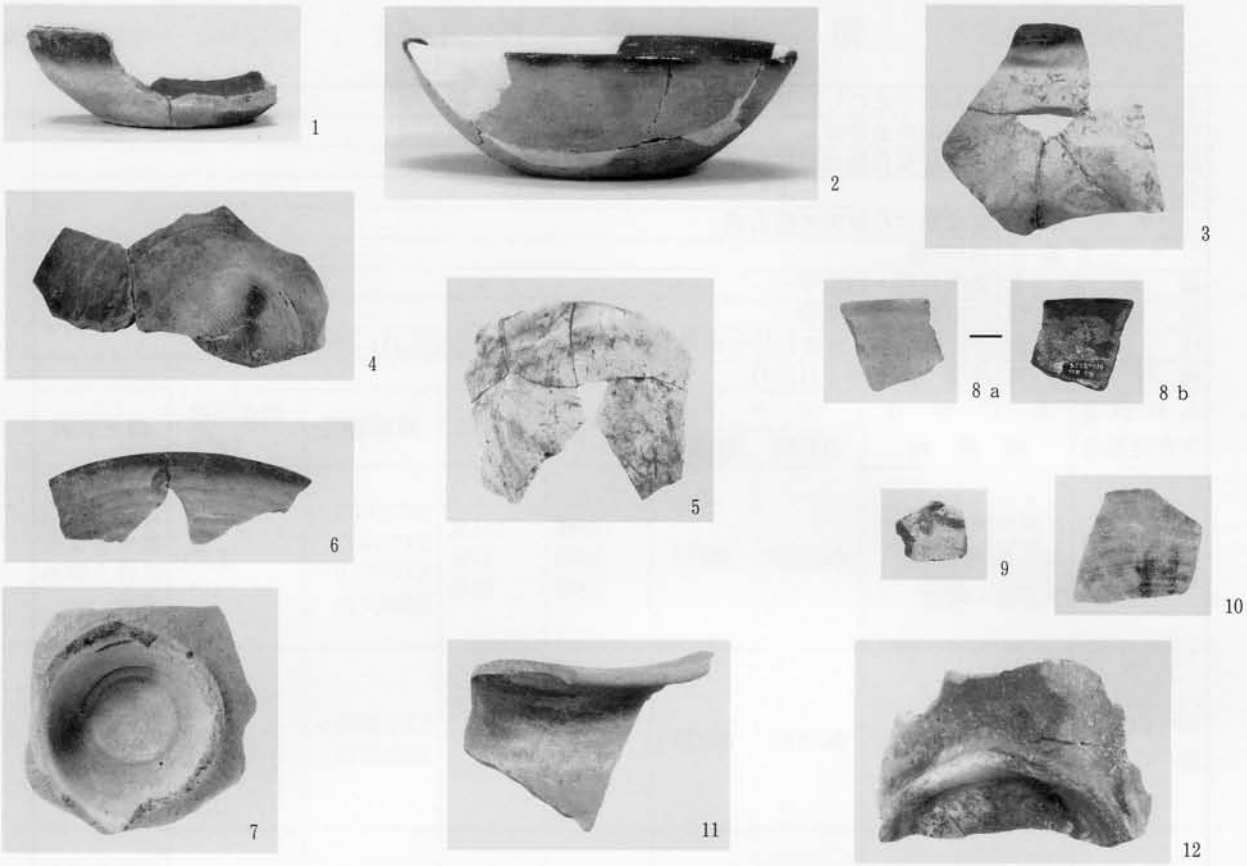
図版 7



1～3、8、10～11　土師器・杯
4　土師器・小型甕
5・13・14　土師器・甕
9・12　土師器・高台杯
6・7　赤焼土器・杯
15　須恵器・広口壷
16～19　須恵器・甕
20　須恵器・壷
21　鉄滓
22　縄文土器

SI02竪穴住居跡出土遺物

図版 8



1～6・10　土師器・杯
7　土師器・高台杯
8　赤焼土器・鉢
9　赤焼土器・杯
11　須恵器・甕
12　須恵器・壷

SX11旧谷地出土遺物

図版 9

報　告　書　抄　録

ふりがな	さわだやまにしいせき
書名	沢田山西遺跡ほか
副書名	三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第196集
編著者名	須田良平・相原淳一
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL022-211-3682
発行年月日	西暦　2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
さわだやまにしいせき 沢田山西遺跡	みやぎけんものうぐん 宮城県桃生郡 かほくちょうこふなこし 河北町小船越 あざさわだ　さきやま 字沢田・崎山	045616	66075	38度 29分 58秒	141度 17分 25秒	20020603～ 20021022 20030518～ 20030718	2,220	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
さきやまいせき 崎山B遺跡	みやぎけんものうぐん 宮城県桃生郡 かほくちょうこふなこし 河北町小船越 あざさきやま 字崎山	045616	66077	38度 29分 52秒	141度 17分 20秒	20020603～ 20020723	6,000	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
まんざいやまいせき 万歳山C遺跡	みやぎけんものうぐん 宮城県桃生郡 ものうちょうあざまんざいやま 桃生町字万歳山	045659	70036	38度 32分 07秒	141度 16分 53秒	20030407～ 20030516	700	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
はちまんいせき 八幡遺跡	みやぎけんものうぐん 宮城県桃生郡 ものうちょうながいあざ 桃生町永井字 はちまん　きりぶち 八幡・黄竜渕	045659	70035	38度 34分 09秒	141度 16分 36秒	20021004～ 20021011 20030717～ 20030807 20030901～ 20031008	2,540	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
使用測地系								
日本測地系（改正前）								

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢田山西遺跡	集落跡	縄文・古代・近世	古代：掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡14軒、柱列1条、溝跡5条、土壙3基など 近世：掘立柱建物跡8棟、柱列1条、井戸跡1基、石垣1条、溝跡4条、土壙3基など	土師器、須恵器、土製支脚、鉄製品（鋤先、釘など）、砥石、磨石、陶磁器、古銭、紡錘車、縄文土器、石器	奈良時代（8世紀後半）、平安時代（9世紀頃～灰白色火山灰降灰以前）の集落跡・江戸時代の建物跡
崎山B遺跡	墓跡・土壙	古代・近世	古代：土壙1基 近世：墓壙7基 時期不明：焼土遺構2基など	土師器、須恵器、古銭、銅製容器、鉄製品、漆器、磁器、土製紡錘車	
万歳山C遺跡	集落跡	縄文・古代	掘立柱建物跡2棟、土壙2基など	縄文土器、石器、土師器、須恵器	
八幡遺跡	集落跡・水田跡	古代・近世	竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡、溝跡、水田跡など	土師器、須恵器、縄文土器、陶磁器	灰白色火山灰の覆う水田跡

宮城県文化財調査報告書第196集

沢田山西遺跡ほか

平成16年3月25日印刷
平成16年3月29日発行

発行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町3丁目8番1号

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24-24